
夏の夜の日 ~化人大家族~

周一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夏の夜の日 ～化人大家族～

【Zコード】

Z7535P

【作者名】

周一

【あらすじ】

変わった宗教観をもつ父に占い師のところに連れてこられた千央は、化け物に憑かれていると言われる。

当然強い不信感をもつが、化け物仲間に会いたく、そこで催された交流会に参加することを決める。

第1話「お尋ね者」

父に靈能者の元に連れて行かれた千央は、インチキな内容に怒り心頭、憔悴して帰るのだった。

誤字脱字、改行間違いなど、度々やらかします。見つけ次第修正しますが、よかつたら教えて下さい。助かります。

一、お尋ね者

どうやら私には悪魔が憑いているらしいので

墨を流した様な色の山間の道に、車が列を作り走っている。上から見ると、一つ一つの車のライトはまるで、糸を伝うビーズの様な動きをする。もしくは血管を流れる血液のようだ。ただ、緑や青色の球もあることから、もしかしたら人のそれではないのかも知れない。

その赤血球の中の一つ、92・製ビビオの車内には、なつかしのヒット歌謡曲特集と称し、70年代初めに大流行りした、ある歌手のバラード曲がラジオから流れてきていた。それは、一人の耳には今まで忘れていた懐かしい曲、一人の耳には初めて聞く新しい曲であつた。

そのうち、後ろに乗った幼い方は、物思いにふけた顔をして窓の外を眺めはじめた。色とりどりの光が素早く目のはしを過ぎ、小さ

な鼻を横切り、また目を渡つて行つた。

右手に等間隔に並んだ樹木は元気がなく、哀れ、殆どが立ち枯れてしまつてゐる。

奥の方には、細い煙突のついた奇妙な建物がある。初めは煙突から火葬場かと思つたのだが、しかしそれにしては壁の絵が少々不謹慎ではないかと、こちらに向かつてアカンベー やニヤリ笑いをするキャラクタを見ながら思い直した。

そして左側にはアメリカンカジノ風のパチンコ屋があり、黄色やピンク、グリーンの光が建物を縁取り、巨大な蛍光板では、レースカーが走つたり、イルカが飛び跳ねたりと、次々と場面が早変りしていった。そして、建物からのびたサーチライトは夜の底を更つていた。

やつと混んでいた車が動き出し、長い間座つて固まつた体をほぐすため、千央は肩に食い込んだシートベルトを緩めた。ドライブは好きだつたが、今回は楽しめそうもない。しかし、隣に座つた父は、上機嫌なのが分かつた。

今年12才になる千央は今まで普通の子供として育つた、はずだった。七五三には神社に行つた、着物姿で仮面の写真が残つてゐる、一方、両親は満面の笑みである、現金にも千歳飴を貰つた後の顔は笑顔である。クリスマスにはケーキを食べる、両親からプレゼントも貰う、サンタさんの代行、というわけで、夜中に枕元に置いてってくれる。そして、先祖のお墓は近所の寺にある。日当たりが良く、供えた花はすぐ曇れてしまう。特に宗教的な決まり事はない。ある意味とても日本らしい家庭だった。

だが、なにがきっかけだつたのだろうか。いつのころからか何か得体の知れない悪い物が憑いてきたのだつた。今では千央の後ろに

普通じゃないものがたくさん控えていた。

胎芽、水の精、下級武士……、猫……電信柱……野菜畠……家々の明かり……

ぱつぱつと現れる平野らしき部分には家が密集している。まるで葺のようだと千央は思った。葺は一つあるとそばに固まつて生えてくると聞いたことがある。

高速道路を下り、大きな川にかかる橋を渡った。対岸側は真っ暗だ、水面には星が光っていた。どうやら橋を挟んで県境を越えたらしく、家が急に減りはじめ、車は畑と大型トラックしかない土地を走っていた。なんだか、ゴーストタウンの様な感じのする田舎だった。

向こう側にこんもりとした山が見える、色の濃いブロッパーのようである。千央たちはその山へ向かっているのだ。

山道に入ると、群青色の空が全て緑林に覆いつくされた、何か光るものと目があつたと思ったら、それは林から顔だけ突き出した狸の目であつたりした。

しばらく進むと、車のエンジン音の他に砂が軋む音や石が弾け飛び音が加わった。車が脇道に入ったようだ。唐突に車が止まり、千央は前につんのめった。

ようやく目的地についたらしい。父は行くぞ、と田配せし、さつさと降りていった。

千央は降りようとして足に力を入れたが緊張のせいか、長く座っていた痺れのせいか、情けないことに全く力が入らない。

千央は今回の教祖が更正に暴力的な手段に訴えないことを何にともなく祈った。

やつと車を降りた千央は、それを見た。

木は整えられ、前庭の通り道には白い砂利がしいてあり、その道の先に白いペンション風の家がそびえ立っている。「ゴーストタウン

のようだとは思つたが、まさか幽霊のような建物に遭遇するとは。

町の明かりもない山の中、それはまさにゴーストのように闇に浮かびあがつたのだった。それは邸宅といつてもよいほど大きく、横向きに打たれた板が鱗のように見えた。

立派だった、お金持ちか。気にいらない。千央はそれさえも憎たらしく思えた。別に金持ちだから嫌いなわけではない、彼らの金集めの方方が気に入らないのだ。

千央は大股に、足取りをしつかりと歩いたのだが膝下がゴムのようになく、アンバランスに感じられた。ふと横を見ると、綺麗な蛾が柱のように群れていた。お手玉のような動きで上がり下ったり、下ったりを繰り返して飛んでいる。さらに蝙蝠がその間を縫うように滑空している。

色々複雑な気分で扉を開けると、余計な笑みを張り付けた、親しげな雰囲気のおばさんが奥から出てきて、一人を出迎えてくれた。二人は中に入った。

玄関は広く、こんな時間だというのに来訪者の靴がいくつも並んでいた。革靴が主だ、千央はなんだか気が重くなつた。脇に置いてある鉢植えには透明のバイクの雨よけカバーがかけてあつた、おそらく温室代わりに使つてているのだ。

千央は靴を脱いだ時、その中に見覚えのあるものを見つけた。

鉢植えに植わつたその植物は、生姜の様な木肌と多肉植物の様な葉をもつていた、最近、金の成る木として店で売つてあるのをよく見かける。そして千央の家の玄関にも同じものが一つあるのだ。

思いがけない共通点の発見に、千央は苦笑いをさせられた。しかしそのおかげで、少しだけ、緊張がほぐれた。

つづいて、二人は奥の和室に通された。

中には中年や年寄りを主に人が沢山集まつていた、子供も数人いた。

千央達は、部屋の一番後ろに通された。父は回ってきたボードの紙に何やら書き込んでいた。その横で千央は一度は座つたが、どう

しても我慢出来ず、膝立ちし、ニアキャットか、プレーリードッグみたいに前の方を覗き見た。

前方には低い舞台の様なものが作ってあり、そこから誰かの囁き声が、人垣の間を縫つて漏れ聞こえてきた。前の詳しい様子はこちらからは大勢の人垣のせいで見えない。けれども、こんなに人がいるのに話しているのは前にいる数人だけで、他の人は病院の待合室の様にただ座つて大人しく待つていた。

たとえば、千央のナナメ上にいる青銅色の作業着の男は緊張した面持ちで、ただ前を見つめている、肌はよく焼けて赤土の様だ。隣にいる良さそうな丸顔の若者は腕を組み、目をつぶっている。奥の方にいる中年女性は、座っているのも辛そうにしている。腰を痛そくに摩つていた。窓側には年の近い兄弟が騒がしくお菓子の取り合ひをしていて、おそらく母親だろうが、地味で瘦せた女性が2人が奇声を発するたび、それを諫めている。

部屋の中は低い話声と時々あがる子供の声の他、とても静かなものだった。千央は前の方で行なわれているやりとりを聞こうと、全力で神経を集中させたが、やはり全く聞こえなかつた。

けれど、前の舞台近くにいる人には間違いなく聞こえているはずだ、個人的な話を知らない人に聞かれて平気なのだろうか？

千央は彼らのプライバシーを人事ながら心配した。それに、すぐに千央にも無関係ではなくなる話だつた。

しかし、千央はこの賑わいぶりを見て脱力感を覚え、少し情けなく思つた。こういう商売を始める奴は大抵詐欺師か頭の配線がどこかおかしいと千央は思うのだが、しかし信者たちもまた、どこか変に思える。どちらがより不可思議な存在なのか判断がつかないくらい、というのが千央の考え方であつた。

靈能者がそれを詐欺行為だとわかつてやつてているのなら、倫理的にはともかく、ある意味冴えてる、といえるだろう。しかしながら信者の思考回路の方は、どうひっくり返つても全然理解が追いつかなかつた。

育ちが違うからだろ？それとも、千央の頭が堅いからだろ？

か？

千央には全くわからなかつた、完全にお手上げである。結局いつも、本当に他人の脳みそというのは不思議だナアと思い、首を傾げて終わるのだつた。

暇を持て余した千央は、まわりを見渡して、なぜこの人たちがここに来ているのかを色々想像してみた。

まず、一番分かりやすいのは腰の痛そうな中年女性だ。おそらく、腰痛の件でここに来ているのだろう。次に母親と2人の兄弟だが、夫とうまくいっていないのか、子供連れのところを見ると彼らが問題でも起こしたか、いずれにしても子供達が元気そうなので、あまり不幸そうな感じはしない。逆に深刻そうに見えるのが、作業着の男である。千央は男性が多額の借金でも抱えているのだろうか、ときながつた。作業着を着ているということは、身体は元気なはずだ。だけど、こんなに夜遅くにここに来るなら早く家に帰つて体を休めたらしいのに、千央は肉体労働をしているであろう彼を見て思つた。一番解せないのは、隣に座つたこの若者だ。年寄りが多い中で際立つて若い彼は、健康そうで、普通に見えた。彼は瞑想するように目を閉じていた。なんとも堂々として落ち着いている、というより千央とは違い、周りのことに全く興味が無いのかもしれない。

千央がしばらく見ていると、男はふいに目を開けてこっちに笑いかけてきた。千央は驚いて急いで目をふせた。

千央はただ目を瞑むつて、自分の心臓の音を聞いた。あることに気づき、千央は動搖していた。考えてみれば千央自身も観察対象であり、同時に彼らの仲間であるのだ。

自分はどう見えているのだろうか。きっと問題児に思われてるだろ？と思いつ、嫌な気持ちになつた。所詮この部屋にいる人たちと、自分は同じ穴のムジナであつた。本来なら、自分のために使うべき時間や金を、この馬鹿な場所に注ぎ込んで、いるのかいなか？

も分からぬようなもののために、人生を一重二重に無駄にしているのだから。

その時ふと、さつきの瞑想した若者の気持ちが読めたような気がした。彼は千央と同じように、ここにいることを恥じ入っているのだ。

しかしすぐに、自分と同じ心情ということはない、と気づいた。彼は大人だし、来るのも来ないのも勝手なのだから、千央のように大人に連れてこられることもない。自らの意思でここにきているのだと。

千央は仲間を失ったような気がして、がっくり肩を落とした。たつた〇・コンマ一秒の間の仲間意識だつたけれど……。

千央はこの場の一人一人に怒鳴つてまわりたい気分になった。もし、怒りが目に見えるなら、まわりの人は千央を震源に津波のように広がっていくものが見えたんじやないだろうか、しかし千央は幸いかな、そのような特異体質ではなかつた。千央は急に胸が焼けるような悔しい気持ちになつた。

ここにいる、千央を含む人たちのせいだ、この詐欺師は肥続けているのだ。千央は興奮してきた、具合が悪くなりそうだ。

こんな馬鹿で害しかない集団に加わつたことはあつただろうか。いや、あつたよ、何度も。畜生。千央は目の前にいる信者たちを心の中で罵倒し続けた。お前らのせいだ。チクショウ……。もういやだ。

そして怒りと共に、哀れみの気持ちも千央は感じていた。嘘の言葉に騙され、搾取されるばかりの人達。かわいそう。なにもかも、卑劣で狡猾、良心を失つた醜い人間のせいなのだ。

ここで千央の頭に浮かんだまだ知らぬ靈能者は、化け物じみ、そして滑稽な姿をしていた。

カエルの様な顔の詐欺師は、豪華な玉座におさまりきれないほど肥満している。まわりには小人が群がり、なにかを懇願しながら順

番に巨大な口に食物を注ぐ。上戸を流れるように食物はたちまち奈落の底へ落ちていく。小人たちは甲斐甲斐しく世話を焼くが、あまりの忙しさに働くほど体はやせ細り弱っていく。

中々面白い絵が出来上がった。千央はその中に自分自身の姿を見つけ、3度自嘲的な笑みを浮かべた。ひどい気分だった。自分がこの犯罪詐欺行為の小さな協力者になつたような気がした。

いや、実際にそうに違ひなかつた。

千央は、この場所にいるのも辛くなり、目を粒つて動かず、せめて感覚や気配を消しとろうと努めた。

まず、この状況から脳の意識をすらすため他のことを考える、これはなるたけインパクトがあり、気を逸らしやすいものがよい、簡単にいえば、考えたくないような嫌なことだ。だから、千央は学校のことを考える。次にその事柄から関心のピントをすらしていく、すると何かに気を取られているような感覚だけが残り、そのうち磁石のU極とN極のよう、じわじわと自分の身体とまわりの空気の境目が分からなくなる。

そして、自分の意識が視野とともに段々と小さくなつていいく、ここまでやると肉体は服とほぼ変わらないような感覚になる。また、精神的につい出来事にも、ある程度まで無関心でいられた。

そうして、うまい具合に虚無感が千央を包みこんでいった。千央は膝にあいた自分の手が、もはや他人ものに思えた。それは百メートルも二百メートルも先にあるように見え、千央はそれを力なく眺めまわし、ひたすら時間が経つのを待つた。

ふと千央は気がついた、どうやら自分たちが今日の最後の客のようだと、千央たちの後からはとうとう新しい客はやってこなかつた。信者達は相談が終わると少しづつ前に詰めていくので、次々と後ろにある明かりは一つまた一つと消されていった。そうすると、部屋はどんどんと暗くなつていき、千央は寒々とした気分になつた。

後半になつて舞台が近くなると、前の方の話もきこえるようになつてきたが、しかし、来訪者のほとんどは常連らしく、切れ切れの内容しか理解できない。千央はうまいことできているなと、感心するに同時に残念に思つた。これでは靈能者の占いの方法が読み取れないからだ。大袈裟だがとりあえずは敵を知れというではないか。少しは心の準備ができるかもしないと思い、千央はこれまでの経験から少しばかり推理してみた。

はじめ通つていた靈能者は、頭の禿げた坊さんのような格好の男だつた。大きな菩薩像が庭先に飾つてあつたのが忘れられない。彼は当時習つていた習字のおじいちゃん先生に顔がソックリであつたから、なんとなく親しみがわいた。しかし、気性が粗く攻撃的な性格で、千央は面食らつた。彼からは胎芽と水の精をもらつた。

いつだつたか、なぜか羊の彫られた石鹼とカステラを帰りにくれた。そうだ思い出した。その時は調度年末だつたのだ。2002年の12月末の出来事であった。その年の次の干支は未であるから。次に行つたところは、ボロい猫屋敷であつた。靈能者は女で、みすぼらしい格好をしていた。容姿は悪くなかった。なにしろ地元テレビ局の美人リポーターに顔が似ていたからだ。彼女は前世の話をよくしてくれた。あなたの前世は頭の良い侍であるから、勉強を頑張りなさいと言われ、千央は反応に困つた。

穏やかな性格で、そこに行くのはそれほどストレスにならなかつたが、ボロボロの壁に張られた写真の数ときたら。年代は出鱈目にまぜこぜになつていて、白黒の写真から昭和後期と思われるものまであつた。さらに千央が気になつたのは、彼女の家の猫が揃いも揃つて青目の白猫であつたことだ。

……結局考へても、何もわからなかつた。

ともあれ、父がこういう人達の居場所を一体どこから見つけ出してくるのかが、千央にはとてつもなく疑問であつた。とりあえず、大人の情報網つてスゴイ、この一言につきた。

「小千谷さん」急に自分の名前が呼ばれ、千央はびっくりして飛び起きた。周りを見渡すといつの方にか、他には誰もいなくなっていた。

部屋の中はすでに外の闇が迫っているような暗さだった。千央と父は膝立ちで前に行つた。舞台の上は煌煌としたオレンジの光で満ちていて、一人の影は背後へ真っすぐに伸びていた。千央は自分の血圧がいくらか上がったかのように感じられた。

舞台は、床から15センチくらいのところにつくつてあり、後ろに地味な色のカーテンがひいてあつたが、派手な装飾品でほとんどそれは見えなかつた。

壁からはピンクのボンボン飾りが垂れ、七夕のような紙飾りは動く度に、乾いたカサカサという音をさせていた。奥にある古い木箱にはなにが入つているのだろうか。黒檀の大きなテーブルにはいくつもの菓子箱が山と詰まれていた。いろいろな形の香炉からは細い煙がたえまなく出ている。それらが混然一体となつて異国風の複雑なタピストリーみたいになつていた。

その真ん中にコウモリのような顔をした老婆が座つていた。

靈能者は千央の妄想に当たるとも遠からずという姿をしていた。がつしりした体を粗い編み目の黄色と茶色のポンチョが包んでいて、それが後ろの風景に溶け込み、まるで蛾の保護色のような効果を發揮している。

特筆すべきはその目である。皮膚がたるんでいるせいで白目部分は見えず、瞳しか見えない。その色は緑か青、しかし外国人のような色ではなく濁つた膜がはつたような目だつた。

奥に椅子に座つた女の子がいて、高飛車にこちらを見下しているように見えるが、単に高い位置に頭があるせいかもしない。それから派手なチエック柄のフエルト地のツーピースを着た中年女性がいて、脇で書類整理をしていた。もう随分暖かいのにも関わらず、そんなものを着ていて暑くはないのだろうが、千央は不思議に思つ

た。

千央は緊張したが、挑むような気持ちもあって、ふてぶてしい顔を向けた。なんとなく懐かしい感覺だ。

「さて、今日は何の『』ようでしょうか」と老婆。

「ええ、今日は娘のことでお尋ねしたいことがあります」

老婆はこちらを見据え、

「あらあら、どうしたの」と言つた。

父は

「あのですね、この子がこの間、普通じゃない状態になります」「普通じゃない?」

「この間寝室を覗いた時、この子が……、誰かと話していました」「お話してていた? 誰かと?」興味深げにききかえした。
「決まって深夜二時ごろです、何か暗闇に向かつてぶつぶつと」
ここで千央は、堪らず赤面した。

「朝聞くと、本人は覚えていないといいますし……」

それから数分間、しばらく千央にとって、つらい時間となつた。

父は千央の異常行動の詳細を述べた。

「他につつたか、夜中にいきなり起きて暑いと大声暴れ回つて、顔が燃えると顔を真っ赤にして言い、息が詰まるときしそうでした。恐ろしかったですよ、私は。まるでこの子が何かに憑かれたように暴れ回りまして。とても尋常ではない様子で」

父は強く息をはいた。

「まあ、そうでしたか」 精能者は本当に驚いているのか、その降りをしているのか、わからない反応を見せた。
「で、どうやって落ち着かせたんですか?」

精能者は探偵のような目つきで考えながら言つた。
「しばらく宥めていたら、大人しくなりました」

「大変でしたね」と老婆。

さらに父は「後ですね」と続けた。まだなんの!?

「虚ろな目をして空間を見ていたり……、何か危機せまったような顔をしてグルグル回つたり、とつぜん犬のように唸つたり」

千央は声をだして笑つた、笑うところではなかつたのだけど、悲惨な気分を盛り上げるために必要だつたので。そのことには何も言わず、靈能者は見てみましよう、と言つた。千央は前の方に呼ばれ、膝立ちでステージ前に移動した。

靈能者の前には黒檀つぽい文机があり、その上にはフタ付きのマグカップ、と用紙が一、三枚、手には万年筆がある。

「手を出して」

千央は靈能者に拳をついた。

靈能者は千央の拳に手をおき、下を向きぶつぶつとつぶやいた。

「……なんとも物騒な独り言である。手相を見るのかと思つたが違うようだ。

靈能者は後ろにいた父にきいた。「この子は兄弟はない?」

「はい、一人っ子ですね」

「ふうん、そうなのね」

「この子は何か大きな病氣をしたことはある?」

「いえ、特に大きなものは……」 ここで靈能者は千央の手を裏返し、強引に開こうとした。

千央は意固地になつて拳を握つたままにしようとしたが、無理矢理開かされ力ずくで伸されてしまった。

彼女は人間の手を初めて見たかのように千央の手の平や指を入念に調べはじめた。

これどこかでみたことがあるなあ……そうだ。テレビでみたチンパンジーが実験で似たような動きをしていたのだ。その時の実験はどうなものだつただろうか、と考えているうちに、彼女の手は千央の一の腕あたりまできていた。まるで、千央の腕が命綱であるかのようにがつしりと掴んでいた。目に映るものが本当にそこにあらかを確かめているようだつた。

「この子冷え症だね」 まだ腕をべたべた触つていた、加減しつこ

い。

「そうです。最近食欲もないようで大分痩せたんですね」 靈能者は人差し指と親指とで、千央の手首の太さをを図ると、なるほどと言つた。

これすらも何かの靈のせいにすると千央には何となくわかつて、うんざりした。おそらくただの夏バテであるのに。

「冷たい冷たい」

今度は靈能者は千央の手を、摩擦で暖めようと擦つていた。千央は冷え症だつた。さすがに悍ましく、千央は腕を引っ込めようとしたが、靈能者がすごい力で掴んでいて微動だにしない。数秒間無言の攻めきあいが繰り広げられたが、結局千央はしぶしぶ諦めた。

その時、どこからか笑い声が聞こえてきた。声の主を捜すと女子と曰が合つて、千央と女の子はしばらくの間睨み合つていた。

そして、ふと、鳩尾辺りに違和感を感じたと思つたら、今度は千央の胃袋辺りを靈能者は突くように触つていた。

そして、じくじくしてゐるねと言つた。私の胸には水虫菌でもいるのかと千央は憤慨した。やれやれと、千央は仏頂面で大きく息を吸つて吐いた。また笑い声がする、幻聴だらうか。

また靈能者は何事かぶつぶつ言い、今度は何かを探つてゐるかのよくな感じだつた。恍惚の表情。これがトランプといつやつか、千央は少しだけ感心した。「この子はどんな性格ですか」

「温厚、気弱、引っ越し思案、大人しい、強くものが言えない」確かにここに来てから喋つていなが、それはあまりにあほらしいからだ。

「お母さんはどんな人ですか」

「活動的ですね、テレビ局に勤めていまして」

父は母の話題になると生き生きしだした。

「お母さんからではない」

「お父さんはお仕事はなにされてるんですか?」

「歯医者をやっております」 父は厳かな調子で答えた。

「家は三人暮らし？」

「いえ、母方の祖父も一緒に住んでます」

「あら、婿養子になられたの」

「いえ病院が母方の祖父の病院なので」

千央は父はこのことを言いたくなかったのではと思つた。でも、父も少しは嫌な思いをしてもらわないと不公平だ。 そういえば、父はたまに自分のことを、皮肉つて職業養子と言つていた。

「学校は楽しい？」

初めて質問された。千央はうーんと唸つた。

「学校でも大人しい子です」

さらに父は続けた。

「成績もいい」

千央は目を剥いた。

「体育は？」

「割とできる方だと思います」

「友達とけんかしたりは？」

「そんな性格じゃないです」「そういえば、以前学校に行きたくないと言つたことが……」

靈能者の目が一瞬キラリと光つた、よつな気がした。

「それはどんなわけで？」

「ええ1年前くらいですかね、具合が悪いと言つて急に休みがちになりました」

「何で嫌だったの？」 灵能者は千央の顔を覗きこんできた。千央は押し黙つた。

「友達同士のトラブルらしいんです。担任の先生が色々動いて下さつて、それで行けるようになつたんですけど

「どういう揉め事だつたの？」

「先生がおつしやるには、仲間外れにされてるんじゃないとか、なんというかクラスにボス的な子がいるらしいんですよね。それで友達も一緒になつて無視したり、大人しい性格ですから、何も言えん

でしょうが

さて、千央はここで怒るでもなく悲しむでもなく、ふと、オヤ、何かがおかしいぞと思った。確かにここでやっていることは大概がおかしいし、格別へんてこではある。しかし今感じたものは、また別のおかしさだ。閃きに似た性質の違和感というのか、いくらか陽性の興奮が混じっていた、ここではかなり珍しい部類の感情だ。

「どんな子？」

「その子はかなり気が強くて、クラスでも度々トラブルを起こしていたようです。この子はきいても何も話さないんですよ」

老婆は隣の父と千央を交互に見ながらきいていた。千央はその間苦悶の百面相を演じていた。

そしてよりによつて、つらい時は言わなきゃダメよ、と靈能者に説教されてしまった。千央は、私は今現在つらいのだが、これは一体誰に言えばいいんでしようか、と内心皮肉つた。その子が関係あるかもしぬせんね、お祓いをしましよう、と靈能者は言った。

これは新しいパターンだつた。かわいそうにその子は生きてるのにもかかわらず、亡靈にされてしまつた。しかも、いじめられていのを前提に話が進んでいくので、おかしいことになつている。

実は今の父の話、この話には大きな誤解がある。千央は今回の学校の件について得に誰にも話していなかつたが、てつきり今までの父のようすから、このトラブルを九割方把握していると思っていた。しかし今回の話でその半分もわかつていらないらしいということがわかつたのである。勝手な推測で話しているのだ、しかしながらなんに物知り顔で自信満々なのだろうか、千央は不思議でならないのだが……。とにかくこの靈能者は全く関係がない別の話をもとに、千央の憑きものを診断することになるようだ。これは良い見極めの材料になる、と千央は思った。つまり彼女が本物の靈能者であるならば、話の真偽も含めて真相を見破るのではないかと千央は考えたのだ。なにせ彼女は靈と話しができるわけだから、本来ならば親や本人も知らないことがわかつてもいいはずだ。

しばらく黙つた後、靈能者が口を開いた。

「その子の念が千央さんに干渉して、雑靈を引き寄せていました」

千央は大きく息をついた。やっぱり、偽物だ。やつた。

そして、千央の肩に手をおき、話しかけた。「出ていかんね……ここにいちゃいかん……、出ていかんね！－ダメダメ、離れなさい！－」怒つて吐き捨てるように言つた。

千央は自然と肩が震えだすのをなんとか耐えた、まだ靈能者の手が肩に乗つていたのだ。息を吸いそこない、鼻が豚のように鳴りそうになつた、千央は息を止めて耐えた。靈能者はまた呼びかけたが、靈はどうやら出ていきたくないようだ。

ちなみに出て行つても何か合図や印があるわけではないようなので、靈能者の態度からなんとなく汲み取るしかない。

「頑固かばい」

頑固なのはあんただよ、クソが。

そしてまた靈能者は千央の手を握りしめた。

「ところで一族の中で早死にした人はいませんか？」文机の用紙を見ながら言つた。

さつき父が書いていたものだ、千央も向かいから覗き見ることができた。

彼女は他に家族の流産、借金、病気の有無、不貞等をきいていつた、千央はしばらく家族に降り懸かつた災難の歴史を興味深く聞いていた。

千央から数えて五代の先祖に結婚を生涯五回もした人がいたこと、祖父の親戚一家が大水で全滅したこと、～年前馬屋が完成したその夜に火がでて、馬が焼け死んでしまつたこと（これは知つていた、なぜなら父の実家にはその死んだ馬の墓がある、行く度にそこで話を聞かされる、赤毛（鹿毛のこと）の美しい馬だつたらしい）などを聞いた。

話をきいた霊能者は一人一人不幸な魂が千央に残つていないか、口をつぶり念を送るようにして確かめていった。時折、誰だかわからないが何かを見つけたように独り言を言つてはそれを追い払う仕種をしていた。それは人相手に話すというよりは、勝手に家に侵入した野良猫を邪険に追つ払つているような口ぶりだった。なので千央は「先祖を内心とても気の毒に思った。

途中、何かに気づいたようにいった。

「一族で一番長生きした人は誰?」

「曾祖父ですかね。確かに90代で老衰で亡くなつたそうです」

「長寿ね。でも見えてるのは女性なの」囁くようにいった。

「曾祖母かな」

「寝たきりだつた?」

「はい」「なんで亡くなつたの」

「胃ガンです」

「それがこの子の腹にきてるのかもね」千央の肩を撫でて言った。

「ちゃんと最後までお世話してあげた?」

「さあ、僕はよく知らないんです」

「誰が世話してたの」

「祖母じやないでしようか」

「嫁姑仲は良かつた?」

「さあ……、昔すぎて」

「わからぬことだらけだ。

霊能者は祈るようなふりをし、深刻そうな口振りでひらいた。

「あのね……、そのお祖母さん水が欲しいお腹がすいたって言って成仏できず苦しんでる。亡くなつた方が成仏するためには生前の厄怨みやら未練を取り去る必要があるの、それが取り去られてないと成仏できないでこの世とあの世の間で永遠に苦しむことになるの」

「ちゃんと墓参りに行つてる?」

「いえ忙しくてあまり」父は小さい声で答えた。

今度はキリスト教でいう煉獄のようなところにおばあちゃんは捕

まつていて抜け出せない、ということらしい。しかもお嫁さんは死に際に虐待された？！という設定で。

本当のところはわからないものの、お嫁さんはとんでもばっかりである。

おばあちゃんも引っ張りだされて災難だ、知らないやつに不幸な死に際だと難癖をつけられて、死後の世界で意識があるなら、きっと怒っているだろうと思った。というかむしろ、千央が怒っていた。

そして一族の誰かが成仏してないと他の人にも悪い影響があるから、そのためにもお祖母様を無事成仏させなければならない、と靈能者は付け加えた。千央は大きく溜息をついた。

「そしてね、なぜこんなに幼い子が憑かれたかというと、『本人が我が儘だからよ。普通はこんな小さな子に頼らないでもっと大きな人に行くから。友達のこともそう、本当なら憑かれるようなことじゃないのにそうなったのは、あなたの心が病んでいるせい。だからちゃんと親の言つことを素直な心で聞かないダメよ』と言つた」

“病んでる”……病んでる。病んでいる……。

素直な心で聞かなければいけないのか、それはとても難しいことだった。とても。千央はニヤッと笑ってしまった。なんだか可笑しいのと情けないのとで。

最後辺りにはもう、千央は緊張もとけて、場の雰囲気にも慣れてきていた。というか時間的に長過ぎて緊張が続かなくなつていて、くだらねえと思いながら聞いていたのが、態度に出でていたのかもしれない。ばれていたか。もしかしたら少々反抗的だった千央への仕返しかもしれない、とも思ったのだった。

最後に靈能者は一枚の絵を見せてくれた、赤い長毛の猿が水彩絵の具で書かれてあった。これがあなたのわがままの精だと、千央は説明を受けた。訳が分からない。猿は足を一步踏み出し、こちらに向かつて歯を剥いている。それを含めた、友人の雑霊などを追い出すらしい。

それで今日は終わりだった。時間は大分オーバーし、一時間もた

つていた。何かと浮き沈みの激しい一日だった。

帰り道、二人と一緒に見えない道連れが増えた車は真っ暗な道を走っていた。とりあえず、ひいおばあちゃんにはお茶を出してもてなす。もちろん頭の内側で。Mちゃんは……、オレンジ？ リンゴ？ わかったファンタね。どうぞ。一人は乾杯した。ぜひ仲良くしてね。え？ お前には何もないよ、居座られたら私困るもの。それにお前はお客様じゃないんだよ、全くわがままなやつだな。それ飲んだら帰つてね。わかった？ 千央は皆に頷かせた。

満足かい？ 千央は隣に座った父を覗き込んだ。緊張と不安から解放された千央は、疲れきってドアにもたれかかっていた。目がショボついて、肩がこっている、そして身体のどこかの管がいまもドキドキしていた。なにか一仕事やり遂げたような感覚だった。

多分かなり遅い時間だった。千央は別れ際に言われた言葉を思い出していた。今日一番、千央が脱力した瞬間だった。“次にここに来るのが嫌だというかもされませんが、それはこの子の中の雑霊が追い出されまいとそう言わせています。まだわざれず、次回も必ず連れてきて下さい” 逃げ道は無いってことか、やれやれ。そう思いつつ、内心ホッとしていた。実は毎回こういうところに来る度に本当に見える人だったらどうしようと不安に思う。しかし千央の内面を見破るということではなく、ほとんど父の話から（千央はたいてい黙っている）推測できる範囲の答えなのだ。その結果やっぱり偽物なんだとちょっと安心して帰ることになる。と同時にガツカリした気分にもなる。ただ、特に当たりもしないが外れもしないので、本当に偽物なのかハッキリしたところはわからないのだ。

今までの靈能者ははつきり偽物だと確信がもてずにいた。しかし、今回は見事な外れだつた。ここまで確實に偽物だとわかつたのは初

めてだつた。

靈能者は話の真偽を見抜けなかつた、愉快である。勝つたのだ。
今回は父の勘違いが良い効果をもたらした、わかりやすい指針指標になつてくれた、千央の秘密が守りの誓になつてくれたのだ。

山の坂道が終わり、高速道路に入つた。一つ一つの山影が波のように動いているように見える、寝ぼけているのだろうか。空気や光がゆらいでくる。

しかし、今日靈能者のやつた、死者を使つた脅しのようなこと、あれはどうだろうか。千央は不意に怒りを覚えた。

信心深い人や年寄りなら成仏していないとそれらしい理由をつけて言われたら、強迫観念になり、簡単に鴨になつてしまふのではないかと……。やっぱり最低だ。ますます靈能者嫌いになつた一日であつた。千央は自分が死ぬ前に“自分は化けて出たりしないから、偽物には用心しろ”と遺言書に警告を書く必要があるなど[冗談]のようと思つた。

だがそれでも、本物の靈能者がいるなら是非あつてみたいと千央は熱望するのだった。千央の思考の始めから結末までを完璧に辿れる人がいたなら、その人は千央にとつて最大の理解者になるのではないか、と思うのだ。

それは言葉も必要ない、唯一無一の存在になるのかも知れない。

ふいに、目の前の山の影が過ぎ去り、千央の目に大きな光るもののが飛び込んできた。なんだ、夢を見ているのだろうか。それは、黒い地に何列にも連なつた大きなビールハウスで、まるで怪獣のさなぎかまゆのようだつた。それは、籠つたように白熱していく、溶けた太陽が蝶のように落ちてきたように。そのうちきっと何かが生まれてくるのだろう。怪獣かな。千央は笑つた。そんな突拍子もないことを考えつくなんて、もうここが夢の中なのか外なのか分からなくなつてきた。そして次の瞬間、千央は意識を完全に失つてしまつたのだった。

一、千央、カラフルなパンダに会う

通い慣れた道とは速く感じるものだ、と千央は思った。しかし、逆に待ち時間は日に日に長くなつていくように感じられた。ただ笑えた初回のころを終えてみれば、効果もない除霊を受けるのは、思つていたほど気楽なものではなかつた。

この日、千央は部屋の後ろで巨大な猫のようにだらしなく寝そべつていた。こういう時周りを気にしなくていいから子供は楽でいい。今日もずいぶんと混んでいる。

近ごろ千央は自分の腹の中に余分な内蔵が増えたような、今までと違う働きをしているような気がしていた。緊張すると、何故か腹と首辺りが激しく脈打ち、肝心の心臓は冷え切つて妙な無感覚状態になる。まるで腹が腐つていくようで、じつとしてはいられない気分になるのだった。

始める頃、あまりの奇妙な感覚に、千央は自分がゆっくりと死ぬのを体験しているのかと思った。千央は布団に横になり大変至極眞面目な態度で、臨終の時を待つていた。当然死ぬことはなく、その日千央は布団でそのまま寝入つてしまい、弊害といえば、そのせいでも夜眠れなくなつただけだつた。後から思えば、とても間抜けな光景だと自分でも思うけれど、その時は真剣にそう思いこんでいた。

千央は立ち上がり、父にトイレと口の動きだけで伝えて、部屋を出た。別段便意も尿意も感じてはいなかつたが、身体を動かして温めたら少しは状況がよくなる気がしたのだ。千央はトイレの場所を知らなかつたが、それを借りに行く人を何度か見かけていたのでなんとなく見当はついた。

廊下を出て左に曲がり、進んだ。真つすぐ行くと、突き当たり左右分かれ道があり、一方には奥にまつ黒いカーテンが見え、もう一方はまだ道が続いていた。右側に進むと、廊下は縁側みたいになつていて右手はガラス張りだつた。そこからは黄色い四角い陽光が差

し、庭を見ることができた。それは、すばらしい庭だつた。日向でひまわりは元気に咲いていた。日陰にはキキョウが水分たっぷりという様子でいくつもの花を付けている。遠くに大きくずつしりと固まつた鶏頭がある、それは充血した小人の脳みそのように赤々としている。斑のアイビーがそれを縁取るように植えられている。しかし、斑入りの葉はそういうものだと知っていても、やはりどうしても病気のように見えるなと千央は思った。庭の外周には、ツツジの木がぐるりと植えられていて、庭師がそれを剪定していた。

用もないトイレにしばらく座つた後（立派な洗面所だったので、千央は例によつて腹を立てた）、またすばらしい帰り道を歩いてくる時、千央は不審な部屋があることに気づいた。行きに見た時は、無意識に窓にカーテンがかかつているものと思った、しかしそくみるとドアの枠にカーテンで目隠しのみがしてある。しつとりとした重みのカーテンの裾は、余るほど長く、光を通さないようにしてあるようだ。なんでもない黒いカーテンだが、ここでみると黒魔術的なものを思わせた。一体、なんだろうか、と千央は思った。

千央は好奇心のままドア枠のある奥へ進んでいき、捲ろうと手を伸ばした。

その時急にぐらぐらとカーテンが波打つた。次の瞬間、女の子が目の前に飛び出してきた。いきなりの鉢合わせに一人はびっくりして見つめあつていた。千央ももちろん驚いたが、それ以上に同じ年頃の仲間を見つけたという嬉しさと興奮の方がすぐに上回つた。

「食べる？」

その子は早々に氣を取り直したようで、こちらに菓子袋を見せた。

千央は那一言で、その子は女の子ではなく男の子だということに気づいた。男の子にも高い声、女の子にも低い声の持ち主はいるけど、その違いはなんとなく聞き分けることはできた。

「いらない」

千央は拒否した。

「あ、そ」

男の子は袋を雑に破ると中のバターケーキを食べた。

もしかして、この子は人の家に勝手に入つて盗み食いをしているのか。千央は部屋をのぞこうとした自身を差し置いて、とりあえずそう思った。

もしそうなら確かに問題児だ。窃盗癖……ここに連れて来られるのもある意味当然かもしれない。

千央はかなり不信がつた顔をしていたと思うが、それを見るか見ないかのうちに、その子は部屋の奥へすたすたと入つていってしまつた。千央はその後を追い、慌てて部屋に入った。

薄暗い部屋の中は粉っぽいと思えるくらいほこり臭く、千央は息をつめて目が慣れるのを待つた。

千央は中の光景に圧倒されていた。部屋は、畳ほどの広さだったが、その半分ほどが大小の包装された箱で占領されていた。箱の山は部屋の角を一番高く段々低くなつていて、そのせいで、奥にある窓は外の光が遮られ、つす暗かつた。ふいに金属音がしたのでそちらをみると、さつきの子はたくさんあつた菓子缶を一つ取り、フタを開けて、クッキーを食べだした。千央は困惑してそれを見ていた。

ほこりが舞う散る中、男の子はクッキーを貪り食い、砂糖粒が輝き、大変不思議な光景だった。

「いつまでいるの？」男の子は手の上に乗つた砂糖粒を払いながら言った。言葉のニュアンスがどことなくおかしい。彼は急に我にかえつたようで、千央に笑いかけていた。しかし、どこか一腹ありそうな笑みだつた。

千央は答ようとしてすぐ黙つてしまつた、この部屋のどこからか声が聞こえてきたような気がしたのだ。

部屋の壁の一つは入り口のドアと同じでカーテンがひかれていた。確かに集中すると確かに人の声がそこから聞こえてくる。男の子もしばらく一緒に耳を澄ませていた、気のせいではないらしい。前にも

こんなことがあつたな、と千央は考えた。

男の子は箱の山を乗り越え、訳知り顔でこちらを向き手招きした。そして、床に寝そべりカーテンの裾に頭を入れた。千央もそれに習い、男の子の隣に寝そべった。

カーテンは二重になつており、手前の方にドアにかけてあつたのと同じ黒いカーテンが、一枚目は、これはうすい茶色のカーテンだつた。これにはまたどこかで見覚えがあつた。

千央も同じように頭をだすと、目の前に又箱の山があつた。隣の男の子を見ると、箱のすき間を熱心に覗きこんでいる。

すき間を探し、千央も覗いた。

部屋で見知らぬ老人が正座でこちら側に話しているのが見えた。千央は悟った。あそこはさつきまでいた霊視部屋でここは控え室なのだ、ということはあの山はおみやげものだろうか。しかし自分達は何にも持つて来たことがないぞと千央は思った。

「この人の奥さんは末期がなんなんだ、気の毒にねえ」隣で男の子は目を細めながら、ぼそりと呟いた。

千央は首を捻つた、氣の毒とはどういう意味だらうか。奥さんが病氣で間もなく死ぬことか、頼る人を間違えていることだらうか。老人の体には薄いシャツが体に張り付いて、瘦せた肩の形がはっきりと見えていた。

おじいさん、あんた來るとこ間違つてるよ。病氣の妻の側にいてやればいいんだ、この馬鹿詐欺師の所なんかじゃなく。無駄なことのように思えたが、又ふつふつと怒りがわいてきていた。

彼女がこの弱りきつた夫婦にとりついているといつているものはなんだろ？

どんなことを責め立てているのだろうか。

今までの経験からして大抵の偽の靈能者は話したことから、殆ど的人はそうだろう、ということを自信たっぷりに言つたり、どちら

でも通用する質問をして、予め答えがわかつたかのように振る舞つたりしている、言い当てる。ここまでなら誰でもできそうなのだが、宗教の怪しい雰囲気で疑心暗鬼にしたり、不幸になると脅したり、先祖を無下にするという罪悪感を持たせたりするのは普通の人にはできない。

それと人を騙すという背徳ができる人物に限る。これらの粗悪な混ぜ物が、靈能者を肥えさせているのだ。正しくは偽物の靈能者だ。しかしそれより、本当に自分が靈が見えると信じている人の方が怖い。靈が見えると嘘をつく人と、どっちがましだろうか、千央にはわからない。

たまに両方わかつていて演技しているんじゃないのかという場面にでくわすことがあった。

この前、千央の前の番だった人の話だが、その人は体調不良の相談できていたようだつたが、会話の端々に親戚からむけられる容赦ない悪意についてを匂わせ、さりげなく靈能者に訴えていた。この人は明らかに愚痴をきいてもらいにきているだけだ、と千央は話を聞く途中でわかつてきた。最初は呆れたが、話しを聞いていて段々同情の気持ちが沸いてきた。最終的に千央は、その話の高松の伯父夫婦とやらに殺意まで抱いた。

結局、ほとんど誘導尋問のようにして出た結果は期待通りだつたようで、その人は気が晴れたようにして帰つていつた。千央は複雑だけれど、その姿を祝福しながら見送つた。

とても短い時間だつたが、こいつの場所の意義、有用性を多少なりとも理解することができ、また、靈能者の優しさ、というか配慮、のようなものを感じたエピソードだつた。靈能者はある程度ウンウンと話を聞いてくれるし、気軽に愚痴れるような人が側にいない人にはよいのかもしれない。

しかし肝心なのは、千央自身が納得も得もしないことだ。むしろマイナスじゃないか、と千央は自分の考えに絡んだ。

その通りなのだ。むしろ他の人たちと同じように話をきく父の真

剣な顔に呆れ、父への尊敬が日々削り取られていった。大波に削られる岸壁のように。いまや千央の父への信頼は真夏のゆきだるま並に減つっていた。

千央は、老人はやっぱり信じているのか、女と問答する様子を見ながら思つた。

千央が憂慮していた怪しい儀式はなかつた。しかし、やはり異常ともいうべき光景が目の前で繰り広げられていくのだった。この靈能者と適当な呼び方がないのでそう呼ぶの対談は、医師の診察に似てゐると思つ。

まずははじめに、相談者は今抱えている問題や不安を相談し、靈能者は過去にやつた罪についていくつか質問する。ここでは、自らの罪やの失態が惡靈を引き寄せ、困難や不満を引き起こすと考えられている。

だから、相談者はの子供時代から人間関係まで根掘り葉掘り聞かれ、そこから何に憑かれているかを推測する。その原因が本人に見つからない場合も安心だ赤ちゃんなど、話は家族や先祖、前世にまで及ぶ。たとえ、結局当人が聖人の様に暮らしていても、もれなく晴れて憑かれたに認定される。

憑きものは大抵人や動物、化け物の姿をしている。稀に生きている人にとりつかることもある、千央の場合もそうらしい。まさか除靈のため本人を殺せとか言わないだろうな、と千央はいかぶつたが、本人は生きていてもいいらしく、殺人は勧められなかつた。

そして対象が定まればお祓いのプロセスに入る。

除靈はその靈に話かけながら行う、なだめたり賺したり、時には怒つたりして眞面目に離れよう訴える。幽靈にも性格があるようですが、すぐ離れたり、逆に離れなかつたり、何か言つたり要求してきたりする、というかそう演出している。その光景は異様に見えると同時に可笑しかつた。

靈能者は突然除零される側になつて奇声をあげたり、急にまとも

に戻つたりを繰り返しながら、一人、大芝居を繰り広げるのであつた。それは、サイレント映画のように身振りが大袈裟でありながら、それでいて声までついているので、やかましく滑稽この上なかつた。しかし、千央は基本不機嫌と無口を装つてゐる手前、可笑しいところにあつても笑うわけにはいかず、毎度も吹き出しあうになるのを堪え、大変苦しい思いをしていた。

そして他の人は知らないが、千央はお祓いの後、家での課題が出来た。

毎日、お香を焚くことと、家の手伝いである。お香は叩き割つたような形の木片で、増田家の玄関あたりの受付で1セット600円で売つていた。これは長さがなく、肌は流木のように滑らかで、ピンセットで挟んで火を付ける。そうしないとやけどをしそうになつて、すごく危ない。

さらにこの木片、かなり火が付き難い、しかも火の元はマッチでなければいけないとの通達があり、さらに焚く時間も夕方と決められていた。その時間家には誰もいないので、さぼつてもばれようもないのだが、千央は義理堅く毎日焚いていた、誰にに対する義理なのかなはわからぬけれど。

しかし、本物にうんざりするぐらい目にしみる煙りだつた。千央はお香を炊く度、大粒の涙を机に垂らして、泣いていたくらいであった。

男の子が首を引っ込めたので、千央も従つた。頭をあげるなり、千央は薄々感づいたことについて質問した。

「ここに住んでいるの?」「これは客がもつてきたもの?」などを。男の子はゆつくりとした調子で答えた。

「うん、まあ、ここに住んでる。あそこにいるのは、おばあちゃんといど」。あと、このみやげ物は催促してるものじゃない、勝手にもつてくるんだ。このとおりこの通りもてあましてはいるしね」

男の子は山づみの箱を見上げた。確かに埃が積もり、長い間手をつけた痕跡がない。

男の子は手を後ろに組み、千央が何か言うのを待っているようだ。千央は改めてこの男の子を観察した。彼の顔は一言で言うとカラフルな顔立ちであった。色鮮やか、というと何か病気かケガをしているようだがそういうわけではない。

彼は割と白い肌をしていて、だからか目の下の青いくまがとても目立っていた、その上、目の周りが泣いた後のようにピンク色に縁取られていた。カラフルなパンダのような子だ。

長髪でゆるやかなウェーブのかみをかたまでたらし、顔は可愛らしく、背は千央より低い。唇の形がとても印象的だ、小振りながら日本人形やビスクドールのような山なりのはつきりとした肉の厚い立体的な形をしていた。その縫い縮められたようのような格好の口はひどく紅い、かき氷のイチゴシロップを食べた後みたいだ。服はキヤミソールに短い丈のズボン姿だった。

千央は心の中で彼が女みたいだと思ったが、むしろ女性らしく見られたい様に見え、他の人には無礼がもしかない考えは、あまり罪悪感はわいてこなかつた。本人もどう見えるか分かつてやつているのだろうと思う。

男の子は黙つて踵でリズムをとつていた。一人はしばらく黙つて見つめ合つていた。彼の肌は見れば見るほど、白さを増していく、千央は息が詰まつていいくような感覚があつた。

また千央がカーテンをぐぐるとき、男の子は「氣を悪くしないでね」と悲しそうにいった。

千央は何とも言葉が見つからず、結局返事をしなかつた。それに、当然無視していいような気がしたのだ。

またあの閉塞感のある部屋にもどつた千央は、今度は姿勢を正して座つた。あの男の子が見ていると思うと何となく気が抜けなかつ

た。

その日の帰り際、父に渡されたプリントにはこう書いてあった。
くすんだ茶色い藁半紙に印刷してあると、家の真っ白い紙より本格的に見えるのだから、なんだか不思議である。

「交流会のおしらせ

第××回夏季交流会を、下記の要領で実施します。

日時：8月×日（火）PM18:00～、×日まで

場所：喜屋武・増田ヒサノ、宅

持ちもの・着替え、学習用具等

料金（食事代等）

嫌いな場所での胡散臭い集まりにも拘わらず、千央はこの企画に惹かれていた。

この紙が父に渡された時、千央はちょうど側にいたのだが、子供がいる親みんなに渡している、というようなことをきいた。紙に対する象は小中学生と書いてある、つまり千央とおなじ年頃の子が集まるということだ、千央の行く時間にはおなじ年はおろか子供の姿を見るることはほとんどなかつた。千央はその子たちと特別何かを話したい訳じやなかつたが、しかし、千央は親に靈が憑かれていると思われている子供たちが、どのくらいまとも、もしくはおかしいのかを自分の目で確かめてみたかったのだ。そして、本人は親を怨んでいないのだろうか。または自分の中になにかが居着いていると思っているのか、それとも怖がっているのかが気になつた。

千央の説得がどれだけの影響を与えるかはわからない。しかし、もし靈能者の言うことを信じて怯えているのなら、それは嘘なのだと教えて安心させかった。この無茶で、衝動的ともいえる感情は、誰にも感知されることなく、千央の胸の中だけで、強い使命感として大きく燃え盛つたのだった。

一方、千央の場合はと、これらの恐れ、不満、恨み、どの感情にもあてはまりはしなかつた。靈より祟りより、そんなことを信じる父のことを千央はただ単純に、不気味に思っていた。悲しいことに父も千央の何かを不気味に思っているのだろう。そうでなければ、こんなところに連れてこられはしまい。

それにもしても、憎み合っている親子は多いかもしれないが、お互いを氣味悪がっている親子はかなり珍しいのではないか。そう思うと少し情けないが、それでいて奇妙すぎて、いつも笑ってしまう。

毎回あちら側で、自分の悪霊の悪行について切々と訴えられるけれど、それは悪霊なぞではなく自分自身のせいか偶然そうなつただけだと分かっている。残念ながら悪いことでも、ちゃんと意識を持つてしているのだ。

しかし、ふと、もしその悪霊が自分自身のことではないかという変なことを思いつことがあった。千央はそれで一つの空想をした。私の意識は小千谷千央という子に寄生し、11年間育つた何かの亡靈で、私の中には本当の赤ん坊状態の千央がいるのだ。そして、もし自分を追い払つわれたら、きっと記憶喪失になつて本当に病院行きであろうなど、そんなひどいおちになつて妄想は終了した。どちらにしろ悪い霊も千央もたちが悪いところで結果は同じなのかも知れない。とにかく今の千央では駄目らしいのだ。

それにしても、父はどこでそのような特殊な思想を身につけたのだろうか。今まで父は超自然現象を信じるタイプでもなく、普段宗教に感慨深いようすもなかつたから、この場に限つての父の变化には千央は首をかしげるばかりだった。千央は一度そのこと考えだすと、しばらくの間それが頭をはなれなかつた。

本人に聞こうにも聞けなかつた。なぜかといふと、なんとなくどういう展開になるか予想がつくからである。きっと大げんかになり、父は一生懸命に自分の行動を肯定し、千央はショックを受ける。父は千央から頭がおかしいと言われる、多分怒るだらう。そして大喧嘩をし、父子の関係は修復不可になる。千央は永遠に父を失う、精神的な意味で。

今の立場もつらいが、踏み込めばどうなるのかがわからない。本当に嫌になるかもしない、だから黙つてることに決めたのだ。もしかしたら、父が言いたいことを女教祖を介して言つてもらつているという比較的まともな可能性も考えた。古い分野から生まれた新しい矯正教育法というわけだ。ただ、今回に限つて言えば嘘だとバレているから全然効き目はないし、逆にひいては、そういう効果を期待するなら小さい頃から英才教育的なすりこみをするべきだつた、と千央は思つた。

それに、今となつては杞憂だが、千央が本当に信じきつてしまつた場合はどうするつもりだつたんだろう。千央はもともと怖がりで、今でもテレビでやつてている怖い話をみてしまつと夜は眠れないくらいだ。それをもちろん父は知つてはいるはずだ。いくらか対処法を生み出さなければ、千央はなにかに怯えながら過ごさなくてはいけなかつただろう。もしかしたら父はそれを望んでいたのだろうか。千央は気分が落ち込んだ。それならあまりに趣味の悪い方法だ。それそこまで自分は扱いづらい子ではないはずだ、そう願つて千央は考え方を振り払つた。そこまでして矯正したいわけがない。恐怖で支配してまでも。

この件は眞面目に考えるほど、頭がこんがらがつてくる。毎回聞かないかぎりはもう、わかりよつがない、といつところで毎回どん詰まつておわる。永遠に飽きることのない問答である。答えは隣で運転しているのだけだ。

父は千央が思つてはいるより訳ありな人物なのかもしれない。隣の父を見て千央はそう思つた。

それにもう一つ、消極的な訳だが参加したい理由があった。祖父と父の不仲が千央の不在によつて解決するかもという副産物的な目論みだ。解決するといつても二人が復縁するわけではなく、決別する可能性もあつたが、今の状態を続けるよりずっといい、と千央は思つていた。父も独立すればいい。

千央は冷蔵庫のドアに磁石で“お知らせ”を貼付けた。

III、イノシシの沢

「かんき」おもむろに立つた彼は確かにそういうた。
とても変わった名前だ。

「僕はここに住んでいるので知っている人もいると思います。何か
分からぬことがあつたら聞いてください」

歡喜は階の顔を一周見渡し、一礼した。そして静かに椅子に腰を
下ろした。

合宿に参加する子供は増田家のサンルームに集まり、それぞれ自
己紹介をさせられた。サンルームとは全面ガラス張りのベランダの
よつなところだ。

まず、石川五右衛門かヤマアラシのよつな髪の男の子が立ち上が
り、最初は照れ臭そうに、最後はふざけながら言つた。

「えーと、吉田伊鶴です。よろしくお願ひします」

千央たちはモザイク模様が施された丸テーブルを囲んで座つてい
たが、その上には植木鉢がどつさり置いてあつた。

「坂田真琴です。中学二年生です」

だから宿泊道具の詰まつた重そうなスポーツバッグやリュックな
どは床に散乱していた。

「夏梅杏子です。よろしくお願ひします」

隣の子が挨拶した。次は千央の番だ。思うのだが、こういう場で
いつも行われる自己紹介に意味はあるのだろうか、千央は自分の番
がくる前は緊張で、相手の名前も特技も趣味も全く聞いていられた
ためしがない。千央は立ち上がつた。頭に血が上る。

「小千谷千央です、よろしく」そそくさと言つて着席。やつと終
わつた、千央はため息をついた。ひどく無愛想に思われただろうけ
ど、まあいい。

「福岡県からきました。仙谷真です」

色白の小柄な男の子が千央に勝るとも劣らない緊張感と震え声で

自己紹介を終えた。

「牛島公平です。特技は多分……サッカーです」

ひとりきわ背の高い男の子はこつ挨拶した。

「僕は平岡慶幾です。10歳です。よろしくお願ひします」

最後の子はまだ幼い雰囲気があるので、実に落ち着いていた。鼻が高く、艶のある癖毛が魚の鱗のようで、どこか異国人風だった。正午過ぎのこの時間、光沢のあるタイルの床に光が反射し、堪え難いほど眩しくて暑かつたから、千央はアロエの鉢の影に潜み涼んでいた。目の前を飴色の小さなアリが列を作つて渡つていた。それに見惚れていると、姿勢のよいすらっとした若い女性が登場した、彼女は元気よく言った。

「今日からはじまります、宿泊会ですが、初日からお天気に恵まれ何よりです。今回、君達にはこの自然の中でしか経験できないことを学んでほしいと思つています。私は園まり子といいます。皆のお世話を担当します。よろしくお願ひします。まず

「来てたんだね。びっくりした」

後ろから声がした。いつのまにか歡喜が側に来ていた、千央はただ驚き頷いた。

「誰なの？」

隣から鈴のような高い声がした。振り向くと、そこには千央と同じ歳頃の女の子がいた。菱形の大きな眼、小さな鼻をして、癖のない真つすぐな髪は形の良い頭蓋骨にぴったりと沿い、耳下辺りで切り揃えられていた。その猫のよつな目は不審気に光り、千央に向けられていた。

「ばあちゃんの客だよ」

歡喜は答えながら椅子を引き寄せ、女の子と千央の間に座った。女の子はふーん、と言つた。どうやら一人は知り合いのようだ。その時拍手が起こつた。話は聞いていなかつたが三人は一応拍手をした。

彼に会うのは随分久しぶりだった。歡喜の碎けた人懐っこい態度

に、千央は驚きはしたがまた嬉しくも思い、前回に会つた時の気まずい思いを払拭したいとも考えていたので、千央はいかにも親しいふうに話しかけた。

「そういえばさ、あの人どうなつた、あのガンの」と千央。妙だが唯一の共通の話題であつた。

「んー、さあね、知らない。全員を監視してゐわけじゃないから」歡喜は変な顔をしてすぐなく囁きかえした。仲直りの握手の手を跳ねのけられた、ような気がした。

「これから部屋に案内します。荷物はそこに置いてきて下さい。一同きりつ。」テキパキとした合図にガタガタと音をさせ、皆は立ち上がつた。少し軍隊のような乗りなので、千央はこれからが不安になつてきた。

千央も二人もざわつきの中、立ち上がつた、スリッパを履くように指示された。

一同は団子になつて移動した。先頭がつつかえるので皆は必然的にすり足になつっていた。二階にあがり、ガラスの引き戸を開けて部屋に入った。

「女は向こう側で男はこっちね」歡喜は男女を左右に別けた。

部屋の広さは20畳ほど、小学校の教室のような大きな窓があり、そこからは山が見えた。この家は周囲三方を山に囲まれており、お隣りは道を挟んだ右手に一軒のみだった。由くて大きな犬が吠えているのが見えた。大きな納屋があることから、どうやら農家のようだ。また窓から見える裏手に、現代日本風の家屋が建つていたが、明らかに歡喜の家の敷地内なので、おそらくこれが本宅なのだろう、と千央は思った。

この部屋は本々一つの大きな部屋だが、真ん中に仕切りがあり、男女が別々に使えるようになつていて。その仕切りは滑車付きのアコードイオンドアだつた。これは両側から鍵がかけられる様になつていて、衝突させるとばふばふいつた。この妙でばふばふしたドアを開けるには両方の鍵を開けないといけないようになつていた。

壁には洋服箪笥が備え付けてあり、扉は合板だった。反対の男の子側には押し入れと本棚があつた。テレビはなく、川の水音だけが聞こえた。千央は足元に荷物をおいた、ここで数日の間寝起きするのだ。

千央は今日、相談室と控え室以外の部屋を初めて見た。この家は外見こそペンションのようだつたが、中は鴨居や襖のある完全な和風の内装だつた。長方形の形をした建物で、部屋数が多く、旅館か学校のように長い廊下があつた。

その途中至る所にいくつもの絵が飾つてあり、ちょっとした画廊並であつた。その絵というのがどれもこれもとても妙ちくりんだった。

その中の一つに横幅が千央ほどもある巨大な絵があつた。三つの丘が近景から中景、遠景にかけて描かれていて、そこへクリーム色の一本の道が渡してある。右側には古代の原始植物か、南国植物だかがの森が描かれていた、その暗闇の中から得体の知れない生物の目玉が二つ、覗いている。中央にはこちらに背を向けている男が描かれている。彼は薄黄色の上着と若草色のズボンを履いての帽子をかぶっている。おそらく化け物は男を狙つて潜み隠れているのだろう。

だが、千央には狙われているこの人物の方がよっぽど不気味に思えた。彼はひたすら歩いているだけなのだけど

歓喜は「今夜は外でご飯を食べるから、道具を運ぶのを手伝つて」と皆に呼びかけた。部屋にいる皆、得に男の子はとたんに色めきたち、すぐに走つていった。

千央は外の庭まで彼らを追いかけた。焼き台、網、すみ等をそれぞれ分担した。

「近くの川原まで運ぶよ」

歡喜はそう言って裏口から出でていった。

家のうら側に山があり、その道を歩いていった。道を行くと川原がみえてきた。手前は砂利のたくさん敷き詰められた川原で、対岸は山が割れてできた絶壁のように土が剥き出しになっていた。向こう側にいくほど、水深は深くなっている。上流は岩だらけで水が白糸となって流れ落ちていた。辺りは腐葉土や濡れ落ち葉の匂い、木の匂いがした。その緑林の匂いが沢の水で搔き回されて、山独特の空氣となり、そこら中に発散されていた。

猫の女の子は靴を脱ぎ、裸足になつて、川原へ駆け寄り川に足を入れた。千央も同じようにした、水は飛び上がるほど冷たく、澄んでいた。

公平は川原の石を拾い、それを投げた。石は水面でポーンポーンと小気味よく跳ねた。ひとつ、ふたつ、みつ、よつ、いつつ、むつつ、ななつ、千央はわあ、と感嘆の声をあげた。 欢喜は川に入り、「こう言つた。「ここ蟹がいるんだよ。石をひっくり返してみて、出てくるから」

千央は言われた通り、適当に石をひっくり返してみた、大きな石を移動させると軽い小石は水に流されてしまつ。いや、よく見ると、それは灰色の小さな沢蟹であった。大きさは味噌汁のアサリの中に入っているのと同じくらい。千央が手の平で包むと、しゃこしゃこと中で運動をした。とてもくすぐつたい。

歡喜は小石でブールを作り、そこにカニを集めていった。中には鎧のような鱗の魚が数匹、灰色の蟹は石をどかすと動きだし、それでやつと見分けをつけることができた。中には鎧のような鱗の魚が数匹、灰色の蟹は石をどかすと動きだし、それでやつと見分けをつけることができた。

慶幾が大きな蟹を捕まえたと言うので、見せてもらつた。殻が3㌢くらいはあり、真つ赤な色をしていて、明らかに雌だった。なぜ雌だとわかつたかというと、腹に卵を抱えていたからだ。紅色と

銀の斑模様で、マニキュアにこんな色があつたかも、と千央は思った。サイズは意外と大きく、BB弾くらいはあるだろう。

「沢にはメガロパ、ゾエア期を卵の中で過ごすんだよ」豆知識を語る口調で歡喜は言った。

しかし千央にはメガロパ期も、ゾエア期も、両方意味がわからなかつた。多分成長期みたいなものだらうということは、なんとなくわかつた。

「ほお、歡喜は物知りじゃないか」

突然、後ろから感心した声がし、そこにはクーラーボックスを担いだ見知らぬ男の人があつてきていた。唐突に現れたので、千央はびっくりした。背が高くて、なかなか格好がよかつた。「ねえメガロパつて何?」猫は歡喜に聞いた。

「えーと、それはね……」歡喜は目を泳がせて、うろたえた。うまく説明できないようだった。

「メガロパつていうのは、蟹の幼生のことだよ。普通蟹は生まれてすぐは蟹の形をしていないんだ。メガロパやゾエアは蝶になる前の青虫や蛹みたいなものだね」

男は助け船を出した。

「まあそのうち学校で習うと思うけど」と笑いながら締めた。彼は愛想が良かつたが、笑うと口の角ではなく、両頬に縦のシワができる妙だつた。歯は小さく、米粒のように青白い。今までそんな人を見たことがなかつたので、千央はまた驚いた。とりあえずメガロパのことはわかつたが、しかしこの男の人は誰だらう、という不審な雰囲気になつた。

男は空氣を察してか、自己紹介した。

「あ、俺、水野裕紀です。よろしくな」水野さんは手近にいた、公平、慶幾、ヨワマルと握手をしていった。いや、どーも、どーもと言つて。気になつたのが隣にいた歡喜の態度で、嫌に目が虚ろで、

白々しく、その上怒つていいようにも見えた。

そのすぐ横では、五右衛門頭は特別大きな蟹を捕まえるのにしばらく奮闘していた。ようやく捕まると彼は「己蟹、あんまり生意氣だと、茹でて食うぞ。おら」歯を力チカチいわせながら、蟹に言った。蟹はもちろん脅しなどには屈せず、本の脚をバツと開き威嚇の格好をとった。

「でも沢蟹つて食べられるのかな？全然身がなさそうだけど」とワマルが聞いた。真面目な答えに千央は内心おかしくて、こっそりと笑ってしまった。

「丸」とから揚げにすると美味しいらしいよ」歓喜は答えた。エビフライのしつぽを集めたような味がしそうだな、と千央は思つた。「うわ、痛い」五右衛門頭は声をあげた。彼は蟹の大きなハサミで指を挟まれていたのだ、五右衛門頭は手を振りまくつた。ボチャと水音をたて、蟹は落ちた。蟹は紅葉が流れるようにして、するすると石の間に入り込み、あつという間に皆の視界から消えてしまった。

「あ～あ、逃げちゃった」と猫。皆も惜しそうな顔をしていた。

「きっと、俺らに食われちゃたまらんと思つたんだろ」と公平が笑いながら言つた。

佐野さんは火をおこす準備をはじめた。カセットコンロの上に柄つきの網を乗せて、その上に炭を並べ、火をつけた。

よく炭が熾つたら焼き台に入れ、網を被せた。千央はその間、野菜を切るのを手伝つた。ナスとタマネギは輪切り、ニンジンは薄切りにした。

それが終わるまでには、人たちが集つてきていて、分担して仕事をやつた。

皆で肉を焼きはじめたころには、辺りは夕方を飛ばして夜の気配がしてきていた、どこかの草むらで、鈴虫が鳴きはじめていた。山なので日が暮れはじめるのが少し早いのだ。

千央は川原に座り食べはじめた。石が尻にあたつて痛かったが、

すぐに慣れた。しかしそれよりも、知らない人達の集まりで千央は身の置き場がなく、小さくなってしまった。他の子も申し合わせたように沈黙していた。カルビの隣でなぜかバナナが丸ごと焼かれていたが、誰も突つ込まなかつた。千央は炭火で顔が熱く火照つてきた。

それにしても、と千央は紙皿に溜まつた茶色の液体を見ながらこう思つた。このタレはちょっと辛過ぎかもしれない、そのせいいか、胃が少し痛くなつてきた。なにしろ全然会話がなかつた。

バナナが黒く焼けて焼きナスみたいになつてきたころ、「ねえとこりで、このナスを丸ごと焼いたのは何なの？」

細身の年上の子があるものを指さし、誰にともなく聞いた。
その先には長い間焼かれ、もつナスのように変色したバナナがあつた。

「いやそれ、バナナですよ。誰が焼いたんだろ」と笑いをこらえながら千央は言つた。

それを聞き、「嘘、それバナナなの」と慶幾が少し大きな声を出したので、皆は注目した。にわかに誰がやつたの?と犯人探しのようになつた。

「あああ、僕です」

ものすごく言いにくそうに名乗る声がした。それはなんとも気弱なようすの信だつた。信はそれをさつと自分の皿に取つた。バナナは真っ黒く軟らかくなつていて、透明の汁が皮から流れ出している。奇妙な調理法に皆は引いてしまい、白い目で信を見た。彼はしょんぼりとしていた。千央はちょっとしまつたと思つた。

そこに、どこか企み顔のおじさんがやつてきた。おじさんは得体の知れない肉の乗つた皿を皆の中心にドンと置き、「うづうづおら、こいば食べんこ」

皆は食べるのを中断して、皿に注目した。肉が乗つていた。公平は盛られた肉を見て、非難めいた声を出した。

「なにこれ、汚ねえ」無礼な言い方だつたが、的確だつた。確かにそれは散々灰の中で転がして遊んだ後の肉片みたいで、すごく汚く見えた。

しかし歡喜は、いただきます、と言つと身を乗り出し、箸で一切れ取つて、あつさり口に入れてしまった。皆はア然とするか、感心してそれを見ていた。歡喜は何とも自慢げな顔をして言つた。

「美味しいよ、これ」

それを聞いておじさんは側にいた他の人に次々に進めていった。これは何かあると思ったが、危険なものではないらしい。千央はとりあえず一切れ取り、他の何人かもそうした。

千央は匂いを嗅いだ、とりあえず何かの肉であることだけは間違いなかつたが、それ以外は不明だ、肉はローストビーフのように塊を切り分けた形で、外と同じで中も黒灰色をしていた。色からすると牛肉だが、全く牛肉の匂いがしない、多分鹿とかヤギか熊。まさか……人肉ではないだろう。なんて考えながら、千央はおじさんの顔を見ながら少しだけ口にした。それはとてもくにくにとしていて歯ごたえがあつた。半乾燥のジャーキーか、纖維質なハムみたいだ。臭みはない。千央が思案顔で食べているのを、おじさんは面白そうに見ていた。

千央の鈍い咀嚼の間に、やつぱり種明かしがあつた。水野さんがふいに現れ、この肉の正体を明かしたのだ。

「あれ、親父、そいイノシシの肉じゃなか？」

それを聞いた瞬間、その場にどよめきが起こり、急に騒々しくなつた。向かいではウワツ、と声があがり、猫の女の子がベツと肉を吐き出した。公平は苦い物を含んだように歪め、すぐさま千央は肉を噛むのを止めた。五右衛門頭は頸が外れたような面白い動きをした。慶幾は困惑して立ち上がつた。歡喜は知つていたのか、そのようすを見て笑いこけている。猫目は半泣きになつっていた。なにも泣かなくても。

「嘘、これイノシシなの！？」

公平は驚いて言った。

「そりだよ、去年まで近所を駆け回つてたやつ」苦笑しながら水野さんは答えた。

水野さんのお父さんは鉄砲を構える仕種をして言った。
「冬にね。イノシシが出てくるけん、おっちゃんが山で捕つてきたとよ。こいはその肉ば燻製にしたと」

「まじ? すげえ、イノシシとか初めて食べた」と五右衛門頭。

「えー、可哀そう」と猫目の子。

「不味くはないかも」

千央は肉を噛み締めながら呟いた。

「でもそういうのは先に言つてよね、おじさん。まじびっくりした」慶幾は抗議した。

しかし、こう文句は言いながらも、また皿に箸を延ばした者が何人かいた。初め汚いと言つた公平などは、何切れも食べた。砂かと思つていたそれは、黒と白の碎いたコショウだつたり、何かの植物の種（香辛料）であり、それからいい香りがしていた。

おじさんはその様子を嬉しそうに見ていた、そして千央が一息に飲み下したのを見て、満足そうな顔をした。

「あーあ、面白かった」

歓喜はやつと笑いの発作が終わつたようだ。しかしながら肩をひくつかせていた。

それから、バナナの件で一時下手物食いのような扱いになつてしまつた信だが、後で千央が一口貰うと、甘味が増して中々美味しく、無事その誤解は解けたのだった。

帰り道で水野さんはイノシシの話をはじめた。

「一度イノシシにあつたことがある」「以前山の上に住んでいた時、家までの坂道を自転車で上つていたんだ。ちょうど今『』の夏の暑い日でさ、暑くて、暑くて汗だらだらになりながらね。で上り終え

た後、僕は猛スピードで坂をくだつた。ほぼノーブレーキでね。そしたら行く先に何か茶色いものが見えたわけ、最初はあまり気にしていなかつたんだけど、近づいてみるとそれはイノシシでさ。でも急には止まれなかつた、一度急ブレーキをかけ損ねて数メートル下に落ちたことがあつたから、下がたんぼじやなかつたらきつと死んでいたよ。とにかくそのまま僕は下つていつた。そういうしてゐる内にイノシシも僕に気がついてね。あと数メートル位に近づいた時、イノシシが突進してくるように身構えた、僕も猛スピードで走りながら身構えた。そしたら次の瞬間、小さい破裂音がしたかと思うと、イノシシはあつという間に森の向こうに走つていつてしまつた。頭を一所懸命ふつてね

千央はイノシシが暑いアスファルトをひづめでたたきながら、慌てて逃げる様子を想像した。

「大きさはどうくらいだつたの？」と猫の女の子。

「ん~、僕の膝くらいかな」水野さんは自分の足を見ながらいつた。急に馬のような顔のおじさんが、人懐っこそうな表情をして割り込んできた。良く口焼けしていて、まるで鹿毛の馬のようだつた。おじさんは言つ。「おいの小さかいろ、どがんでん太かイノシシば飼つとつたことのあつたよ。昔、親父の養豚業をやつとつた時、山でウリぼうば拾つてきて、ウリぼうつてのはイノシシの子供ね。赤ちゃんの時はイノシシもカワイイかどよ、こんぐらいで、茶色と黄色の縞があると。そこで懐くと人について歩くと

おじさんはラグビー ボールを抱えるような格好をした。

「でもブタと同じエサをやつとつたけんが、俺の背を超すぐらいどんどんバカでかくなつてさ。暴れ回るようになつてからは、普通の豚と一緒にしておれんとなつて、隔離のために木で檻を作つてそこに入れたとよ。一日中体当たりしてから、いつ檻の壊れるかびくびくしどつた。最終的には親父の背ぐらいになつとつたけんね」

「怖つ」

「檻は大丈夫だつたんですか？」と公平。

「多分ね。いやー、そいがせい。親父が養豚ば辞めた時はもうねりんかつたと思うとけど、もうよー覚えとらんとよ」

「名前はつけてた?」

「そりゃー、ウリぼうけん。ウリぼうけん」

「そのまんまじやん!..」

おじさんの単純なネーミングセンスにその場の皆から笑いがおこった。

千央も笑った。だが、燻製にして食べたイノシシと併せて考えた結果、ある可能性について思い当たつたのだった。その時千央は、落ち込まずにはいられなかつたのであつた。

四、穴ぼり（前書き）

虫や内蔵が苦手な方は閲覧注意

四、穴ぼり

次の日の早朝、千央は窓の桟にもたれ掛かりそこから見える風景を眺めた。そこからは蒼い刃紋のようななかたちの山影がパノラマで見渡せた。昨日は三角に見えた藍色の山影は、今日は厚い雲がかかり、台形に見える。

この時間帯、辺りは霧で満ちていて、全てのものに靄がかかつていた。この噎せこむほどの中の湿り気を帯びた空気は、吸っているだけでお腹一杯になりそうだ。

仙人は霞を食べているらしいけれど、ここにじばらく修業すれば肺で食事が摂れるようになるかもしれない、わたあめに似た霞を食べていい自分を千央は想像した。しかしどりあえず、まだ人間の千央達は食べなければならなかつた。

千央は服を着替え、食堂（多分この部屋は普段使われていないと思つ）に入つて行つた。

皆は先に来ていたが、揃いも揃つて眠そうな目をして朝食のみそ汁を啜つていた。それを見て千央は可笑くなつた。夏休みも8月に入り、すっかり朝寝坊の癖が染み付いていたのだ。時計の針は6時15分を指していた。唯一目が覚めているらしい歡喜は、夏休みの課題について生き生きと話しか始めた。

「ねえ、皆はさ、夏休みの自由研究は何するつもり？」

「さあ……、まだ決めてないな」公平が虚ろな声で言つた。目が真つ赤だつた。

「去年は何やつた？」

「えーと、僕は昆虫採集をやつたと思うんだけど……、今年もそれじゃ駄目だよね。だつて先生が同じ人だし……、めんどくさいな」そう言つて慶幾の頭は、寝ている間に何かに踏み荒らされたのかと思うほどぴんぴんとし、荒れ放題だつた。

「へえ、僕も昆虫採集をしたよ。蝶とか甲虫とか……、ちゃんと標

本にもして額にいたんだから。賞も取つたんだよ」

そうして歡喜は近くにいた子たちに顔を寄せて、低い声で話はじめた。遠くの席いた千央に話は聞こえてこなかつた。

しばらくして歡喜の隣にいた信が口を手で被い、ひどく驚いた反応を見せた。千央はそんなに面白い話なのかと思い、興味を引かれて歡喜にその話を聞かせてくれと頼んだ。歡喜はそれに応じて話し出した。

「うん。あのねえ、カマキリとかバッタの標本を作る時の話なんだ。まず、腹を開いて、内蔵を取り出すんだよね（千央はここの顔を歪めた）、そなんだよ。その作業がすごくキモくつてや。ドロドロして汚いし、汚れるから。それが嫌いだつた。でもそなつやって乾燥させないとカマキリは内蔵の部分が腐りやすくて変色しやすいんだ。それにさ、割とでかいからスペースが稼げていいんだよね」

聞かなきやよかつた。千央はそう思つたが、しかし、その話はまだ終わつていなかつたようだ。歡喜は続けた。

「それである時に、すごく大きいカマキリが道路で轢かれそうになつているのを捕まえてさ。それで標本を作ろうと思つた。でも僕、内蔵出しの作業をしたくなつたから、別の方法に変えることにしたわけ。まず餓死させてから乾燥させるつて方法にさ」

まあ、カマキリにとつては内蔵を取り出されるより、ましかもしれないなど千央は思い苦笑いをした。歡喜はそれに応えるよう笑い、そして言つた。

「それで、僕は両方をいっぺんにやつてしまおうと思つて、それでピンで留めたカマキリを晴れた日に窓際に置いて、しばらくの間放つといったわけ。そしたらいつかの夜。ゴキブリがたくさん……、10匹くらいかな、ぶわーっと群れで来て、カマキリの腹をぼりぼり食つてたんだよね……」

歡喜は神妙な顔で話終えた。聞かなきやよかつた、千央は気分が悪くなつてしまつた。ゴキブリに生きたままじられるなんて、恐すぎる。歡喜はその時カマキリが死んでいたか生きていたかは言わ

なかつたけれど、千央はもう詳しく述ねる気にはなれなかつた。

「食べる途中なんだけど。止めるよ、そんな話」

本氣で神経に触つたようで、公平は怒鳴つた。まあ当然だらう、と千央は思つた。

「生き物じゃなくて植物を標本にすれば殺さなくてすむのに、私は毎年毎年押し花作つてゐる、手抜きだけど……」猫田は言つた。

「いや、植物にも感情はあるよ」歡喜はそう言つた。動物も植物も平等というのだ。どうやら歡喜の中ではずいぶん植物のランクが上らしい。いや、むしろ動物の方の位が下がつてゐるのかもしれないが。

「じゃあ、写真に収めるだけにしつけば解決じゃん」猫田は妥協案をだした。

「いや、駄目駄目。写真は魂が吸い取られるからな」慶幾は小さな声で歡喜の口まねをした。「それに、葉っぱじや殺し甲斐つてもんがないものな」

千央はその時、去年自分がやつた自由研究「塩の結晶づくり」を鯵の干物を食べながら思い返していた。

まず、塩を溶かした水に星型やハート型に作つたモールを浸しておき、を思い出していた。これを繰り返していくと、まるで砂糖衣のような塩の結晶ができてくる。これは、自由研究の本の中で“クリスマスのオーナメントに使つてね!!”縦長の田をしたキャラクターが言つていたのだが、数ヶ月後、いざそれを使うころには乾燥剤を入れなかつたせいか、変色してしまつっていた。それで少しガツカリしたのを覚えている。

そういうえば、千央のクラスでタコ焼き屋をやつてゐる家の子が“おいしいタコ焼きの作り方”という課題で研究してきた子がいた。美味しそうだという感想の他に、家業で課題すませられるのだからうやましいものだと思った。千央の家は歯医者だがどうすればいいのだろう、患者からとつた歯型でももつていけばいいんだろうか。

不気味だけど。歓喜も虫など無駄に殺さず、自分の家業について研究すればいいのだと千央は思った。

また昨日話した年上の女の子は旅先で拾った貝の標本を作つたと言い、慶幾は変わつていて、カビの研究をしたと言つていた。

千央が慶幾にその話を詳しく聞こうとしたところ、信が「俺、でかいイノシシがみたいな」とつぶやいた。「あの昨日おじさんが言つていたやつ」

男の子がやんやと賛同するなか、女の子たちからは「やだよ怖いもの」とか「見つかるわけないじゃん」などと声があがつた。

「でも、おじさんが子供の時の話なんだから巨大イノシシがいたのは何十年も前なんだろう? もうとっくに死んじゃつてると思うけど」五右衛門頭は断言した。

「でもさあ、普通のイノシシは今もいるんだよね」信は歓喜に聞いた。

「うん、いるはずだよ。僕は死んだのしか見たことないけどね、秋に狩猟会の人気が捕つてくるやつ。結構大きかった」

猫目は言った。「もしかしたら、イノシシの赤ちゃんもいるかもしれないよね、それだったら私も見たいなあ。カワイルインでしょうか? 名前なんだつたつけ」

「ウリボウ」と慶幾は答えた。

「もし捕まえられたらさ、それ、俺たちで飼おうよ」と公平が笑いながら言った。

「飼つてどうすんの?」歓喜も笑つて言った。「あ、わかつた。さては太らして食う氣だろ? お前イノシシの肉気に入つてたし」「違うよ、そりぢやなくて。テカく育てた後、調教して乗るの、馬みたいにしてさ。なんか楽しそうだろ?」

千央はその光景を想像した。まるで戦記もののファンタジーの一場面みたいだと思った。歓喜は吹き出して言った。

「無理だよ、イノシシにそんなこと覚えさせるのは

「知らないのか? お前、豚は犬並に頭がいいんだぞ」

「それはイノシシじゃなくて豚の話だろ?」一人で盛り上がり始めた。

イノシシって何食べるんだろう

そこへ、園さんが千央の分の味噌汁を装つて持つて持ってくれた。千央はお礼を言つた。味噌汁の身はスナップえんどうとジャガ芋だった。さつきの話が聞こえていたのだろう、園さんは歓喜達に注意した。

「あなたたち、イノシシを捕まえるなんて、無茶だから絶対やつちや駄目よ」

「大丈夫ですよ」笑いながら公平は言つた。しかし園さんは目を二角にして、怖い顔になつた。

「笑い事じやないわよ、怪我するよ。イノシシに襲われて怪我した人がいっぱいいるんだから」

園さんは“いっぱい”的ところに特に力を入れた。確かに、毎年秋頃にはイノシシが人を襲い、怪我をさせたとニュースを必ず耳にする。それも普通サイズのイノシシを相手にして。極まれだが、人が死ぬこともあるのだ。

「嘘だあ、そんなの聞いたことない」と歓喜は呑気なようすで言った。

「本当だつて」

「じゃあ誰?名前言つてみてよ」

「ああもう」園さんは呆れていた。

「ねえ」向こうの席で猫の高い声が聞こえた。「僕飯全然食べてないじやん」

千央は注意を惹かれ、そちらを見た。娘の子の御膳に乗つた食べ物は全く減つていなかつた。ただ搔き回されているだけだ。彼女は鯵の背骨を恨めしげに突いた。

「何で食べないの?食べないと体を壊すよ、それに栄養が偏るよ」

貝の子は明らかに迷惑そつた顔をしていた、しかし猫はまだ話しかけていた。

「お腹すいてないんじやない？ 昨日焼肉だつたし」 生来少食の千央は底うような気持ちでつぶやいた。

「いや、あの真琴つて人、昨日何も食べていなかつたよ」 近くにいた慶幾が目を細めて言った。ということは「食も抜いているのか。

五右衛門が鼻で笑いながら言った。「拒食症とかじやない？ 今流行つてんじやん、そういうの」 そんなの流行つてねえよ、と慶幾は突つ込み、二人の間に笑いがおこつた。

「ねえ、拒食症って何？」 極力小さな声で喋っていたのにも関わらず。五右衛門頭と慶幾が楽しそうに話しているのを見て興味をもつたのだろう、よりもよつて真琴に近い席にいた、真がそう聞いてきた。しかもとてもよく通る声で。どうやら彼はものすごい聴覚の持ち主らしいのだ、真琴はこっちを見た。

千央たちの間に大変気まずい空気が流れ、またもあの沈黙が訪れた。

「とにかくやめなさいね、危ないから」 その反対側では、園さんが歓喜たちに念を押していた。しかし、それは多分聞き入れられないだろうな、と千央は思ったのだった。

昼前、千央はイノシシ狩りのようすを見に山に入った、四方八方から波音が聞こえてきた。千央ははじめてこここの林に足を踏み入れた。

この山は杉が多く、当然ながら杉は落葉樹なので、地面全体には痩せたリスのしつぽのような枝が落ち積もつていた。それがこれでもかというほど厚く大量にあり、そこを歩く時はまるでスプリングベッドの上を渡っているようだった。またそれを突き破るようにしてイネに似た葉が生えたり、わずかなすき間から薦のような植物が這い出してきていた。千央が物音のする方へ行ってみると、歓喜が

一心不乱に穴を掘っていた。

「あれ？ 皆はどこへ行つたの」 欽喜以外誰もおらず、たつた一人だつた。

「あれ？ 皆はどこへ行つたの」 欽喜以外誰もおらず、たつた一人だつた。

「あれ？ 皆はどこへ行つたの」 欽喜以外誰もおらず、たつた一人だつた。

「あれ？」

「あれ？」

「落とし穴、直接捕まえるのは無理だから、落とし穴作戦に変更したわけ」

「いい考えだと千央は思った。少なくともイノシシのキバに突かれて死ぬ危険は減る。千央はそばに行つて地面に開いた穴ぼこを覗いた。穴は割と深さがあつたが、ツボみたいな形をしていて、先細りしていた。

「ずいぶん小さいけど。これでちゃんと捕まえられるの？」 千央は聞いた。これではむしろ一足歩行の人間用だ、とても四つ脚のイノシシなどは落ちそつになかった。

「うん、それは……無理だらうね。でも、あつちにはもつとテカい穴もあるよ。みんなとちゅうで飽きてきちゃつてさ、それでこんな中途半端になつちゃつたんだよ」と欽喜はしきつそうに答えた。汗が吹き出しているなじには髪がべつたりと張り付いている。

千央は手伝おうと思い、側にあつたスコップをとつた。縁に足をのせ、体重をかけて地面にめりこませた。

「ああ、そう頑張つたつて無駄。無駄なんだよ。本当はイノシシがこんなのに嵌まるわけがないんだ。普通獵をする時はこんな罠は張らないし」

毅によるトイノシシの罠はカウボーイの投げ縄のように金属製の縄を結び、通り道に仕掛けておくのだそうだ。さらにイノシシが万が一穴に落ちたとしても、この程度なら樂々飛び超えていくと。

そして、ならなぜこんな意味のないことをやつているのか、という千央の質問に毅はこう答えた。

「えつ、ウーン。それはお客様へのサービス的な気持ちからだよ。これは。うちは一応自営業で客商売なんだからね」「でも、僕がこんな風に思っているなんてことは他の子には黙つておいてね。あつとガッカリすると思う」「うう」ともつけくわえた。

客商売も大変だなあ、と千央は思った。千央の家の歯医者も、一応客商売ではある。だが少なくとも、子供が表に出で患者さんのご機嫌取りをする必要はない。千央はクラスメイトさえ鷺崎歯科に誘つたこともないのだ。しかし、それよりも面倒な仕事を押し付けられる氣弱な毅の態度に千央は少しばかり腹が立つた。

「そんなこと必要ないよ」少々非難めいた調子で千央は言った。「面倒臭いからって歓喜一人に押し付けていつたやつらなのに?そんな風に気遣いするとかさあ。馬鹿らしいよ、いいよつに利用されとるだけじゃん」

思いがけず辛辣な言い方になってしまい、千央はすぐさま後悔し、首を竦めた。歓喜はそこまで悪くはないのだ。むしろ被害にあってるので、これでは踏んだり蹴つたりである。

しばらく歓喜はぽかんとしてこちらを見ていたが、そのうちに笑いだした。

「どうか、そうだね。でも僕こいついうの好きだし、楽しんでやつているから、別に怒らなくていいよ。それに、朝変な話しちゃったから、その罪滅ぼしもあるのさ」

なにそれ!?'そんならそれを早く言つてよね'千央はまた怒つた。これじゃ怒り損じやないか。

「ごめん、と歓喜は謝つたが、次第にまたおかしそうな顔になつていつた。「でも、前から思つてたけど、君つてさ、へンな所で気が強いんだ。最初におばあちゃんに見てもらつてた時も、唸るし、引張りつこはするし。すげく抵抗してさ。僕はもうおかしくつて、散々笑つたよ」

千央は今思い出した、靈視中に笑い声が聞こえてきて、とても妙に思つたことを。笑つたのはあの場にいた眼鏡の女の子の可能性が

高い、と思つてたが、といふことはあれは歡喜だつたのか。

「じゃあ、あの時聞こえた笑い声はそれだつたのか。やつと謎が解けたよ。ねえ、いつもああやつて部屋を覗いてるの？」

「つうん、違うよ。そんな趣味はない」歡喜は首を振る。「ただ……僕、ご飯前に腹が減つたら、あそこでお菓子を食てるんだ。だから、話がたまに聞こえてきたりするんだよ」

「ふうん……、それならさ、他の子の対談とかち合わせしたことはないの？」千央は自分が皆の弱点がわかっているなんてずるい、なんて思い聞いた。

「ないこともないけどさア……」

歡喜は笑つて手を後ろにまわし、背中をボリボリ搔いた。背中が泥まみれになつた。

「そういうえば、私でつきり笑つたのは側に座つてた女の子だと思って、その子と睨み合つちゃつたよ。本当に不気味だつたから、嫌がらせかと思った。あれは誰なの？」

千央は思い出し笑いをしながら言つた。

「季生のこと？違うよ。僕だよ。あの人はいとこ」。そんなことはしないよ。いつも無表情つてゆうか、わりと無感情だしさ。つて、ちよつとまで、不気味つて失礼だな

「だつて、本当に不気味だつたんだもん。幽靈が出てきたのかと思つたよ。おかしいけど、きっとあの空気にあてられたんだね」

「アハハ、幽靈なんているわけがないだろ、可笑しいんだ」歡喜は笑う。

千央は謎が解けてすつきりしたが、歡喜はこの家業についてどう思つてゐるんだらう、という疑問が新たに生まれた。こうやつて手伝う反面、幽靈はいないと言つ。またこれは完全に専業なのだろうか？家族は他に誰がいるのだらうか？他に働いて稼ぐ人はいるのか？などと。

しかし、実際いたとしても、働きに出る必要はないかもしない。千央はそう思つた。この間千央は、父が毎回報酬として渡すはずの

封筒の中身を見た。それには三〇〇〇円が入っていた。一回の靈視は30分弱である。仮に時給六〇〇〇円とし、一日8時間働くとする。「これを暗算すると、…… $6 \times 8 = 48$ で4800円。週休二日とすると一月で百五万六千円になる。一年間の収入は、軽く一千二百万を超える、なんてボロい商売なんだろう。いやまた、それだと、一日十六組しか捌けない。いつも客の数は絶対それ以上はあつたぞ。」この収入の青天井ぶりに、千央は一時唖然としてしまった。

千央はその後毅を手伝い、細い木を穴の上に交互にのせ、上から葉っぱを被せた。土を振り掛け、境をわからなくした。土を振り掛け、境をわからなくした。その真ん中に慎重に餌をのせ、周りにもまいた。イノシシをおびきよせるエサは、米せんべいだつた。仕上げに毅は枝でバツテンを作り、地面にいた。そして持つていた紙に何か書き込んだ。それにはいくつも×印があつた、千央はそのことを尋ねた。

「この×印は何？お宝か何か？」

「違う、違う」毅は笑つて否定した。

「掘つた落とし穴の目印、君達が帰つたら、うめもどさないと、誰かが落ちたら困るだろ？」

「ずいぶんたくさん掘つたんだね。あれ、歓喜つてさ、地図がわかるの？」

それは上からみた山の地図で、いびつな水の波紋のように山のがかれているだけだつた。

「いや全然読めないんだけどさ。でも田印のそばに掘つているから大丈夫。ほら、よく見てよ」

確かに印はシユロ竹、米岩、コウモリ山などの字の側にあつた。これらの文字は全て手書きで、バーガー岩、ナイアガラなどもあることから、これらが正式の地名や名称ではないことは明らかだつた。おそらく歓喜が遊びで付けていった名前だと思つ。

「ここ」の名前は……、 “ハート” の森なの? なんでハートなの? 「うん、 よくぞ聞いてくれた。 その訳はね。 上を見るとわかるよ」

歡喜は最高につきうちしたようすで腕まくりをして、 真上を指差した。 それを見て、 千央はわあと声をあげた。 幾つもの杉が空に向かって真つすぐに伸び、 重なり合って青々と繁っている。 そのすき間の一つがくつきりとしたハートの形をしていて、 濃緑の縁取りが水色に白の模様を浮き上がらせていた。

「今年見つけたんだ、 すごいでしょ。 ただ、 時間がたつたら枝が伸びて、 形が変わっちゃうかもしれないけど」

本當だ、 千央は感心して言った。 杉の木は時折吹く風で、 ザワリザワリと揺れたが、 そのハートの形は全く変わることはなかつた。 ただ向こう側で白い雲が流れて行くだけだ。 それを千央と歡喜はしばらく眺めていたが、 また質問した。 「ところで、 もし、 イノシシが捕まらなかつたら、 っていうか多分捕まらないんでしょう? そういうたら宿題はどうするつもり? 」

「その時はまた適当にやるよ、 何かの観察でもやって、 提出するよ、 写真とともにとつたりしてさ。 ここにはそういうものだけはたくさんあるし」

ゆつくりと言い、 欢喜は周りを見渡した。 確かにそのとおりだつた。 千央は側にあつた朽ち木に生える色鮮やかな茸群を見た。 明らかに毒茸だったが、 その見た目から誰も食べようとは思わないであろう、 だからむしろ安心であつた。

「君はどうするの? 」

「私は酵母を育てる」 千央は答えた。 欢喜は訳がわからないという顔をした。

「さつき園さんたちと一緒にパンを作つたんだけど、 それの……」 不意に千央はあることを思い出した。

「ああ、 わかつた、 わかつた。 あの泡立つやつね。 それいいかもしない、 パクらせてよ」

「別にいいけど」 違う学校なのだから、 どうせばれないだろう、 千

央は思い承諾した。それよりも、千央は忘れないうちに聞きたいことがあつたのだ。

「ねえ、そういうえば。真琴つて背の高い人がいたでしょう？あの人はもしかして拒食症なのかな？全然ご飯食べないんだけど」

歡喜はしばらくの間、黙つていた。みんなの所へ行こうか、急に言い、立ちあがつた。千央はそれを引き留めた。

歡喜は眩しそうな表情で言つた。

「さあね、そんなことは知らない。そんなに知りたいなら、台帳を見ればいい、誰でも勝手に見られるんだから」

台帳とは多分、父や靈能者が書いていた紙のことだ、と千央は分かつた。相談内容や家族構成など個人情報満載なことが色々と書いてある。しかし、だれでも見られるはどういうことだ、一体どういう管理をしているんだ。千央はこのことを聞いて、かなり不安になつた。

「ちょっと、誰でも見られるつて、まさか公開しているわけじゃないよね」千央はあわてて聞いた。

「いや、そんなことしてないよ。ほら、君が来た控え室。そこの中棚にまとめて置いてあるんだ。ただ鍵もしてないし、誰でも見ようと思えば自由に見られるんだ」

「ああ、そうなの。よかつた。でもそれは必要ないよ。その子に悪いもの」千央は遠慮した。

靈能者の仕事の物にどんな形でも関わりをもつのは嫌だった。それに自分が同じことをされたら、とんでもなく不愉快だらうと思つたからだ。長らく黙つた後、歡喜は急に振り返つて言つた。

「ねえ、千央、だつけ？さつきからかんきかんきつて呼んでるけど、それ、間違つてるよ。僕の名前はかんきとかじやない、僕は喜屋武毅つていうんだ。喜屋武は名字なんだよ」

千央はびっくりした。今までずっと歡喜と呼んでいたのだ。それに今さら言つなんて。遅いよ。それに何て変な名前なんだ。「え、でもさ、おばあちゃんは増田つて名前じやん。何で名字が違うの？」

「それは、母方のおばあちゃんだから。僕の名前とは関係がないんだ」

「なんでもっと早くに教えてくれなかつたのさ?」

「だつて、どうでもよかつたから」毅はひょうひょうとした調子で答えた。

「……ふうん。わかつた、でもこれからはちゃんと毅と呼ぶよ」千央は言った。でも、毅も相当変な名前だと千央は思うのだ。

「うん。そうして、言いにくいけどね」

毅はふふと笑つて軽く肩を竦め頷いた。そして再び歩き出した。

千央は歓喜改め、毅の後を小走りで追つて行つた。

五、川つり

「8月5日、今日は用水路に釣りに出かけた。」

しかし千央はシャープペンをおき、これを消しゴムを使って消した。

この日午後から皆で、近所の川へ釣りに行く予定だった。なので午前中のうち、近所の商店に買い物に行き、道具を揃えた。毅と慶幾、五右衛門頭には自分の竿があつたが、その他千央たちは店で300円で売つてある、安いのベ竿を買った。毅は糸ミニズも購入していた。餌にはパンとご飯粒が家にあるのに案の定、皆に気味悪がられていた。

一度家に戻り、昼食の後、千央たちは釣りに行くため買った道具を携え、部屋から玄関へ行く廊下を歩いていた。そこへ、いきなり千央の前を何かが勢いよく横切り、壁にぶちあたつて足元に落ちた。よく見るとそれは何かの本だった。続いてスリッパがひゅんと音をたてて飛んできて、まだびっくりさせられた。毅はスリッパを、千央は本を拾いあげた。

側の部屋からは何か言い争う声が聞こえた、この本はそこから飛んできたらしい。千央が中を伺うと五右衛門頭が園さんを怒鳴りつけていた。側では三歳くらいの男の子が泣いていて、真琴が男の子を慰めていた。その後ろに慶幾がポケットに入れて立っていた、慶幾は途方に暮れた顔をしている。

彼の話によると、このようなことがあつたらしい。

五右衛門頭は、慶幾に用水路ではなく上流まで釣りに出かけようと言った。五右衛門頭の本名は伊鶴というのだが、彼は竿まで持参

しているくらいの釣り好きらしいのだ。しかしおいしくに難しからと園さんに止められた。伊鶴は猛反発したが、もちろん認められず、そのうち毅の小さいとこが自分も行きたいと駄々をこね、一行に加わることになった、そうして結局渓流釣りは不可能になった。伊鶴は不満そうにしていたが、とりあえずは納得したように見えた。最後に園さんはいざれにしろ、子供だけの渓流釣りは毅の家では禁止されているわ、と駄目押しで言つた。その言葉がどうやら地雷だつたらしい。

直後、伊鶴は急に園さんに殴りかかり、園さんは彼を羽交い締めにして止めた。それが気に食わなかつたのか。伊鶴は周りにあつたものを投げまくり、このような対峙する格好になつたのだ。

千央は伊鶴の体に火がついたような錯乱ぶりに、度肝を抜かれてしまつた。彼の顔は紅潮し、歯を剥き出して、まるで野獣のようだつた。彼の腕は妙に筋張つて、肩を怒らせゼイゼイと荒い息をしていた。

伊鶴は唸りながら拳をあげ、園さんにまた殴りかかつた。園さんは素早く手首を捕まえて、伊鶴の攻撃を封じた。さらに激高した伊鶴はキック攻撃に切り替え、今度は腹を狙いだした。園さんは膝を曲げて避けようとしたが、ズドンと2発蹴りを食らつた。これはマズイ。

加勢しようと千央たちが動きかけた時、吠えるような声が聞こえ、男の人部屋に飛び込んできて伊鶴を抑えつけた。

「おい、やめる!! 何してんの!! お前は!!」 水野さんは伊鶴の腕を掴んで言った。

ものすごい剣幕に千央たちはびっくりして固まつた。伊鶴はしばらく抵抗していたが、手と足を押さえ付けられ、やがて敵わないことが分かつたのか大人しくなつた。

「お前、さつき人の腹を蹴りよつたよな!!?」 伊鶴の肩を掴み、水

野さんは凄むのを、千央たちはは動搖しながら見ていた。

当の本人はふて腐れたような顔をして、そっぽを向いている。そっぽを向いている。千央は伊鶴のようすをヒヤヒヤして見守った。あんなに怒っている人を前にしてよくそんな態度がとれるな、と伊鶴の根性に千央はある意味感心した。これが自分だったらすぐに怖くて泣いているだろう。と同時に意地を張らないでさっさと謝つてしまえばいいのに、とも思つた。

「人の腹を蹴つて、下手したら怪我さすつぞ。おい、こっちを見ろ」は説教した。

しかし伊鶴は、めんどくせえという顔をしていて、どうやら聞き流しているようだった。

「何で園さんを蹴つたりしたんだ？」

両者の間の空気はだんだんと張り詰めてきた。千央ははやく伊鶴が折ってくれるよう祈つていた、じやないと大変なことになりそうだ。

「おい、聞いてるのか!? お前に話してるんだぞ、田を見ろ」水野さんが声を荒げた。

伊鶴がフンと鼻をならし、水野さんはため息をついた。続いて舌打ちの音が聞こえた。

水野さんは千央たちが持つていて、釣り道具を見て言った。

「こいつと話があるから、君たちは、先に釣りに行つてきて。湖水も連れていつて。お前にはちょっと話がある」

それを聞いて伊鶴は、はあ?と言い大いに異存のある顔になつた。「お前は行かせん、ずっと家におれ。わかつたな」水野さんは静かに言つた。

嫌だ、伊鶴はそう言つて腕を振りほどこうとしたが、水野さんは掴んだ手を離さなかつた。むしろ掴む力が強まつたようだ。伊鶴の腕の色が白くなつていた。伊鶴はみるみるうちに涙目になり、わんわんと泣き出し、児童虐待!!!と喚いた。水野さんは違う、教育だと低い声で言つた。

早く行つてきなさい、と水野さんはまた癪癩をおこしだした伊鶴

を押さえ付けて、千央たちを急かした。もうどうしようもなく、千央たちはそろりそろりと後ずさりして部屋から出ていった。ごめん、伊鶴。

背後から何でだよーっ！…と伊鶴の泣き声が聞こえてきて、千央の肌は泡立つた。隣を見ると、公平も慶幾も暗い顔をしていた。千央は堪らず、耳をふさいだ。

高い位置に昇った太陽が、黒いアスファルトの上に益々濃い影を作っていた。ひどく蒸し暑い空気の中、千央たちは全身を炙られながら、ゆっくり山を下つていった。用水路は大分歩いた、町に近い場所にあつた。深さは2mほどあり、二字型のコンクリート製であった。周りには白い柵が備え付けられており、それを触ると手に白い粉がつく。千央たちは持参したお茶を飲み、少し休憩をとつた。突然、慶幾は誰にともなく聞いた。

「伊鶴、大丈夫かな？」

「園さんもついているし、大丈夫だよ。多分」と言いながらも、毅は不安そうな面持ちである。

「でも、釣りぐらいでさ、ちょっと騒ぎすぎでしょ。びっくりしたよ」彼女は乱闘騒ぎを直に見てはいないのだ。猫の子は大きな麦わら帽子をかぶってきていた。多分、田に焼けるのが嫌で、本当はきたくなかったのだ。

「あの子、ひどい癪疵持ちなんだよね。まあ暴れてる間は別の人と考えるしかないよ」と毅はいう。

さて、皆は横一列に並び糸を垂らしたが、全く楽しくなかつた。側の木ではたくさんのセミがやかましく鳴いていた、しかし千央の耳には伊鶴の何で！？何で！？というのとギイイイイイ！…という必死な叫び声がしばらくついて、離れなかつた。

この釣りに行かせない、というのが伊鶴に対する制裁なのが千央にはわかつた。伊鶴が暴力を振るつた罰なのだ。

しかし千央は何だかすきつとせず、気分が悪かった。大人に挟まれ、暴れまくる伊鶴がとても非力で哀れに思えたのだ。伊鶴は今ごろ一人で待っているのだろうか、千央はなんだかいたたまれない気持ちになつた。そして、この釣りを乐しまないことが伊鶴への唯一の助けのような気がするのだ。しかし、それがやりすぎだということはわかつてゐるけれど。

「……全然釣れやしない」しばらくの沈黙の後公平がいった。
「ウンともスンとも言わないね、本当にこんなところに魚がいるの？」と猫目。

確かに、千央はゆっくりとした川の流れを見て思つた。この用水路の水は藻が大量発生していて、これでは魚が酸欠になりそうだ。底も全く見えない。従つて生き物の気配も感じとれなかつた。山の清んだ川の水とは大違ひなのだ。ここでは何がとれるのだろう。

「案ずるな、僕たちには秘密兵器がある」毅はそう言つと、朝商店で買つた糸ミミズを取り出すと、川にぶちまけた。ミミズは次々と暗黒の川に沈んでいった。

「なんか、沈んじやつたけど」と千央。

「意味あるのか？これ」と公平は聞いた。

「多分ね」どうやら、ミミズの匂いで魚を呼び寄せるという作戦らしいのだ。毅は答えた。

聞けば、この辺ではフナのような形の魚がつれるそうである。これはモロコという。また、鉗で挟めるような大きな餌を使えばアメリカザリガニが釣れることがある。たまに地味な色の小さなザリガニが10分の1くらいの確率で揚がるが、それはまだ赤くなつていない子供ではなく、二ホンザリガニという種類のものであるとか。そして春には大きなオタマジャクシがみられるという、やがてガエルに変体すると、雨の降る日はいつも夜中うるさくならしい。つまりモロコしか釣れない、ということがわかつた。

隣から力チャ力チャと物音があるので見ると、さつきまで泣きじやくつていた湖水が今はすっかり泣き止んで、毅の擬似餌コレクシ

ヨンをすらり地面に並べていた。ギラギラ光る鮮やかな色のものからゴム製のグミのような派手な色ものまですらりとある。

「危ないよ」すっかりお世話役になつた真琴が優しく言った。擬似餌には針がついているのだ。

「ウン。わかつた」湖水は子供らしい、かわいい声で答えた。彼、湖水は髪が短いのと、肌が浅黒いこと以外では毅に本当に似ているなど千央は思うのだった。湖水の襟足は汗でびっしょりだった。時間がたつほどアスファルトの照り返しが益々ひどくなつてきていたのだ。蜃気楼がおこりそうなほどだ。背景でセミがミイミイ、ジワワワと鳴いていた。

炎天下の元、千央はぼんやりと緑色のチョークを溶かしたような緑白い水面を見ていた。緑の羊毛みたいな水草がゆらゆらと動めいでいた。その水面の色は否応なしにあのアブラコウモリのような靈能者の瞳を連想させる。千央は不意に、今がることを聞く絶好の機会ではないかと思いつたのだった。

「ねえ、あのさー」千央は糸を弛ませて言つた。緊張のため声が少し震え、不自然に大きな声になつたが、皆に聞こえていない方が困る。

「なに」誰かが答えるのが聞こえた。

千央は浮きをじつと見ていた。しつかり見ていいないといけない。「そういえば、皆はなにが憑いてるって言われた？私はお祖母ちゃんと同級生の子だけど」千央は一気に言い切つた。さりげなく聞こうと思っていたのに、内容がおかし過ぎたせいか全然さりげなくなれなかつた。

「僕は先輩だつて」誰かがどこからか笑いながらこう答えた。千央は顔をあげた。意外にも口火を切つたのは公平だった。

「二ツ上の。最近警察に捕まつたらしいけど

警察！？」千央はびっくりして公平を凝視した。

「えーと、僕は飛び込み競技をしてるんだけど、成績がめちゃくち

や落ちちゃつてさ。とにかくそれの原因がその先輩の恨み……なんじやないかと言われ……た。うん」公平はちらりと毅を見た。

「なんでその人は公平さんを恨んでるんですか？」慶幾が聞いた。

「まあそれは、僕が捜査に協力したからだろうな

。

「その人はなにをしたんですか？人殺しとか？テレビにでた？」猫目が言った。

公平は笑った。「まさか、不法侵入と放火だよ。それぐらいじゃ多分テレビはこないよ。いや、地元の新聞ならきてたかもな……」公平は思い出すためにしばらく黙り込んだ。結局こう言つた。「どうだつたかな……あんまり覚えてないや

「協力つてどんなことをしたの？」千央はスパイ映画のおとり捜査のような壮絶なものを想像していた。

「その人がそこにいたと証言しただけ、目撃証言つてやつ」「でも、そのぐらいで恨まれるなんて、たまつたもんじゃないっすね」猫目は言った。

そうですね、と公平はハハハと笑いながら答えた。

公平の話を皮切りにして、皆は憑きものたちを次々に話してくれた。

慶幾は「僕にはおばあさんの靈が憑いてるらしい、江戸時代の人なんだつて」と言い、
真は「犬とヘビが憑いてるつてさ、嫌になる。僕犬もヘビも苦手なのに」と言つた。

そして猫目は「私は死んだ弟が憑いてるつて言われたけど」と言つ。皆の話すようすは一様に明るかつたので、千央はよかつたと思つた。しかし、公平の先輩に、江戸時代の老婆、犬にヘビ、猫の亡くなつた弟に……と、千央がそれぞれの姿を想像すると、空気が一気に混雑し始めたように思えた。

「ねえ、まさかとか思うけど、皆はそれが見えたことはないよね……

」千央は好奇心から面白半分でそれを聞いた。

「ない」皆は首を横に振るなどして、それぞれの方法で否定した。

逆に公平は千央に聞いた。「君はどうなの？」

「そんなもの見えるわけないでしょ」千央は急いで答えた。

「有り難いことに、とりあえず千央には世間一般で言われている靈感のようなものは多分備つてはいなかつたのだ。本当の目で直接それらを見たり、話したりすることはない。だがわざと頭の中で幽霊や妖怪を具現化することはあつた。そうして『機嫌を取つたり、仲良くなることを試みたりする。しかしそれは、靈能者のところにあちこち連れて行かれているうちに、むやみに怖く感じるのを回避するため生み出した方法だつた、もちろんそれらは千央の一人芝居で、彼らは実際に存在してはいないのだ。』

一瞬だけだが、不思議ちゃんかのよつうな目で見られたので千央は少し慌てた。しかしそうにそれを帳消しにするようなことが起つたのである。千央の問いに、名乗り出た人物がいたのだ。

「私は見えるよ。ちょっとだけなら」真琴は虚ろな表情で言った。皆はギョッとして黙つていた。千央もなんて言つたら良いのか、分からなかつた。まさか靈を信じる、信じない以前に自ら見えると主張する人がいるとは思わなかつたのだ。慶幾はクククと笑つた。彼はいつも詰まつた笑い方をする。

「あつ、なんかいる……」

ナイスタイミング、その時ちょうど猫田が声をあげるので、上手いこと真琴の微妙な答えに反応せずにすんだ。千央たちの前に一瞬黒い影が水面に姿を見せたが、すぐに潜つていつてしまつた。とりあえず真琴の問題発言はうつちゃつておき、皆は大声を出した。

「なんだろう、ものすごくでかかつたぞ」と慶幾。

「鯰かもなあ」公平は首を傾げる。

「大きさからして、雷魚じゃあないかな」毅は言つた。千央の見た影は、間違いなく軽く20cmは超していた。

「そんなら、これじゃとても釣りあげられないよ」と千央。

問題は竿にあつた。千央たちの使つている竿はリールがついてい

なくて、初心者には使いやすかった。しかしまるで縁日の水風船釣りに使うような物だつた。あまりにも細くて軽いので、千央はこんなおもちゃみたいなものでは、おそらく釣り上げた時にボッキリ折れるだらうと思つた。

あの大きな影がまた現れやしないかと、千央は息を詰めて水面を見守つた。皆も黙りこくつていた。千央には虫の音とたまにする水の音以外は何も聞こえてこなくなり、首が太陽にジリジリと焼かれ、痛くなつてきた。

しばらくして、不意にプーパーいう音が聞こえてきた。続いてヒューヒューという喘息のような掠れた囁く音。

千央はある箇所に目を留めていた。その水面には、とても小さな穴が二つ開いていたのだ。なぜ水に穴が?、千央がそう思つた時、大きなカメの頭が水面を突き破つて浮上してきた。

「あつ、ミシシッピアカミミガメだ」と毅は言つた。

このカメはその名の通り、目の横に赤い線が走つてゐる、灰色の大きなビワのような頭、そしてブタのような上向きの鼻をもつてゐる。あの謎の穴はカメの鼻の穴であつたのだ。カメは、慶幾がパンをちぎり、投げてやると喜んで食いついた。無表情だつたが、状況からみて千央はそう思つたのだつた。

「おいしーか?」と真琴はカメに聞いた。

「こいつ、よく食べるなあ。全部なくなりそうだよ」慶幾はカメへ次々パンを投げながら言つた。

「いいよ、全部やつてしまえよ」毅は言つた。放り込んだパンは川の水を吸い込み、瞬く間に緑パンになつてしまつていた。

“ギュゴ”不意に不自然で大きな音が自分の中から聞こえた。それは、千央が唾を飲み込んだ時の音だつた。この時千央はなんとか嫌な予感がしたのだが、しかしそれが何なのかはよく分からなかつた。途端、急に辺りが静かになりはじめた、いや、セミは依然やかましく鳴き続けていたが、なぜか音が小さくなつてしまつたようだ。誰かに千央の耳を塞がれたみたいだ。なんなんだろう、千央は

思った。

カメは今だ川にぶかり、浮かんでいた。鋭い爪のついた前足を握つたり、また開いたりしていた。カメの目は出田だった、瞳の形は波打つナマコのようだ。あれ。そして、カメは言つた。

もしもし、そこのお若いの。

“えっ、私ですか？”

そうそう、あなたですよ。あなた。あなた今ここにいるのはとてもママが悪いですよ。

“間が悪い？なぜ？”

ええ、とつても間が悪いの。なぜなら南西の空に悪い兆候があるからです。今に大嵐がやつてきますよ。そしてその後には大きな波がやつてきます。

“南西の空から大嵐と大きな波ですか？”

そうです。大嵐と波です。このままここにいれば、どちらも避けがたいものです。“……そうですか。”忠告どうもありがとうございました。“どういたしまして、それにしても今日は暑いですね。全く。さつきから喉が渴いてたまらない。

そのうちカメのお喋りの声は消えて無くなつた、そして千央には太鼓のようなドンドンいう音しかもう聞こえてこなくなつた。やかましいなあ、静かにしてくれよ。一体何の音だろう、こんなに耳元で騒々しく鳴つているのは。千央はとつくり、考えこんだ。

ああ、そうか。それは千央自身の心臓の音だつた。すると、いきなり千央の体の心棒が気持ち悪く揺れだした。まるで、新体操のリボン競技のように、それか縄跳びでヘビの動き作つた時のような感じで。しかし、それはすぐに収まつた。

「ああ、そういえば。カメって卵の時の温度で性別が決まるってこと知つてた？」公平が言つた。

「へえ。知らなかつた」と慶幾。普通知らないよね、と千央は言つ。

「確か温度が高い方がオス……、いや逆だったかな？」公平はうろ覚えなようすだ。

「高い方がメスだと思う」猫目が短く言った。「だって、女は体を冷やしちゃいけないってよく言われるもの」

「なるほどね、もしかしたらそんなんだつかも知れない」と公平は言った。

でも千央は、カメは爬虫類なのだから人間とは少々勝手が違うような気がするのだ。

千央たちは、その後しばらく糸を垂らしていくけども、結局釣果はなく、帰ることになった。しかしそれなりに良い時間だったと思えた。なぜなら、少しだけだが皆と憑き物について話せたし、大半が気楽に受け止めているらしいことが分かったからだ。千央は、立ち上がろうと足に力を入れた。しかし、途中で腰が抜けて立ち上がることができなかつた、柵をつかもうとしたがつかみ損ね、そのままぐらりと崩れ落ちた。まるで首の感覚が無く、頭が浮いているような感じがした。千央の視界には青と紫の斑点が現れては消え、現れては消えていた。千央は自分がとても気分が悪くなっているのに気がつき、その場にへたりこんだ。千央の腕が引っ張りあげられて、側で誰かが話している声が聞こえた。あのカメの声だ。

「ガゴゴゴゴ、ガゲゲゲ、また、かえるのもやむなし……なんちゃって……ガググググ……」

次に千央が目を覚ましたのは、とうに夜のとばりの下りた、深夜二時頃であった。窓の外ではカエルたちがうるさく鳴いていた。

六、深夜徘徊

布団から出て窓を開けると、サアサアという雨音が、より一層はつきりと千央の耳に聞こえてきた。いつも見ている庭の風景とは違ひ、今夜は雨の白い線が余すところなく引かれていた。そこはしつこいまでに定規で縦を引かれている世界であった。

同室の二人は、規則正しい寝息をたててすでに眠っていた。なんだか喉が渇いていた。そして、千央は急に空腹感を覚えた。そういうえば昨日は夕飯を食べそこねたのだ。

倒れた後、千央は近所にあつた個人商店で休ませてもらい、水野さんの車で病院へ向かつた。そこで点滴の治療を受けて増田家に帰つたのだが、くたくたに疲れていてその後すぐ寝付いてしまつたのだった。病院の先生の話では、水分不足と暑さのせいで熱中症になつてしまつていたらしく、夏の水分補給の重要さと熱中症の危険について、先生に長々と注意されてしまった。話を総括すると、馬のように飲み食いしろ、ということらしかつた、千央には少なくともそのような意味に聞こえた。その先生は「そのおかげで毎年僕は夏バテ知らずですよ、アツハツハツハハ」と出つ張つた腹を揺すつて笑つた。

さて千央は、階下の真つ暗な台所に行き冷蔵庫を漁つていた。この台所はとても古かつた、壁側にコンロや流し台があるのだが、ガス周り一帯には古い茶色の油汚れが堆積し、もはや一種のコーティング材になつていた。多分そのせいで物の角は丸みを帯びて、部屋中が常に油臭かつた。そして流し台は劣化して水を出す度シンクがバンバン音とをたて、とてもやかましかつた。廊下側にはカウンターのような形で窓がついていて、千央たちが普段食事をする部屋と繋がつていて、そつち側には比較的新しいと思える一升焼きの炊飯器と、銀色の扉の巨大な冷蔵庫とが鎮座していた。しかし、その冷蔵庫の中身は生肉や生玉子くらいで、すぐに食べられそうな物は

何も入つていなかつた。あまりにすっからかんなので、ここにはまだ夢の中じゃないか、と疑つたくらいだつた。

冷蔵庫がブゥーンと唸り、千央はあることを思い出した。あの控え室には毅が食べまくつていたお菓子が沢山あるはずだ。そして、あれを食べればいいんじやないか、と。状況が状況だし、クッキー2、3枚くらいなら、黙つて食べても次の日ちゃんと言えば怒られはしないだろう、と千央は理由をつけて考えた。

そうと決めたら、早速控え室に千央は向かつた。控え室は台所からそう遠くない場所にあつた。千央はあのカーテンの側に立つて開けようとしたが、何かに邪魔された。また中から生き物の気配がするのだ。だがしかし、腹が減ると気が短くなる人がいる、まさに今千央がそれだつた。すでに頭の中は食べ物でいっぱい、特別それについて考えることも躊躇することもなく、千央は黒いカーテンを開け、警視庁特捜部並の迷いのなさで控え室に乗り込んだ。

案の定、中には人がいた。その人は毅に会つた時と同じ場所で、磨りガラスから洩れる月明かりの元、何かを熱心に読んでいる。青い寝間着姿だつた。それは最初のお尋ねの時千央と睨み合つた、あの女の子であつた。確かに名前は季生とかいつたか。

季生はこちらに気づいて少し驚いた顔をしたが、すぐに親しげに微笑み、こう言つた。

「お早う」季生は千央の腕の点滴の後を見ていた。千央が病院に運ばれることを知つているのだ。「起きたんだね。もう気分はいい？」千央は蚊の鳴くような声で“はい”と頷いた。多分聞こえたと思う。

「本当よかつたねえ。死なないで」と大袈裟に彼女は言つた。

まさか死ぬほど症状が重かつたとは思えないが……、千央は少し笑つて頷いた。しかし、困つてしまつた。これでは何も食べれない。だが、こちらから言つうまでもなく、上手いことあちら側から聞いてくれたのだった。

「もしかしてお腹空いて目が覚めちゃつたの？」

千央は頷いた。

「だよねえ、晩御飯食べずに寝ちゃつたもんだから……。でももうすぐ朝ご飯だから、我慢した方がいいよ……ってまだ一時台じゃないの」彼女は時計を見ながら自分に突っ込んだ。時計はデジタルで2：18と表示していた。

「いいわ。私もお腹すいてたし、カップ麺でも作つてあげる。というかそれしか作れないんだけどね、うん。ちょっと待つてね」と言つて立ち上がると、季生は騒々しい音をたてて、部屋を出て行つた。

千央は駆け足で行つてしまつた彼女の後ろ姿を見ながら、よくわからないがなんだか良い人らしいなと思つた。と同時にとてもドジらしいぞとも気づいた。季生は大きな茶色菓子缶を大きく蹴り飛ばし、読んでいた何かのファイルを根こそぎひっくり返していつた、それが辺り一面散乱していた。千央はそれを拾い集めた。重い灰色のバインダーには何かの資料が大量に納められていた。その中身には千央はてきめんに見覚えがあった。そういえば以前、毅が台帳はここに置いてあるということを教えてくれたのだった。千央は興味をそそられ、何回もページをめくり、霊能者版カルテとも言えるそれを見ていつた。

紙には弁当箱のような区切りの中があり、それぞれ性格、体調、家系などがかいてあり、その人の相談事が一枚でわかるようになっている。内容は病気、人間関係の話が多いようだ。カルテは基本的に文字だけだが、あるコーナーにお子様ランチのおまけのような感じで憑きものの絵がちょこんとついている。これはあの子が描いたのだろう。季生という人は本当に絵がうまいなあと感心しながら、次々に千央はファイルをめくつていつた。千央も一回目の面談の時に描いてもらつたが、鳥の顔をした青白いエジプト風の兵隊や、人面蜘蛛、何かを避けようとする綿ウサギだつたりと、人によつてそれぞれ違うモンスターがかかっているので、見ていて面白かつた。他にも猫やヘビ、山羊などがあつた。

それに、このモンスターたちにはバトルものの少年マンガみたいに、それぞれ一つずつ火水木土の属性があるようだった、脇にそういう印がうつてある。見ているうちに千央はあるパターンを発見した。おそらくこの印は家での宿題に関係あるらしいのだ。属性が火の場合お香を焚くのを勧められている、水の性質がついている場合は、下水管に酒と塩を流して清めるらしい。これらは靈を慰めて次の面談まで悪い作用を抑えておくという効果がある、と霊能者に以前千央は聞かされたのだが、ただこの属性をどんな基準で決めるのかが謎だつた。多分だが、会つた印象で適当に決めているんじゃないかと千央は考えている。あの時、千央が反抗的な態度でいたから火になつたのではないだろうか？反対に元気が無かつたら水になるわけだ。どうだらうか……？今度毅にきいてみようかな、と思つた。

千央がファイルに覆いかぶさり、夢中になつて見ていると、なにやら人の気配がした。目をあげると側には季生が立つていた、いつの間にか戻つてきていたのだ。彼女はファイルを勝手に見ていて、口には何も言わなかつた。手にはカップヌードルと箸を持っていて、千央に一組くれた。ラーメンは湯が入つていて暖かかつた。

「それ、自分のはあつた？」彼女は千央の向かいに腰を下ろしながら聞いてきた。

「ないです。探してはみましたけど」千央は首を横に振り言つた。

今のところ千央は自分のカルテ、知り合いのカルテ、どちらにも遭遇してはいなかつた。もともと特に名前を気にして見ていなかつたのと、年代順がバラバラな上、あいうえお整理もされていなかつたので、探す気も失せるというものだ。とりあえず自分のものは探したが、それさえ見つけられなかつた。

「そうだよねえ。ちゃんと整頓しないもん。これじゃ不便だつていつも言つてるのに」季生はそう言つて首を竦めた。ちょうどその時、季生の腕にあつた電光時計が鳴り出し、3分が経つたことを伝えた。

さあ食べよう、と季生はラーメンの器のフタを剥がして開けた。

千央はそれを見て笑つた。季生は大きなまぼこを逆さにしたような形の古くさい眼鏡をしていたのだが、それがラーメンの湯気で曇つたのだ。彼女は照れたようにニヤと笑つて、眼鏡をはずして言った。

「そういえば、名前聞いてなかつたね。私、増田季生子、毅のいとこ。今年で十六。あなた名前は？」

「えーと、小千谷千央といいます」千央は頭を軽く下げた。
彼女は中肉中背で、長い黒髪を真ん中分けしていた。そして下膨れの顔をしていたが、顎は細く尖っていた。そのふくふくとした頬だけで下膨れの形を作っているのだからす『ごい』、それは頬袋に餌を詰めたハムスターに、ちょっとだけ似ていた。

「これはあなたが描いてるんですか？」千央はファイルの絵を指して聞いた。“そうだよ”と季生子は答えた。

「へー！すごい」千央は感嘆の声をあげ、「うまいねえ」とボソリ呟いた。季生子の喋り方が移つてしまつたようだ。

その後二人は黙つて麺をチュルチュル啜つていたが、

「そうだ！思い出した。新しい客の名簿はあつちに置いてあるんだ！」といきなり季生子が膝頭を打つて立ち上がつた。

思いついたからつて、本当に膝を打つ人を千央ははじめて見たのだった。季生子は黒いカーテンの端をすり抜け、隣室の占い部屋に入つていつた。千央はカーテンから頭だけを出し、そのようすを覗いた。

夜の占い部屋は静まり返つていた。ステージには白い紙のテープで結界のようなものが張つてあり、黒檀の文机の上にはグラスに入つた透明な液体と、小さいお茶碗（おちょこか？）にご飯を円錐形に盛つたもののがお供えしてあつた。千央はハイハイして、文机のところに行くとグラスの液体の匂いを嗅いだ、どうやらこれはただの

水のようだ。

「ゴメン、見つからないわ」その横で季生子は、辺りの木箱やらを手当たり次第開けたり、ひっくり返したりして探していたが、結局見つからなかつたようだつた。特に頼んではないんだけどなあ、と千央は思つた。もしかしたら自分の描いた絵を見て褒めて欲しいのかもしれない、そんなことは朝メシ前だが、もちろん両方とも口には出さなかつた。

一人は再び隣室に帰ると、残つたラーメンを食べた。お腹一杯になると、千央は足先をメトロノームのように振り大あくびをした、体がとても暖かかく、とても良い心持ちになつた。また疲れを感じてきたが、今度は心地好い眠気を伴つていた。

「眠いのなら寝たら？あと三時間は寝られるよ」眠そうな千央を見て季生子は言つた。壁の時計は午前三時であつた。千央たちの早起き習慣づけ作戦はまだ続けられていたのだ。

部屋まで戻る際、千央は日記を付けていないことに気がついた。それで川つりのことを書こうとしたのだけど、色々複雑すぎて、結局止めてしまつた。

七、頻客

降り続く雨のため、千央たちは室内で過ごすことを余儀なくされていた。

皆はじめのうちはゲームやマンガの類で時間をつぶしていたが、それにも限度があった。観念したのか、それともただ飽きたのか、やつとそれぞれドリルやら、プリントやらの宿題をはじめた。

一方千央は、8月に入るまでに大方の宿題をやり終えていた。残りは自由研究二つと読書感想文、ポスターだけだったのだが、これらは別格に厄介で、千央は毎年最後ギリギリまでやり残してしまう。しかし今年こそは早め早めにやり終えたいと、千央はいつになくやる気になっていた。なぜなら昨年の夏休み最終日、読書感想文をヒステリー状態で書き上げたからだ。これは千央にとってほとんどトラウマになり、二度と繰り返したくなかった。

千央は傘を借り、ベランダから裏庭へと向かつた。庭には鶏のボードがあり、他には太った十字の形のようなドクダミ派手な色のサルビア白いダチュワが咲いていた。脇でハイビスカスに似た花をつけているのは実はアオイであった。金属製のじょうろが垣根に逆さまにかけてあり、隣には深緑の園芸用ゴム手袋が乾かしてあった。それだけ見ればのどかな田舎の風景だったが、偶然なのか棒が中指に入ってしまっていて、それがまたなんとも下品な手の仕種になっていた。

生け垣から外へはい出ると、千央は水しづきを思い切り浴びてしまった。それから用水路をわたり、一旦道に出て少し行くと、山を一部開拓したような土地にあたる、そこが増田家の野菜畠になっていた。場所柄からいって、ここは野生動物にとつて格好の食事場になっているんだろう、と千央は思った。

いくつかの畝が作ってあり、今が最盛期の夏の野菜がごろごろなつていた。

残りはまだ苗の状態が何も植えられていない、もしかしたら、種が蒔いてあるかもしないのでむやみに踏み荒らしてはいけない。足元に気をつけつつ、千央は畑の奥へと向かった。

畑にふる小雨は、最近の強い口差しに耐える植物たちに『えられた夏の小休憩』という感じがある、畑はどこかホッと一息ついたような雰囲気があった。

千央は傘を肩にかけ、ナスの葉を搔き分けた。千央は今年の夏の自由研究に酵母について調べることに決めた。野菜には天然の酵母がついていて、それを培養し、酵母をつくる。それがパンを膨らませるの元種になるのだ。先日、園さんがパンを作るというので千央たちはそれを見学させてもらつた。

まず、園さんは台の上に粉類をあけ、山のように盛り、真ん中に窪みを作つた。その中にお砂糖、水、卵を落とした。それから園さんは棚からビンを持つてきた。その中身をひっくり返し、窪みに入れた。

皆の見守る中、軽石のような色のでろでろしたものは、小麦粉の上に着地した。泡が始終ぶつぶつとしていて、氣味の悪い代物だつた。千央は誰にもわからぬによつ少しだけ眉を寄せて不信な顔をしてみせた。

次に園さんは生地をグルグルと混ぜてまとめ、台の上で体重をかけ、力一杯にこねていつた。千央たちも途中で順番に捏ねさせてもらつたが、とても力のいる仕事だつた。生地を押し付けながら向こう側に滑らし、それをまた手前に戻す。これを何度も繰り返していくつた。園さんの額には汗が光っていた。

千央が見ていているうちに、生地にはしつとりとした膜がピンと張つているように見えてきた。そのうちに段々と濡れたようにピカピカしてきた。千央はパン生地がバニラ色をしたゴム鞠のように思えてならなくなつた。千央はパン作りを見るのは始めてであつたから、

あのソフトグレイ色のべたべたしたもののがなんなのか、分からなかつた。

それを聞かれ、園さんはこう答えた。

「ああ、あれ？あれは天然酵母。普通はパンづくりにはスーパーとかで売つてるイーストっていう酵母菌を使うんだけど、今回は自家製の酵母を使ったの。その酵母菌は果物とか野菜にもついていて、それを培養したものがあの瓶にはいってたものよ。これは林檎から種起こしたから林檎酵母。

作り方？ええと、まずは、林檎に砂糖、湯冷ましを消毒した瓶に入れてしばらくおいて置く。その間毎日蓋を開けて、空氣の入れ換えをしてやるの。そうすると林檎についていた酵母が糖分を餌にして増えてきて、そのうちガスで泡がふくふくとたつてくる、まるでサイダーみたいよ。そしたら出来上がり。パンに入れるとそれがイースト代わりになつて、膨らましてくれるの イチゴやレーズンとかでも出来るらしいけど、私は林檎とバナナくらいでしか試したことがないから 野菜？いいんじやない？トマトとかなら上手いくかもね」と。

「へえー。すごいですね」アンコが感心した様子で言つた。

ああそうだ、そういう質問したのは千央ではなく猫の女の子だつたつけか。彼女は夏梅杏子という名前で、アンコと呼ばれていた。料理や栄養についてとても詳しく、度々小講義を始めるのだった。たとえばトマトは肌にいいとか、豚肉はビタミンB1が豊富だと、そのような話だ。それはもっぱら、今だ食事拒否状態の真琴のために行われるのだった。

とにかく、千央は出来上がつたツヤのない、素朴な丸パンの旨さと、酵母を起こす話の面白さにすっかり感心して、これを理科の自由研究課題に決めたのだった。

千央は野菜をよく観察した、もつたいないのであまり綺麗な物は使いたくない。なので形が変つたり傷がついている物を選び取つ

ていった。

きゅうりとオクラはお化けの様に大きくなつたものが見つかつたので苦労もなかつた。きゅうりは黄色に熟れて、熟れないメロンの匂いがした。これが茶色だつたら巨大生物の糞みたいに見えるな、と千央は思つたりした。オクラは大きさといい形といい、短剣みたいで武器になりそうだつた。硬さも十分にあり、試したらスコップの様に地面に突き立てる事ができた。

また千央はトマトをもぐ時、とても面白いものを見つけた。普通に苗に実つてはいるのだが、ボールを風呂敷で包んだような、太つた涙型をしており、良く見ると、中の果肉が完全に液体になつているのだつた。触るとフニョフニョしていくと氣味が悪い。多分、なにかの原因で中の果肉が傷んだが、皮は破れず、ずっと毎日の太陽の熱で熱せられ、天然のトマトソースになつたのではないだろうか。

畠にはカボチャがあつたが、蔓のよつなものが伸びているだけで、まだ身はなつていなかつた。丸っこい葉っぱには、よく見ると産毛が生えていた、触るとしゃりしゃりしていた。

その隣ではスイカの実がなりはじめていた、しかしながら小さかつた。そして何故だか新聞紙が尻に敷いてあつた。その上をナメクジが頭を振りながらのんきに渡つていた。渡り終えるまで千央はしばらく待つっていた。傘の上をハチが飛んでいった。

数十分後、千央は増田家の台所にいた。

部屋の真ん中には長方形の作業台があつた。それは流行りのアイランドキッチンの様だつたが、ここのはもっと古めかしく、学校の調理室のようだ。その調理台には野菜や葉っぱが所せましと並べられていた。

まず千央はいくつかの広口瓶を用意して貰い、それを熱湯で消毒した。その中に適当に切つた野菜と砂糖を入れ水で満たす。それから蓋を開け空気を入れる、蓋を閉め振つて全体を混ぜる、という作

業を毎日一回繰り返す。つまくいけば泡がたち発酵してくるはずなので、その様子を観察する。ほって置けばできる樂な自由研究であった。

多分規定通りに作れば料理にも使えるちゃんとしたものが出来るはずだが、自然のものなのでそれなりに難しいらしい。つまくいくだろうか。

実のところ千央は、本当はビールがつくりたかったのだ。作り方も調べた、まず大麦を一定の温度時間で煮、大麦に含まれる糖を取り出す、そしてその液をこし、イースト菌を入れ、ポップを浸して、風味をつける。あとは待つのみで、時間が仕事をしてくれる。

ただ家では誰もビールを飲まないし、飲めたとしても、素人が鍊金した得体の知れない発酵飲料を誰が飲んでくれるだろう、ビール酵母ではない謎の菌が繁殖していたら、それこそ大変なことになってしまう。それに、そもそも日本では家で酒を造ることは違法であった。

千央は持ってきたカメラを使って、それぞれの瓶を一つずつ写真に収めた。後々、比較写真にするためだ。

雨が降り止んだので、千央たちは散歩という名目（そうしないと園さんが許してくれないだろう）で川まで歩いて行った。その途中、こんな話をした。毅が言った。「昨日さ、公平が話してくれたじゃん。警察に捕まつた先輩のこと」

「ああ、うん」千央はコシップを聞くよつな気持ちで耳を傾けた。
「それで僕、気になつて公平の台帳を調べてみたんだ。捜すの大変だつたよ。そしたらどうも、公平の証言が決め手になつてその人は捕まつたらしいよ」

「へえ」では、公平始め、千央たちのカルテはどこかにちゃんと保管してあるらしい。

「うん。公平は飛込の選手でさ、学校のプールに忍び込んでは毎晩

練習していたらしい。それでその時ちょうど学校の教師の持ち物が夜のうちに燃やされる事件があつたんだって」

「ふーん」

「もちろん警察には通報したらしいけど犯人は最初見当もつかなかつたらしい。で、いくらかたつたある晩、公平はとうとう学校の警備員さんに見つかってさ。先生にお前が犯人じゃないかと問い合わせられたらしいんだ」

「ええ！！そんな馬鹿なこと」

「だよね。多分先生も冗談だつたと思うよ。そもそも放火なんてする動機がないんだから。なにせ公平は飛込のトップ選手らしいんだ、だから無断で忍び込んで精々練習熱心過ぎるためだと思われるくらいだよ。でも公平はビビッちゃつたのか、自分が疑われているのが嫌だつたのか、喋つちゃつたんだ。その日学校まで行く途中、その先輩たちとすれ違つたのをね」

「うーん」千央は、どんどんと話に引き込まれていった。

「その先輩は普段から不良っぽい人だつたらしいから、田ぐらましひこうか、よいおどりになると思ったのかもね。で、先生は当然その先輩たちに話を聞いたわけ……そしたら次の日その先輩たちが警察に捕まつたんだって！」

「ええっ！！」千央は間抜けな声を出した。しかし、学校側が生徒を通報するなんて珍しいことだと思った、多分よつほど酷いいたずらだつたのだろう。それから、千央はすぐあることに気づいた。

「でも、結局その人たちが犯人だつたのなら話した方がよかつたんじゃない」

「まあね。でもどうやら公平とその子たちは仲良しだつたらしいよ。なんか幼稚園から一緒に幼なじみだつたんだって」

なるほど、と言いつつ、本当に彼らは仲良しだつたのかなあ、と千央は思つたのだった。不良の彼らがより疑惑の目で見られるようになるかもしれないし、濡れ衣を着せられる可能性もあるからだ。しかし、結局彼ら犯人だつたのだから、特に公平が気に病むことで

はないような気がする。むしろ気にしてはいけない、誇りにしてもいいくらいだ、と千央は思った。偶然とはいえ、公平の行動は良い結果を招いたのだから。

「その後さ、公平は飛込台から滑つて、背中を打っちゃつて飛込ができなくなつたんだよ」

「ふーん、……全然元気そうに見えるんだけどなあ。可哀相。怪我の後遺症とかつて聞くけど、本當にあるんだねえ」氣の毒だなあ。怪我の程度は知らないけど、千央はとても同情した。

「いや、体の方は大丈夫なんだけど」と、毅は前置いた。しかし、「たださあ……」毅はそう言つた後、長く黙つてしまつた。

どうやら、この件には窺い知れないような事情があるらしい。そして、あのカルテには色んなことが書いてあるに違いない。それらを見聞きして、毅はおそらくみんな知つているのだ。千央はその事実に生理的な嫌悪を感じ、またそれを警戒した。つまり、あのカルテを見るかぎり、毅にとつて千央はクラスの女ボスからいじめを受けた、いじめられつ子という認識になつてしまつた。“友達にいじめられ、傷つき、悲しみにくれた11歳の女の子”こんなに本来の千央と掛け離れたイメージ像があるだろうか。なぜなら本来の千央は、それほど“温厚”でも“柔軟”でもないからだ。攻撃的で勝ち気な面も持ち合わせている。そんな自分が同級生の攻撃くらいで打ち萎れているものか、畜生、もし不当な扱いをされようものなら迷わず一発お見舞いしてやるんだ、千央は歯痒く思う。いや、それは流石にやり過ぎか、でも胸倉を掴むくらいなら本当にやるかもしれない。ただ、今まで周りに良い人たちしかいなかつたので、それを御披露する機会がなかつただけの話なのだ。

しかし、“いじめの被害者”というレッテル（と、いうべきか）、これはこれで違和感を覚えて嫌だけども、大人から同情の目で見られても余裕で笑つていられる理由はこれなのだから、それには感謝しなくてはならない。以前学校のカウンセラーに優しく相談するよう促された時には、むしろ優越さえ感じたほどである。

「で、それがなんでだか知りたい？」

と毅が焦らしたそうな話のふり方をしてきた。

千央は考え事のせいでイライラしていたので、毅の申し出を即効拒絶しかけた。しかしその時、縄を裂くよくなとまではいかないが、千央たちの歩いている道から脇にそれた方、つまり森の中から女の悲鳴が響いてきて、二人のお喋りはとりあえず中断となつた。同時に、千央の“温厚”な面目は保たれたのである。

さらに、森の中から怯えた声が聞こえ、続いて誰かを呼ぶ声がした。千央たちが駆け付けると、真琴が以前掘った落とし穴の側で腰を抜かしへたり込んでいた。脇には湖水がいた。長い髪を振り乱し、興奮したようすでこう言った。

「今この中から、なにかおかしな声がしたの。誰かがいるみたい」真琴は落とし穴を震える指で差した。

どうやら落とし穴に本当に何かが落ちてしまつたらしい。千央が見てみると、確かに穴のかぶせた部分には穴が開いていた。しかし中は何のへんてつもないただの暗闇が見えるだけだ。悲鳴を聞いて、公平、慶幾、伊鶴、真、アンコたちも駆け付けて來た。何だろう？毅たちは談合した。

「めええー、つてないよ。めええー」湖水はそう言つて声まねをした。

その時“その通り”と応じるように、メニーと大きな鳴き声が穴から聞こえた。山羊だろうか。毅は勢い込んで穴を覗いて、ゴッチ、ゴッチじゃないか、と喜んでいた。千央が覗き込んで見ると、思つた通り山羊が落ち込んでいた。それもとても大きく、表情のないあの横長の瞳でこちらを見ていた。千央は後ずさりした。

毅はまず上にのせていた枝や葉っぱをどかし、穴に飛び降りた。そして山羊の前脚をつかんで持ち上げようとした。しかしそれだけでは体は上らず穴から出られない。その間も山羊はメーメー鳴きま

くつていた。そこで板切れを斜めに差し入れ、そこから登つてこられた。何人かが後ろから押して手伝つた。しばらく押し続けて、見事、山羊は上陸した。湖水は拍手して喜び、ぴょんぴよんと飛び跳ねた。

「そろそろ現れる頃だと思つてたんだけど、まさか穴の中にいるとはね」毅は嬉しそうに言つた。この山羊は去年の12月ころに突然現れ、今まで数ヶ月置きで何度も行方不明になつていたといつ。そして、数ヶ月前にも同じように姿を消してたらし。

「じゃあ、この山羊は毅の家で飼つてるんじゃないの？」と真。

「そうだよ、どつかから来た野良山羊さ」毅は答えた。

はじめはもちろん毅たちも飼い主を探そうとした。しかし近所に山羊を飼っている住人はいるが、自分の山羊が行方不明だいう人はなく、また他に名乗りでる人もいなかつた。それで、しばらく世話するつもりで家に連れ帰つたのだが、

「それが一晩たつたら、いつの間にかどつかに消えているんだよね。とにかく煙りみたいなやつだよ、きっと自由にしてるのが好きなんだ」毅は山羊の頭を撫で摩つた。

それで、今でもこの「ゴッち」という山羊は山を好き勝手に歩きまわり、野草を食む、生糞の放浪山羊だといつことである。

ここまで言い、毅は急に笑い出したので、何とかと皆の注目を浴びた。毅はまだ笑いながら言つた。

「あのね、おかしいんだよ、鷺崎……あ、うちに耳の田立つ庭師がいるだろ、そいつがいつだつたかとても熱心なようすで手紙を書いてたわけ。だから何してるか聞いたんだけど、そしたら「ゴッち」の飼い主に手紙を書いて、ちゃんと山羊を繋いで飼つてくれるようにお願いするんだって言つてさ」

「へー、それってやせしいかも」一体何がおかしいのかわからぬ、千央は感心して言つた。

「いやでもさあ……、それって、飼い主がどこにいるのかわからぬいのにその手紙はどうやって渡すんだよ」公平がしかめつづらで言

つた。

おかしそうに頷き、毅は言った。

「うん、いいとこに気づいたな公平。だから、そのことを言つたわけ、そしたら次の日ゴッちの首にその手紙が巻き付けてあつたんだよ」

これには千央を含む皆が吹き出した。きっと彼はヤギの郵便屋を思い出してやつたに違いないのだ。

「何それ、すごく変！！」アンコは笑つた。

「ちょっと抜けてるな」と公平。

「どうかすごくだろ。あの人、見た目もなんか……ちょっと変だしさ、いやかなり変だな」伊鶴は言った

確かに彼の容姿はずいぶんと風変りだつた。始めて顔を見た時、千央はびっくりして一度見してしまつた。そしてあまりに得体の知れない感じなので、やたら怖かつた。皮下に木材を滑り込ませたようなやけにはつきりとした鼻梁に、大きな耳はパラボラアンテナのように全てがこちらを向いている。目はよく見るとなかなかよい形をしているのだが、如何せんサイズが小さすぎる。それに、白目部分が黄色いのでよく焼けた肌との境がはつきりせず、目が黒い丸点だけのように見えるという始末だつた。彼は一見、他の人たちとはあまりにも違つていて印象をあたえるのだ。例えば千央たちが水墨画なら彼は点描、こちらが版画ならあちらはメゾチントという感じだ。容姿だけでいうなら、彼はまさに異次元の人であつた。

しかし、何度か顔を合わせるうち、その奇妙な目に穏やかで優しそうな光りを感じることができた、それ以後は特に怖がることもなくなつた。彼は大変働き者で、午前は庭仕事をやり、昼は千央たちと一緒にご飯をもりもり食べて、午後からは山仕事に行くのだった。彼は昔から増田家の庭や、近隣の森の手入れを任せられているのだ。

「それで、結局手紙はどうしたの？」真琴は聞く。

「知らない。多分ゴッちに食われちゃつたんじゃないかな？山羊だしね。ねえ、お前は笑いすぎだよ」毅は慶幾に言つた。慶幾はまだ

笑いこけていたのだ。

「でも、いつ穴に落ちたんだろう。可哀相に」アンコは山羊の白い前脚を撫でて土をた。

「真琴が見つけたから良かつたけど、もし何日も気づいてなかつたら飢え死にしてたかもしれないね」真がセーフ、ヒジエスチャーをしながら言つた。

「まさか本当に落とし穴に何かかかるとは思わなかつたなあ」公平は言つた。それでは公平もあんなに乗り気だつたのにも係わらず、無理だと考えていたらしい。千央は内心ずつこけた。

「でも、ちゃんと戻つて来たんだから。ねえ、お前、お腹空いたかい？」毅は優しくゴツチに話しかけた。

ゴツチは前脚に泥を付けていたくらいで、他は元氣で興奮が落ち着くと毅が差し出した草をおとなしく食べはじめた。

「千央は触んないの？ 大人しいよ」公平は薦めた。

「いいよいよ。私山羊嫌いだもん」千央は遠慮した。

皆興味深げにゴツチに群がつていたが、実をいうと、千央は山羊を苦手に思つていた。横長の瞳を不気味なのも一因だが、それとは別に、あのむつくり膨れた腹を見ると、以前飼つていた出田金のことを思い出して胸が悪くなるのだ。

千央は以前、黒出田金を飼つていた。それは夏祭の金魚すくいでとつたもので、水槽には他にも色々な種類が混じつていた。その中でも黒い出田金が一番のお気に入りであつた。大きな目玉と一際でっぷりした腹でゆらりゆらりと泳ぎ、なんとも面倒臭そうな、鈍いユーモラスな姿が好きだつた。ただ少し気になつたのは、いつだつたか父に「出田金はすぐ死ぬよ」と警告されたことだつた。

しばらくたつた朝、黒出田金が水槽の底に沈んでいるのを千央は見つけた。でも単に眠つているのかと思い（魚にはまぶたがない）特に気にするまでもなく、そのまま学校に行つた。午後、下校した千央は水槽を見て息が止まつてしまつた。出田金が水面にポカリと浮かんでいのだ。酸素ポンプの作る流れに身を任せ、出田金はグル

グルと対流し続けていた。灰色の変なものも一緒にグルグルしていた。それは、肉を煮る時に出る灰汁のようだった。千央はそれは力ビだと思い掏つた、死んで半日くらいしかたつていないので力ビなんかが浮いているのだろうと不思議に思った。

それが何であるかは埋葬する時にわかつた、水から掏い出す際、ある拍子に体がこてんと反転し反対側の腹が見えた。出目金の腹は爆発したように破られていた、あの灰色のものは内臓だったのだ、どうやら、仲間に食い荒らされて散り散りになつてしまつたようだ。

以来千央にとって、大きなお腹というのは短命の印のような気がし、そのうち爆発でも起しそうな気がするのである。

とりあえず、千央たちはゴッチを散歩に連れ出した。

まずゴッチを川に水を飲ませに行き、草が沢山生えた場所を探すこととした。途中で道端に生えた雑草を摘み、食べさせた。山羊は柔らかい草が好きかと思ったが、意外と硬い纖維のある草もよく食べた。まるでファックスみたいな動きで草は飲みこまれていく、ゴッチが草を噛み飲み込むのをじつと眺めていた。そして噛む時は起きしきしと言つ音が口元から聞こえてくるので面白い、千央は耳を澄まして聞いた。

しばらく歩いた先に崖のようなところが見えてきた。高さは数メートルはあるだろうか、下をみるとそこは窪地になつていて沢山の廃品が置かれていた。ソファー や四角くて白い家電がいくつも。千央は奥の崖になつてている所をのぞいた。そこには川を挟んだ向こう側に、川原が見えた。ここに来た初日、皆で焼肉をした場所だ。

皆で周り道をして、下に降りていった。千央はまわりを見渡した。ここにはクローバーに似た小さい草がそこら中に生えていた、ゴッチはそれを口そうに食べた。他にも薦のような草や、ドクダミ等がはえている。見覚えのある形の葉だなどよく見てみれば、それは大

葉だった。なぜか赤しそもあちらこちらに生えていた。

辺りにはベッドのマットレスやら電子レンジ、冷蔵庫などがあつた。千央は冷蔵庫を開け閉めした生活に使えそうなものはほとんど揃っているのではないだろうか。ただ電気がないしあつても古くて使えないだろう。アンゴがマットレスにすわって、お尻が濡れたと言つて悲鳴をあげた、それ以前にここにあるものは雨ざらしなのだから故障しているか。伊鶴がホッピングを持ってきて躊躇うとしたが、はじめのジャンプでぬかるんだ土に足を取られて転び、悪態をついた。薄情にも、皆笑っていた。誰かがここは素敵な秘密基地になりそうと言つた。確かにここは豪華なままごと場になりそうである、ただ残念なことに、もうそんな歳でもないけれど。

湖水はぬかるみの泥でだんごを作っていた、それがとても面白いやり方だった。

まず、湖水は下の方にある黄色い粘りのある粘土を掘り返し、棒のように細長く伸ばした。次に焦げ茶色の土をそれに被せ、また黄色の土を被せる。そのようにしてタラコくらいの大きさになつたら、竹で作ったナイフでのり巻きのように切る。それを丸めると表面が黄色と茶模様のだんごが出来上がるのだ。

千央が褒めるつもりで、湖水に美味しそうと言つたら、これ食べるの?と不審な目で言われてしまつた。男の子はままごと遊びはしないということを千央は忘れていたのだった。

しばらくゴツチに草を食べさせた後、急に冷たい空気が落ちてきて千央は身震いした。何事かと空を見上げると、一拍おいて雨粒が千央の頬を濡らした。

「家に帰ろう。多分これから大雨になるよ」毅は空模様を眺め言った。誰かが残念そうな声を出した。それに応えるように毅は言つ。「家に帰つたらさ、てるてる坊主を作ろつよ」

八、ホルンフェルスのベレン

ある晩、夢から覚めた千央は深夜遅くにトイレに行つた後、そそくさと布団に潜り込んだ。そして、胎児のように丸まつた。

外の庭では名も知らぬ色んな虫たちが鳴いていて賑やかだ。ピッ、ピリリリリリ……。フーア、フーア、フーア……。チュツツツツ……。グーゴ、グーゴ、グーゴ、これはカエルである。千央はさつき見た夢を思い出した。不条理で後味の悪い夢だつた。なんだか全然眠れる気がしない。

その時千央はふと、ある方法で気を紛らわすことを思いついたのだった。

そして揉むように合わせた両手を口元に持つていき、それに向かつて小声で話した。

“あの……ね、あなたが産まれたきっかけは、水野さんに算数のを解くのを手伝つてもらつていた時に、実験に付き合つてほしいと言われたことが始めなんだけど、”

千央はまるで硝子が溶けたかのような水に手を入れ、川底の硬い石に触れた。

石は長い年月をかけて削られ滑らかになつたもの、こんペイ糖のように尖つているもの、灰色や白色がほとんどだが探せば珍しいものもいくつか見つけることができた。

磨りガラスがサンドされているような石、キャラメル色と白が混じつてマーブルキャンディみたいな石、プラネタリウムのように黒に白い星が散らばつたのや、逆に大理石のよつた白黒で霜降り状のもの、真っ黒の碁石の材料になりそうなものどうみても宇宙からの飛来物のようなターコイズブルーのもの、赤い筋が走つているもの、

金箔が混じつたような。

千央はその中からブルーサファイア色をした石を拾い上げた。白く曇ったような青と白が段々とした層になつてゐる。宵闇の空を写しどつたような柄でとても綺麗だ。

選んだ石を持つて川から揚ると、水野さんが待ち構えていた。「よし、各自石は持つているな。さてさて……えーっと、これら君達には、その石の中から、それぞれに、小さな小さな神さまを取り出してもらう」

エーッと千央たちは声を出して驚くか、もしくは吹き出した。しかし、水野さんが弁解も何もしないので、そのうちみるみる呆れ返つたり、懐疑的な表情になつていった。なにしろ意味不明だつた。彫刻でもさせようというのか。

水野さんは皆のポカンとした顔を眺め回しアッハハ、と乾いた笑い声をあげた。そして、まあ聞いてよと続けた。

「皆も一粒のお米には七人の神様がいるとか聞いたことあるだろう。全ての物に魂は宿る。だからむしろ発見と言つべきなのかも知れない」後半は独り言になりつつも、水野さんは言った。

ハア、という声が隣から聞こえ、千央が見ると、真が困り果てた表情で相槌を打っていた。それを見て千央は随分寛容なやつだ、と思うと同時に、それに対して腹が立つてきた。彼も散々おかしなことに振り回されてきたはずなのに、なんでそんな間抜け呆けた初心な反応しかできないのかと。しかし、そう言う千央も同じようなもので、またおかしなことを言うやつが出てきた、と失望した気持ちで意識が占められ、千央はにわかに起きた相手に対する不審な気持ちを全く表すことはできなかつた。現れた変化はせいぜい、少し頭を下に向けたぐらいであった。

もちろんそれで抗議や反抗の気持ちが相手に伝わるはずもなく、水野さんは提案を続けた。

「万物にはそれぞれ神が宿ります。この小さな石ころにもそれがあります。しかしその神さまたちの精神は未熟で赤ん坊同然なのです。

さらに目も見えず、耳も聞こえない、あなたの話し掛ける心の声だけが聞こえるんです。それだけが彼、もしくは彼女の全世界なのです。あなたはマリアさま、マヤ夫人になつて、優しくはなしかけ、一日あつた出来事、気持ちや考えを報告をしてください。正しい方へ導いてやつてください。いつか知恵がついて、精神が十分に成長した時に、あなたに話しかけてくるのを待つて下さい。その時どんな言葉を掛けてくるか、楽しみにしていて下さい。その時はどんな言葉を話したか教えてね」

水野さんはこちらの反応などまるで気にすることなく、まるでテレビの中の人のように喋り終えた。皆は、やはリア然としていた。水野さんが急に様相を崩し、

「実にくだらないなんて思わないで、皆をまどうかどうかご協力を、お頼み申し上げます」と言つた。

そのようすが可笑しかつたので、千央らは吹き出してしまつた。千央がふと隣を見ると、公平が一人鬼瓦のような形相をしていたので、とたんに笑いが吹つ飛んでしまつた。どうやら彼も一筋縄ではないかのようだ。彼は千央たちよりいくつか年上に見えたので、多分他の子が気づかないようなこと、思いを巡らしているのだろう。

それは純粹な嫌悪の表情といつのか、一瞬の出来事だったのに、それは千央の目と脳に強く焼き付いたのであつた。

「本当に話しかけてくるの？」

「ああ、きっと答えてくれるよ。熱心なら熱心なほど」水野さんは軽い調子で請け合つた。

「ヘレン・ケラーとサリバン先生みたいだね」

「そうそう。いいね、その例え。それ頂きだ。でも神様なんだから、立場はわきまえないと云ひないよ。……まあ、馬鹿らしいと思うかもしぬないけど、試しにやつてみてよ」水野さんは仏頂面の真琴を見ながら言つた。

公平や真琴は気に入らなかつたようだつたが、千央はこのやり方をとても面白そうだと考えた。これが人形遊びの一種の変形のように思えたからだ。千央は人形遊びやごっこ遊びはとても好きで、これは自分自身いつもやつてていることだった。しかし、この奇妙な状況でお墨付きを貰つたことにより、千央は不信感を持ったのだった。そして、この遊びがどういったものであるかを考えさせられた。

これが、普通のごっこ遊びと違うのは、出来事や考えに自問自答をさせる相手の役が神さままでなくてはならない、というところがある。話し相手は神さまなのだから、なるだけ人格者の性格をつくらなくてはならないから、善の性格を引き出す効果があるかもしれないといふ、千央は思うのだ。もし、悪い考えが起きた時とかにそれを諫めてくれたりするのかもしれない。どうだろうか？

ようは、より好ましい人格のイマジナリー・フレンド（想像上の友達）を人工的に創りだすにかしがの心理学的な実験のような気がするのだ。神様云々のところがこの場所らしいな、と千央は思つたのだった。

しかし千央は後から、この方法にはマズイ面もある気がしてきたのだ。

そもそも一人の人間がそれぞれの感情（この場合は良心）に意識的に人格をつけるのは不自然だし、一人一役を繰り返すうちに自分の意見を他人の考えのように感じるようになるかもしない。これは、二重人格になる危険をがないだろうか？また、良心の規準を子供に丸投げしていいのだろうか、とも思うのだ。下手したら、その人の全て肯定する独りよがりな神様になつてしまふのではないか？と、……そのような心配をしながら、千央は神様への報告を終えた。

しかし、この心配はあくまでも真面目にやるやつがいればの話しだつた。そもそも、そんなにうまくいくわけがないのである。だって、子供の自分でさえこんなに馬鹿馬鹿しく感じるのだから、 “

いいから、神とやらはさつさと失せろ！！”と、千央は自分の拳に向かつてそう念じた。

“そんな風に言われ、私は千央に突き放されてしまった。以来、私は真っ暗な静寂の世界に住むことになったのだった

”

ハハハ、……なんてね。千央は一人笑いし、しばらくしてやつと眠りに入ることができた。

九、奇妙な家業

「誰だよ。ふれふれ坊主なんかを作っちゃったのは?」慶幾がふて腐れて言つ。

これもある意味夏の風物詩かも知れないな、と思ひながらも、少々うんざりした顔で、千央はテレビにうつる渦巻きを見ていた。千央たちの見ているニュースによると、「南シナ海で発生した台風28号は徐々に勢力を増しながら南九州を北上」し、進路予想図は千央のいる「北九州をすっぽり覆つて」いた。

場面が変わり、画面には背の高い椰の枝が一方に勢い良くふりきられるようすが映つた、続いて堤防に波が体当たりし、打ち碎かれて大きな水しぶきをあげているところが映し出された。アナウンサーの黄色いレインコートが暴風雨に煽られバシバシ音をたててている。千央は大変な仕事だなあ、と見ていた。そのうち彼の持つていた傘は紙切れのように暴風雨に吹き飛ばされてしまった。

驚いたことに後ろの堤防には人影が見える。千央が危ないなあ、と思つて見ていると、急に来た高波が数名を陸側に押し流した。

次に土砂崩れのようすが映しだされた。山の土の中が剥き出しになつてゐる、まるで不自然な傷口みたいだ、黄色の土が膿か脂肪のよう видえてくる。千央は突然とてつもなくグロテスクなものを見せられている気分になつた。

どこかの山で土砂崩れが起き、川が塞がれ、行き場を失つた土砂が下の町に流れ込み大きな被害がでたというニュースを伝えていた。ヘリコプターが町の上空を飛び、家屋が映つたが、完全に屋根上水没していた。

園さんたちはこれまでに植木鉢をすべて家の中にいれ、鎧戸をとじた。それのない小さな窓にはガムテープをとめた。これは、万が一窓が割れた時破片がとびちらないようにするためだ。そのせいで部屋は暗く、部屋はあかりがつき、まるで夜の様な雰囲気だつた。

千央が窓から覗くと、かろうじて木の影が揺さ振られるのが見えた。

千央は台風自体にはもう慣れきっていた。なにせ毎年何度も来るのがだから。それでも直接の被害は酷くて停電程度、その時はせいぜい買い物置きのアイスクリームの溶けぐあいを心配するくらいで、気にかけるだけ無駄だというのが台風に対する千央の認識であった。しかし、今回は違ったようだ。午後三時ごろ、千央のいる地域に避難勧告がされたのだ。長雨の影響で、土砂崩れの危険性があるとのことだった。

避難勧告を受けて、増田家は一気に慌ただしくなった。水野さんがワゴン車で乗りつけ、靈能者たちを避難所へ先に送つていった（とても妙な台詞回しだ）。千央たちは持つていく荷物、懐中電灯やラジオなどをまとめた。このラジオはとても優れていて、手回し式の充電器がついていた。だから電池切れの心配がいらないのだ。他にマンガやゲームなども。それから親に電話をした。真琴は心配した母親からの電話をまるで厄介なもののように対応した。さつき公平にも電話がかかってきていたらしいが、その時母親ことをママと呼んでいたせいで、伊鶴とアンコにからかわれた。結果、伊鶴は公平のひじ鉄を食らっていた。戸締まりの後、土のうを乗り越えて流れる泥水を横目に、千央たちは急いで車へと乗り込んだ。屋外はまるで脱水中の洗濯機のようだった。

千央は避難するような大事になつたのは今回がはじめてで、少し不安になつたが、それより興奮の方が優つていて、完全に遠足気分で上気していた。皆も同じらしく、いつもより元気で声が無駄にでかい。車内はぎゅうぎゅう詰めで騒々しかつた。お菓子を回し食いはじめた千央たちを運転席から振り返り、水野さんは言った。

「おいおい、君たち、騒ぎすぎだ。遊びに行くんじゃないんだぞ。お願ひだから静かにおとなしくしてくれ。じゃないと、運転を誤つて車もとも川に落ちることになつてるからな。それでもいいの？」

皆はなぜかノリノリで、はーいーーーと返事をした。……いいのか？

「でも水野さん、これって重量オーバーじゃないんですかあ？」季生子は周りを見渡して声をあげた。彼女はいつも部屋にいて、千央はあの夜以来、会つていなかつたが、やつと顔が見れた。

「いや、その前に定員オーバーだよ。でも子供だから軽いし、多分大丈夫だろう。それに誰かを置いて行くわけにもいかないから」水野さんは首を振りながら、ハンドルを握った。水野さんは災害情報を探こうとラジオをつけたが、しかし雑音しか聞こえてこなかつた。千央たちは顔を見合させた。確かに雑業団のような車内だつた、それでもなんとか全員が座席におさまつてはいた。出発。総勢10名を乗せた車はゆつぐりと動き出した。

台風の雨はまるで映画の撮影のつくりもののように強くなつたり弱くなつたりしながら、ポンネットを絶えず打ち鳴らす。

風の動きは速く、車窓越しに見つけた笑い顔模様の雲が千央の座つた右側の窓に顔をだしたと思ったら、急速に様相を崩し、あつという間に見るも無惨な泣き顔に変化し、そのうちバラバラに散り、反対側の左の窓に出現した。

それでも避難するほどには大したことないかも、と千央は思った。途端、巨大な看板が完全に浮いたまま、道路を右から左へ渡つていい、何処かの家の椰子の木が倒れてきた、千央は血の気がひいた。山肌に白いコンクリートで網を張つたように補強された継ぎ接ぎを見つける度、千央は土砂崩れが起きないだろうかと心配になつた。「ねえねえ、千央。あそこにあるのが米岩だよ」途中、毅が窓の外を指差して言つた。

千央がそちらの方向を見ると、岩が崖の上にあつた。米岩という名前の通り、細さといい、先の尖り具合といい、米粒そつくりであつた。米岩は落とし穴を掘つた際に、蝙蝠窟やバーガー岩などと一緒に地図に記してあつたものだ。それは落ちるか落ちないかの、相当危ういバランスで立つていた。風に煽られて、崖の上から岩が転

がり落ちてきやしないかと千央は冷や冷やした。ちゅうじ車は『落石注意』の看板の横を通り過ぎたのだ。

「これは本当に土砂崩れがおきるかもしないな」慶幾は下の方で轟音をたて流れる川を眺めながら言った。川は完全にカフェオレ色だった。

「ものすごい雨の量だね。ほら、あんないでつかい石が流されてきた」と真琴。

大岩が「ゴロゴロ」とすごい勢いで何十回も転がり落ちてきた、皆は感心してそのようすを眺めた。

「でもあそこでサーフィンとかしたら、すぐ楽しそうだな」と公平。

「そうね。でもそのかわり……命を失つよ」と、真琴。

不意に、ウワーン！…という叫び声が後ろから聞こえてきた、千央は何事かとギクッと飛び上がった。見ると叫んだのは毅だった。蒼白な顔をしている。隣の慶幾も真もひどく驚いたようすだ。

「クソッ何だよ！…急にでかい声だして、脅かすなよ！…」

「どうしたの一体？」

毅は涙声で訴えた。

「大変だ。僕、昨日ゴッヂを秘密基地のところに繋いでそれで……、そのまんまだ」アンコはハツと息を飲んだ。ああ、と公平が唸つた。ゲッ、伊鶴が言つた。そのなのだ。秘密基地の隣には川が流れている。今、川は増水して危険だ。もしかしたらゴッヂは川に流れてしまうかもしれない。

「何だ、どうかした？」異様な雰囲気を感じとつたのか、水野さんは言つた。バックミラーに怪訝な顔が写つている。

「水野さん。すみませんけど、今から家に引き返して下さい」毅は身を乗り出し、必死になつて懇願した。

「えつ、なんで。もうすぐ避難所に着くし、忘れ物なら悪いけど諦めてくれ」

「違います、忘れ物じゃないです。でも、すぐ帰らないと。じゃな

いと「ゴッヂが死んじやうかもしれないんです。すぐに行かないと、川が……」毅は堪えきれずにシクシク泣き出してしまった。

何のことやら、と混乱する水野さんに皆はことの次第を寄つて集つて説明した、それで水野さんは納得した顔をした。しかし、

「でも、今から行つても台風で危なくつて山には入れないと思ひよ。いつ土砂崩れが起こるかわからないし」と、とても気の毒がつて言つた。

そう言われた毅は、みるみる憔悴してしまった。毅とて今さら引き返すのは無理だと分かつてているのだ。皆は色々な言葉をかけて慰めにかかつた。

「山羊は半分野生動物みたいなもんなんだから平氣だよ。前にテレビで見たもん。泳ぎもきっと上手いよ」とよく分からぬことを言つたり、

「ゴッヂは縄抜け名人なんでしょう」と思い出させたり、

「絶対上手く逃げてるつて。そんな予感がする」と根拠もなく請け合つたりした。

「あの土地の形からいつて、山が沈むくらいの雨が降らない限り、そんなことは起きっこないよ」唯一納得できる意見を水野さんが言つた。

その時車が樹木のトンネルから抜け出て、障害物が無くなつたのか、雜音が消え、ラジオアナウンサーの淡々とした声が急に鮮明になつて聞こえてきた。その情報に皆は言葉を詰まらせた。

“…………”XX川上流で起きた土砂災害の影響により堤防が決壊、XX川が氾濫し、付近では一般の家屋4棟が半壊、16棟が床上、床下浸水しました。現在70世帯134人に避難……”

「…………」なんて間の悪い時に沿るラジオなんだろ？…………。

千央は心配して後ろを振り返つた。毅はもう泣いてはいなかつた。ただ肩を落とし、沈痛な表情で黙つていた。慰めの言葉も尽き、車

内は一転静かになり、風がびゅうびゅう吹く音と雨のバチバチした音だけが響いていた。

山からおりてしばらく走った後、いくつか通行止めに引っ掛かりはしたが、車は無事目的地に到着した。毅の通つている小学校の体育館と向かい側にある公民館とが避難所になっていた。門柱には開知小学校と書いてある。

千央たちが体育館に入ると、すでに地元の人たちが数人集まつていて、災害情報を聞いたり、横になつたり、知り合いで同時にお喋りしたりしていた。中は橙色の毛布がしかれ、オレンジ色のライトが煌々としていた。

千央は毛布を貰い床に敷いて、その上に座つた。千央たちは暇つぶしに、ゲームをしようと持つてきていた。周りを見ても子供のほとんどなどがゲームをしていた。

その間に、人が続々と集まつてきた。急に慶幾がむくりと起き上がり、そのうちの一人にお一一と声をかけた。

「あれ、ヨシクじyan。なんでいんの？」少年がこちらに走つて来て言った。「わっ！！それにキモいるし」

まあね、と毅は鬱陶しそうに頷いた。まだ山羊ショックから回復していなかつたのだ。むしろ、そのさなかといえた。

少年は慶幾の知り合いらしかつた。

「来る途中、お前のお父さんに会つたよ」

「へえ、いつこりこつちに着くかな」

「消防団の服着てたからこっちにはこれないと思うぜ。俺のお父さんも呼ばれたから」彼はこちらをジロジロ見ながら言つた。

そのうち誰かが舞台にカーテンをしき、その中で備えつけのボールを蹴りつこして遊びはじめた。賑やかな声に惹かれたのか、慶幾はゲームをやめて、その友達と連れ立つてそちらに行つてしまつた。向こうからはボールの跳ねる音、楽しそうな歓声が聞こえてくる。

「ねえ、私たちも行かない？」そう言ってアンコは立ち上がった。

「私は疲れることはバス」真琴はマンガから目を離さずに言った。

「毅は行こうよ」アンコは元気のない毅を、無理矢理立せようと
して腕を引っ張つた。

「まあ、毅はいま廃人状態だから、いくら誘つても無駄さ」と公平
が冗談を言つた。

毅はそろそろ、と頷き少し笑つて千央たちにバイバイと手を振つ
た。

千央は知らない子たちに混じつて遊んだ。そのうち伊鶴がオーバー・ヘッジキックをしようとして肩から落ちを痛めた。また身体の大きな男の子がけり上げたゴムボールが天井に当たり派手な音をたて、ライトが割れた。直後かなり怒った顔のおじさんが乱入してきて、千央たちは雷を落とされた。結局この即席ボール蹴り部は即解散と相成つた。後から慶幾に聞いた話によると、彼はなんと、この学校の校長らしかつた。

運動をして汗だくになつた千央たちは体育館に戻つて、用意された長いテーブルの周りに座つた。それから、お茶や茶菓子を貰つた。それが見たこともない渋いお菓子ばかりなので、千央はどれに手をつけたらいいものやら迷つてしまつた。真は挑戦的に、鮮やかな赤い立方体のお菓子に手を出した。まず一口かじり、それから首を傾げていた。

結局千央は最も無難だったお菓子、最中に噛み付いた。隣のおばさんたちの会話が、自然と耳に入つてくる。

「それで、うちの孫が言つと、パパとママは行けんけんが、ジージとバーバにお願いするどーーて、私はもう可笑しゅうして」

「まあ、偉くませとんさつねえ。来年の春からはもう幼稚園になりんさつとでしょ？」

「そうそ。来年の春に4つになるけん」

「もうそがんなりんさつね？ついこの間まで赤ちゃんやつたのに、
早かねえ」

「本当、子供は成長が早かけんねえ」

「……、今度新しか病院のできるていいよるけど、せんたちが反対しょんわつじたるよ」

「へえ、そがんね」

「でくつとは病棟のこたつですよ」

「予定地はどこやつたかね?」

「バルーンの店の東側で私は聞いたです」

「ああ、西さんのところの近所やろう? 国道から一つ入った道の

……、」

「……、こつなつたらここから帰れるとやうつか

「台風はどうやら逸れてくれたごたつけん、明日には家に戻れるとやなかね?」

「帰つたら屋根の修理ば急いでせんばいかん、じゃなかと雨の漏つけん」

では、台風は逸れたのか。千央は口には出さなかつたが、やつぱり心配することなんてなかつたんだ、と思つた。そして、毅とゴッチには願つてもない朗報であつた。この情報で多少気分が上向いたのか、豆菓子を食べながら毅は聞いてきた。

「なあ、さつき誰かに怒鳴られてたみたいだけど、なにがあつたの?」

カーテンの向こうで起つたことなので、毅は一部始終をしらな

いのだ。

「うん、なんかでかい男の子の蹴つたボールがライトに当たつて壊れちゃつてさ。それで怒られていたの。でも、私たちは完全にとばつちりだよ」

「そりやあ、災難だつたね」と毅は言つた。

「それにしても、あの校長の怒鳴り方。超怖かつた。毅の学校の校長つてめちゃくちゃ怖いね」と千央。

「えつ……じや、あのジャージが校長なの!?」毅はびっくりしていた。「こつも英國紳士みたいに決めてるのに、信じられないよ

毅の話によれば、いつもの校長は紺色のスーツの中に揃いのベストつけ、鼈甲のタイピンをして、かなり洒落ている人らしい。だから、ラフな格好の校長などまるで想像がつかないといつ。

いやいや、校長がジャージを着たくらいで驚いてはいけない、と公平は横から言つた。公平の通う学校の校長は、いつも作業着姿で庭にいるせいで、来客に用務員だと必ずと言っていいほど間違えられていた。それどころか本当に校長かさえ、信じてもらえていないことも度々あつたそうである、皆はその話に笑つた。毅も可笑しいと笑つっていて、大分普段のようすに戻つたみたいで、千央はホッとしました。

お茶を飲み終え、毅の手引きで千央たちは体育倉庫に行つた。そこは打ちっぱなしのコンクリートの壁で、冷たくジットリと湿つていた。木で作り付けられた棚にボールやネット等の備品が収められ、マットレス置場は電車の寝台のようになつていた。

「病院建設に反対つて、どういうことだらうね？」と公平が呟いた。さつきおばさんたちが話していたことを言つているのだ。

「よく知らない、地価が下がるからじゃないの」と毅。

皆はマットに並んで腰掛けた。それは石灰の匂いがした、千央は鼻がツンとし、むず痒くなつた。

「病院の建設で地価が下がるなんておかしな話じゃない。それに建設じゃなくて増設つて言つてたよ、もうあるものなのに」と、アン口。

「いや、出来るのは普通の病院じゃなくて精神病院らしいよ」真琴は言つた。そういうえば真琴（と毅）はおばさんの側にいたから、ずっと話を聞いていた。

皆はギョッとしていた。しかし精神病院なら反対の声があるのも仕様がない、と千央は思つた。

「そういえば、千央はそこに行つたことがあるはずだけど……」と毅は言つ。

こきなり名指しされ、千央はギクッとした。千央の記憶では精神

病院にようがあつたことは今までなかつたはずなのだ。だからこれは完全な言い掛かりで、なぜ毅がそのようなことを言うのか、千央は一瞬憤つた。毅は一拍おいた後、続けた。

「ほら、釣りに行つて熱中症になつた時行つたところがあるだろ。あそこが精神病院。病院の名前は確か、よしば病院だつたかな」

千央は自分の腕に残る点滴の跡を見た。ほんの数日前の出来事なのだが、もうほとんど消えてしまつていて。そうか、あそこは精神病院だつたのか、と千央は思つた。自分のことで精一杯で、その時は全く気づかなかつた。「えー、どうだつた?なんかやばそうな人いた?」

こういうことになるなら、もつとちゃんと観察しておけばよかつたかな、と千央は思つた。

「そうだねえ、言われてみれば元気が無い人が多かつた気がするけど」貧弱な記憶を懸命に千央は辿り、答えた。しかし、それに笑いが起つた。

「それ、当たり前じやん。病院なんだから」

それはそうなのだが、千央は体じやなく気分が落ち込んでいる人、という意味で言つたのだ。しかし千央はもう説明するのが面倒臭くなり、適当に答えることにした。笑われて気に障つた、というのもあるけど。

「私は寝てたからあんまり他の人はよく見てなかつたの!..」

「ふうん」つまらない、といった表情だ。

千央は改めて病院でのようすを思い出した。具合が悪くてそれどころじやなかつた、というのは半分は本当のことだ。しかし、治療後にはそれなりに周りのことを気にする余裕ができていたのだ。それで、そんな風にいわれてみると、千央はそれらしい人物に出くわしたのに覚えがあつた。

点滴が終わり、廊下の長椅子に少しの間座つて待つっていた時、千央の前を車椅子の女性が通つて行つた。彼女は今にも泣きだしそうなようすで千央は何事かと思つたのを覚えている。女性は付き添い

の人に車椅子を押されて、細い腕を撫でさすっていた、千央はこの女性が重い病気でたつた今余命宣告でもうけてきたのかもと考え、なんだか怖くなつたのだ。

またその後、水野さんが受付で精算するのを待合室で待つていた時、隣に座つた中年男性はむくれたようすで下唇を突き出していた。きっと彼はワーカホリックかなんかで、病氣で仕事に行けないのが悔しいのだろうと千央は思つた。

思いつくことといえばそのくらいで、他の病院と比べて違いを感じることは特になかつた。待合室には爺婆もたくさんいたので、多分内科も兼ねているような気がする。だいたいほとんどの患者は見た目ではわからないんじやないのかと千央は思うのだ。そのように振る舞うことが義務ということもないだろうから。でも、はじめから精神病院だとわかつて周りを見ていたら、全然違つて見えたかも知れないな、と千央は思つた。そして惜しいような、惜しくないような気がしたのだった。

「ところで、おばさんたちがが話してたバルーンの店つてなんだろう? バルーンの専門店があるの?」アンコは言つた。

「そんな店近所になかつた。それにこれからもできないと思う、多分永遠に」季生子は言つた。
「こんなにすぐ潰れそうな店つてないよな。一体誰が買うつていうんだ、バルーンフェスタの時に急に膜が破れた選手とかかよ?」と公平は言つた。

千央たちのいる県では毎年11月にバルーンフェスタが行われるためか、バルーンといえばアドバルーン(広告気球)より、人間が乗るバルーンの方がより思い出された。田んぼと平地だらけの土地だから、バルーン競技にはとても都合がよいのだ。とはいへ、県民総出でバルーンを飛ばすというイベントではない。国内や海外から選手がやって来るのだ、もちろん各自道具はちゃんと持参してやって来るから、多分替えのバルーンは必要にならないだろう。

不意にガラガラと音がし、次に千央は顔面に猛烈な風と水しぶき

を受けた。千央たちの田の前には横長の窓があつたのだが、それがなぜか開いていたのだ。ここは半地下になつており、そこからは横殴りの雨でさざ波がたち、霧が吹き上がる地面のよつすがちょうど向かい合つて見えていた。

「うわっ、ちょっと！…まこと、早く閉めて…！」

「なんで開けてんだよ…馬鹿」

「えつ…？」「めん、ごめん」非難囂囂を浴びた真は謝りながら、平均台に飛び乗り窓を閉めた。しかし時既に遅し、皆は全身に霧吹きを浴びたように湿つっていた。

「あーあ、濡れちゃつたよ。もう」と不満な声があがつた。

真はなにがなんだか意味が分からぬんだけど、という顔をしていた。それも当然で、窓を開けたのは真ではなかつたのだ。本当の犯人である真琴は、この勘違いの成り行きを面白そうに見守つていた、いつづくかなと思いながら。その時の千央だが、全然別のこと気に取られていた。伊鶴が濡れたTシャツを使い、一人ジャミラの物まねをやつていたのを見るなり、思わず吹き出してしまったのだ。

夕方、“校内のものは仲良く使いませう。なお、おトイレは混雑やケンカのないよう”と物凄い年のお婆さんからのお達しと同時に、校舎が解放された。

そこで千央は皆と一緒に図書室で読書をした。読んだのは“ヘレン・ケラーの生涯について”という本だ。ヘレンがサリバン先生にウォーターの単語を教わつてからしばらくたつた頃、千央たちは部屋を誰にも気づかれないようにこつそりと抜け出した。校内を抜き足差し足歩いて、見てまわつた。子供は図書室とトイレ以外使ってはならないと最初に注意されていたのだ。

開知小学校は白壁に水色の柱という、ごく一般的なデザインの外観をしていた。中も千央の通つている学校と同じような感じだったが、真つ暗なのでどこかの市庁舎のようにも思える。毅は、一人さつさと階段を昇つてしまい、千央たちは慌ててそれを追いか

けた。一階にいると思つたのに毅は階段の踊り場にいた。

そして、壁にかけてある大きな姿見を睨みつけているのだ。

「それがどうかしたの？俺かっこいいー、ってか」と最初に階段を昇りきつた伊鶴がからかった。

「いや違うよ」毅は少し怒つて言つた。「この鏡には噂があつてさ。この鏡を夜、2時ごろ覗き込むと、なにか恐ろしいものが見えるらしいんだ」

千央はそれを見た。しかし何の変哲もない普通の鏡である。ただし古く、木製の額縁はひらひらとした濃縁で、まるで昆布みたいだ。

「それって、すげ嘘くさいな」と公平。

「どこにでもあるんだね、そういう怪談話つて。私の学校の鏡は3時33分だって話があつたよ」と千央。「しかも、3月3日限定で」

アンノは言つた。「私の学校ではトイレに泣く女がいるんだって、でもそれ、多分生きている人だったと思うんだよね」

「一体、なにが出てくるんだろ。私見てみたいかも」と季生子。

「どうせ怒り狂つた雛人形とかだろ」と言つた後、公平はその光景を想像したようだ。少しして顔を歪め、呟いた。「かなり恐いな……」

急に真がシッと人差し指を立て、千央たちの会話を制した。「ねえ、何か物音がするよ」

「ちょっともう、変な事言わないでよ。さつきのことはもう謝つたじゃないの」と真琴は怒つて言つた。

「そうじゃないよ、本当に音がするんだってば……」真は鋭く囁いた。

……

本当だつた。それから数秒後に、上の階からスリッパをパタパタさせる音が聞こえてきたのだ。誰かが階段を下りてきているようだ。

「逃げる！」「誰かが言つた。

皆はそれを合図に階段を転がるように駆け下り、蜘蛛の子を散らすように散り散りになつて逃げた。千央は手近な部屋に飛び込んだ。

声を潜めてドアの影に張り付いていると、音の主はずりずり引くする音をたて、直に遠ざかっていった。

アンコはドアの隙間から外を覗いた。

「危ない危ない。さつきの校長だつたわ」「あの校長、怒り方がまじでギヤグやで」いきなり関西弁になつて伊鶴は言つた。

毅はすぐに鍵を閉め、誰も入つてこられないようにし、一息ついた。「あれ？ 真たちはどこに行つた？」

部屋に隠れたのは伊鶴、毅、アンコ、千央の4人だけだつたのだ。「さつき体育館に入るのがチラツと見えたよ」アンコは口を覆つた。「ねえ、何だらう？」」「すごく埃っぽいけど」

振り返ると、色々な形のフラスコとビーカーが山と置かれた黒のテーブルがあつた。青銅色の棚があり、内側にカーテンがひかれていた。その隙間から、色々な展示物が見えていた。全てがたっぷりと埃をかぶつていた。多分ここは理科準備室として使つているようだ。何やら分からぬホルマリン漬けや、耳のような色形をした大きな貝殻が置いてある。真綿にガラガラヘビのしつぽが恭しく包まれていて、これには何故かマラカスと書いてあつた。脇に説明書がついていて、「ガラガラヘビは一つ歳をとる」とにしつぽの節がふえていきます。このヘビは何歳か数えてみよう」とある。千央が数えてみると、「ごく小さいものも含めて九個だつた、つまりこのヘビは九歳ということになるわけだ。

そして、胎児の成長のようすを象つた模型が棚一段を占領している。着床後から臨月まで、全部で12体の模型だ。「ごく初期の赤ん坊は、肉の色をした、車に轢かれて頭の吹き飛んだ川エビや、特別下手な人が作つた餃子の中身のようであつた。それでもよく見ると、目の兆候のようなものや、背骨の節のようなものをそれぞれ所定の位置に見つけることができた。腕はまだなく、その場所にはマグマのような肉の凸凹があるのみだつた。どの部分が手になるのだろうかと千央は思った。

一番大きいのをよく見ると、外国製なのだろうが、ちょっと歐米

人風の顔立ちをしている。それはどこか慶幾に似ていた。彼は友達と遊びに行つてしまつたきりだ。

いきなりドアを強く叩く音がし、オイ開いてねえぞ、と声がした。かすれてはいたが、子供の声だった。その子も大人から隠れているのだろうか、そう思い千央は、開けてやろうと鍵に手をかけた。しかし横で毅は一瞬それを止めようとした。だが間に合わずドアは開いて、どやどやと男の子たちの集団が入ってきた。千央はその中に慶幾の姿を認めた。目で合図を送つたが、しかし彼はこちらを見て一瞬顔を歪めた、だがすぐ普段の顔に戻つた。

「あれ、お前ここで何してんの？ また泥棒か？」一人が毅に嘲るよう言つた。大きな体躯をした男の子で、脚が長かつた。

また？ 泥棒？ 千央は混乱した。

「いや、ただ見てただけだよ」 毅は低い声で答えた。

男の子はえりたち3人を面白くなさそうに見、嘲笑うように呟いた。それには千央たちへの冷笑も間違いなく含まれていた。「へえ。こいつらが新しい力モカ、天才占い師の孫ともあれば商売熱心なんだな、関心関心」 取り巻きたち数名が占い師が水晶を覗くような仕種をして冷やかし笑いをした。

千央は少し驚いた。毅の家の家業は、同級生の間で周知の事実らしいのだ（そういうことはあまり考えたことはなかつたが）。しかしそれでは色々と双方やりにくいだろうなと千央は思つた。

「俺、さつき体育館で見たけどもつといたぜ。だいたい8人はいたよな。なあ？」 言つたのは、慶幾の友達である。慶幾はウンと頷いた。

「そんなんじやないよ」 毅は笑つて言つた。

「お前の意見は聞いてないんだよ」 毅を見もせず、男の子は突き放すような調子で言つた。そして彼は大声で威嚇するように言つた。顔はこちらを見ていたが、敵意は確かに毅の方へ向かつていた。

君たちにはあらかじめ忠告しとく、他のやつにも伝える。こいつに

騙されるな。親切そうな顔して近づいてくるけど、ここにこの家は一家総出で詐欺してやがるからな」

「いきなり出てきてあんた何なのよ」アンコは負けじと猛り立て言った。

「だつてお前ら、あの頭のおかしいばあさんの密なんだろ?違つか?あのクソババアのアブラカタブラで病気が治るなら本当世話ねえんだけど。でもそいつは詐欺師だから関わるな。やることなすこと全部嘘つぱちだからな」

その通りかも、と千央は思った。脇で毅は息をしづらやうにしていた。

「たとえ今はよくても、そのうち金を根こそぎ持つていかれるぜ」彼はドスを利かせた声を出した。

千央は毅が反論するのを、やきもきしながら待っていた。しかし毅は何も言わず、ただ黙っていた。千央も同じだ。相手が中学生くらいに見える男の子であるということもあつたが、毅と親しくなつた今も、靈能者のことや仕事のことは好いていなかつたからだ。とあれ千央は、今公平がいてくれたらいいのにと強く思つた。口達者な彼なら上手い切り返しができるだろうから。

口達者といえば、慶幾はどちらにも加勢せず、手持ち無沙汰な感じで、終わるのをただ待つてゐるようだつた。

「あんた、言いがかりも大概にしなさいよ!! 毅、もう行こう。校長も遠くに行つちゃつたよ」アンコは毅の手を引いた。「嘘つき!」

「言いがかり、これは言いがかりだらうか。答えはわかつていたけども、千央は激しく自問した。

「おい待て」男の子は毅たちを引き留めた。「嘘つき!? 嘘つきだつて!? 僕をこいつと同類にするな。なら言ってやる。俺や家族もこいつら一家の犯罪被害者なんだからな」

ではあの子とその家族も元々信者だったのか。えりは興味を惹かれた、これは単なる言いがかりでも冷やかしでもなく、実際の被害者の訴えなのだ。毅は大きなため息をついた。それに刺激されたの

が、彼はさらりと声を荒げた。

「こいつら家族にうちの弟は殺されたんだよーー！」

「はあ、何言つてんの！？それ」アンコが反応した。アンコは毅を掴んでいた腕を緩めた。なんだかとんでもない話になってしまった。千央は一人を見比べた。

「殺してなんかないよ」ようやく毅は反論した。

「殺されたも同然だろ、お前の親父とばあさんにな

「そんなことない」毅の握った手が白かつた。

「なんなら警察に通報してもいいんだ。殺人罪には無理でも詐欺罪にはなるだろうからな」

「お前の弟が勝手に死んだのがいけないんだろう。そんなのまで人のせいにするなー！」毅は叫びかえす。

「なんだとお前ーー！」男の子は毅の首に手をかけた、千央たちも取り巻き連中も止める間がなかつた。しかし彼は顔を歪めてはいたが、手に力を入れるのは我慢しているようだつた。

毅は男の子の手首を掴み、うつ、と唸りをあげた。

正に一触即発の事態であつた。その時、机の上にあつたビーカーとバットの山が雪崩のように落ちてきた、伊鶴がその一つを慌てて受け止めた。しかし大半はそのまま床に落ち、ビーカーはほとんどが割れてしまつた。盆は大きな音を立てて転がつた。

その音で、千央たちの周りからは緊張の釀す独特な覆いが破られた。いきなり遠くの音がより鮮明に聞こえだした。皆はシーン黙つた。そして、雰囲気が変わっていくのがわかつた。周囲から人の動く気配がするのだ。明らかにこちらに近づいてくるようだ。まずい、どこかに逃げなければ。千央は慌てて周りを見渡すと、薄暗がりの中にもう一つ出口を見つけた。全員がそちらへ殺到した。

数分後、千央の背後で理科準備室の扉が開けられ、電気がついたのがわかつた。しかし明かりをつけた人物が見たものは、もぬけの

殻の室内と散乱したガラス類だけだったはずだ、外で雨に降られながら、千央は思ったのだった。そしてこんなことを考えていた。

“ 思い出してみると、毅は最初の辺りから変に馴れ馴れしいようだった。そのわけが今日わかつた、と思うよ。そういう性格なのかなと思っていたけど、違うみたい。毅本人も学校でいじめられていたから。それで私に親近感を持つたというわけなんだ。 ” がっかりな上に、誤解なのだから千央はかなり複雑な気分だった。

“ それにしても、殺しただなんて本当にひどい言いがかりだよ。毅もおかしなことでいじめられて可哀相になあ。それもこれもある奇妙な家業のせいだ。毅がいじめられているのも、今私たちがこんなに雨に打たれて寒がっているのも、全部あの妙ちきりんな商売のせいなんだよ。ああ、本当に憎つたらしい。あんなのさつさと滅んでしまえばいいのに。”

千央は心の中で拳骨を振り回していた。

隣から伊鶴のクシャミが連発して聞こえ、アンコは歯の根が合わないほど震えていた。風邪をひかなきやいいけど、千央は肩をすぼめ、強風に身を切らせて、体育館に向かいながら言った。

“ 毅にとつて今日は最悪の日に違ひないな。ヤギは死んだかもしれないし、私たちにいじめられていることはバレちゃうし、友達にも裏切られてさ。せめてゴッちが生きてりやいいんだけど” と

十、夏風邪

千央は服をひっかけないようにフェンスへのぼった。太陽の位置は際だつて高く、びしょ濡れに湿つた土地を乾かしていった。道ばたの咲き終わったアジサイは、時間をかけてをじっくりと天然のドライブラーに仕上げられた。とはいえ土を掘り返すと、中は黒く湿り氣を帯びた土が顔を出した。

あの足音が聞こえた直後、千央たちもいじめっ子たちも出口に殺到したが、素早いのも、地の利があつたのもあちら側であった。彼らは隣の理科室に出てしまうと、素早く扉を閉じ、内側から鍵をかけた。準備室側には鍵がついていなかつたので、千央たちは完全に閉じ込められた格好になつた。仕方がないので、千央たちは窓から外へ逃げた。そのようすを慶幾は困惑しきつた顔で見ていたが、結局あれきり、慶幾とは会つていない。あの日雨に降られたアンコと伊鶴は増田家に帰つた直後、ひどい風邪で倒れてしまつた。唯一近所に住んでいた慶幾はうつらないようにといつ配慮から、一時家に帰されたからだ。

そのため、このことを知つているのは千央だけであつたが、しかし、毅とその話は一切していなかつた。こちらから訪ねた方が親切かもとも考えた。けれども、千央は元来相談を受けたり共感するようなことが得意な性質ではないので、あちらから言つてくるまで、とりあえず聞くのは辞めておくことに決めた。心配したが、当の本人はとても元気であつた。「我が家には狐がいっぱいいるね」と面白そうに毅は言つ。

おそらく常に咳の音が聞こえてくる、この状況のことを言つたのだろう。まず伊鶴とアンコが熱を出し、次に幼い湖水が咳をするようになつた。そして世話をしていた園さんにもうつってしまった。

千央ははじめアンコたちは雨で体を冷やしたせいで風邪をひいたのだと思つていたが、湖水や園さんまでが熱を出したのを見ると、

元々夏風邪が流行っていたのかもしれないとも思えた。

これは案外重要なことであった。なぜなら慶幾たちの意地悪のせいで風邪をひいたわけではないとわかれれば、千央の恨みの気持ちも少しは薄らぐというものだからだ。

とにかく、ここ数日前から増田家では動けるのは千央たちだけになっていた。それで当然この家の家事は分担し皆でやることになつたのだ。この当然というのは毅が言つたことだが、彼は妙に張り切つていて、この非常事態の監督役を喜んで引き受けた。

千央は洗濯をやり、毅はサイズの合わないエプロンを着てまで掃除に精をだした。しかしやはりというべきか、部屋の角には取り切れなかつたほこりが溜まり、洗濯物は変にガサガサした仕上がりだつた。さらに干し方が悪いのかタオルは歪んだまま乾き元に戻らない、千央の洗つたシャツをきると皆なんだかみすぼらしい、よく見るとシャツはちりめん皺だらけであった。

毅は大きな掃除機がうまく扱えないようどつても苦労しているようすだった。掃除機がうまくついてこないと言い、来た道をいきつもどりつしていた。

目下一番の問題は食事をどうするかで、誰も「飯の炊き方さえ漠然としか知らなかつた。卵を焼いてみれば、洗うのが嫌になるほどフライパンに身がくつき、茹でればなぜか必ず割れ、レンジに入ればやつぱり爆発した（最後のは忠告したはずだが）。

さらに病人のためのおかゆを作ろうとしたら混ぜすぎて米粒が無くなり、のりのような代物が出来上がつた。公平はこの出来上がりを見て、幼稚園の時に使つたデンプンのりにそつくりだ、と言つた。結局、おかゆは作らなくてよかつたことが半時間後判明した。毅が仕込んだ炊飯器を開けると、水加減を間違えたらしく、見事なおかゆが炊きあがつていたからだ。毅は皆から非難とからかいをつけ、そのことでしばらく臍を曲げた。

仕方がないので缶詰の煮さんまとバラバラ事件のようになつた失敗玉子と一緒に食べた。缶詰も玉子もまづくなかったのだが、疲

労のためかついつい弱音が出た。

「卵さえまともに食べられないのか……、僕らそのつち飢え死してしまうよ」と真は悲観的に言った。

少し大袈裟だと千央は思った。毅は生で食えと豪気に言い張った。しかし、僕には生卵にアレルギーがあるのでそれは無理だ、と真は言い返した。

一方千央は内心うまい、うまいと思ひながらおかゆを食べた。おかゆは昔から千央の好物だつたからだ。何故かは分からぬが、母は千央が急け者であるからだと言ひ、噉むことさえ面倒臭がつてゐるのだ、と。

「このメニューじゃ明らかに野菜不足だわ。タンパク質過多よ」病床にいたアンコはタンパク質の多い食事は腎臓に悪いと言い張つた。「心臓に悪かろうが、頭に悪かろうが今食べるものはこれしかないんだから。とにかく黙つて食つて、力つける。それが黙つて食つうのをやめる」と公平はやり返した。

そんなこんなで自分達だけで食事作りをすることに降参した千央たちは、園さんに相談した。

園さんは咳と笑いをこらえつつ、メモを書いた。

「そうね。じゃ、少し遠いけれど、下のドラッグストアまでおつかいにいつてもらおうかな。これ、買つてこられる?」

そんなわけで、千央たちは近道である店の駐車場のフェンスを大きな袋を抱えて次々飛び越えた。これらにはペットボトルを幾本かと、冷却シートやパン、おかず等がたくさん入つていた。着地の時、レジ袋は勢いよく上下に跳ね揺れ、破れそうになり、千央は一瞬ヒヤリとした。

近道である山中の入口辺りで、かたつむりが強烈な日差しを避けて森の日陰に慌てて退散して行くのを千央は何匹か見た。台風の後の雨上がりは、彼らの天下だったに違ひなかつたが、しかし彼らの

天下ももう終わりを迎えたようだ。土に銀色に光つた筋がついていた。

一方、脚の早いアマガエル達は一足先に保護色をした葉っぱの下にすでに収まつていて、ふいに飛び出してきては皆をびっくりさせるのだった。

さらに道を下つて行くと、先の方に一車線がある、山にそつた緩やかなカーブが多分山頂までずっと続いている、まるで巻貝みたいな形をしていた。こちら側の道には川の下流があり、まだカフエオレ色の水が流れこんでいて、生木と土の匂いがした。心配された地滑りなどはおきなかつたが、まるですき鉄で梳かれたかのように、山全体の木々がこざつぱりとしている。

千央は、道路を挟んだ向かいにとても面白いものを見つけた。山に窓がついているのである。いや、実際はそう見えるだけだ。山の斜面は急でほぼ垂直にある、樹木や薦がかなり過密して生えているのだが、その中腹辺りに格子の窓がついている。山壁そのものが木に覆われた建物で、それに窓を設えているかのようだ。

毅にそれを言うと、いきなり窓に向かつて吠えはじめたので、千央はびっくりした。

「あそこにはね、馬鹿でかい犬をがいるよ」と毅は教えた。

毅は犬を呼ぶようにもう一度吠えたが応えはない。首を傾げ季生子は言った。

「おかしいな。いつもはこうやるといふのをこううりに吠え返してくるのに、あいつどうしたんだろう」「

「あそこの大はミルコつていいて、すぐ年寄りなんだ。だから歯は抜けで口の周りがダフダフになつてゐる。こんな風に」 毅は上唇を両手でつまみながら言つた。「昔は獵犬だつたんだつて」

「年寄りなら夏バテじゃないかな? うちのじいさん犬はエアコンを着けてやらないと夏はゴハンも食べない」と真。

「でも、あんなとこに檻を置くなんて不便じゃない? 危ないし、行くまでに落ちそう。大体どうやってあそこまで行くの?」

「少し昇った奥の方に家があるんだ。鷺崎って人の家がね」

その名前には聞き覚えがあつた。千央はしばらくの間記憶を巡つた、そして思い出した。鷺崎があの妙な格好の庭師のことであるとすることを。

「鷺崎って、あのいつも庭にいる人のことか?」公平も思い出したのか毅に聞いた。

「その人だよ」と毅は答えた。「下を見てよ。あそこにボードが置いてあるだろ。いつもあれに乗つて裏側までぐるりと周りこんで行つてるよ」

見下ろすと、橋の袂に公園にあるような青い手漕きボーディが着けてあり、対岸までロープが張つてあつた。

「なんでもまたこんな面倒臭いところに家を建てたのかな」

毅は笑つて答えた。

「最初はこんな面倒臭いところじやなかつたんだよ。道路が出来て道が新しくなつてから、行く道を変えざるを得なくなつた。確かに車で行くのには便利になつたんだけど、鷺崎はいつも歩きだからね。よっぽどこっちの方が速いんだつて」

千央は改めてそれを見上げた。山の斜面は、本当に伽話に出でくるお姫様が閉じ込められた城のように見える。檻は格子のついた窓なのだ。そこから首を出すのはしかし年寄りの犬、というのが中々面白いと千央は思つたのだった。

その話の最中、毅は油断のない草食動物のように始終きょろきょろしていた。無論、何かに狙われているわけではない。「ゴッちを探しているのである。

台風が完全に過ぎ去つた後、千央たちはあの崖下の秘密基地の場所に行つてみた。そこに生きたゴッちの姿はなく、また死んだゴッちの姿もなかつた。例の穴抜けの術で「ゴッちは逃げ去つていたのだ。千央は少なからずホッとした。そして、皆で実況見分の真似事をした。

真琴は「ゴッちを繋いでいたロープを持ち上げて驚いた声を出した。

ロープは綺麗な輪つかになつてゐる。

「この縄、繫ぎ田が解かれてないし、全然緩まつてもないね。本当に穴ぬけできるんだ」

「スマートゴート・ゴッチ

真はつぶやいた。

公平は言つ。

「ゴッチは雨が降り出す前か、その途中で逃げたみたいだね。止んだ後なら、足跡が残るはずだもの。こんな風に」

皆は足元に目をやつた。地面は雨でぬかるんでいるので、歩けば足がめり込み靴跡がくつきりとつくのだ。千央が周りを見ても、動物の蹄らしき物はなかつた。

「それにあれを見てよ」川原には石が綺麗に敷き詰められているが、それがあるラインを境にしてバラバラに乱れている。おそらくそこまで川の嵩が増えたのだなつ。それを見る限り、大して増水はしていなかつたらしい。

それらを合わせて考えた結果、ゴッチは「生きている」というわけになつたのだが、その姿を見るまでは完全に安心とはいえないかった。

もしかしたら川に落ちて流されたんじゃないのか、という不吉な意見が出たことを千央は思い出した、ここは山の川が最後に行き着くという。千央は川にかかる橋から水面を見下ろし、安堵した。そこに死体が浮いていたなら、やはりあのお腹は短命の暗示だつたのだな、と思うのだが、もちろんそこにゴッチの死体はなく、清い水が弓状のさざ波を作りながら流れてくるのみだった。

「ああ、やっぱりゴッチに会うのは何ヶ月か後まで待つしかないのかなあ」

毅は失望したように、ため息をついて言つた。

「私思うんだけど、ゴッチはまた落とし穴に嵌まつてやしない?」
と真琴。

「まさか、それはいくらなんでも……一度も落ちるか?」毅は疑い

の声を出した。しかしやがてひらめき、納得した顔に変わった。「いや、あいつ少し間が抜けているから、ありえるかもな」

季生子は笑つて言つた。

「そのへんはしっかり飼い主に似たのよねえ。うわっ、ちょっと！」

「よし、じゃ明日は落とし穴をまわってみよう」毅は季生子の首ねっこを掴み、元気よく歩き出した。

途中、牛乳屋の直売所で牛乳と小遣いでアイスを買い、食べながらしばらく歩いた。アイスはバニラの香料が入っていないらしく、普通の牛乳よりかよっぽど牛乳くさかった。

店との中間ごろのちょうどカーブを曲がった時、丸く整えられた生け垣に囲まれた家が見えてきた、そしてその脇には見覚えのある白黒の車両が留まっている。よく見るとそれはパトカーであつた。千央はパトカーに興味津々で近づいた。この家で何か事件が起つたのだろうか？

「何かあつたか聞いてくる」毅はコーンの紙を丸めてポケット入れ、白い砂が敷かれた私道に入つていった。

千央たちは入るわけにもいかないので、敷地と道路の間をなんとなくいつたり来たりして待つていた。家は静まりか千央、緊張感もない、どうやら大事件といえるようなことは起こつてないようだな、千央は思つた。

しばらくして毅が走つて戻ってきた。毅は随分興奮したようすで言つた。「泥棒が入つたんだってさ！…」

毅の話によると、この家は空き巣被害にあつたということだった。何を盗られたのだと聞くと、まだそれは分からぬ、とりあえず分かつてているのは、住人が避難所から帰つてみると留守中に家に誰かが侵入し、部屋を荒らした後があつた、ということだけだと言つ。「ええ、じゃ、台風で避難している時に泥棒に入られたつてこと？」

「うん。なんせ足跡が部屋中にべつたりついてたよ。あれ、後片付けが大変だうなあ」今日の主婦業経験のせいか、毅はとても所帯じみた視点で意見を言った。板の間のみならず、畳やマットレスにも侵入者の足跡がたっぷりな泥とともに白く残っていたらしいのだ。現場を実際に覗かせてもらつたことを、千央はとても羨ましく思った。

「鑑識の人気が指紋とか取つてた？あれ、アルミニウムの粉を使うらしいね」真が訪ねた。千央もサスペンスドラマで、耳かきの上に着いているポンポンのようなもので指紋を浮き上がらせているのを見たことがあった。

真の問いに毅は“それはわからない”と首を振つた。今は盗られたものがなにかを調べている最中だつたそうである。

「それにしても、皆が大変な思いをしてる時に泥棒に入るなんてとんでもないやつだな。……これが火事場泥棒ならぬ、水場泥棒つてやつかな」季生子は憤慨していたが、やがて一人笑いだした。

「勝手に家に入られるなんて、すぐ氣味が悪いだろうね」真琴はしかめ面で言った。

しかし千央は、暴風雨で大変なことになつている時に、大型テレビをふうふう言いながら運ぶ間抜けな泥棒の姿を想像し、不謹慎ながらも笑つてしまつた。しかしふと、千央は増田家にも泥棒が入つているかもしぬないという疑いを持ち、言つた。「毅の家には入つてないよね」

「まさか、そんな汚し屋に入られたんなら、とつくに誰かが気づいているはずだよ。うちが普段からとんでもなく汚いみたいじやないか」

「でもこのまま園さんの風邪が長引いたら、いざれそななるかもしないよ。私たちの家の事のスキルといったら……ねえ？」季生子は笑い、首を竦めた。

「……なあ、俺ら避難する時、戸締まりをちゃんとしてたっけ」公平はつぶやいた。彼は急に心配になつたようだ。

家に着くと、咳は前ほど聞こえてこず、患者たちは大分楽そうになっていた。毅が園さんに近所の家に泥棒が入ったという話をすると、園さんは険しい顔をした後、毅に家の貴重品をチェックをするように頼んでいた。

普通の家の貴重品は預金通帳や宝石だろうが、この家の盗まれて困るものとはなんだろう、と千央は考えた。毅は早速引き出しを開けて中身を確認していた。金品以外ではやはり、靈能者のカルテではなかろうかと千央は思うのだ。何人も個人情報が入っているし、おそらくもつとも他人に知られたら嬉しくない類いのものばかりだらう。最近の千央たちのものから、かなりたくさんあるはずだ。一体、何人分くらいになるのだろうか、千央は思った。

しばらく後、千央が籐椅子に長くなり、モカ・アイス（本日二個目の氷果）を食べて涼んでいると、面白いものを見つけたと言つて、毅が段ボール箱を抱えて持つてきた。中には、週刊誌やマンガ雑誌、料理本、などの古書の類がごちゃごちゃと入つていた。

その中に危険物取り扱いという本を見つけて千央はびっくりした。爆弾の作り方でも載つているのかと思ったが、それは燃料の取り扱う時に必要か資格の本なのだと、毅は教えた。

千央は箱のそこをさらつていて、古い雑誌をビニール紐でまとめて結わえてあるのを見つけた。表紙には会報とレタリングしてある。興味をそそられた千央は紐を解いてそれをバラした、一つの大きさは大体文庫本二冊分ほどで、厚さは1cmもなかつた。千央はそれをパラパラとめくつた。

まず、もくじには、

- ・あなたには世界の断末魔が聞こえるか？
- ・み・き・はコーナー「幽霊は結局のなにがしたいのか」
- ・音吉先生×やればできるの教え×ストラディバリの場合などという訳のわからない記事の題目が並んでいて、千央はかなり

圧倒されてしまった。その中でも特に目を惹かれたのは、「これで貴方も完ぺき パーフェクト・断食 基本法」という記事だ。なぜ惹かれたかというと、題名で唯一内容が予想できた、というただそれだけの理由であったのだが、しかしそく見ると、この断食方の効果として妄想病・便秘・鼻づまり・耳鳴り・がんが治つたと煽り文句が書いてあり、これを見た千央はさすがに目を疑つた。いやおそらく、このガンとかいうのは、千央の知つてゐる悪性腫瘍、癌ではなく、他の病気や症状の別の呼び方が多分ガンなのだと千央はそういう風に無理矢理納得した。たとえばこむら返りとか歯痛とかであるのだ。

もしくは、“がん”が治つた、ではなく“がんが”治つた、といふのが正しい読みなのかもしれない。おそらく“がんが”は発見されたばかりの新しい病気なのだ。そうだ、そうにちがいない。アフリカあたりで蚊を媒介にして猛威を振るいそうじゃないか。千央はここまで考えて、自分が国のコンゴとマラリアとを混同していたことに気がついた。さらに、この本の発行年は98年の秋であり、とても最近とはいえないのであった。

ただ確かことが二つある、と千央は思つた。この記者が妄想病とやらの罹患者であるということと、断食は妄想病にはまるで効き目がないということだ。

その他にこの冊子には、コラム（ダッラで脱魄）、歴史小話（川を海と勘違い、邪魔台国は朝鮮にあり）、そして手作りのコーナーなどがある。

そのコーナーでははじめての黒焼きという題でナスのへたの黒焼きの作り方が紹介されていた。これは歯磨き粉の代用になるそうで、千央はとても実用的であると思い、感心していた。

その他モノスゴイ、凄まじいものが列挙されている記事中の『あの町この店』という欄に増田ヒサノ という文字を見つけ、千央は目を見張つた。千央は増田ヒサノを知つていた。この人物、他でもない毅の祖母であり、と同時に靈能者のことである。

千央が素早く、しかし熱心にそれを読んでいると、伊鶴がキツチ
ンに入ってきた。皆はそれに気づいて、歓迎の声をあげた。伊鶴の
頭はいつもましてボウボウとし、寝巻きがわりのシャツにはたく
さんの皺がよっていたが、顔色はすっかりよくなり、咳もでていな
かつた。

伊鶴は白く乾燥した唇を、ペットボトル入りの飲み物で潤わして
いた。これは手作りのスポーツドリンクで、真琴が午前中に台所で
作っていたものだ。まず、500mlの水に庭から取ってきたレモ
ンの搾り汁と、白砂糖、塩を加え混ぜる。すると市販のスポーツ飲
料にとても似た味の清涼飲料水が出来上がる。伊鶴はそれを部活後
の野球少年のようにがぶがぶと飲んでいた。千央はその回復ぶりを
見て、とても嬉しく思つた。

「皆して、何読んでるの？」

伊鶴は椅子にどかりと腰掛け、こちらを覗き込んだ。

「マンガ、大昔の」真は言った。

「おお、ブルネリ」真琴は真面目な顔で言った。彼女は歌のしおり
を読んでいた。

千央は今しがた見つけた注目記事を、伊鶴に読んで聞かせた。

“特集『あの町この店』第16回「喫茶店“ひびき”」

柳町にある閑静な住宅地の一角にある赤れんがの煙突のような建
物、それが喫茶店「ひびき」だ。開店以来根強いファンに支えられ、
一日客が絶えることはない。

そんな忙しい店を切り盛りするのは、喫茶店オーナーの増田ヒサ
ノさんだ。増田さんは、32歳の時に一人の子供をつれて離婚、4
0歳の時に特技の占いと、コーヒーや軽食を提供するこの店を始め
た。常連客からはマダム・ヒサと呼ばれ、いつも穏やかな笑みをた
てている。しかしその軟らかな物腰とは裏腹に、その占いはとて

も辛口だといつ。

「ええ。娘からはいつもね、お客様にそんな失礼なこと言つてとても商売にならないんじやないのつて、心配されるんです。でもわざわざ遠くから来て下さる方も多くですから、私も伝え忘れがっては大変とついつい熱くなつてしまつて、遠方の方に何度も來てもらうというのは大変ですからね」

さりにスパイシーなカレーライスと数年前からはじめた、手作りの焼き菓子が人気で、最近急がしさは増すばかりだという。

「カレーパンやお菓子を買いに来てくださる方も多くいんですよ」と

増田さんは嬉しそうに顔をほころばせる。

とはいえて一人で店を切り盛りする急がしさに加え、現在70歳と高齢の身、閉店時間は数年前から夜9時から7時に早まつた。しかし、増田さんの意欲は尽きない。

「お店は体力が続くかぎり続けていきたいですね。何度も来てくださいのお客さんがたくさんありますし、まだまだたくさんの人にお会いしたいですからね」

今年で開店30周年を迎える「ひびき」、年々マダムと共にパワーアップしているようだ。

「よく見せて」毅が身を乗り出して言つた。「初めて見た、こんな

の」

「ねえこれつてもしかしてハルエさんじやない?」真琴は一緒に紹介されていた写真の一つを指差して誰にともなく聞いた。

それには店の内装と、若かりし日（とっても当時からおばあさんだが）の靈能者が写っている。店の内部は全体が栗の蜂蜜色をしたとても落ち着いた造りをしていた。バーのような対面式のカウンターの裏でエプロン姿のマダム・ヒサが笑つている。今ほど腰は曲がつてはいはず、さらに瞼も垂れ下がつてはいないのであまり面影がない。しかしこの顔どこかで見たことがある。

「違う。これは大おばあちゃんの若い頃の写真だよ」毅が答えた。

「そうだ。初めてのお尋ねの時に側にいた、おばさんこそつくりなのだった。では文中に出でくる娘というのが、そのハルエさんなのだろう。『言われてみれば確かに今のハルエさんよりも老けてる感じがしてゐるわ。ならこれ、大分昔の本になるね。それにしても本当に似てる。瓜二つてくらい』眞琴は会報を裏返してまじまじと見た。

「そりや親子だもの。似てて当たり前だよ」当然だ、とこう顔で毅は言った。

「昔は喫茶店で占いをやってたんだね」と、眞。

「そうだよ、店は年取つたからやめちゃつたけどね。で、今は占いだけになつた」

「占いで食つてウン十年か。ものすごい来歴だな」公平が言った。
「いや、はじめのうちはお客さんとの話しのネタつて感じでおまけで観てあげていたんだつてさ。けどカレーパンが美味しいって近所で評判になつて、それから少しずつ占い田端のお客も増えていつたらしいよ

もしかして眞の靈能者は単なる占い好きのおばさんだつたのだろうか？千央はそれを聞いて思つた。

記事は合計三枚の写真と一緒に紹介されていた。さつきの写真的に、「みすず」の外観が写つたものとカレーライスとカレーパンの写真があつた。記事に書いてあるとおり、店はとても変わつた建物であつた。まるで円柱のサイロみたいな見た目で木の洞のように丸い窓が一つ開いていた。鮮やかな赤いれんがの壁はさぞ田立つただろう。名物だといふカレーも中々美味しそうだ。しかし人生つてわからないものだな。今靈能者が占いをやつているのもこのパンで人気がでたからなのだ。畜生カレーパンめ、余計なことを……、千央はそれ（カレーパン）を恨めしく思つた。写真の下には小さく注釈がついている。

カルダモン・クミン・クローブなどの数種類のオリジナルスパイ

スを使った『カレーライス』、一皿600円。同じルーを包んだ焼かない『カレーパン』は一つ100円。（中辛と辛口が選べ、パンは持ち帰り可）

それを読んで千央は考えた。もしかしてこれは揚げないの写植間違えじやなからうか、焼かなかつたら生のままだし、蒸すのだろうか？それならもはや、カレーパンじゃなくカレーまんになつてしまふけど、と。

「買い物ついでに占つて貰おうなんて、変わつてるよね」真琴が何気なく言った。

「でも、その時は占いが流行つてたんだつてよ。」

そう言つて毅が箱から取り出したるは、一冊の古本だつた。ハードカバーの表装で『占いパワーでマジックハント』という表題が書いてあり、皆はそれを廻し読みした。内容はティーン向けの占い本で、恋愛関係の占いとかおまじないがたくさん載つていた。一ヶ月間かけた願掛けメゾットの最終章には、「ライバルから気になる彼をダッシュしちゃうわよ！…」とか「お気に入りの彼のハートをハントイング」などが丸っこい字体で書いてある。

これら文句が真と伊鶴に大ウケで、二人は腹を抱えて笑い転げた。それを見ているうちに、他の子たちもたまらず吹き出した。著者の名前はR・レティシアという女人で、顔は普通の日本人に見えた。この著者も数十年の時を経て、この本がこんなに笑いをさらうとは思つていなかつただろうな、と千央は噎せながら考えた。

全員の笑いの発作が一段落してから、真琴は落ち着いた声を出そくと極力努めつつ聞いた。しかしながら肩がひくついている。

「でもさ……。流行つてたつていつても、この手相占いとかタロット占いとか……あとは多分風水とかでしょ？」この占いとは全然種類が違うじゃん

毅もそれに応えようと息を詰めて言った。

「ぐふつ！…いやいや、昔はそういうやり方で占いをしてたんだつ

てよ」毅の言葉に千央は少なからず衝撃を受けた。毅は続けた。

「だつて食事のためにきてる普通のお客の前でお祓いをはじめたりしたら、どうなると思う?その客一度とこないよ」

確かにサンディッシュ食べる隣で、憑いたの離れただの話をされたら、いくら占いブームとはいえ、もう行きたくなくなるだらつと千央も思う。

「じゃあ、なんで今はこんな風になつたの?」

「推測だけど……、雰囲気が出るからじゃないのかな。普通に占うよりは」

「私……、てつきりどこかの寺や神社に縁でもあるのかと思つてた」何人かが同意するように頷いた。

「さらに言つと」毅はまだ喋る。「その靈を擬人化するよつになつたのは、本当にここ最近のことだよ。確か季生子が絵を描き出してからだから、ほんの何年か前だね」

公平がふうん、と言つた。

千央は思いがけない歴史にしばしの間考えこんだ。では集客のために、より見栄えに重点を置いた占いの仕方に変わつていつたのか。それではただ靈媒ショーではないか。そのために毎回毎回罵りを受けるこちら側は堪らない。

真は混乱し、複雑な表情を浮かべていた。千央は手元にある会報を見た。何気なく手に取つたこの小さな会報は、思つていたよりも重要な役目を果たしたのかも知れない。他の子が靈能者に、より懷疑を抱く切つ掛けとなつたのだから。しかし、このことはペラペラ喋つたりしちゃいけなかつたかもよ、毅、と千央は思つた。

「その占いはよく当たつたの?」

「さあね。そこまで詳しくは知らないな
毅はすぐない。

パチパチ、と音がしてそちらの方を向くと、園さんがエプロンを着けながら木珠のれんをぐぐり、キッチンに入つてきていた。園さんは言つた。

「台所を占領するなら、じゃが芋と人参の皮むき、誰か手伝つてくれない？」

「起きちゃつていいんですか。まだ寝てた方が」公平は聞いた。

「熱はないし、咳も止まつたからもう動いても大丈夫よ」

今度は真琴が聞いた。「アンコと湖水の具合はどうです?」「杏子ちゃんも湖水ちゃんも熱は下がつたわ。湖水ちゃんはまだ少し咳が出るけど、大分楽になつたみたいで、一人ともぐっすり寝てるわ。薬が効いたのね。あつ、先生ありがとうございました」

キッチンのドア枠の向こうを白い物体が横切つた。千央はまるでお化けだと思ったが、しかしその影は白衣を着た年寄りのお医者だつた。先生は園さんに挨拶して帰つていつた。千央はそれを見てふと、懐かしい思いにかられた。あのお医者の容貌が祖父にちょっと似ていたからだ。千央の祖父は白髪で口の周りにぐるつと白鬚を生やし、いつもびっくりしたような目をしていた。おじいは、元気にしてるだろうか? 夏バテとかしていいだろうか? “どうしたの、ぼうつとして” 真琴に言われ千央はハッとした。

「あの、園さん。今日の夕ご飯、まさかカレー……、じゃないですね」千央は訪ねた。

「ううん、今日は肉じゃがにしようかと思つて。病み上がりにカレーはちよつとねえ……」そう言って園さんは片手で頬にふれ、笑つた。「でも食べたいのなら明日作つてあげる。ちょうど今日お隣りの水野さんから『ゴーヤをおすすめ分けで貰つたから、それで……』

「いえあの、ちょっと聞いてみただけです」千央は慌てて立ち上がりエプロンを借りた。

「それと季生子はどこ」園さんは皆に聞いた。

「今、部屋で絵を描いてますよ」真琴は包丁で一階を指して言った。千央は台所に立ち、肉じゃがの材料を切つた。玉ねぎは上手く切れたが、しかしども人参は大きすぎ、じゃが芋は小さすぎる気がした。切つている時、後ろから伊鶴の声が聞こえてきた。

「ね、そういうば慶幾はどこいるの?」

続いて公平の声。

「家に帰ったよ。お前らが風邪ひいちゃつたから、つづらないようについて」

「ああね、と伊鶴は納得したようだった。

「そういえば。なんである時、あんなにずぶ濡れになっちゃってたんだ？遊んでたのか？」

「ううん、違うよ。あれから後、偶然居合わせた毅の友達とけんかになつてさ。それで外に逃げるしか道がなかつたんだよ」

千央たちが体育館にずぶ濡れで帰ってきた時にもそれを聞かれたのだけど、全員震えてそれどころではなく、あああとかううううとかあそらく喋らなかつたと思う。

「まったく、お前はいつもしょつがない奴だな。風邪ひいたのも自業自得だ。後で園さんたちに謝つとけよ」

「はじめたのは俺じゃない。毅がその友達たちとモメたんだよ！..」

それは失礼しました、と公平は謝つた。千央はまずい流れになつてきたと焦り、思った。ほらほら、毅がつまらなそうな顔をしてる、お願ひだから伊鶴は空氣を読んで黙つてくれと。しかしぬる瞬間、伊鶴は思いがけないことを言つたのでその感情や表情はすぐさま消え去つた。

「でも、慶幾がうまいことやつたおかげで逃げられたんだよね」

「へえ、どうやつて？」と、真。

「机にあつたビーカーを一気にひっくり返して、敵の気をそらせたんだ。ものす」と音がしてや」

「へええ」千央は驚き半分、といつた声を出した。これはすばらしい朗報だった。では、慶幾は完全に毅を裏切つていたわけではなかつたのか。

「あれ、千央は見てなかつたの？あんなに近くにいたのにさ。大失敗したテープルクロス引きみたいだつたね。この場合はそれでよかつたんだけど」

「全然気がつかなかつた」

千央は頭の中でつぶやいた。だつて、あの時毅は巨大な男の子に首を掴まれ、持ち上げられようとしてたんだから。とても他のことに注意を払ってなんかいられなかつた。それに男の子と毅の体格差と言つたら！！小鹿とバイソン並の違いがあつた。

「でも惜しいことしたな。そんな面白そうな場面見逃すなんてさ」千央は毅を見下ろし、我ながら偉そうだとおもいながら言つた。「毅も見たかったでしょ」

なんでこっちを見るんだ。やめろよとばかりに、毅は田茶苦茶嫌そうな表情と目になつた。しかし毅はやがて、渋々だけれど、まあそうだねと頷いたのだった。

十一、帰り道

本当にそのとおりだ。千央は歯を磨きつつ、三浦プロパン（株）のカレンダーを見て思つた。その時隣に毅がやつてきて、身支度途中の千央とアンコに早くするよとに急かした。

このカレンダーには毎日一つ、短い戒めや教訓、花ことばなどが載つてゐる、8月の挿絵に描いてあるのは待宵草という花で、花ことばは“温和”と“協調”。今日の言葉は“健康こそ人生の糧である”だった。“バランスの良い食事・適度な運動・十分な睡眠”、そのとおり、特に睡眠は大切だ。しかし今日はゴッちを山まで探しに行く計画のため、早起きされられたせいで、千央は十分に寝られなかつた。その計画とは落とし穴箇所に皆で手分けして向かい、その道の途中や穴にゴッちがないかを調べてくるといふものだつた。

千央はあぐびをかみ殺して、口から泡を出し青色のコップに水を汲み、口を濯いだ。増田家の水道水はどうしてか、森林の匂いがある。二人は顔を洗い、タオルで拭いた。洗面台の蛇口は水垢の鎧に被われて真っ白に濁つてゐる。ゆつくり顔を上げると毅は予想通り仏頂面であつた。

「ねえ、何で一人ともわざわざ鈍くやるのさ」

毅の問いに、アンコは飄々として答えた。

「それは毅が慶幾を迎えて行くつて約束しないのがいけないんじやないの」順調に回復したアンコは昨日の伊鶴の目撃話を聞いて感動し、すっかり慶幾を見直したようだつた。

「気取つて何だかいけ好かないと思つてたけど、案外いいやつだつたんだね」とアンコは言つた。

「そんな風に思つてたのかよ」と毅は小声で言つた。「でも誘つても無駄さ。どうせ断るよ、あいつ。汚れる仕事は嫌いなんだから」

「あれ。でも、ゴッちを助けた時は普通に手伝つてたよね」千央は

言つた。

毅はそれを無視した。「あ。それに、あいつの家すぐ遠いし。今はゴツチ探しで忙しいから、そんな暇ないよ」

「じゃあ、自転車で行けばいいじゃないの」アンコはこれで解決と言つた風に答え、千央はそうだねと頷いた。

毅は笑い出した。

「そんなにたくさん自転車うちにはないよ……」

「別に大人数で行く必要ないでしょ。毅だけで行つてくれればいいじやん」きつぱりとアンコはそう言い放ち、それで毅の笑いは一刀両断された。

……。

結局、増田家に自転車は三台しかなかつた。なので他の子たちには先にゴツチを探しに行つてもらうことにして、千央、毅、アンコの三人はそれに乗り慶幾の家に向かつて、山道を走つていた。

「着いたら何て言つて誘えればいいんだよ」毅はブルーシルバーの自転車を漕ぎながら大声で言つた。一行は坂道を下り、耳元を切る風の音がうるさかつた。

「普通に言えばいいんじゃない？ヨシク、一緒に遊ぼうぜ……みたいな」アンコは薄いオレンジ色の自転車に乗つて叫んだ。

「そんな変な言い方したくないよ。あとそのあだ名で呼ぶのは止めてくれ、慶幾をそう呼ぶのはあいつらだけだよ」

「えー、格好いいのになあ」と、アンコは惜しそうだ。

千央はパープルのママチャリを漕ぎながら考えた。そもそも毅と慶幾が直接喧嘩をしたわけではないのに、どうしてこんなにもこじれたのか、と。大体状況によつて向こうに無言でレンタルされていく、この変な状態はなんなんだ……。建て前上何か義理でもあるのだろうか……？なんかとても奇妙で面倒臭い関係だ。

三人は自転車で十分程走つた後、慶幾の家に到着した。場所は殆

ど山のふもとで、木造家屋がいくつも並んだ通りにあった。木の標札には黒く“平岡慶蔵”と彫つてある。

毅は音符のマークがついた灰色のボタンを押した、まずピーン…、と鳴り、人差し指を離すと… ポーンと鳴つた。千央たちはしばらく無言で突つ立つていた。しゃんしゃんしゃん… というクマゼミの鳴き声が周りから聞こえてきた。千央は鳴いているセミの声がなんとなく山と違つていてことに気がついた。ここで聞くセミの声はとても騒々しい。山のセミの鳴き声は森が吸収しているのか、これよりずっとソフトだったのだ。

玄関の戸は、霜柱模様の磨りガラスを銅色の格子が挟むようにして出来ていた。その戸が急に奮えだしたかと思うと、カラリカラリと軽い音がし、じれつといぐらいやつくり開いた。そしてすき間から恐る恐るといった風にナマコ形をした慶幾の目が覗いた。と、千央にはそう見えたのが、しかし彼にしては振る舞いが少しおかしいし、目の位置が明らかに低すぎて、ちょっと変だと気づいた。

「ア、麻ちゃん。慶幾いる？」毅が明るく声をかけた。

「居るよ、でも今から従兄弟たちと一緒にご飯食べに行くなつて」 麻ちゃんは、本当に幼い声で言つた。

「あー、そんならいいや。また来るから」 毅は一瞬引きかけた。しかし奥の方から慶幾の声したので、毅も觀念したようだつた。“慶幾、お客だよ” “誰？” “キャンくん”

次に玄関に下りる物音がして、戸が完全に開かれた。廊下には大きな目玉のような一枚板の衝立が見えた。その横を麻ちゃんがピコピコと歩き奥の部屋に戻つて行つた。

慶幾は後ろ手で戸を閉め、アンコに聞いた。

「風邪はもう治つたの？」

「うん。もう完全に大丈夫。昨日治つたの」 アンコは愛想よく言った。「ねえ、あれ慶幾の妹？ 可愛いね。それにすごく目が似てるね」 慶幾は笑つて否定した。「いや、妹じゃないし。それに別に可愛くもないけどね。……で、何か用？」

よし出番だ、毅。千央とアンコは黙つて毅が発言するのを待つたが、毅は黙つたまま何も言わない。仕様がないので、千央がことの次第を話した。慶幾は呆れた声の合いの手を入れながら聞いていた。ところで、演技だかは分からぬが、話の最中に毅がどんどん首をうなだれはじめ、それを見ていたアンコが笑いをこらえていた。千央は両方に眞面目にやつてくれ、と思ったが、しかしこれが思ひがけない効果をもたらしたようだ。

「ふーん、なんか。深刻っぽいね……」アンコのようすには全然気がつかず、毅をじつと観察しながら慶幾は言った。

「そうなの！！」勢いづいて、アンコは言った。これは誰が見ても演技過剰だ。「助けが遅れたら死んじゃうかもしない！！」

アンコは慶幾の肩を持つて揺さぶつた。慶幾は壁にぶつかりそうになり、悲鳴をあげるようになってしまった。

「分かつた！ 分かつた。協力するよー！」

毅はそれを聞いて、ひそかにニヤッと笑つた。それを叩撃した千央は、さつきの落ち込んだ姿は演技だったのか、と何となく悟つた。慶幾が自転車を取りに行くといふので、三人はそれについて行つた。母屋の奥に自転車置き場がある。千央はふと、さつき会つた女子に言われたことを思い出して聞いた。

「ねえ そういうば、妹さんに親戚とご飯食べに行くつて聞いたけど、よかつたの？」「いいよ。どうせまたうどんに決まつてる。それとあれば妹じやないから」慶幾が話すところによると、近所で親戚がうどん屋を開いているらしい。それなりに美味しいが、いい加減うどんは飽きたそうだ。

「今日はカレーだよね」と毅は千央に聞き、「でも、ゴーヤ入りだよ」と、千央は答え、慶幾は「そりや、マズそつだ」と顔をしかめて言った。

それから、四台の自転車は慶幾の家を出発し、山道へ向かつた。行きと違つて、帰りは上り坂であつた。

帰り道の途中。千央たちは昨日「コッチャや年寄り犬ミルコ」の話をした橋に差し掛かった。あつ！急に毅が大声を出してブレーキをかけて、自転車を乗り捨てた。それで後続の三台も次々に停まった。

「どうしたの？」千央は毅に呼びかけた。

「ケガでもした？」アンコは慌てて駆け寄り、毅の足を見た。

「いや、大丈夫だよ」毅は絶壁になつた山肌を指差して言った。「僕あの向こうにも落とし穴を二つ作つてたのを思い出したんだよ」「ついでだから僕たちで見に行こう、わざわざまたこっちに来るのも手間だしさ」

確かにそうだが、ここからあそこに行くのも、幾分大変そうに思える。

「別にいいけど。あそこまでどうやって行くつもりなの？」当然の疑問だ、という風にアンコは聞いた。

「あのボートを借りたらいい。作る時もそうしたし」当然の答えだ、という感じで毅は山に指して、いた指を橋の下に移動させた。そこには青い一隻のボートが波に揺られて浮かんでいる。庭師の鷺崎さんのボートだ。

「よつしや、なら行こう」慶幾は川に向かうために、森に入ろうとした。

「ちょっと待つて」千央は引き止めた。「自転車を隠しておこう、山道に四台も自転車が放つてあつたら、何かあつたのかと思われるよ」千央は対向車の運転手と何度も目があつたことに気づいていたのだ。

さて、皆は自転車を森に移し、橋のたもとまで下りていった。

「これ毅の家のボートなの？」アンコはボートに乗り込みながら聞いた。

“違うよ”と毅は首を振つた。アンコはえ、といつ顔になつた。

「勝手に使つたりして、怒られない？」

「鷺崎が帰つてくる前に、元のところに戻して置けばバレないって

毅は樂観的に言つた。

ボートは上から見たよりも小さく、四人が乗りこむには大分窮屈に思えた。しかしやがて全員を乗せ、ボートは岸を離れた。慶幾が右側を漕ぎ、毅が左側を漕いだ。ボートはときおり左右に傾き、周り道をしながらも、ゆっくりと対岸へと進んで行つた。千央は川の水を掬い、匂いを嗅いだ。アンコが船の先に座り、はつらつと先導をした。

川の中程まで進み、例の檻にかなり近づいてきたので、千央はミルコの姿が見えないかと気になり、中をじっとよく見ていた。檻は40メートルくらい上にあり、下から仰ぎ見ると内部が植物の侵攻を受けていることが窺えた、千央はその中に白い毛の生えた生き物がいるのがちらと見えた。

ねえ、と千央は聞いた。

「ミルコって白い犬だからミルコなの？」

「いや、ボクサーの雑種だから基本的には茶色っぽいはずだよ。でも年取つて最近白髪は増えたかもね。なんで？」

「変だな。だつて、さつき檻の中に白い生き物がいたよ」

千央が言うと、三人も格子の窓を見た。

「何も見えないよ。気のせいじゃないの？」

「絶対何かいたつて、さつきまで見えてたもの」千央はやつきになつた。

「そんな短期間で急に真っ白になるなんて、おかしいよ。この前見た時は確かに茶色だつたぞ」毅は目を細めた。

「おい、もしかしてミルコはもう死んじゃつてて、今は別の犬が入つているのかもよ」慶幾が言つた。

この不吉な推測にそんなあと毅は不安そうに言つた。

「じゃあ……、多分見間違えたんだろ。知らないよ俺は」

慶幾はさつさと船を漕ぐのを再開した。

空の上からは、鳥の鳴き声とバー、バーという変な声が聞こえてきて、千央は首を傾げた。

数分後、陸にあがつた一同は、まず一つ目の落とし穴のところへ行つた、場所はあの米岩の側である。千央たちは中を覗きこんだが、ゴッチはおらず黒い穴がぽつかり口を開けているのみだった。

「そもそもゴッチがこんな遠くに来るわけがないんだよ」慶幾は言った。

まあ、実際そうなのだ。船を使わずにこの山に来るには、川の周囲をぐるりと遠回りしてこなくてはならない。それにわざわざ危険な道路を渡る理由など、ゴッチにはないだろうし。

「で、もう一つはどこにあるの？」アンコは訊ねた。

「もつと上の方だよ」毅が心底後悔しているように言った。

「なら鷺崎の家の近くを通るな。じゃあ、マリー・アントワネット様に会いに行けるな」

「マリー・アントワネット? なにそれ?」

「ミル『』のこと」慶幾は死刑直前、白髪になつたフランスの女王マリー・アントワネットとミル『』とを重ね合わせて言つてているのだ。」「もう別の犬かもしれないけど」

「お前な……」毅は少々怒つたように言つた。

目的の場所は山の中腹あたりにあつた。樹木がすき間なく生え、葉や枝が分厚く重なり合つていて、その形はまるでドームのように見えて、まるで家全体が卵の殻に覆われているようだ。

その中は六歳のように一段暗くなつており、姿は見えないので動物の気配や鳥の声が絶えずしていた。少し不気味だったが、なぜか守られてるような感じもするところだった。千央は深呼吸して周囲の湿気を帶びた冷たい空気を吸つた。

毅は全く躊躇せず、中についた小さな家を横切り、向こう側へずんずん進み、奥にあつた道へ入つて行つた。慶幾・アンコ・千央の三人もそれの後に続いた。

中はまるで密林のようだつた。木のすき間はモジヤモジヤに絡まつた薦とたくさんのがれ葉で埋まり、一番奥の場所に大きな鉄柵が

あるのが見えた。足元にまで草が伸びきり、足場が悪く、皆歩くのもとても苦労していた。

千央がこれで何度目か、と思いながら足に絡まつた薦を毒づきながら解いていた時、毅が急に「わあっ！」と声を出すと、草むらを一足で飛び越え、ダーツと檻の方へ走つて行つてしまつた。

千央たちはそれを大急ぎで追いかけた。毅は両手で檻の柵を持つて、中の物を凝視している。なにやらただならぬ不吉な気配がしていた。毅はびっくり顔で振り向き、こちらを見て口を開いたり、閉じたりパクパクさせた。

千央は、毅の肩越しに恐る恐る檻の中を覗き込んだ。中には、……。

「ゴッチ！？」アンコが大声をあげた。

「うああっ！」慶幾が素つ頓狂な声を出した。

檻の中には白い大きな牝山羊、すなわちゴッチがいた。ゴッチは元気そうにメエメエ鳴き、毅の手の平にぐいぐいと鼻面を押し付けた。毅は感動して泣いていた。

「ほらね。言つたでしょう！」千央は勝ち誇つていつた。下の川から見えた白い物の正体は他でもない、ゴッチだつたのだ。

「なんでこんなところに入つてるんだろ？」ゴッチの入つている檻をまじまじと見ながら、アンコは言つた。

ゴッチは千央たちから顔を背け、格子の間から飛び出た葉を食みはじめた。思えば案外この場所はゴッチにとって居心地がよかつたかもしけない。この檻はほぼ正方形をしていて、高さは千央たちより少し大きいくらいだった。周りはたくさんの植物に覆われ、ピンクの洗面器には水がたっぷり満たされているし、とりあえず食うには困らない。お菓子の家とはいかないまでも、食料庫に住んでいるような感じだろう。それに洒落た窓もある。千央は奥の方に目をやつた、木の葉の間からは真っ青な空が見え、さつき千央たちが渡つてきた川や連なつた山脈が望めた。

「鷺崎がゴッチを見つけて捕まえててくれたんじゃないかな」早速

毅はガチャガチャやかましい音をたて、錠を外そうとしていた。

「ああもつ、うるせえな！！」慶幾は叫んだ。

「だつて、開かないんだよ」毅は怒ったように言った。錠は檻同様、

金属製の堅牢なもので、いくら揺らしてもそれそうにない。

「これ鷺崎のものなんだろ、なら鍵も持つてるだろ？から、言つて開けてもらえばいいじゃん」慶幾は腕にはめたデジタル時計を見て言つた。『もう昼飯の時間だから毅の家にいるかも知れないから、電話してみよう』

もうそんな時間がと思い、千央は急激にお腹が減ってきた。

「でも電話するってどうやるの？誰も携帯電話なんか持つてないよ」

アン口は反論した。

「あつ……？」慶幾はやつぱりダメか、という顔になつた。

「いや、電話ならあるよ」毅はなにやら思いついたように言つた。

他の三人は毅の顔を見た。

「分からぬい？鷺崎の家に電話があるはずだろ、それを借りようぜ」そう言つて毅は、第一級のたぐみ顔になつた。

鷺崎さんの家は木造の平屋で、建ててから随分と時間が経つているように見えた。何しろ家壁や柱が屋根瓦と同じ黒色をしていた。格子柵のついた出窓の隣からは傘付きの煙突が突き出ていて、千央はこれは一体何に使うものだろうかと思つた。

まず、毅は玄関戸を開けようとしたが、やはり鍵が閉まっていたようで、開かなかつた。次に毅は玄関マットや植木鉢の下を探しあじめた。どちらも鍵の隠す所としてよく知られた場所だ。慶幾は郵便ポストを開いていた。

「なあ、これつて道徳的な問題がないか？」鍵がかちりと音をたてて開いた時、慶幾は聞いた。

「問題もなにも、慶幾がこの鍵を見つけたんじゃない。功労者くん」毅は意気揚揚、引き戸を開けながら言つた。この鍵は慶幾がポストの扉を開けた途端、そこからポトリと落ちてきたものだつたの

だ。「単純な鷺崎に感謝だな、うん」

「君には良心というのがでんで欠落してゐるよ」慶幾はぶつくさ言いながら、毅に続いて玄関に入つていった。

家中は外同様薄暗く、そして湿つた空気が流れていった。側にあつた靴箱には、白いレースのクロスが掛けあり、その上には大小さまざまなかたちの木彫り人形があつた。ねずみ、ウシ、馬、うさぎ、猿、トラ、犬など……、全部で12体ある。これは干支の動物たちに間違いない、と千央は思った。

毅は早速、その靴箱の脇にあつたサイドテーブルの上のコードレスフォンを取り上げ、ボタンを押した。

「あ、もしもし? 水野さん?……今鷺崎さんちにいます。はい、もうすぐ帰ります。あの、公平たちはもづ帰つてます? ジャ、代わつてください……はい」

「公平? あー、ゴッち見つかつたよ。鷺崎の家にいた、うん。知らないけど、なんかミル口の檻に入つてやがんの。うん。で、それでは、鷺崎に檻の鍵がどこにあるか聞きたいから代わつてくれない? え、まだそつち来てない? あ、そう。なら一や。うん。じゃ一ね、バイバイ」

毅は電話を切り、ため息をついた。

「鷺崎はご飯食べに来てないって」

「そう。なら、また出直すしかないね」

千央は言つた。「あれ、そういうばアンコ?」

玄関にアンコの姿はなかつた。ほどなくして、外から犬の吠える声が聞こえてきた、注意して聞くと人の喋り声も。千央たちが表に出ると、大木の下にアンコと鷺崎さんがいた。側には引き綱に繋がれた茶色い犬があり、アンコの足首にしがみつくようにして寝そべつっていた。あれがミル口だと千央はすぐに分かつた。ミル口は巨大な腹を大きく波打たせ荒々しく息をしていた、恐ろしいぎざぎざの歯が並んだ口は閉じると大きく曲がり“へ”の形になつた。しかし、その目は黒糖の飴がけのように真つ黒で、つやつや光り、親しげで

なんとなく頼りがいがありそうにも見えた。

毅が駆けつけるとミル口はよし、存分に撫でるといつぱり

りと腹を出した。毅はわしわし腹を搔いて、その通りにした。

「皆じうしたの？」鷺崎さんは言つた。鷺崎さんはいつも黄色い麦藁帽をかぶっている、それを持ち上げた。口元を見ると、前歯が数本欠けていた。

毅は鷺崎さんを見上げて話した。避難所に行く時、ゴッチをよりによつて川の側に繋いだままなのを思い出したことや、台風後行つてみるとゴッチの姿はなかつたこと、もしかしたら以前嵌まつてしまつた落とし穴にまたかかつてやしないかと見てまわつていて、その途中で鷺崎さんの家の檻にゴッチが入つているのを見つけたといふことなどを。鷺崎さんはふんふんと相槌をうちながら聞いていた。

「ああ、ゴッチはずつとうちにいたんだよ。ボクが台風の来た日、あすこにいたゴッチを見つけて、放つておいたらかわいそうだと思つて……。君たちずっと探してただね。ごめんね」

毅は笑つた。「いえ、助かりました」そして、感謝の言葉を言つた。「預かってくれて、ありがとうございました」

「それで、あの、ゴッチをうちに連れて帰りたいんですけど」毅は急に真面目な表情になつて言つた。

「いいよ」鷺崎さんはあつさり答えた。「それで、あのねえ。……落とし穴つて何なの？」

「イノシシ捕獲用に掘つた穴です」慶幾が言つた。

「前におじさんにに昔大きなイノシシがいたつて聞いたから、捕まえようと思つて皆で作つたんです。それにゴッチが嵌まつちゃつたんですよ」

「ふーん、そうなの。なら僕も落ちないよう、注意しないと」鷺崎さんはのんびりと言つた。

「それで、肝心のイノシシは捕まえられたの？」

千央たち四人は揃つて首を振つた。

「いいえ全然でした。捕れたのはゴッチだけです」

「あらら。それは残念、無念」と言い、鷺崎さんは体を反らし、笑つた。

その後、鷺崎さんは家の奥から鍵を探してきて（千央たちが勝手に入つたことには気付いてないようだつた）、櫻を開け、「ゴッちを外に出してくれた。それから山を下つていき、四人と一匹を一グル一匹に分け、向こう岸まで送つてくれた。一度目に鷺崎さんがボートに乗り込んだ時、

「あれ？今日はご飯食べに来ないんですか？」とアンコは言つた。
鷺崎さんは「今日は休みでしよう。だから食べにはいかないよ」と答えた。千央は今日が日曜日だつたところにはじめて気がついた。

「でも、せつかくだから食べにきたら？」毅はそう言って誘つた。周りで皆はそうそうと頷いた。

「もう食べちゃつたから……」残念そうに言い、
「でも、誘つてくれてありがとう」と、鷺崎さんはこひらに向かい、小刻みに手を振つた。

さよならをした後、カラカラと音をたてながら千央たちは自転車を押して、ようやく帰路についていた。

「ゴッちは先頭に立ち、熱々のアスファルトで蹄を打ち鳴らして、ポツクリポツクリと歩いていた。

「よかつたね、無事見つかって」千央は一連のゴッち行方不明騒動について思いながら、毅に言った。特に今日の不法侵入と、避難の時の毅の落ち込みようについて。

「ああ。よかつた、よかつた」と毅は言い、首を傾げる仕種をした。それから千央に向かつて、秘密を暴露するよつに囁いた。

「実を言うと、僕は最初。鷺崎はゴッちを自分が飼いたいから閉じ込めてたのかと思ったんだ。でも、違つたんだね」毅は、少々バツの悪そうな顔になつた。

「そりなんだ」千央は頷き、白い毛の生えたゴッちの首から背中ま

でを一直線に撫でた。その毛は太く、丈夫そうでパサついている。
その体は堅くて温かい。

「ねえ、鷺崎さんって一人暮らし？」

「うーん。お父さんがいるけど、今入院してるから一人暮らしと言えるかな」

毅は考えながら答えた。千央は言った。

「じゃあ、今日の晩ご飯に呼んであげたら？」

アハハ、と毅は笑い声をあげた。

「えらく鷺崎のこと気にかけるね。もしかして好きなの？」毅は、好きの意味をわざと取り違えるようにしてからかった。

「別に。まあまあかな」千央はからかいには乗らず、顔をしかめ、首を捻つた。千央はただ、孤独で普段毅に冷たくされがちなあの人には、たまには好意を寄せた行動をしてもいいのではないかと考えただけのことである。例え少々変った者としてもだ。彼はある容貌のせいで奇異に思われるが、無害で良い人なのだ。現に彼はゴツチを助け、同時に毅を助けた。だから毅はもう少し恩を感じてもいいくらいだろう。しかし、今回のことでの毅の鷺崎さんに対する感情は随分良くなつたに違ひなかつた。

「ところでさ、ゴツチはどこに繋いでおくつもり？」連れ帰つたところで、また逃げるのではないかと思い、千央は聞いた。

「ああ、今回廻いに入れとけば逃げないつて分かつたから、庭の隅に小屋かなんかを作つてもらおうかと思つてる。それまでは納屋かなんかで飼えばいいさ」

随分と大掛かりだな、と思いながら千央は聞いた。

「でも家の人気が飼うの駄目って言つたらどうするの？」

「多分大丈夫だよ。はじめから飼い主が見つからなかつた時は、うちで飼うつもりだったから」

「ふーん、そつか。じゃあ、小屋作りは鷺崎さんに手伝つてもらえば？」

「えつ。そうだね。あいつ大工仕事とか得意そうだし、今度会つた

時に頼んでみようかな」

毅はウキウキと楽しそうに言った。

さて、その日の楽しい夕餉の後、千央は祖父に電話を駆けようと受話器を取った。

千央の家は歯医者で、普段は午前中から夕方までが祖父、午後あたりから夜遅くまでは父が勤務していた。なので、午後八時ともなれば祖父は自宅のマンションに戻っているはずなのだ。

数回の呼び出し音の後、祖父は電話に出た。

「はい、こちら藏内ですが」

「あ、もしもーし。おじいちゃん？ 私だけど」 千央は爪を弾いた。

「おお、千央か。久しぶり、元気しどったか？」

「まあ元気だよ。そつちは夏バテとか熱中症にはなってない？ 最近暑いからさ、気をつけてよね」 つい先日、自分が熱中症になつたことは棚に上げて千央は言った。

「栄養とか水分をちゃんと摂らないと駄目だよ」 これはアンコからの受け売りだ。

「大丈夫大丈夫、心配いらん。病院はクーラーが効いとるし、今もシチューを作つてたとこでな」

「またシチューなの？ 好きだねえ」

祖父は家ではいつも着物をついているのに、食事は完全に洋食嗜好だった。彼は今も毎朝堅いフランスパンにバターをつけて丸齧りしている、ある意味歯医者の鏡のような人物なのだ。数年前に、妻である千央の祖母が亡くなつてからは自ら腕を振るい、食事をこしらえていた。

「キャンプは楽しいかい？」 祖父は千央の行き先がキャンプだと思つてゐるらしい。丸つきり間違つてゐるわけではないが……。

「案外楽しいよ」

千央は山にイノシシがいるらしいことや、釣りに行つたこと、宿

題が思つたよりはかどつてないことなどを話した。

「あ、そういうえばね、千央は言つた。歯医者である祖父が興味を示しそうなネタがあるのでつた。

「いづちにゴッヂつていう大きな山羊がいるんだけど、その山羊前面が一本もないんだよ」

「ほお、その山羊は年寄りなのか?」

「さあ、何歳かはわからないんだよね。だつて……、」

千央はその後ゴッヂが飼われることになつた経緯についてしばらく喋つた後、電話を終えた。

その際、蚊に刺されんようになると祖父に忠告されたのだが、この涼しい山では森の中以外にほとんど蚊はいないのだったので。

十一、盗み聞き

千央はフライ返しを使い、ホットケーキを慎重に皿に移した。これで11枚目だ。千央は熱々の一切れをつまみ、よく咀嚼して飲み込んだ、そして唸った。やはり熱いと、味の違いはよくわからないのかもしない。

さらに千央は注意深くよく匂いを嗅いだ。まるで重要証拠を探す優秀な警察犬みたいに。次に深く湯気を吸い込んだ、肺の隅々まで湯気が届くようにした、こうすると香りが残留していく、息を吐く時にも何となく余韻が残る。湯気で肺が暖まる感じさえする。

千央は水を飲んでから、いい加減冷めたであろう、1枚目をまたつまんだ。それから小人の家こつそりお食事した白雪姫のように、それぞれ11の皿から少しづつ、ついぱむように食べ、じっくりと思案した。嬉しいことにどれも悪くないのだが、千央は完全に行き詰まってしまった。

使う酵母によって味にどんな違いができるのかと、味くらべを始めたのはいいが、困ったことにどんな酵母を使おうが、素人の舌でははつきりとは味に違いはないようなのだ。それでも他との味覚の違いを検出しようと、鼻と舌を必死にフル活用しているところだった。

唯一、潰したキウイで作った酵母のものは、チーズのような風味がした。多分生地に対する割合がキウイの場合は多かつたからだろう、果肉が多くないと味に影響は与えないようだ。しかし、と千央は思った。こんな結果ではネタにならないし、無駄に腹が膨れるばかりじゃないか。千央は残ったホットケーキの小山を見ながら溜息をついた。

千央はそれをかじった後が見えぬよう向こう側において、商品のパッケージのように段々に重ねていった。千央は何枚か写真を撮った。これは表紙の写真にする予定だ。そうやるとアメリカの朝食つ

て感じだが、皿が伊万里焼なせいか、その雰囲気は大幅に薄められていた。

それから、千央は結果を書き込んでいった。八日間に渡る実験と記録の作業が無事に終わり、ようやく筆を置くことができた。初めの日論みよりも大分大変な課題になつてきて、千央は途中で投げ出そうかと思ったが、とうとう終わつた。

千央は、大きな溜め息をつき、誤字脱字がないか素早く默読した。

「ホットケーキの生地は小麦粉100 gに対し元種は……その後、生地を4、5時間ほど室温で発酵させ……」

しかし確認作業を始めてすぐ、千央は面倒臭くなつた。疲れていだし、取り合えずこのことは後回しにしようか。

窓は真っ白だつた、部屋は薄暗く、外が明る過ぎるのだ。

黒い糸のようなものが千央の腕を通過していつた。顔を上げてよく見ると、それは糸トンボの影だつた。

千央は椅子に座つたまま伸びをし、頭を後ろへ倒し、そして目を泳がせた。椅子が軋んだ。

そろそろ騒がしくなつてきた。

いつものようにお尋ね部屋には続々と人が集まりつつあるようだ。幾人かの客人が向かいの廊下を歩いていた。その時千央は、そこに集まつた面子がいつもと違うことに気づいた。常連の顔を覚えていたわけではない、ただ近所で見覚えのある顔を見つけたのだ。

さらにお尋ねの客はいつも黙つて水玉のように小さな固まりになつてゐるが、今日はテーブルのまわりに集まり親しげにお喋りしている。あれは一体何が行われようとしているんだろうか？

千央は疲れ目を擦りながら、立ち上がり、漏れ出てくる声をきこうと部屋の脇の台所の流し台の影に座り込んだ。

「しかしナイ、どこに行つたとやろうか」落ち着いた低い声が聞こえてきた。

「ほんに。家にも帰つとらん、町にもおらん、山ん中におりやせんか?」

「香月さんの奥さんはえつしゃして、家から出いらんちこよんをつ

よ」

「なんでこがんも発表の遅うなつたとやらうつか?」

「そいけん、犬ば放してくさる……」

ワーッと大笑いがあがつた。

「だいたいおいはあの院長は好かんかつたもん」

千央はこの会話で、この人たちがなんのために集まつてゐるのかピンときた。一つしかない。

昨日昼と夕方の間頃、いつかのあの馬面のおつさん（親しみを込めたあだ名）が、世間話をしに増田家に訪ねてきた。このお喋り好きなおじさん、男より主婦たちのほうとがよつぱど馬が合つようで、色々な家の玄関先で屯しているのを、千央は度々見かけていた。しかし昨日は少しよつすが違つており、増田家の玄関口に立つと、園さんを手招いてこつそりと呼び立て、話し出した。千央はたまたま玄関側の柱のかげにいて、この話を聞くことができたのだ。

おじさんは、まず唾をぐくりと飲み込み言った。

「あの台風の停電の時、患者の一人が病院は脱走したらしか。そいば病院は隠しどつたとよ、あいかう何日たつたね? おいたちが知つたのはほんの数日前ばい。ほんに反対派衆はこれ幸いとばかり、大騒ぎしどつよ」

園さんは、ええ、とか、まあ、とか言つて話を聞いていた。

家人が病氣で寝込んでしまつたり、ゴツチの騒ぎもあつて、しばらく世間から隔絶されていたため知らなかつたのだが、どうやら世の中は千央たちをつちやつたまま、随分と変化してしまつていたらしい。

千央は馬面のおじさんが帰つた後、園さんに詳しいことについて訊ねた。園さんは“子供はそんなこと気にしないでいいの、すぐ見

つかるから”と言つていたが、しかし、やつぱり気になるし、後になつて園さんの顔を盗み見ると、目を見張つたり眉間にシワを寄せたりして、不安そうな表情をしていたのを千央は見たのだ。話を要約すると、台風の日によしば精神病院から一人の入院患者が逃げ出し、行方不明、というわけだ。このニュースが増田家に届いたのがほんの一日前のこと。厳密に言つとまだ24時間も経っていないのだ。

さすがに子供の千央でも、こういうことを黙つていた場合、状況がマズくなるのはわかつた。案の定、これが反対派のみならず中立意見だった住民達にも怒りの火をつけたらしく、それでこの穏やかでない井戸端会議となつたわけだ。

ところで、さつきから千央はなんだか落ち着かない気持ちになつてきていた。隣のお尋ね部屋から、台風襲来からこっち、町では不信な事件や事故が頻発しているとの話が聞こえてきたのだ。そういえば、そういえばと次々と話題にあげ、盛り上がつてゐる。いくつかの盜難事件やちよつとした破損事件、最近起きたボヤ騒ぎについてや、日常の些細な異変を取り上げて、怪しんだり、ちょっと神経質になりすぎではといえるものもあつた。中には犬の治療費など全然関係のない話をしてゐる者もいた。

その嵐に押されて、千央もそういえば……とあること思い出した。千央たちもいつだつたか空き巣被害に鉢合させたではないか。これは犯人が捕まつたという話を聞かないから、おそらく今回起きた事件の一つになつてゐるんぢやなかろうか。

千央はさらに耳をそばだてた。警察に被害届けを出していないものを除いても、普段の犯罪数からみて異常だ、とおじさんが主張している。その声があまりにも大きいので千央は耳をそばだてるのをやめ、思わず耳を塞いだ。

この逃走話をどういう経緯で公表したのか、といつところはもうろんわからないが、しかし病院だか警察だかがこれらの犯罪の犯人を脱走した患者である可能性があると考え、やむなく発表したと勘

繰る人がいてもそんなに不思議ではない。現に千央もそう思つたし、これらの事件に共通するのは、台風後に起こったことと、一つも犯人が捕まつていないことなのだから（ただ単に警察が本氣を出してないだけなのかもしれない）、その可能性は十分に考えられるのだ。

「山狩りでもしそうな雰囲気だよな」

弾けるように隣を見ると、毅が千央の横にいた。気づけば奥の棚の側にはアンコが潜んで同じように聞き耳を立てていたし、玄関の影には公平と伊鶴が忍び隠れていて、こちらにやあ、と挨拶してきた。毅も、他の皆さん、千央が話したせいで脱走騒ぎのことはすでに知っていたのだ。

「目がヤギみたいだぜ？ 眠いの？」

毅に目を輝かせながら指摘され、千央は少しムツとした。山羊のようだと言われてしまつたが、千央は内心目を見張つて驚いていたのだ。自分の前でこんなあべこべの対比が起こりえようとは、と。「ね、これってすごく変だと思わない？」千央はさつきの言葉に反抗するように、はきはきと言つた。

「何が？」毅は千央のいきなりの覚醒ぶりに驚くことなく聞いた。

「違う、ここでこういう反対の相談していることがだよ」

千央はある程度深刻な不都合が起きたらお尋ねよりもまず、社会に実態のある専門家のところに行くべきだと思つていた。どこかが痛むのなら、すぐ病院にかかるべきだし、トラブルが起きたら弁護士に相談すればいい、精神病院もその選択肢の一つだと。

「まあ、うちは増設には反対でも賛成でもないから、変っちゃ変だな」

言葉が足りていなかつたせいか、意味が通じておらず、毅は呑気に言つた。

「そういうんじゃなくって」千央は半笑いで言つた。「精神病院をつくるのを反対する相談に、幽霊の治療をすることを使うなんて、すごくおかしくない? ってこと」

病院なら資格をもつた先生に診てもらえるし、診断結果には根拠

もちゃんとあり、薬もある。少なくともお尋ねよりは効果がありそうだと思う。その上保険も効くのだ。確かになんとなく怖い感じはするが、それはお尋ねも同じだ。それに比べてこちらの方はどうだろ？元喫茶店店長の靈能者がやつていて、お金を払つてもらえるものといえば、不幸を家系や性格に結び付けた攻撃と木片数個だけだ。明らかに信用や誠実さ正確さでグレードが落ちる、というか全ての面で落ちてる。だからこの光景は立場がまるで逆転しているのではないか？と思うのだ。

「確かに」毅はフフンと笑つた。

「でも今回はただ貸してるだけだよ。他に人が大勢入る場所がないつて、あの馬の人と言われて」

「馬の人」千央は肩を揺すつて笑つた。毅は「あのおじさん、馬に似てるよね」と以前千央が言つてたのを覚えていたらしいのだ。

「ねえ、その逃げた患者つてさ。山で野宿でもしているのかな」千央の頭にはロビンソン・クルーソー的な情景が浮かんでいた。

「そうかもね。でも馬鹿だよね、そいつ。俺なら自分が逃げてきたものからできるだけはなれたいし、見つかりたくないから、近所の山なんかには籠らずにすぐ遠くに逃げると思うんだけど……」

「それは私もそうすると思うよ」千央は頷いた。しかし、何者かが潜んでいるという痕跡があるのだ。

あつ、と毅は思い出したように言つた。「そういうばあの空き巣に入られた家、どうやら金田のものは盗られていなかつたって聞いたよ。もしかしたら食べ物を盗られていたのかもな」

確かにお金や宝石なかともかく、食べ物が少し減つたくらいなら盗られてもめつたことでは気付かないだろう、千央は思った。もし、その家人がなんかおかしいと感じたとしても、記憶違いという可能性も考えるだろうから結局通報するまでにはそつそつ至らない。あれは足跡べつたりだつたから発覚しただけだし。

しばらく考えている内に窓の外から、パチリ、パチリという音が聞こえてきた。鶯崎さんだ、直感で千央は思った。

立ち上がり窓の外を覗くとやつぱりその通りだった。鷺崎さんは、低木を剪定ハサミで丸く整える作業をしているのだった。後ろの剪定を終えた木は、まるでほどよい重力の影響をうけてたわむ水風船のような見事な形だった。特別腕のよい彼は、どんな植物でも形よく仕上げることができるのだ。

毅も立ち上がり鷺崎さんに声をかけて、手を振った。するとあちらは両腕を振ってきた。

「暑そだなあー」と毅はつぶやいた。

外は猛烈な直射日光が降り注ぎ、そのせいで目がちゃんと開けられないほどだった。影は色濃く、不必要なほどに草葉はぴかぴかと光いた。芝生はきっとあつあつになつてているだろうな、千央は思つた。

「お茶持つていってやろ」毅はくるりと身を翻した。そして冷蔵庫の方に向かつたが、その途中、千央に尋ねた。

「こりゃ、なんだ？」

毅が見ていたのは、大量に積み上げられたホットケーキだった。
千央は言った。

「宿題で酵母育てたでしょ、それで作つたんだけど

「美味しい？」

「まあまあ普通」千央は一枚取つて食べてみせた。

「ううん……それ、品質的に大丈夫？本当に酵母になつたの？」

「失礼な、平氣だよ」と言いつつ、千央は不安になつてきた。ちゃんと膨らんだので成功したと思つていたが、もしかしたら別のものが増殖していたりして……。

ともあれそれから毅はコップに冷たい麦茶をつぐと、すぐに庭に飛び出して行つた。

鷺崎さんがゴツチを助けたとわかつて以来、二人は口を追うごとに親しくなつていた。というのも、毅の言つていたゴツチの山羊小屋の願いを鷺崎さんはすぐさま聞き届けてくれ、一緒に小屋の外見を考えたり、材料を買いに行つたりしているうちにすっかり仲良く

なつたのだ。

小屋を手作りするにあたつてまず、一人がぶち当たつた問題は場所をどこにするかということだった。当初は庭に作りたいということだったが、増田家の庭は一面芝生で、とても大切に手入れされていた。なのでどこかを潰すわけにもいかず、作れる場所がなかつたのだ。

しかし、これはすぐに解決した。あの半分山の中にあるような野菜畑が適当じゃないかという案がでたのだ。あそこなら十一分に場所がとれる広さがだし、山好きのゴッチにはぴったりだろう。とうわけで小屋の建設地は決まった。

続いて設計図だが、これは近所に住む知り合いの大工さんに頼んだらしい。千央は設計図を見たが、斜めの屋根に前庭付きの中々立派な山羊小屋であった。

それからというもの、工事は突貫作業で進んでいった。

まず畑に長四角の溝を掘り、ブロックを並べてセメントで固め、土台を作つていった。千央もセメント塗りと一緒にやつたが、あまりお役には立てなかつたようで、ペンキを塗る時にまた手伝つてくれと言われてしまい、後は見てるだけになつた。

皿洗いの後、千央たちはゴッチに会いに水野さん方へ遊びに行つた。水野さんの家には農機具を入れて置く広い納屋があつた、それでストレスなく過ごせるだろうと鷺崎さんが水野さんにゴッチを預かってくれるようお願いしたのだった。

水野さんの家に着くと、ゴッチは野外に繋がれて草を食べていた。「なんだ、これ？」慶幾はゴッチの首についた新しい首輪を指して言つた。それはまるでリュックの肩紐のような感じで、首前の方から前足の脇までぐるりうつにして身体にまきついている。

「これなんですか？」公平は水野さんに訊ねた。

「あ、これね」すぐ側で土を起こしていた水野さんはゴッチを見遣つて言つた。「首輪をいくらきつく結んでも、ゴッチは逃げてしまうだろ。でもほら、こうやって……脚に引っ掛けなければ、どう動

かしても抜けないだろ。少し窮屈そうでかわいそうだけど、小屋ができるまではなんとしてもここに居てもらわんとな」

「小屋は多分もう少しで完成しますよ」千央は言った。

実際、「ゴッチが新居に引っ越して来る日もそう遠くないものと思われた。千央がセメント塗りの次に見に行つた時、すでに柱が何本も立つており、さらに次に行つた時は骨組みがほとんど出来上がつていて、千央は小屋に入り中から空を見上げたのだ。

「しかし、うまいこと考えましたね」真琴が言った。

「ああ。それにそこらの雑草も食べててくれて、おかげで草取りいらずになつたよ」と水野さんは言つて、アハハハ、と笑つた。

この家の裏にはヨモギ、イネ、タンポポなど数多くの種類の草が所狭しと生えていて、ゴッチにとってここはかなり好条件の餌場だろう。湖水は人参の葉に似た物や、ほうれん草に似た物、大葉のようないもの選び取り、ままごと用のお皿に盛り合わせた。その上に花を飾り、ミックサスサラダを作つてゴッチに食べさせていた。

「水野さんは集まりには行かないんですか?」公平が聞いた。集まることは、増田家で行われている例の集会のことだ。

水野さんはすぐに合点したようで、答えた。「ああ、親父が行つてるから俺は行かないよ。見かけなかつた?」

「僕ら、立入禁止だつたんで」真は腕でバツを造つた。「部屋には入れませんでした」

「ああ、そつか」水野さんは鍬を置いてタオルで顔を拭つた。

真は言つた。「でも、話は聞こえた。なんかいっぽい変な事件が起こつてゐつて、泥棒に入られたとか、不審火があつたとか」

「そうらしいな」

「私、なんか怖いよ」アンコがつま先で土を搔きながら言つた。

「まあ多分大丈夫だと思うよ」水野さんは言つた。

話している途中、砂が擦れる音がしたかと思うと、水野さんのお父さんが帰つて來た。千央たちはこんにちはと挨拶をし、おじさんも挨拶を返してくれた。それから、水野さんが持つてゐる鍬を見て

おじさんは言つた。

「鶴樹。終わつたらせいはむちゃんと片付けとけよ」

わかつた、という風に水野さんは頷いた。

「あと、あつこに放りっぱなしにとるやつも忘れずにな」おじさんは顎で指した先には、土くれのついた草刈り鎌が数本、洗い場に置いてあつた。

「いいけど。親父、どうかしたと?」水野さんは少し不審気な顔になつた。

おじさんは不機嫌そうに言つた。

「西さんのうちの鎌が何本かの一なつともらしか。もしかしたら盗まれたとかも知れんとやと」

「それ、ただの思い違いじゃなかかね? おばちゃん最近忘れっぽくなつたつて自分で言つとつたやろ」茶化すように水野さんは言つた。「ああ。でも、その分からんけん言いよつとくわ」「用心するにこしたことないけん」おじさんはそう言い捨てると、千央たちの前を通り過ぎ、家に入つて行つた。

残された千央たちは、お互の青い顔を見合させたのだった。

「なあ。これからは雑草を取るのに、たまにガッチを貸してくれな」
帰り際、水野さんは毅に言つた。
「いいですよ、と毅は頷いた。

十三、花火の後

この日、千央たちは風呂に入つてから、庭にてて花火をやり、早々に床についた。しかし駆け回るねずみ花火にロケット花火、ウネウネしたへび花火にはしゃぎ、チカチカ光る青や白の花火を見た後の興奮はさめず、中々寝付けなかつた。そして少し鼻がむず痒かつた、火薬の匂いを嗅ぎ過ぎたからかもしれない、と千央は思った。そこで千央たちは、今夜は両方を仕切つているアコーディオンカーテンを開き、布団を寄せ合つて話をした。

始めは怪談話などをして盛り上がつていたが、しかし自然と昼間に聞いた脱走者の方に、話しが向いてしまうのだった。

「おかしいと思つてたのよ。台風で青年団が駆り出されるなんて、今までこんなことなかつたもの。きっと捜索でいつもより人手がいつたんだわ」季生子は猛りつつ言つた。今日は別棟で寝ている毅や季生子、湖水も一緒であつたのだ。

父親があの日青年団の一員として招集されていたことから、慶幾はその話題について千央たちより多少明るいと思われた、しかし案外そうでもないようだつた。

「うちのお父さんは捜索には加わらなかつたよ。土のう積みしかやつてないつてさ」期待されても困る、という調子で慶幾は言つた。「なんだ。つまんないの」とアンコはふて腐れた声を出した。つまらないと言われ、慶幾は少々躍起になつて言つた。「でもその人は一時、死んでいるかもつて言われてたらしいよ

「ええ……、なんですよ」

「だつて台風で大荒れの日にいなくなつたんだぜ。逃げる途中何かの事故にあつていたとしてもおかしくはないだろ。以来誰も姿を見ていないんだし」

ふうんと公平は言つた。「ある意味空き巣が生存確認になつたつて訳か。皮肉だな。不謹慎だけど家族はホツとしただらうな」

確かに家族にとつては死んでいるよりか泥棒しても元氣でいる方がマシだろう、と千央は思った。いや……しかし、そもそもその患者に家族はいるのだろうか？もし家族がいるのなら、管理責任問題云々でもう少し速く騒ぎになりそうなものだけ。

「でもその人が犯人である証拠は全然ないんだろ。他に犯人がいるのかもしない」

慶幾は腕を組み直した。「状況的に見てそいつの可能性の方が高いよ。だつて全部の事件は逃げた後で起こっているんだからさ」「食い物が盗られてたんだっけ？」

「いや、なにが盗られていたかはわからなかつたらしくよ」と公平。「じゃあなんで泥棒に入つたんだよ」

「そんなこと俺に聞かれてもね」

「でもさ、精神病院から一体どうやつて逃げ出したんだと思う？」

「さあ俺、入院したことないからわかんないな」元気印の伊鶴は言った。

しかし、「僕は喘息で入院したことあるけど、逃げようと思えば逃げられると思うよ。体が動くならだけど」と真。

「あのねえ、それは普通の病院のお話でしきう」真琴は呆れたように言う。「精神病棟は、外出に制限がつく場合があるのよ。病気の程度にもよるけどね」

千央の持つ精神病院のイメージは、先日行つた落ち込んだ人達の集まる待合室と、曇つたガラスがはまり、白い格子の影のついた窓くらいだった。千央には患者の管理体制など、他のことについては知る由もなかつた。しかし、その病院に収容されている人達は自分たちと別の惑星の人間のような気がするのだ……。

「普通の病院でも外出の規則はあるよ」真は言つた。

「違うよ。病院じゃなくて病室の外への外出。精神病院つてのはね、病気がひどい患者の病室には鍵をかけておくんだよ。そこから抜けってきたのなら相当すごいよ」

むしろ、すごいというよりは大変なのだ。

「なら、逃げたやつは拘束されるほど病気は重くなかったって考えられるんじゃない？ 檻のある部屋から抜け出すなんて大事だろ。マジシャンじゃあるまいし」公平は言った、彼は常に穏健派なのだ。

これらは関心度の高く面白いニュースだったが、長く話を続けるにはネタが少な過ぎすぐに終わった。だいたい情報が少な過ぎるのだ。なにせ逃げた人物の性別、年齢、病状もわからない、何から今まですべて謎に包まれているのだから。

しかし千央は住民たちのその警戒ぶり見て、それなりの年格好でおそらく性別は男だろうということが推測できた。そして、鎌が盗まれたという情報から、住民たちが想像している脱走者の姿は、荒々しい、鎌を上段に構えた乱暴者に違いないと千央は思うのだ。これは他の皆も大方同じような考えだつた。

「私チラと思つたんだけど、病院側は実は患者は逃げた直後、とうに死んでましたって方がかえつて都合がいいと思っているかもね」「だつて事件を起こしたりしてたら、病院が責任を負わされるわけだしさあ。これからエスカレートして殺人事件でも起こつてみなよ。病院の増設どころか、病院存続の危機よ」真琴はそう言いながらも、おかしそうに眉毛をキュイキュイと動かした。

「殺人とか……、なんて物騒なことを考えるやつなんだ」毅は呆れていた。「それに馬鹿らしい」

「怖いよお」と湖水は泣き声を出して、布団に潜ってしまった。

「もうこの話は終わりにして、湖水が怖がってる」アンコはよしよしと湖水で膨らんだ布団を撫でた。

しかし、怖がつてるのは多分年少の湖水だけではない、と千央は思った。千央は部屋の脇へ視線をやつた、いつもなら風を入れるために開け放されている窓が、今夜は閉じられていた。それは夕方から吹きだした風で特別涼しいという理由だけではあるまいと千央は思つた。

脱走者は今も外でうろついていて、次の瞬間こちらに襲い掛かつてくるかもしれないのだ。そのような幻想を千央は持つたのだった。

「そういえば、うちの近所でも変な人を見かけたことがあるよ。全身が赤い女」急に真が話しだした。

「“全身赤い女”？」真琴が聞き返す。

何やら怖い話のような気がして、千央は一気に興味を惹かれた。
「うん。本当に全身まっかつかなの。前にスーパーのレジに並んでた時、後ろの方に女の人がいたんだ。すごく背が高くて、赤のジャケットに赤のミニスカート……、赤のハイヒール靴をはいてた……。化粧も赤くって赤い唇に頬つべた……、目の周りも……」「おてもやんじゃないか」と公平。

「あと、真っ赤な色したストッキングもはいてたよ」

「それって、水商売の人だつたんじゃないの？」アンコが聞いた。

「まさか、だつておかっぱだよ。その人の髪形

「それって幾つぐらいの人？」

「30歳とか、35くらいに見えたかな。髪も染めてなくて黒だった。僕はジツと見たかったけど、ジロジロ見るなってお母さんに怒られちゃってさ。周りの見て見ぬフリがすごかつたな」「何買つてた？ やっぱりトマトとかりんごとか赤いやつ？」

「ペットボトルのお茶を買ってたよ。大きいやつを何本も、もしかしたら買い出しかなんかだつたのかも……」「あるいは罰ゲームのような気もする。

「その後はどうなったんだ？」

「普通に店を出ていったよ。それ以来見かけないな」と真は言った。

「うちの近くには仙人が住んでんだぜ。噂の上でだけど」

次にそう言つて、伊鶴は身を乗り出した。

「学校帰りに俺、良く寄り道する本屋があるんだけどさ。前からそこに仙人が来る、っていう噂が学校であつてたんだよね。その人の正体は山で修行してる、仙人のタマゴだつていうんだよ。この本屋にはたまに息抜きで来てて、しばらく町をうろついた後、また山に帰つていくんだって」

「仙人！？」慶幾は吹き出した。

「俺も何回か隣で雑誌読んでるそいつに鉢合わせしたことあって、顔は知つてたからそりやびっくりした。俺は普通にホームレスなんかだろう、って思つてたからね。でも、一緒にいた友達はその噂を信じてさ。見かける度に話し掛けようとして、俺がいつもとめてた。その人は若くて、ヒヨロツとした体型で、髪と鬚がかなり長かつたから、確かに格好だけ見れば、若手の仙人らしいんだよね」「で、いつだつたかな。急な雨に降られて、その本屋に雨宿りに入つたんだ」

その日伊鶴は一人で遊びに出ていた。にわか雨だつたのか、それはすぐにやんだ。

「雨がやんて帰ろうとしたら、その仙人が本屋を出てこいつとしたのに鉢合わせしたんだ。俺その時ちょうどヒマだつたから、仙人の後をつけて行くことにした。本当に仙人なのかを見定めるためにね」伊鶴は雨上がりの道を仙人の後にひたすらついて歩いた。仙人はいつも幾分か大きめのよれたTシャツと色褪せたデニムをはいて、ベージュ色のチューリップハットを被つていた。そして黒い蝙蝠傘を杖のようについていた。男はゆっくり時間をかけて、町中を一周していった。

「全然面白いことが起きなくて、退屈だつたよ。こちりに氣づきますらしないし」と伊鶴は言った。

しばらく歩いた後、伊鶴は自分が見覚えのありすぎる場所に踏み込んだのを知つた。そこは伊鶴の住むマンションの目と鼻の先を流れる河川の橋であった。

男は橋の下におり、住まいと思われるブルーシートで作ったテントから鍋やコノロを取り出した。腰を下ろして袋ラーメンを作つて、食べ出した。伊鶴は男がラーメンを完食したのを見届け、それから歩いて十分もかかるない自分の家に帰つたという。

「結局ただのホームレスだつたんじゃないか」毅は少し不服そうに言つた。

「そうだよ。ただ近くに住んでてびっくりって話だよ」

「でも友達はまだその兄ちゃんがただのホームレスだつて知らないから、まだ仙人だと思ってるっぽいんだよね。この間会った時は持つてたお菓子を分けてあげたらしいよ」と伊鶴は続けた。

「お前、ヒドイな。ちゃんとそのこと教えてやれよ」と慶幾は言つ。「逆だよ。だつて夢が壊れるし、かわいそうちやん」

「でも、そのうち金をたかられるようになるかもしれないぞ」公平が寝返りをうちながら言つた。「仙人に寄付しろ、みたいな感じですか」

「いや、それがお菓子をやる時に聞いたらしいんだ」

「何を聞いたつて?」

「だから、そのまんま“あなた仙人ですか”つて」部屋中に笑いがおこつた。伊鶴の友人の言動も可笑しかつたが、そんなことを出し抜けに訊ねられて、その人は大層面食らつたに違いない。その心中を思うと余計に笑了。

「何で答えたの?」アンコは可笑しくて堪らないといつよつに聞いた。

「普通にいや違いますけど、つて言われたそつだよ」

「よかつたな、その人が善良な人で」

慶幾は安心したように言つた。

「いやそれがさあ」伊鶴が遮つた。

「そいつ、今だにそのホームレスが仙人だつて信じてるみたいなんだよね」

「おいおい、そいつ頭は大丈夫なのか?」

「多分大丈夫だと思う、ただ少し変わつているだけ」

と、伊鶴はこう言つたが、千央は伊鶴の少々純粹過ぎる友達が心配になつたのだった。

その時ボンボン時計の鐘が、午前一時を告げた。そしてとうとう部屋の電気が消された。しかし、千央たちは全く眠たくならなかつた。そこに、真琴が通つていた小学校で実際にあつた怖い話がある

と言い出し、千央たちは喜んでその話を聞いた。「ええと……、私の行つてた学校にはいつからあるのかわからない古い人形があつたの、多分何かの教材で使つていたものだと思うんだけど、その時は物置みたいなところに打ち捨ててあつた。子供がまま」と使うようなミルク飲み人形で、頭にゴムがついてた。その髪留めに噂があるて……、「

その人形は、屋上までの階段の踊り場に使わなくなつた備品と一緒に置いてあり、毎日たくさんその前を通る最上級生たちの目にふれていた。しかし、生徒たちがそれに近づくことはめつたになかつた。なぜなら、その階段を上つて行き着くところは立入禁止の屋上のみだつたからだ。その関係で屋上と同じくその階段も自然と侵入禁止区域とされてきたのだという。

だからこそ、そこが物置として利用されている状況があつたのが……。

真琴は思い出すようにゆっくりと話した。

「その髪留めには呪いがかかっている、という噂があつて……」

その人形の名はあすかといった。あすかは頭や腕、足はプラスチック製、お腹は布でできていて、手足を自由に曲げられた。口はおもちゃの哺乳瓶や自分の親指がくわえられるように独特的の形をしていた。目は体を倒すと閉じるスリーピング・アイだつた。髪は短くて金茶色をしており、その前髪に問題の髪留めが結んであつた。

「その噂つてのがちょっと曖昧なんだけど、確か……、そう、夜中にその人形が校舎の中歩き回つていてあすかに机なり、靴箱なりに髪留めを入れられてた人は呪われる、って内容だつたわね」

それは大抵、夏から秋にかけて起こり、狙われるのは決まって女子の持ち物だつた。その時期になると一部の怖がりな女の子たちは少々ナーバスになり、交通安全のお守りを靴箱に置いていつたり、自分で作つた魔よけの札を入れたりして、あすかの髪留めの被害から持ち物を防衛していた。

しかし、それでも事件は起つたのである。「ある朝一人の女子

の机にあすかの髪留めが入れてあったの。まあそれ、私なんだけどさ

いきなり話が核心に触れたため皆はヒーッとのけ反つた。

「ほら、これが現物だよ」

軽く真琴は言い、自分の頭から赤いゴムをといた。中学生くらいの年の子が使うには少し幼過ぎるような赤い星の飾りのついたものだった。普段、肩までの長い髪を垂らしているが風呂上がりや勉強する時などはそのゴムで髪を束ねていたのだ。

「そのゴム、なんで持つたままなんですか？」

「戻したらまた他の人に使われるでしょう。だから、自分が持つてるのが一番安全かと思ってさ」真琴は「ゴムの飾りを揺らし、チャリチャリと鳴らした。「でも私には一人姉がいて、同じ小学校を卒業してるの。だから髪留めのことを相談したんだ。そしたらそろつてその髪留めは変だつていうのよ、偽物だつて。上のお姉ちゃんの時から噂はあつたけど、ゴムの色は黒だったはずつていうし、下の姉ちゃんの時は水色でガラスの飾りがついたものだつたつていうわけ」「良くわからないけど、少なくとも一回は代えられてるつてこと?」「ならそれは本物じゃないつてわけ、よかつたねえ」

「なんだ。全然怖くないじやん!—! つまんねえ」伊鶴は責めるように言った。

「この話の怖さがわからないかなあ、お子ちゃんには」ヤレヤレ、と真琴はわざとらしく溜め息をついて言った。

一向に無くならない髪留め、つまりそれの意味するところは、長年に渡つてわざわざ呪いのゴムを補充しているやつがいるということなのだ。これは一人の人間がやつていることではないと千央は思う。つまり数年に一人が髪留めの噂を利用して、誰かを怖がらせるいたずらをし、また使えるようにゴムをあすかの頭に括っているのだ。こつちは同一人物の仕業だろうか? 千央にはそれはよくわからぬぐ、なんとなく不気味に思った。

この時千央が思いついたのは、“一番怖いのは生きている人間だ

”とかいう言葉であった。

「その人形はまだ学校にあるんですかね」

「さあね、多分残っているんじゃないかな。妹も弟もいないからわからないわ」真琴は言った。

あすかはまた呪いの髪留めをつけているのだろうか、千央はしばしどつくりと考えた。

その時ふいに物音がして、皆は動きを止めた。どこからか、小さな爆発のような音がしたのだ。その音は、タイヤが石を弾き出した時の音によく似ていた。

毅も同じことを思ったようだ。

「こんな時間に誰が来たんだろう？」毅は素早く布団から出て、窓側に立った。

「誰もいないぞ」毅は外を見て言った。

パチッ、また弾ける音がし、千央はビクッとなつた。そして隣にいた真琴と顔を見合わせた。真琴は怖がってはいなかつたようだが、不審気な表情をしていた。

パチ、パチ

「違う、こりやあラップ音だ」公平は冷静な声を出した。公平は何かを見定めるかのように暗闇を見ていた。

風が毅の開けた窓をすり抜け、カーテンを大きく捲つた。夏とは思えない、とても冷たい風だつた。寒い！千央の肌に鳥肌が立つた。

「閉めて」アンコが毅に言った。今度はドミノ倒しのように連續した音だった。

「何かいる！！」

皆は布団の中に潜り込んだ。千央はそのすき間から、外のようすを伺つた。誰かの犬のような荒い息遣いが聞こえてきた。皆はジッと黙り込んでいた。何かの影がさつと横切つた。

「おばけの襲撃だあ！！」いきなり大声があがつた。

慶幾だつた。それから、慶幾は大笑いした。つられて何人かの笑い声が起こつた。「ウ……、ヒヒヒヒ！」と、誰かがわざと甲高い声で笑うので、少し不気味だつた。

この大騒ぎの中、小さな布団が大きく伸び上がつた。湖水が目を覚ましたのだ、湖水は不安そうにぐずり、とうとう泣き出してしまつた。

十四、アシナガバチの日記

「今日ははとても面白い光景をみたのでそのことをかこいつと思います。今日の朝、玄関の掃き掃除をしていると、目の前にIFTOキヤツチヤーのクレーンのような形をした物がいきなり飛び出してきたので、私はびっくりしてしまいました。よく見ると、それはハチが大きなクモを運ぼうとしているのでした。そのクモは見た目がとても変わつていました。

今まで私は、釣り竿みたいな色と形のものと、エビの抜け殻とかダニのようなクモしか見たことがなかつたけれど、このクモはまず脚が異様に長い上に、体中が茶色い毛で覆われていました。

毛のあるクモといえばタランチュラが思い出されますが、これにはイガイガした毛じゃなく、ビロードのような纖細で毛並みのいいつやつやしたものがはえていました。ハチは自分の何倍もの大きさの獲物に苦戦して上がつたり下がつたりを繰り返していました。

私は運ぶのを手伝おうとほづきでクモの脚あたりを支えていました。それでも、しばらくするとハチは疲れたのか玄関のすみに着地しました。

私はそのあともしばらく観察していました。ハチはクモの脚に何度も頭をぶつけて続けていました。すると脚が急にもげ、私はびっくりしてしまいました。

多分ハチはクモをばらしてから運ぶことにしたみたいだとすぐ分かりました。私はとても気味が悪くなつて、掃除を止めて急いで家に入りました。しばらくして様子を見に行くと、あのクモは跡形もなく消えていました。ハチが巣に持つてかえり、きっとクモ・ミートボールになっているのだと思いました。

そのあとでのクモのことを調べようと思い、昆虫図鑑を開いたのですが、運悪く一番最初に開いたのが私の大嫌いな毛虫のページだったのですで、また気分が悪くなり、やめました。

朝のクモは縁起がよく、見るとその日一日ラッキーだときいたことがあるのですが、このクモはすでに死んでいたので、普通にラッキーでいいのかタロットみたいに裏返った意味になり、アンラッキーになるのか私は分かりませんでした。今日一日の出来事を振り返った結果、朝見たクモが死んでいたら、それはアンラッキーなことがわかりました。今日は私にとってあまりいい日ではなかつたのです。

先生がクモは好きですか？私は大嫌いです。

8・5　」

8月5日の日記に千央はこうかいている。

数日後の今日、クモ・ミートボールとやらの所在がわかつたようだ。

そんなもの一生わからなくていいのに、台所の際の軒下に大きなハチの巣が発見された。

見にいくと、ちょうど屋根の張り出した裏側に昔の笠付きライトのような形のハチの巣があつた。このアシナガバチの巣はセンチくらいの大きさで、六角形をした巣の部屋には白いフタが付いている、どうやら働きバチが生まれるようだ。

巣からはハチが出たり入ったりしていて、とても忙し気にしている。

千央は以前にも、アシナガバチがその長い脚をプラプラさせながら飛んでいたのを何度も見た覚えがある。山の中だからハチがいても驚かないが、まさかこんなに近くに巣を作っていたとは。この間の台風の風がさらつていってくれたらよかつたのだが、そう話はうまくいかなかつた。巣はちょうど風の当たらない軒下にあつたので全くの無傷だつたようだ。これには女王バチの先見の明に乾杯といつたところだ。しかし、作った場所が人間の家の軒先というのがただ一つ致命的であった。

もちろん駆除をしなければならないが、そこに水野さんが駆除実践の名乗りをあげた。

「え、でも刺されたら大変よ」

危険なので駆除するのに業者を頼もつと言つていた園さんは心配し、反対した。

「大丈夫です、自分らでできるのに料金がもつたいないし」水野さんは言う。

「僕はハチに刺されない体質ですから」

千央はこの言葉理由にビカツと反応した。

「私もそうなの、ハチに刺されないんだよ」これは本当だった、今まで千央はハチに接近したりちょっかいをだしても刺されることがなかつたのだ。

「だから、私も手伝つていい？」

「ダメ、絶対ダメ」園さんは麻薬撲滅の標語みたいなことを言つて、反対した。

「大丈夫だよ」千央は食い下がつた。

「でも、刺されたら危ないからな」水野さんは言つた。

さつき自分に言われたことをそのまま他人に言つのか、と千央は訝然とせず不満に思つた。

駆除は夕食の後、暗くなつてから決行された。ハチは昼活動し、夜に巣で眠るらしい。

急遽鷺崎さんも呼び出され、一人はまず、Tシャツを頭に被り普段なら頭を出す襟首のところに顔のみを出した。一瞬とても間抜けに見えたが、鼻口を隠して、色々形を整えると、まるで忍者のようになつた。ただし、この頭巾は黒ではなく白もしくは白っぽい色を使わなければいけなかつた。ハチは特に暗い色を襲うので黒は避けねばならない色なのだと水野さんは言つた。それから、ゆつたりした長袖シャツを着て、袖口をハチが入つてこないようにゴムで止め

た。手には軍手をはめ、麦藁帽子をかぶつた。

そうやって、完全防備になつた水野さんはふざけたポーズをとり、言つた。

「どうだ？ 格好いいだろ」

「いいね、日焼け対策万全の強盗つてかんじ」アンコは言つた。

「本當だ」皆から笑いがおこつた。

「なんて失敬なガキどもなんだ」水野さんは憤慨するふりをした。
さてそれから、準備万端になつた二人は殺虫剤を持ち、ハチの巣の場所に向かつた。

千央たちは外には出られないでの、台所の窓の前に殺到し、すし詰めになりながら始まるのを待つていた。あまりにもぎゅうぎゅうなので、皆の息で窓が白くなつた。

突然、ガチャリという金属音がして皆振り返つた。毅が椅子を換気扇の前に持つてきていて、そこから外を覗き見ていたのだ。

この家の台所には、なぜか換気扇が二つあり、一つはフイルターのついた小さめのもの、もう一つはファンが剥き出しへ、奥の方に幅広のブラインドのようなものついたものがあつた。それはステンレスボールの紐がスイッチになつているのだが、その紐を引っ張つて持つたままでいると、ファンが回らないままブラインドが開く、そうすると調度そこから一人のいるところが覗けるようになるのだ。そこで千央たちは、二つに別れて見物することにした。

千央は窓から見ていたが、換気扇からハチが入つてこないかと心配していた。自分は刺されないと根拠もなく信じているけれど他の人は別であるからだ。千央が熱心に換気扇の枠と睨めっこしていると、毅と目が合いへらへらと笑いかけられてしまつた。

「電気を消せ」と誰かから声がかかり、その通り部屋は真っ暗になつた。皆の肌が夜光虫のように青白く光つて見えた。とうとう作戦決行の時間だ……。

水野さんはかまぼこを逆さまにしたような形の大きな眼鏡をかけ

た姿で、殺虫剤の缶を振りながら踏み台に飛び乗った。次の瞬間、殺虫剤が巣に吹き付けられた。鷺崎さんは一步下がったところに待機し、逃げたハチに薬を噴霧し打ち落としていった。千央はどちらかが今にも刺されて悲鳴をあげたりはしないかと、多少びくつきながら恐々と見物していた。今夜は風が無く、白い霧状の薬剤は噴射音とともに、夜の暗闇にモクーンと現れ、しばらくそこをおぼけのようになつたあと、雲散霧消していった。

虐殺はものの数十秒間で終わった。

水野さんは壁に虫取り網を当て、巣を棒で叩き落として、それをキヤッчиした。おーっ、と歓声があがり、伊鶴が拍手をした。暗闇の部屋にまた電気が付けられた。そのうち、かさかさいう音と、プラスチックのガタガタという音がした、ハチの巣がゴミ箱に入れられたのだ。

「終わった、終わった。無事終了」水野さんは宣言した。

しかし、すぐにギャッという声があがつた。千央たちの見ていた窓ガラスに一匹の残党アシナガバチが突進し、大きな音をたてたのだ。水野さんが急いでやつて来て、スプレーをこちらに降りかけた。窓には殺虫剤で白い模様が描かれ、こんなにムシ暑い夜にも関わらず、千央はクリスマスを思い出した。クリスマスシーズンに窓に吹き付けられる、スノースプレーに似ていたのだ。

しかしハチはそれにもめげない、なおも激しい攻撃を続けてきた。ブンブンバチバチと、やかましい音が響いた。中々根性のある虫だ。次に鷺崎さんは首に巻きつけていたタオルを解き、ムチのようにしならせハチを打つた。ハチは身体をタオルに絡みとられ、地面へ落下していった。水野さんと鷺崎さんは一人してそれを踏み付けて。ガスツ、ガスツ。哀れた。ガスツ、ガスツ。哀れた。

「死んだ？」
「死んだぞ」

その声を合図にまた歎声が起き、毅たちはポンポンと椅子から飛びおり、換気扇はガチャリと音をたて、閉じられた。千央はやれや

れど、無事終わってホッとしたと同時に、清々した気分だった。だけど、浮かない顔をしているものがいた。真が皆から離れ、ボーッとした表情で一人テーブルに座っていたのだ。何か考え事をしている様だが、何処か様子が変だ。もしや、今までずっとそうしていたのだろうか？

もしかしたら真は虫が苦手だったのかとも千央は思い、

「大丈夫？」と聞いた。真は、

「僕？うん、大丈夫だよ」と笑いながら答えた。しかしその声はひどく嗄れていた。いよいよ以ておかしい。

千央はちょっと詰問するような口調になつて言った。

「本当に大丈夫？」

真は急にふて腐れた顔になつた。

「何でもない、ほつといてくれよ」真はこう言つて、顔を赤くした。千央は自分が心配したのに冷たく返され、少し氣を悪くしたが、真が駆除の光景にショックを受け氣を悪くしたのだろうとを考えた。きっと意気地がないと思われるのが嫌で、それは言えなかつたのだろうと。

千央はそのあとすぐに寝付いてしまつた。その夜、真がハチアレルギーで病院に運ばれたということをアンコに教えられたのは、明くる日の朝のことであつた。

「ねえ、これはどう？」

そう言つて、伊鶴は一本の花を差し出した。伊鶴が持つていたのは、透明度の低いオレンジにあざき色の斑の入つた花であった。

「そんな毒々しい花、お見舞いに持つていけるか馬鹿タレー！」と、アンコ。

「じゃあ、これは？」

慶幾はオレンジの花を指差した。

「匂いの強い花はダメってさつき言つたでしょ？」「

「なあ」公平はアンコたち三人を眺めて、つぶやくように言った。

「さつきからずっとこんな感じだけど、一体いつ出発できるんだ？」

「分からん。でもどうせ何も言つても無駄だろ？」毅は諦めよう、

とこう調子で唸つた。

千央は思わず吹き出した。真が入院して3日目、やつと全員が連れ立つてお見舞いに行くことが許されたのだ。それで、庭から摘んだ花をお見舞いにしようと決めただけだ、こんな具合に押し問答が繰り返されて、花束はなかなか完成せず、出発は遅れていたのだった。

また、慶幾の持ってきた色の花がすぐさま却下されていた。赤いねこじやらしのような花だつた。却下された理由はわからない。

「じゃあ、これにしようぜー」公平がなにやら持ちあげて言つた。

それは濃い緑色の玉数珠のような植物の植わつた鉢植えだつた。

「花ですらないじゃん！－だいたい鉢植えは駄目なんだつて！！根が付くが寝付くの意味に通がるから……」アンコは必死に説明した。

途端に公平が吹き出し、えりたちも笑つた。自分がからかわれていたことに気づいたアンコはムツと膨れて、大いに悔しそうにしていた。

「お見舞いの花はあのがいいと思うよ」

公平は、ほとんど空を指差して言つた。その先にあつたのは大きなひまわりの花であつた。早速、伊鶴がそれを束ねて、季生子がリボンを結ぶと立派な花束になつた。

それからすぐに、千央たちは水野さんの車に乗り込み、真のいる病院へと出発した。

真の入院先は千央が熱中症で倒れた時に行つた、あの病院であつた。千央はその時のこと苦々しく思い出した。同時に、今話題にもなつていて、よしば総合病院でもあつた。そこは、精神科と内科が併設されていたのだ。

さて、目的地に到着した千央たちは、建物の裏手に回つた。前に

きた時千央は、真正面から入つたが、真のいる病棟の入り口は真横にあつたのだ。

そこには灰色の壁の昇降室があり、そこから真のいる病室の階に行つた。真の部屋は病院の最上階、すなわち4階にあつた。

「縁起悪いわねえ、4階なんて」階段を上り終え、真琴はゼイゼイ息切れしながら言つた。階段の横にある窓からは、病院の周りにあるヤシの木や蘇鉄がによつきりと何本も生えているのが見えた。よしば病院は山と田園に囲まれていて、その熱帯植物や白い堅固な建物との混在した風景がなんともアンバランスだつた。

病室の壁は真っ白でベッドもベッドカバーも白かつた。その中段辺りに真のあの困つたような顔があつた。

「死にかけたんだって？おい」公平は笑つて声をかけた。「可哀相になあ」

「言つてることと表情があつてねえぞ」真の顔が綻んだ。

皆と同じように川で遊んでいてもほとんど焼けずにいたその白い肌は、この数日の間にますます白く青ざめたようで、真の真っ黒い髪がその小さな顔の輪郭を縁取り、まるで白い壁に直接顔を描いたようだつた。

それを見た千央は、なんて病室が似合つ子なんだろうと真の病弱な雰囲気に少し感激したが、しかし直にそれはとても間抜けな考えだといふことに気づいた。

毅は暇つぶしにと持つてきたマンガを真に渡し、部屋を見回した。
「とってもいい部屋だね、でもすぐ高そうだよ」と、いきなり入院費の心配である。

千央も部屋の中を見渡した。確かにここはとても広い部屋で、千央たち9人全員が入つても、まだ十分に余裕があつた。壁際には冷蔵庫とソファベッド、割としつかりとした造りの棚があり、そしてどこかの野原を描いた大きな絵が飾つてあつた。そのせいか、病院の生活感のない無機質な感じはあまりしない。むしろ飾り気のないホテルの一室のように見える。確實に病院らしいと思えるのは真の

寝ているパイプベッドくらいだと千央は思った。

壁の絵のような顔をした真は笑い声をあげて、

「四人部屋が空いていなかつたんだって、病院の都合だから部屋代は同じさ。心配いらないよ」と、首をすくめながら答えた。

「へー、得したじやんか」ホツとしたように毅は言った。

毅は自分の家でケガをさせてしまったせいか、真の入院を他の子より余計に気に病んでいたようだつたのだ。千央たちは近くの椅子を引き寄せて、ベッドの周りに座つた。

「暇じやない?」伊鶴は聞いた。

「すつ」この暇だよ、だからテレビばかり見てる」と、真は言い、台に乗つたテレビを頸で指した。

ベッドの脇に自立式のテレビがあり、番組の明かりがチラチラと映つていて気になつた。それにはイヤホンが繋いである。せつかく個室なのだから、そのまま聞けばいいのに、と千央は思つた。

「ねえ、なんでハチに刺されたくらいで、こんなに入院が長いの」真は首を捻りながら答えた。

「よく分からぬけど、まだ治療が残つてゐるらしきんだ。検査とかがね」

「ねえね。ハチに刺された時、何ですぐに言わなかつたの?あの時はもう刺されてたんでしょ?」

考へてみれば退治を終えた直後から、真は声が嗄れ、顔は妙に赤いしで、様子がおかしかつたのだ。それに刺される危険性はある時が一番高いと思う。

「まあね。痛かつたけど、我慢すればそのうち治るかなと思つてほつといた。騒ぐのも嫌だし。でも、そのうちどんどんと息苦しくなつてきて……、本当に僕死ぬんじやないかと思つた」

切羽詰まつた真は、真夜中にほとんど這うようにして園さんの部屋に行つたらしい。真の様子があんまり変なので救急車が呼ばれた、そのあと救命士にたずねられて始めてハチに刺されたことを告白したようなのだ。

この息苦しさも嘔声も顔面紅潮の症状もハチアレルギーで起る、アナフィラキシーショックのせいだった。真は数年前、低学年だった時、ハチと戯れていてバスとやられたそうだ。「それでその時に身体の中に抗体ができてたらしくって、こんな症状がでたんだってさ」

ハチに刺され、下手したら死ぬこともあるらしい。千央は思つていたのよりずっと深刻な事態だったことを聞いて、びっくりしてしまつた。それとこれからはハチに不用意に触らいようにしようと決めたのだった。しかし真が本当に死んでいたら、原因はハチ毒だけではなく、余計な我慢のせいでもある気がする。性格が死に一役買うなんてなんだか損だな、とも思つた。

「まあ、これからはその変な堪え性は他のことに活かせよ」公平は慰めるように言つた。

真は上の空の調子で、

「え？ ああ、はいはい」と答えていた。

さて、今まで毅は話を聞きながら落ち着かない様子でそわそわしている、そろそろ真から不審な目で見られ始めていた。

無理もなかつた、実は真に伝える重大な出来事があるのだ。他の子が伝えても良いのだが、毅が伝えるのが一番自然だと思えた。しかしあまり、どこか全然良いことじゃなく、言い出し難い話だつた。それでもやがて、毅は重々しく口を開いた。

「あのね……、真。ゴッちが死んだぞ」

「は、死んだつて？ 何が？」へら、と笑つて真は聞き返してきた。
冗談だと思ったのだろう。当たり前だ。千央たちもまだ半分は信じられない。

毅は事の次第をゆっくり話し始めた。千央も一緒に思い出していた。それは、つい昨日起こつた出来事だった。

十五、討伐詐欺

「おはよう」

水色のパジヤマ姿の湖水が眠そうな顔で食堂にやつてきた。

「おはよう」

目を擦っている湖水に皆あこがれをかえした。

「ねえ湖水、今田は僕ら皆で幽靈を退治に行くからね」

やさしく毅は言った。

それに合わせて千央たちは真剣神妙な顔で頷いた、当然至極、という感じで。

それから皆揃つて湖水の顔に注目した。次に湖水が頷くのを見ると、いっせいに何かを決意した表情になつた。

こんな奇妙な光景の訳は、先日の幽靈騒ぎの一件にあつた……。

あのお化けの闖入騒ぎの後、千央は暗闇にまるで何かがいるかのように感じ、恐くて眠れないでいた。千央はカメのように布団の中に潜り、しつかりと目を閉じ、そのことは考えないようにしていたら、そのうち寝てしまつていた。次の日には、前の晩の恐さは跡形もなく消え去り、なにか特別に面白い経験をした時のようなワクワクした感じだけが残つたのだった。

確かに一時的には恐ろしい思いもしたが、明るい日の下にてみれば、なんであんなのを怖がつたのだろうかと不思議に思つて笑つたものだ。

朝食の席にも、話題にすら上らず、いつもなら意識もしないうちに忘れ去られそうな出来事だった。それきり終わつたと思っていた。しかし湖水は違つた。その日の夜皆が寝静まつた頃、湖水が眠るのが怖いと言つて泣きだしたのだ。千央はその騒動に一度だけ目を覚ました。湖水は大声で泣き喚き、部屋を駆け回り、狂人のように

大騒ぎした。

『おばけが来るーっ！…おばけが来るよーっ』 『助けてえ……』 『こあいーっ！…こあいーっ』

千央はその凄まじいパワーに恐怖さえ感じたのだった。これは夜遅く、何度も起こったそうだ。湖水にその度に起された園さんは、なんとなく寝不足の顔つきである。湖水は朝方やつと落ち着いて眠つたらしい。起きてきたのはついに七時だった、時計は12時をとうに回っていた。

さて、その昨晚の話を聞いた千央たちは、それまでの間、食堂に集まってどうしたものかと話し合っていた。思つたより大事になつてしまい、千央も皆もとても驚いていた。可哀相なことをしたと、皆は一様にしょんぼりとした。他の子も千央も騒ぎ立てて、湖水を怖がらせてしまい、罪悪感があつたのだ。

しかし、誰もこんなに影響するとは思つていなかつたのだ。

「そんなに恐かつたかしら？」アンコは呟く。

「普段、こういう普通のお化けの話とかしないから、慣れてないんだよ」毅が笑つて言つた。

伊鶴は、のんびりと言つた。「湖水は子供だから仕方ないさ」「そんなこと言つて、つるさく騒いだくせに。お前が一番やかましかつたぞ」と、真琴は指摘した。

「盛り上がりただけだよ」伊鶴は羞恥心を隠すかのように反論した。「恐い話の最中にあんな音がなつたら誰だってびっくりするつゝの」たしかにあの音はその場を盛り上げるのに最高のタイミングだつた。今思えば最悪だけれど。

「でも、あの音は一体なんだつたんだろう？かなり大きい音だつたけど……まさか、本物のおばけだつたりして」アンコはふふと笑いながら言つた。

「そんな訳ないだろ。まあ、あれには俺もびびつたけど」慶幾は白状するかのように言つた。

「だから、あれはただのラップ音だつてば」公平は言つた。公平に

よると、温度が下がつたり空気が乾燥すると木材が伸び縮んで軋みが起き、それでの小枝の折るような音が鳴るらしい。あの日は、夕方から気温が下がつていたから、ラップ音が起きてても不思議ではないといつ。

「ねえ、そういえばお前さ。昨日変なこと言つて湖水を慰めていたかつた?」毅は思い出し笑いをして慶幾に聞いた。

「ああ、そういうば言つてた。まるで効果無かつたけどな」

「さつぱりだつたな」毅は頷いた。

「なんのこと?」真琴は尋ねた。

毅は説明した。湖水の泣き声で起された慶幾は朦朧とした意識の中、この間家にやつてきたおばけを山に探しに行ってやると、約束したのだった。そして話のとおりおばけがいるのなら退治してきてやると言い、周りの皆は湖水を慰めようと、大きな賛成の声をあげたのだった。その時その場にいた千央も、頬もしそうに見えるよう、自信に満ちた顔で頷いた。しかし、聞いているのかいないのか、その後も湖水は大声で泣き続けたのだった。

それを聞いて公平は皆に聞いてきた。

「ねえ、湖水は本当にお化けがでたと思つて恐がつていてると思つかい?」

慶幾は少し考えてから答えた。「さあ、わからないよ、でもそりなんじやないの。そういうつて怖がつていたし」

千央もそう思う。幾つかの怪談話、そしてあのラップ音。幼い湖水が怖がるには十分な出来事だ。

「なんでそんなこときくの?」千央は聞いた。

「うん……。もしさうなら、退治という案はそう悪くないかも知れないと思つてや」ゆづくり考えながら公平は言い、そして笑つた。

この時、千央の頭の中にはクエスチョンマーク柄の風呂敷が一杯に広げられていた。

「どういうこと?」

「なんだつて?」

「何よそれ」

慶幾、真琴、アンコが同時に言った。毅は顔をしかめた。

「つまりだね」公平は机の縁を持つて前のめりになった。「存在しないものに怯えているのなら、それを退治したふりをすればいい、つて言つてるんだよ。嘘は嘘で解決。要は、ちちんぷいぶいのみたいに暗示をかけるつて訳さ」

「どうやるの?」

公平は手を細めた。「そうだな。まず、どつかにおばけの根城みたいなのを仕立てあげる。それから、そこに行つた……後に、湖水におばけはもういなくなつた、というとか。」

この話を聞き、千央の頭の中には大勢の子供に石を投げつけられ、泣きながら退散していくおばけの姿が浮かんでいた。

「どう?」公平は聞いた。

「どうつて言つたつて……」慶幾は呆れた声を出した。

「変だよねえ」真琴は言い、近くにいた千央と顔を見合させた。千央は目で頷いた。確かに原因を作つた当事者というのもあって、どうにかしたいといつ気持ちは千央にももちろんあるのだけど、しかし元々無いものを退治するなんていきなり無理難題な話であった。

毅は言った。「おいコラ。俺の弟はそんなにだまくらかせるほど馬鹿じやないぜ。そんなの簡単にばれるよ」

「そつか? お化けの存在を信じてるならいけると思うんだけどな」

公平は続けた。「湖水はまだ幼稚園児だろ? そのくらいならあるいは信じてもらえるかもしれないぜ?」

「でもね。湖水はあの場の雰囲気に当てられてなんとなく不安になつてゐるだけで、実際に幽靈がいると思つて恐がつてゐるわけじゃないと思うんだけど」千央は意見を言つた。

「当てられた?」伊鶴は笑う。

「う……つまり、幽靈は普段あまり信じていない。けど、皆が怖い怖い言つて大騒ぎした時の興奮が残つてゐるせいと、あんな風になつたんじゃないかと思うんだ」

「まあ、そつかもね」真琴は言った。「信じていないのに退治した

なんて言つたら白けるだけだろうね」

「むしろ、馬鹿にされたと思つて怒るんじゃない?」

いや、この場合、お化けなんかよりもっと気味悪い思いをするかもしれないのだ、普通の人がいきなり幽霊が見えて、退治しましたなんて言つたら、その人そのものがやばく見えてくる。正に今の千央の状態じゃないか。

「つまり信じていなくて退治の振りを演技とわからない場合が……最悪だな」

「完全に憑かれておかしくなったと思うだらうね」アンコの言ったことに皆笑つた。この冗談はここにいる子くらいにしか通じないだろ?。なのでより一層可笑しかつた。

皆はこのとつぴょうしのない案についてしばらく考えこんだ、湖水は上手く騙してくれるだろうかと。

千央も考えた、お化けを信じこんでいるかいないか。こればかりは多分個人差というしかない、恐らく。千央は参考に自分が湖水と同じくらいだった時を思い出してみて、びっくりしてしまつた。信じる信じないという以前に、千央は小さい頃、お化けの話を認識していなかつたらしい、ということを思い出したのだ。どうやら存在さえ知らなかつたらしい。

さらに小さい頃何かを恐れていたという記憶もない。なんとも幸せでのん気な幼児である。だが今は逆に恐いものだらけで、千央は今度はがっかりした。このベースじゃとんでもなくびびりやの大人になりそうなのだ。

そういえば、皆はどここの時点でお化けの存在を知つたのだろうか。それはある程度成長した脳から自然発生した空想の産物なのだろうか、それとも、周りの意地の悪い大人から脅されたのだろうか。まあそれは今現在の自分だったなと千央は今の自分とその将来像に、かなり憔悴し、ゲッソリとした自虐的な気分になつた。

「君はどう思う?」

急に尋ねられ、フレッシュナーのためか、毅は赤面しつつ言った。

「僕はうまくいくと思う。家のことをいうなら、人がお化けをお祓いするところを普段からみてるし逆にいいかも、……それで、それで吹っ切ってくれればいいかもしない」

「じゃあ、行くか、行っちゃうか」

公平は自分の案が受け入れられ、嬉しそうに破顔しながら言い、最終的にそういうことになつたのである。

はじめのうち、千央は両方に半分ずつ賛成だった。

あんなに恐がるのをみると試す価値はある氣がするが、嘘と見破られた時の立場のなさつたらない。それに騙すことにも罪悪感がある。しかし、湖水にそう信じさせて安心させることができるならそれはそれで良いと、とりあえずやってみよつとじやないかと、いう湖水の保護者である、毅の意見で心が傾いた。

とはいっても上手く演技できなければ嘘だとばれてしまうだろう。架空の話なのだから、実際にはいないものをじるよう見せなければいけないのだ。絶妙なタイミングで鳴ったラップ音や人影のよつな物の登場、皆の演技なしの興奮した悲鳴などの演出に後押しされ焼き付けられた恐怖を、全く冷静な時の素人の三文芝居で溶かなければならない、すごく難しそうだ。それに、

「私絶対笑っちゃうと思うんだけど」千央は誰にともなく呟いた。

「そんな時はな、下手に喋らず黙つとくんだけよ」公平は真面目な顔でこっちを向いて言った。

わかった、と言うように千央はただ頷いた。

「でもちょっと待つて」毅は引き止めた。「その前に湖水が昨日のことを見えているかさぐりをいれてみよつ、すっかり忘れててしまつているかもしない」

公平は頷いて言った。「それもそうだな。もし忘れてたら、いきなりおばけ退治云々言い出したりした僕らに混乱するだけだよ。まぬけもいいとこだ」

「それと仮に覚えていたとしても、湖水が嫌がるようなやうなやう

皆は毅の意見にいっせいに同意した。

そうしてやつたのよしに、毅の言つたことに湖水が頷いた。これで千央たちの、おばけ退治行きが決まったのだった。

早速、元気なく朝昼兼用の食事をとる湖水に毅は手作りの弓矢を湖水に見せた。この弓は、竹を裂き、曲げて作ったものに麻ひもをきつく張つたもので、矢は細い竹を尖らしたものだった。これらは午前の内に千央たちが増田家の納屋で用意してきたものだ。それから他の子達もそれぞれがおばけ退治に有効だとと思う武器を持つて集まってきた。

短冊の紙に悪霊大散と書かれた、手作りのお札（退の字が間違っている）おばけ退治にはお馴染みな塩を一掴み分、スリングショット（パチンコ）。半分はただの遊びになつていていたのだ。千央も一組弓矢を持たされ少しだけわくわくはじめていた。

「ちょっと、癪癩玉はやめとけよ。山家事になるだろ」

公平は伊鶴を叱つてそれを取り上げた。伊鶴はおとついの花火の残りの癪癩玉をパチンコの弾にしようとしていたのだった。

毅は弓の弦を中指でビシバシと弾いてみせた。

「ね、これで退治してやるから」

古いひもだつたのか、粉が空氣中に舞い、千央は鼻がむずむずと痒くなつた。

湖水ははしを下ろし、渋い顔で頷いた。これが駄目押しになつたような気がした。それは嫌がつてゐるというより、沈んでいるという顔だったから、昨日のことがまだ影響しているのだと千央は可哀相に思つた。皆はそれぞれの思いを巡らせ顔を見合させた。

かくして、劇場型おばけ討伐隊は、ここに発足し、一同は山に向かつて出発したのだった。

“劇団いきあたりばつたり、演目は妖怪討伐でござる。チヨーン
!!”

「ヤアヤア、湖水を怖がらす、クソ妖怪は何処じやーーー！余が征伐してくれるで候おーー！」

伊鶴はそう叫びながら、目茶苦茶に走り、とんぼ返りをして見事枯れ葉の山の上に背中で着地した。

千央はその可笑しさについ声をあげて笑った。

「今は演技しなくてもいいよ。湖水は見てないんだからさ」慶幾はそう言いながらも、口の端がひくついている。「とにかく今は土産になるものを探さないと」

山に入る前、千央たちの間でこんな会話が持たれた。

湖水におばけ退治を信じさせるような、証拠が必要じゃないか？

証拠？ 例えば、どういうものだよ？

そうだな。何かの骨とか血とかがいいかな。

そんなものの山の中を見つかるわけないだろ。あつたら新たな事件だよ。

別に本物を持つてこいとは言つてない。ぽい、ものでいいんだ。不思議な感じのするものを、各自手分けして探してくれ。というわけで、千央たちは山に入った後、何組かに別れてお土産探しに行くことになり、慶幾、伊鶴、千央が同じチームになつた。慶幾は地面を凝視しながら、「ああ、どつかに死体っぽいもの落ちてないかなあ」と物騒なことをつぶやいていた。

「あるわけないじゃん」と石を持ち上げながら伊鶴。

「そんなもの、あつて欲しくないよ」と千央は枯れ葉を焼き分けながら言った。

「これどう？」伊鶴は地面の中から何かを発掘してきた。それは黄色いアヒルの描かれた古びたマグカップだった。

「かわいい」と千央は言った。でも、カップは不思議な物でもなんでもない。むしろ身の回りにあふれている品物だ。

「こんなのは見つけたけど」次に慶幾が持ってきたのは、茶色い瓶だ。ラベルが貼つてある。開けると中は空っぽだった。

「まあ、何にもならないよな」慶幾は匂いを嗅ぎ、顔をしかめて瓶を捨てた。

千央は地べたを這つて探したが、何にも見つからず、手がぱさぱさになつただけだった。脇のより深くなつた森を見た、奥に行けば何か面白い物が探せるかもしけなかつた。

「意外とゴミないもんだね」

足で枯れ草の山を搔き分けながら伊鶴は残念そうに言った。

「それはそれでいいことなんだけどね」

慶幾が笑いながらそう言うのを、千央は背後で聞いた。

千央は草が生い茂る道に闇雲進んで行つた。川の音に混じり、遠くの方から皆の声が聞こえてくる。いつもと逆で、見るより聞く方がずっと忙しい。見る方は木と土と薦のみ……そういうたものしかなかつた。鳥や蝉が鳴きまくつている。これらがいるのは木のすつと上方で、姿を見る事はないのだが、無視できないほどやかましいのだ。中にはケケケケ、ケケケーッとまるで笑つてゐるかような鳴き声の鳥もいる。しかし、あまり愉快そうには聞こえない。

千央は丈高く伸びた草を飛び越えて奥に進んだ、特別濃い草いきれを吸い込んだ。上を見ると澄みきつた空があり、雲が千切れた綿飴のような形で浮いていた。空は「ぐく自然な色なのだが、青みが強過ぎて、むしろ人工物に思えてくる。かき氷のブルーハワイのような色だ。

千央は足元を見た。ここいらは死んだ草と生きた草が混在している箇所だった。夏の青々とした若草がある一方、長い間をかけて枯れ葉が堆積した、ふかふかの地面をしたところもある。そこはまるで反発力の弱いトランポリンのように、足を取られてとても歩き難い、千央がゆっくりと踏むと茎の折れるパチパチという音がして、そこから小さなクモが中から這い出でてきた。

千央はぎょっとし、後ずさつた。といつても、クモだけのせいで

はなかつた。どこからか、助けを呼ぶ声があがつたからだ。まさかお化けが本当に出たのかと思い、声の出所を探そうと振り返った。

引き返し始めて千央は混乱した。あれ？さつきまで左側で川の音がしていたのに今は右側から聞こえてくる。……いやこれで合ってるんだ、来た道を戻つてるんだから。しかしここはどこだろ？…？見覚えがないようで、見覚えがある。木ばかりの風景なものだから、全部に見覚えがあるのだ。まずい、迷っちゃつたんだろうか。千央はパニックになつていた、パニックになつた時つて梅干しを食べて唾液がでているような、明らかに何かが分泌されているような感覚が脳みそにある氣がするのだ。千央は不意に思い出した。ああ、そうだ。自分が幼い頃一番怖かつたのは迷子になることだつた。そういうやその時も、母親は全く心配してはくれなかつた。あんのクソ婆め。畜生。

千央が怒りのまま、ひたすら突き進んでいると、ふいに視界が開け、木のない空間が見えてきた。そこに行こうと大きく踏み出した時、木のあしに足を取られ、千央は前につんのめつて倒れてしまつた。千央が飛び出したのは木のない開けた場所だつた。誰も見ていなかつたが、赤面しながら千央は立ち上がつた。膝がヒリヒリするので見ると、擦りむいていた。畜生。

ここはうまい具合に木影が集まるところで、夏のコントラストの強い影とは違う、まるで秋か春の空間がここだけに残留しているようだつた。木が逆スポットライトのような効果を果たしている。とはいえ、空気はまさに夏の熱さであつた。木の叉になつたところにはクモが大きな巣を張つていた。

千央はそこに落とし穴を見つけ、ほつと一安心した。落とし穴の近くには道があるはずだからだ。どうやらそこまで奥まつた所には来てないみたいだ。

あ、いたぞ。見つけた。

千央は駆け寄つた。何人かが草がまだらに生えた盆地にいて、木の所に円をかくよつにして群がつてゐる。千央は興奮を納めつつ、

何食わぬ顔でその中に加わった。盆地の大きくへこんだところには黄色いストロー状の枯れ草がこんもりと乗つかっていた。

毅がこれはイノシシの巣だと言つた。

なるほど、と千央は思った。この大きさだと、イノシシくらいのサイズにはちょうどピッタリだろう。

千央はそこに毛が絡み付いているのを見つけ、それを手に取つた。かなりの剛毛で握るとなかなか離すことができない。針のように尖つていた。色は茶色かつた。

貸してと言われ、千央は毅にイノシシの毛を渡した。毅はそれをまじまじと見たり、匂いを嗅いだりして観察した後、こう言った。

「こいつをおばけの毛つてことにして、おばけ退治の証拠にしよう。千央はそのことに異議は無かつたが、自分たちの追つているものはこんなにも毛深かかつたのか、と驚いた。千央はもつと実態のない偽げな幽霊のようなものを想像していたので。

それからしばらくの探索活動の結果、戦利品は次のようなものがあつた。

伊鶴の見つけたマグカップ、イノシシの毛、3cmはある大きめのビー玉、白くなつた木、何かの茶色い羽、それとなぜかカミキリムシだ。カミキリムシは関節をキシリシいわせ、慶幾の手の平を歩き回つた。

千央はまずビー玉を手に取つた。このビー玉はすぐ変わつていて、光があたると虹色に光るのだ。まるでそれは、雨あがりの道路に車から漏れたガソリンみたいな色だつた。なにかの拍子に固まつてしまつたシャボン玉みたいにも見える。大きさは親指と人差し指をくつつけたくらいで、持つとかなり重みを感じた。

続いて白く変色した木は、流木のよう滑らかでささくれがなく、細く尖り、まるで何かの動物の牙のようだ。そして、羽ペンにできそうなくらいの立派な羽は、クモの巣に引っ掛けているのをアンコが見つけた。単純に留守番している湖水へのお土産になると思つたそうだ。羽の柄は黒と白の縞模様だった。千央は綺麗になるよう、

指で挟んで撫で、毛羽を整えてやる。すると、より滑らかでつやつやになるのだ。

これらを総合すると、千央たちが退治した幽霊は、長い牙に茶色い毛の生えた体に翼を持つた中々に恐ろしい姿をした化け物だったようだ。

公平は羽を見て言った。「これは何の鳥の羽だろ？」

「多分、ワシじゃないとは思うけど」と毅は言った。

一人は羽をまじまじと見た。

一方、千央は全く違う方面を見ていた、すぐ側の雑木林の中に丸丹棒に脚がついたような生き物がいたのだ。生き物はひたすらこちらに近づいてくる。目は小さく、上向きの鼻面、尖った牙……体色はそのまま樹木の外皮の色をしている。

間違いない、イノシシだつた。

千央たちのいる場所から、数メートル先には数日前捕まえようと頑張っていたイノシシが行儀良く脚を揃えて立っているのだ。

「ウワツ！！」と千央は大声で叫び、それを指差した。

皆も千央が差したものを見つけ、イノシシはしばらくの間姿を見せつけていた。皆もそれに釘付けになつた。しかし、「ウアアアアアー！」千央たちは悲鳴をあげ、散り散りになつて林に逃げ込んだ。イノシシはいきなり猪突猛進とばかりに、突然千央たちの中に飛び込んできたのだ。

イノシシは一直線に突っ走り、反対側の林の中に飛び込んで消えた。千央はア然として、低木の影から窪地を覗き見た。そこにはもう、イノシシはいなかつた。大きさはおじさんが話してくれたものとは比べものにならないほどに、小さかつた。せいぜい犬くらいだろうか、それでもミルコの方が大きいだろう。しかし、あの足の速さと力強さといつたら！まるでお寺の鐘打ちの棒みたいだつた。千央の周りの林で、姿は見えないが興奮した囁きが交わされたのがわかつた。鳥がクククと笑い、樹木がざわめいた。また、イノシシが戻ってきたのだ。

すると木の擦れる音が聞こえ、慶幾が立ち上がった、それから逸足でイノシシの方へと駆け寄つた。イノシシは少し逃げるそぶりを見せたが、ほとんど意にかえさず、今度は反り返つた鼻面で地面を掘り始めた。

慶幾は「」に矢を番え、数メートル先のイノシシへ狙いを定めた。力が持たず、腕がぶるぶると震えている。

「おい、やめろ」と公平。

「いいから。黙つて見ててよ」慶幾は鋭い声で囁き、ますます弓を引いた。

その場はしばらくの間、静寂につつまれた。慶幾は矢を射つた。しかしそくにこれは駄目だとわかつた。矢の軌道は芯から大きくぶれ、回転していたからだ。竹の矢は弧を描いて飛んでいき、地面に先がぶつかり、自らの弾力と勢いで土の上をビヨンと跳ね、ボトリと落ちた。イノシシはピッキーと一声鳴き、悠々とその場から去つて行つた。どこかで誰かの笑い声があがつた。固唾を呑んで見守つていた千央もほつとして力が抜けた。

慶幾は「」を見て、怒つた声を出した。

「何だ。これ使えないのかよ」

「使えるわけないだろ。格好だけのために作つたんだから」と毅は言つ。

「期待ハズレだつたなあ」伊鶴は不満気だ。

「でも、即席にしては案外健闘したじゃないか」公平は矢を拾おうとそちらの方へ歩きながら言つた。竹の矢は、千央たちから数メートル先にある木の根元に落ちていて、茶の地面に小さな影を作つていた。

「ひもが乾燥し過ぎてるから、真つすぐに飛ばないんだ」伊鶴は言つた。

「家に帰つたらもつといいものに作り直そつよ。ひもじゃなくてゴムを使つたら上手く飛ぶかも」

「そんな長いゴムあるのか?」

「輪ゴムをいくつかつなげたらいいんじゃない？」と、真琴は提案した。

「あーっ、ゴッち！」急に公平の悲鳴があがつて、皆はビクッとしました。始めは大声を出して千央たちを驚かそうとしているのかと思ったが、どうやら違うらしい。公平は矢を持ったまま立ちつくしていて、その影はピクリともしない。

千央たちが駆け付けると、公平は震える手で自分の頬をペタペタと触つて、驚愕した顔つきをしている。

目で指した先には藪があり、真っ白のヤギがいた。茶色の草の中で横たわっている。ヤギはなぜか、全く動くことがなかつた。何かようすがおかしい、顔が変だ。いや、全部おかしい。死んでる。間違いない。

ヤギの死体、それは、他に何があるうか、もちろんゴッちだった。

ゴッちはヤギの模型のように両を開けたまま、口ronと横たわっていた。力無く、というより脚をピンと伸びきらせており、体は硬直し、まるでヤギの剥製のようになつていてる。

皆はヤギの死体の周りに集まりゴッちを見下ろした。

「えっ、何で……？」とアンコは言った。

千央も同じように思った。しかし、千央はなんでゴッちが死んでいるのか、というより、そもそもゴッちは水野さんの家に預けているのではなかつたか、なんでここにいるのだ、という風に考え出していた。なぜなら、千央はひどく動搖して、悲しくなつてきていて、それについて、すぐに深くは考えたくなかったからだ。これはゴッちの死と同様、意外なことだつた。

毅はヤギの前にしゃがみ込み、前脚を掴んでゆっくりと持ち上げ、取り落とした。ゴッちの脚はゴム人形の様にボトと鈍い音をたてた。

「もう死後硬直が始まってる」

毅は周りを憚るかのようにささやいた。

「いつ死んだんだ、前見た時は元気だったのに……。だいたいなん

でここにいるんだよ」納得できぬよう慶幾は言った。

「また逃げたんだろ。ゴッちのことだから」毅は静かな声で言った。
「昨日湖水と見に行つた時はいたよ」珍しく動搖しながら真琴は言った。一秒前に元気でも今は死んでるんだから、意味ないだろ、と千央は腹が立つた。

「なあ、もしかしてあれのせいじゃなかろうか、あの……例の……」慶幾は言い難そうに呟いた。かなりばかした言い方だつたが、その場にいた全員が意味を理解したと思う。

慶幾はこれが病院から逃げ去り、鎌を持ち去つたと言われている男の仕業ではないか、と言つていいのだ。もしこれがその鎌男のやつたことならいろんな意味で大変なることになる。千央は血の気がひいた。

無論、公平はそれを否定した。「馬鹿な、そつならそれなりの怪我してるはずだろ。全然傷はないようだし、血も出でない

「そうだよねえ……」

慶幾はふーっと、溜息をついた。その長い溜息を聞いた公平はまさか、と言つて笑つた。

と言いつつも一同は、死体をひっくり返したり、あちこち触つたり、もしかしたら死の原因になつた怪我の後がどこかにないものかと調べていつた。随分念入りに調べたのだが、幸運なことに、ヤギの体には切り傷どころか、すり傷一つ見つからなかつた。ゴッちがケガで死んでないことは明らかだ。じゃあ、ゴッちは何で死んでしまつたんだろうか?

何気なく千央は硬い毛の生えた背中を撫でた。真琴も遠慮なくべたべたと触つていた。しかし、慶幾は触りたがらなかつた。

「かわいそう」と、伊鶴。

皆は元気だったのに、と口々に言つた。

「変なもんでも食べたんじゃない?」

慶幾はそう言つてフンを見た。ゴッちのフンはポロポロとした粒状になつていて、周りにはハエが数匹渦を巻くように飛び回つてい

た。アンコは手の平を降り、ハエを追い払った。

千央たちはゴッヂの顔をジッと眺めた。ゴッヂは苦しむでも安らかでもなく、ボーッとして空虚な顔をしていた。自分が死んだのを理解しているのか、していないのか、よくわからない顔だった。

「ゴッヂを埋めなきやならない」きつぱりとした声で公平は言った。それが唯一の慰めであるかのようだった。

「コイツをこのままにしておく訳にもいかない」この暑い季節、ゴッヂにもハエがたかりはじめるだろう。次の日来てみたら、ウジが湧いていたとか、目玉が鳥に食われていた、なんてことになつたら誰もさわれないだろう。そしてそのうち、腐りだし、堪え難い匂いが漂いはじめる、と。

食う腐れるの描写に恐れ戦いた千央たちは、すぐそれに同意した。すぐ側にゴッヂを埋めるのに都合のよい穴があつた。さつき千央が迷い込んだ場所のあの落とし穴だ。毅は首を千央は前脚を持ち、伊鶴は後ろ脚を、公平は最も重い腰を支え、そこに千央たちはヤギを運びこんだ。

その間真琴とアンコ、慶幾は野の花を摘んできて、それをゴッヂの上に撒いた。ゴッヂ白い体に薄黄色やピンクの斑点がぽつぽつと咲いた。

皆は黙り込み、周囲にある土の山を崩し穴に入れていった。お尻から顔へ順に埋めていき、顔が最後に余つた。土の丸窓から見えるゴッヂの顔は、なんだかレリーフのように思える。ゴッヂの顔を埋める時、千央はゴッヂにさようならを言ってお別れした。

それから土を山のようすに盛り、塚に仕上げ、周りを草花で飾りつけた。そして手を合わせた。

千央は毅の横顔を眺めつつ、実は彼が泣き出さないか、心配に思っていた。台風の時に秘密基地においてけぼりにしてきたことは、あんなにも取り乱していたのに、今この落ち着きぶりはどうだろうか。すごく変なやつだな、と思いながら。

「うーん」

随分長い話になつたが、真は一度も不満なようすを見せずには聞きた。

「では、ゴッちに怪我はなかつたんだね？」

真は聞き、皆は頷いた。

「うん。全くの無傷だつたよ、だから何かの病氣で死んだんじゃないかと思つてる」と慶幾。

「でも、前日までは元気だつたんだよ。湖水がやつた工サもよく食べてたし」真琴は言つた。この会話は何回も繰り返され、もはやお馴染みの堂々巡りだつた。

「水野さんの話じや、前の日の夕方見に行つた時は確かにいたんだつて。だから、その後なんかあつたんだ」

今まで千央たちは散々ゴッちの死因を考察をしていたが、ほとんどアイデアは出尽くしてしまつていた。なにせ、傷一つなく一晩で死に至るヤギの病など、ほとんど思いつかなかつた。毒殺の線も話題に出たが、しかし一体誰が何の目的で一介のヤギをわざわざ毒まで用いて殺すというのだと、すぐに反論された。

不意に背後で引き戸のガラガラという音がし、看護師さんが入つてきた。看護師は昼食だと呼びに来たのだ。それで、この会話は一旦打ち止めになつた。真によるとこの病院では、動ける患者は、普段ナースステーション前にある食堂に集まり、大人数で食事をとつてているという。しかし千央たちが大勢でいるのを見て、御膳を運んできてくれたのだ。

きつとこんな大人數で行つたら迷惑なんだろうなと考え、千央は笑つて言つた。「でも他の患者さんを見たかつたな」真は「なんで?」と聞き返した。

千央は訳を話した。自分は反対運動をされるくらい嫌がられる人たちをもう一邊見たいのだ。前の時は特別意識していなかつたので、

機会があればしつかり観察したいと思つていたのだ、食堂に集まる患者の中にもいるに違いないから、と。

「それは聞き、大変きつぱりとしたようすで言った。

「いや、見れないよ。ここにいるのは内科の患者さんだけだよ。他の棟にいるんだ」 真はお盆を自分の方へ引き寄せた。「確か西棟にね」

「そうなのか。残念」 千央は言葉の通り、がっかりした。

真の昼食は食パン、ホワイトシチューに、なぜか大根のなますを組み合わせるという謎の献立だった、明らかに味の組み合わせを考えてないメニューだったが、千央たちは興味津々で覗き込んでいた。皆の注目を浴びて、真はかなり食べ辛そうだった。昼食はもちろん千央たちにはでない、だから売店に行つて、何か食べる物を買いに行くことになった。

真が進んで先に立ち、道案内をしてくれた。この病院の売店は一階の待合室すぐ側にあつた。病院の規模の割にこじんまりとした店で、千央たちの他に客は一人しかいなかつた。店の陳列の仕方は駅構内の売店に似ていて、種類は多いが数が少なく、一つ、二つしか置いていない商品もあつた。カップ麺の品揃えがすごく充実していたのと、食料品とオムツとが一緒の棚に並んでいるのが病院の売店という感じがし、ちょっと面白かつた。さらに以前テレビで見たことのある、透明なプラスチック製の急須を千央は見つけた。値段を見ると600円くらいだった。

千央はクリームパンを選びひとり、毅はカップ麺の新味を選び会計した。全員分で1700円にいかないくらいだった。全員が買うとパンの棚はほとんど空になつてしまつて、千央は自分たちはたくさん買い物をするいい客なのだろうか、それともパンを買い占めた迷惑な客なのだろうかと、しばし考えた。

病院は三階建てで、一階は外来になつていた。一部がピロティ形式になつていて、そこにはプランター植物が並べてあり、中庭のような使われ方をしていた。窓が大きく、十分陽が差し込むので廊下

に明かりをつける必要はなかつた。皆は窓際のテーブルに並んで座り、パンにかぶりついた。

「もしかしてや。」ゴッチはフィラリアだつたんぢやないかな」真はふと思いついたように言つた。

しかし、「いや、違うか。突然死んだんだもの」早々に結論をつけ、取下げてしまった。

「フィラリアって何?」千央は聞いた。横文字の病氣は今一ピンとこない。

「蚊に刺されて移る、寄生虫のことだよ」

「うへえ」

「僕ん家の犬もこの季節は薬を飲ましてゐるよ。でも犬以外は感染しないのかも、猫もいるけど、猫には薬飲ませてないもの」

「ああ、知つてる。心臓にそうめんみたいな虫が生えるやつでしょう?」慶幾は言つた。

「うげえ」

そういうえば、と千央はあることを思い出した。千央の家の近所の動物病院にはある風物詩がある、毎年暖かい季節が近づくとフィラリアに寄生された犬の心臓の模型と写真どがよりにもよつて受付カウンターに展示されるのだ。その虫は極細の上、白色をしていて、あまりにもそうめんに似ているので、グロいのかそうでないのか、よくわからない代物なのだ。そのことを話して聞かせると、無論皆は氣味悪がつた。

しかし、真は言つた。「それはいい方法かもしねによ」

「お金がかかるから、薬を買うのを渋る飼い主がいるつて聞いたことがあるよ。犬には保険がないからね。氣味の悪い模型を見てショックを受けたら、買つてくれると思ったんぢやないかな」

「それも手かもね」千央は納得した。そして、口髭を生やしたそこの医者を思い出していた。あの獣医、人の良さそうな顔して中々やり手だな、と考えながら。

「ところで湖水はその後どうなの?」真は聞いてきた。

「この質問には公平が答えた。「もう平氣みたいだよ、昨日は普通に寝ていたよ。あの討伐詐欺はあんまり意味がなかつたようだね」千央たちの帰り際、真は餞別だと黙つて何かが入つたレジ袋をくられた。

伊鶴は中を覗いて吹き出し、それを突つ返した。「いらぬいつて、こんなのもん。誰も読まないよ」

しかし真は、何やらしたり顔で言うのだ。「この雑誌の84ページに面白い記事があつたんだ。とやかく言わずに読んでみなつて」確かによく見るとそれは新品で、さつき行つた商店の袋に入つていた。真はわざわざこれを購入したのだ。それは有名人の「ゴシップ」が載るような週刊誌だつたが、中にはなるほどと思わせるような内容の記事が載つていた。

『【人権のためか！？はたまた……、自治体の対応の真意とは？】

峰山と雪夢山の間から清冽なト夢川の水が注ぐ西昇町。九州北部の人口人たらずの小さな町である。ほとんどの面積を森林が占め、間に小規模な田畠があり、牛舎が所々に点在する。

こののどかな田舎町に住民を一分する問題が持ち上がつているといつ。片桐夕日記者が取材した。

ことの発端は台風6号の上陸した今年8月7日。台風6号はに九州各地に大きな爪痕を残したが、山間にある西昇町も例外ではなかつた。同日午後三時ごろ、市役所から発令されていた避難勧告は増水した河川による洪水の警戒から避難命令に変わる。対象住民は一斉に避難し始めていた。さらに長雨の影響で山崩れがおき、電線の断絶により周辺一帯が停電がおこつた。なお、停電は午後四時過ぎに復旧している。

同じ頃、山のふもとに位置する私立よしば病院では別の問題が起きていた。職員の一人が精神科病棟に入院している患者Kの姿が見えないことに気がついたのだ。職員たちは院内を捜索するが発見できず、同日通報を受けた警察と消防が、明朝から山中の小規模な搜

索を行つたが、これも発見には至らず、近隣住民への告知は11日までなかつた。

この時逃亡した患者K氏の行方は現在をもつてしてもわかつていない。直後の搜索と情報公開の遅滞が今回のような事態を招いたのではないかと指摘されている。さらにこの隠蔽ともいえる病院側の対応について、市長の指示があつたのではないいかとの疑惑の声があるのだ。それはなぜなのだろうか……。

【背景には地方商業活性法か?】

昨年の7月、過疎化地方商業活性法が成立。国から地方自治体へ補助金が出ることが決定し、その施行に間に合つよう、全国の自治体は地元の有望企業の認可を目指している。

ここ、西昇市の場合はよしば病院を認定させようと計画があるのだ。

よしば病院は1985年に開院。内科、心療内科、精神科、リハビリテーション科を併設し、現在ベッド数は68床。しかし、認定されるにはベッド数が足りず、認可規定内にするため病院側は病棟を増設し、156床まで増やす予定だった。

しかし新しい病棟の入院対象者は精神科の患者であることから、一部の住民の間で反対の声があがつた、その反対運動は8月までにじわじわと広がりを見せていた。

今回の患者の失踪騒ぎにより、病院側の管理状況への不安や、不信感などで、住民の意見が反対にますます傾くことは明白であった

……
』

十六、カエルと二ワトリ

ここ西昇町の図書館は白く粉を吹いた煉瓦の建物で、とても古かつた。左右対象の形をしており、正面から見ると、まるで羽を広げた飛び立つテントウ虫のようであった。

中は灰色のカーペットが敷いてあり、精緻な模様つきの白く濁ったランプが壁についている、千央は図書館にしては豪華だなと思ったのだが、それもそのはずで何かの資料館もかねているらしい。千央は廊下でホシ胃腸薬と書かれた古い看板を見つけ、たくさんの中ガメの頭蓋骨や一組の甲冑とすれ違つたのだつた。

千央はまず2階の自然科学コーナーへ向かい、高い本棚を背伸びして漁つた。難しそうな表題が色々と並ぶなかに、調度良さそうなものを見つけた。黄色の表紙の「臨床家畜診療」という本だ。

早速それを棚から取り出しながら、千央は昨日見た夢のことを思い出して、それはとても短い夢だった。

夢の中の千央は小さな子供に戻っていた、多分5歳か6歳くらいだろうか。

部屋の小さなテーブルにはゲージが置いてあり、中には茶色のジヤンガリアンハムスターが入っている。千央はふと思い出した。そのくらいの年の頃に実際にハムスターを飼っていたのを。名前はチビ太といい、名前とは違い、家にやつてきた時はすでに大人サイズになつていて、別にチビじやなかつた。しかしそく人に慣れ、手の上でご飯を食べたりする手乗りハムスターだつた。

ある時千央は、ヒマワリの種を山盛り入れた陶器の小さな皿持ち、ケージの中を覗いた。チビ太はケージの真ん中でぴくりとも動かなくなつていた。始めは変わつた寝姿かと思つた。千央が手に乗せると、生きている時はあんなに温かかく柔らかかつたチビ太のお腹が、石のように冷たく固まつていた。

千央はそれに衝撃を受けて、ハツと目を覚ました。これは今まで

ほとんど忘れていた出来事だった。

そのあと千央は、自分の飼い方が悪かったのだろうか、としばらく思い悩んだことを思い出した。確かにチビ太は前の日まで元気だつたのだ。なんで突然死んでしまったのか、大いに首を捻つたものだ。

後になつてわかつことなのだが、どうやら餌にヒマワリの種だけやつっていたのがいけなかつたようだつた。ハムスターの可愛らしさに惹かれて、チビ太を飼い始めた千央だが、テレビで見ただけで詳しい飼育法を全く知らなかつた。ヒマワリの種はハムスターの大好物でよく食べる。しかし、同時に高脂肪であり、それだけを餌にしては栄養が偏り、体にかなり悪いことだつたらしい。

それをハムスターを飼つている友人との何気ない会話で知つたのは、つい最近のことであつた。

唯一の救いはチビ太の死に懲りて、今日まで、新たにハムスターを飼わなかつことだらう、下手したらまた同じ間違いを犯してペットと殺していたかも知れなかつたからだ。

目についた本を何冊か集めてしまつと、千央は雑誌コーナーに行き、一冊の雑誌を取つてきた。これは先日真がくれた雑誌と同じもので、シユピオという題と色鮮やかなカエルと二ワトリが表紙に印刷されていた。

それからテーブルに座つて、それらを読みはじめた。そこへ毅が現れ、向かいに大量の本をどさつと置いた。

「犬の飼育本をいくつか持つてき、ずいぶん沢山あつたよ。これにフィラリアのこと何か載つてるといいけど」

「載つてるとと思うよ、真も知つてたんだからさ」と千央は答えた。

「よし！ 探すぜ！」

毅は張り切つて本を開いた。

朝、千央がハムスターの一件を話した時、毅は自分たちでゴツチ

の死因を調べようと言いだした。毅も気になっていたのだ、日に日に弱つていったならともかく、ゴッヂの死は突然で、まさに不信過ぎた死だつたからだ。それに昨日、例の脱走騒ぎがますます大きくなっているのを千央たちは知つた。これをそのままにしたら、時期的に彼、
脱走した人 のせいになつてしまふかも知れない。
いや、他の人がそう考える可能性がどうのといつよりも、実は千央自身がそうかもしれないと考えていたのだ。

千央は例の黄色い本に視線を戻した。

この本には、一般に家畜と呼ばれている、牛、馬、ひつじ、ヤギ、豚などの注意すべき病気やその予防法が書いてある。千央はまずそのヤギの項目を開いて、ページを斜め読みした。最初に目に留まつたのは、ヤギの病気の代表格だという腰麻痺だつた。腰麻痺は脳脊髄系状虫症ともいい、蚊を媒介にヤギに感染する病気らしい。そこはフィラリアに似ている。発病時期は初夏から大体秋頃までで、条件にあう。千央は毅を呼び読み聞かせた。

「ねえ、見つけたかもしんない……。この腰麻痺つてやつ……。ほら蚊からうつる、発病は夏と秋……。2週間から40日くらいかけて進行……？……なんか違うみたい。兆候はふらつき、足のひきずり、よだれつてかいてある……。違つみたいだね」

千央はさつさと質問を終わらせた。

続いて鼓脹症の欄を読んだ。反芻動物のヤギは穀物を食べ過ぎると、第一の胃の中で過発酵してしまつて、最悪の場合窒息死するらしい。かなり苦しそうな死に方だ。

だが、これはありえない、と千央は息をついた。ゴッヂの普段のご飯は山に生えている雑草だつた。おやつに米煎餅をあげることもあるが、それはごくごくたまにで、食べ過ぎとまではならないのではないか。

ここまで考えた時、毅が声をあげた。

「ああ！…あつた！…フィラリアの写真！…キモイ！…
と、テンション高めである。

もう知ってるのに、毅は本をひっくり返し、わざわざ千央に見せてくれた。

そこには真っ赤に充血した心臓から虫が吹き出している写真があった。フィラリアに感染した犬の心臓は、そうめんと一緒に盛られた生レバーのようだ。虫は体液でてかてかぬるぬるしている。千央はさらにじつと見てこう思つた。いやこうして本物を見ると、あまりそめんには似ていなかもしれない、もつ少し堅そうな、プラスチックのような感じもあるな。

「しかし。こんなひどい病氣に飼い犬がなるのを、予防しない飼い主ってとんだ人で無しだよな。マジで犬飼う資格ねーよ！…」

毅は怒つて早口になつた。「千央ん家の近所の動物病院だつけ？そこは正しいよ、こんなのは見せられたらみんな素直に薬買つだらうし」

「あ、うん。そうだろうね」

千央はほとんど上の空で答えていた。次のようなことを思案中だったからだ。

人間が前の日まで何の不調もなかつたのに、次の日床に打ち転がつていたら、死因は何だろう、やはり梗塞か心臓発作、それか殺しをまず疑うのではないか（ヤギなので自殺は省いた）。無傷の殺しの方法といえば、まずは毒殺だらうと千央は考えた。ゴツチが誤つて毒草を食べた可能性がないだらうか。

千央はヤギが中毒を起こす植物を調べて、毅に言つた。

「あのさあ、ゴツチはもしかして、毒のある植物を食べて中毒になつたのかもしれない。アセビ、レンゲツツジ、ヒマ、ジキタリス、ジャガイモ、タバコ、チョウセンアサガオ、キヨウチクトウ、ネジキ、ケシ、ハウチマメとかが毒になるらしいんだけど。山にこういう草生えていない？」

毅は戸惑つた様子で答えた。

「さあ、とりあえずタバコとケシは山にないだろう……？畑のジャガイモが何かに食われたつてことも今のところない。朝顔は庭で育

てていたようだけど、チョウセンアサガオかどうかまではわからないよ。他の名前だけ言われてもわからないよ

それから毅は言った。

「ねえ、前テレビがなんかで、野生動物は自分の毒になる草を本能的に避けるってことを聞いたことがあるよ。ゴツチは一応野良ヤギだし、そういうことは起きないんじゃないかなあ

「じゃあ、違うか」

千央もそういう話は聞いたことがある、第一野生動物が自分にとつての毒草をホイホイ食べていたら、とっくに死に絶えているはずだ。というわけで、中毒死は候補からはずした。

続いて、自然野の草を食べていることから、急性硝酸塩中毒といふのは無し。

他にも感染症の類が載つてはいたものの、それに一日で悪化して死ぬような病気ではないうえに、死に至るのはまれであるとかいてあつた。極めつけはこれらの症状と全く一致していないことだつた。千央は思い出した。そもそも、ゴツチには症状といえるものが全く見当たらなかつたのだった。死ぬ様も見ていなかつたし、いきなり死体を見せられて、手がかりもなく死因を当てろと言われても困る。自分から始めたのだが強くそう思つたのだった。

それから、ゴツチの死体をもつとよく観察しなかつたことを、今さらながら千央は後悔していた。例えば中毒を起こした時に出る、よだれの跡だとか、下痢で肛門付近が汚れてたりだとか（見たくはないが）、なにか有用なヒントがあつたかもしけなかつた。なにより第一に、素人が本を見ただけで死因を特定しようなど無理があつた。大体そんなに簡単診断ができるものなら、獣医などいるんじゃないか。

それでも、千央はいくつもの本を読み続けた。その結果、豚の妊娠期間が3ヶ月3週間3日だということや、ヤギには上の歯がないのが普通なこと、牛の腸はぐるぐる巻くようにして体におさまっていること、などがわかつたが、ゴツチの死因の手がかりになりそう

なものはなく、千央は失望して溜息をついた。これまで消去法で唯一可能性がありそうのが、野草による中毒死だ。しかし、千央には中毒死であつてほしくない理由があつた。何故かというとだ。

千央は毅に言った。

「ねえ。もし、中毒で死んでたとしても、こつちは結局は確かめられないよね。食べたものをわざわざ調べるわけにいかないし」

毅は難しい顔で聞いていた、そして頷き、

「まあ、そうだね」

と言つた。それから、思い出したかのように聞いた。

「ねえゴッチは死ぬとき苦しんだと思うか？」

千央はびっくりしながらも答えた。

「さあ、普通死ぬときは苦しむんじゃないの？ それなりに。死んだことないからわかんないね」

「す」「ーく苦しんだと思うか？」

「うーん、……調べたなかでは鼓張症が窒息死だから苦しいと思つ、あと中毒死も、毒で死ぬわけだし」

千央はそう言いながら、自分も息が苦しくなつてきた。まるで千央たちが死因を見定めることによつて、またゴッチに新たな苦しみを押し付けているような気がしてきたのだ。つまり自分たちが死因を知らないでいるうちはゴッチの死は安らかなままで、知つたあとに跡付けで苦しみが与えられるような気がしてくるのだ。それが気のせいなのはわかっている、それに実際に苦しくなるのは千央たちだといふことも。「ゴッチは臨終の苦しみを終えて、もう楽になつてゐるのだ、そこには肺もなく、痛覚もないし、苦しいという感覚もない。だからこそ、それが無性に悲しいのだ。

「なあ、牛の臍つて四つもあるんだつて、どうりでこいつらよく食べるはずだよなあ」

毅は唐突に牛の解剖という本を見ながら言つた。さつきの真面目な会話は何だつたのだと思いながら、千央は内心ホッとした。そして笑つて言つた。

「甘いものは別腹つてレベルじゃないねえ、これ」

しかしこう言いながらも、無限に食べられる胃袋があれば、さぞいだらうなと千央は思った。千央はいつも、学校の給食を全部食べきれなくて残してしまうのだ。

調べ物が一段落した後、千央はいくつかめぼしいものをメモに取つた。

『脳脊髄炎状虫症 牛から蚊でうつる、ミクロフィラリア、寄生虫
鼓張症 穀物類の食べ過ぎ、それが胃の中で発酵し、窒息死する
中毒症状 歩行失調、呼吸マヒ、心臓マヒ、痙攣、涎、嘔吐、昏睡、
下痢……』

これらの漢字は難しくて（特に痙攣の攣）、目と腕が疲れた。ふと、向かいにいる毅を見てみれば、かわいい子犬の写真集をにやにやしながら夢中になつて見ていた。無性に腹がたつて、千央は本をむしり取りたかったが、表紙のビーグル犬と目が合つたので急遽それはとりやめたのだった。

暇ができた千央は次にシユピオを読みはじめた。

『この件について、病院側が行つた説明集会での住民と病院側とのやり取りを一部抜粋して紹介しよう。

院長はまず、地域住民への迷惑と心配をかけていることを謝罪。失踪から捜索までの経緯を説明の後、住民との質疑応答の場がもたれた。

最初に六十歳代の男性が立ち上がり、発言した。

男性 まず聞きたいんですけど、患者はなんで逃げてしまったんで

すか？よしぶ病院は患者をほつたらかして、自由に抜け出せるような適当な管理体制なんですか？

病院 いいえ。もちろん患者の安全が守られるよう、日々職員とともに努めています。（しぶしの無言）けれどもあの時は、停電等で混乱があり、現場の管理は全く普段通りとはいかなかったと思います。

男性 あの時は万全じゃなかつたんですか？

病院 万全じゃないとか……。職員は停電や、土砂災害が起ころかもしれないということで避難の準備等で駆けずり回っています……。

男性 では、こんなに情報の公開が遅れたのはなぜですか？わかつた時点で住民にも通知すべきだったのでは？

病院 皆さんもご存知のとおり、当時は台風の被害があり、患者さん方を保護することが第一でしたので。

男性 忙しかつた、と言いたいんじょうけど、後から言えれば良かつたんじゃないですか？

病院 患者のプライバシーに配慮して、通知しないと判断しました。

男性 ジゃあ、台風が来ても来なくとも、どちらにしろ通知はなかつたということですかね？

病院 まあ、多分そうですね。

男性 なら最初つからう言つて下さいよ。では先ほど通知はないとおつしゃいましたけど、何で今回、今になつて情報開示をしたんですか？

病院 数日間の搜索にも関わらず、患者は依然として行方不明なままであります。それで住民の方々からご協力いただければと考えまして。

男性 それが理由ですか？

病院 はい。そうです。

男性 最近、病院周辺で空き巣被害が頻発しているのはご存知ですか？

病院 少し知つてはいますが。

男性 それとこの件は何か関係ありませんか？
病院 いえ、何の関係もありません。

続いて女性が手をあげた。

女性 あの、逃げた患者はどのような症状で入院してたんです？
病院 それは医者の守秘義務がありますので、お答えできません
女性 でもその人は今も捕まつてませんし、家には子供もいるのに
すぐ近所にいるかも知れないと。

病院 私が言えるのは、ここは以前と同じくらい安全であるということです。

女性 患者を発見した場合は、どうしたらいいんですか？

病院（チラシを出す）さつき配りましたチラシの、こちらの番号
に電話して下さい。そうしたら職員が迎えに行きますので。女性
危害を加えられる心配はないんですか？

病院 然るべき場所で然るべき人に発見されれば特に問題はないと
考えてます。

女性 然るべき場所と人って何です？

病院 それは危険でない場所と……、悪意のない人です。

ヤジ）おい！－じや、俺たちは悪意のある人ってわけかあ！－？だか
ら隠蔽してたのか！？

病院 いえ、そういうわけでは……ただ、患者さんを無事に保護す
るためにには皆さん協力が必要不可欠なのです。

次の質問者は、五十代の男性だった。

男性 あの、よしば病院さんは病棟を増設……する計画があると
聞いてますけど……。

病院 はい。男性 で、そこは精神病棟らしいですね？（病院・頷

く）それで反対意見もいくらか出るとかで……、もともと僕自身は反対でも賛成でもなかつたんですけど、やつぱり今回このことをずっと黙つてたことで、病院側に不信感をもちましたし、腹も立ちました。それで反対の声もますます大きくなっていますよね。そういうのを防げうとして病院側は秘密にしてたところとはないですか？

病院　いえ、やつかも言つたように、患者のプライバシーに配慮したためです。

男性　でも、反対にあつて増設がもし中止にでもなつたら国から補助金は貰えないですよね？だからじゃないんですか？

病院　いえ、そんなことはしません。そもそも病棟の建設計画は以前からあつたもので、補助金は当てではないので。

男性　じゃあ、補助金が貰えることになつたのは棚ぼただつたってことですか？

病院　そうですね、運は良かつたと思いますけど、そのようなことはないです。

（一部内容を編集・改変しています）

説明会の明くる日、記者は市の病院担当職員への電話取材を行つた。

記者　今回の失踪騒ぎについて、よしば病院の対応は適切であつたか？

市）誠に遺憾ではある。今後再発防止に努めることを望む。しかし病院は市の施設でもなく、緊急時の判断について現在何の権限もない。さらに病院側は事故を速やかに通報している。何ら問題はない。記者）警察と消防の対応に問題はなかつたか？

市）ないと認識している。災害発生直後の搜索は危険であったときいている、警察、消防共に最大の努力を尽くしていいたと思っている。記者）（市側もしくは病院側が）地域住民に情報公開し、協力を要

請すべきではなかつたか？情報の共有の遅れが今回のような事態を起こしたのではないか？

市）病院患者が脱走した場合の規定は自治体では特に決められておらず、台風の影響もあり、当時現場は平常ではない状態にあつた。初動の遅れがあつたというが、あの時点ではどうじょうもなかつた。患者情報公開は患者のプライバシーの侵害であり、病院は情報を無断で公開をする権限はない、市も同様である。

個人情報保護の問題もあり一朝一夕では決められない問題だ。

記者）では、この事件で住民が抱いた不安感の解消は自治体として今後どのようにやっていくつもりか？

市）ガイドラインの作成が急務であると認め、今後の再発防止に協力したい所存です。

記者）今回の事件で病院の管理能力について不信感は感じませんでしたか？また事件の影響で増設計画に変更がある可能性はあると思いますか？市職員としてではなく、西昇市民として答えて頂けますか？

市）……不信感は感じていないし、可能性はないと思つてます。

記者）この事件の情報が遅れたのは市長と院長が関係者に箇口令を出したからだという噂があるのはご存知ですか？

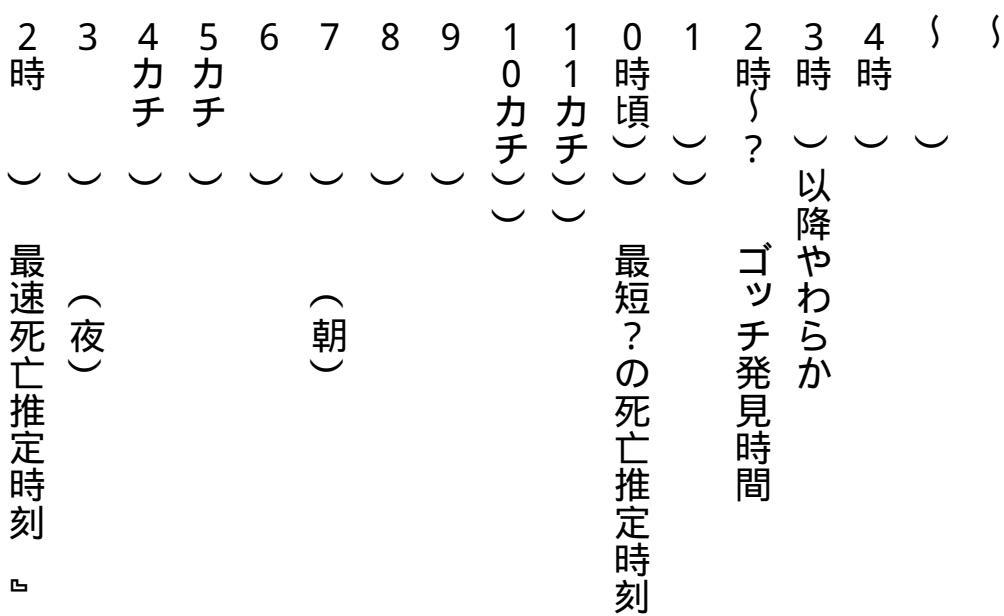
市）アンタもしつこいですね。そんなものありません（笑）有り得ませんよ（笑）

『

それから千央たちは慶幾や真琴たちと合流した。一人はパソコンを使って、死後硬直について調べてくれていたのだった。

「私たちが調べたことによると、死後硬直は動物の場合、死んでから約2時間から4時間で始まって、9時間から12時間で解けるらしいわ。昨日ゴツチを見つけたのは午後二時過ぎ、だから……」

真琴はこのよつな図を書いて説明した。



「死んでからすぐ見つけていたとしても、もう体が硬直していたから、最低2時間は経つてになるわ。つまり正午頃ね。逆に一番時間が長く経つてから発見してたとしても、まだ硬直が残つてたから、午後2時から1~2時間巻き戻して午前2時……」

「死亡推定時刻は夜2時から昼1~2時までの間の10時間か……随分長いなア」アンコは言った。「ま、刑事ドラマのようにはいかないよね」

「さらに言つと、死後硬直は気温が高いと速く始まり硬直してる時間も短く、低いと遅く始まつて硬直時間が長くなるそつで」真琴は補足した。

千央は腕を組んで言つた。

「なら今は夏だし、12時より遅く死んでいた可能性もあるよね」「でも、山の中だったからいくらか涼しいだろう。それに夜に死んだのなら、温度はもっと低かつたはずだよ」と慶幾が言ったものだから、事態はこんがらがり、死亡時刻の推測はますます困難になつてしまつた。

十七、夜になるとまつて（前輪や）

内臓系グロ注意

十七、夜になるまでまつて

夜半過ぎ、目を覚ますと毅がまくらべに立っていて、千央は一発で頭が冴えてしまった。毅は指をちゅいちゅいと曲げ、廊下に千央を呼び出すといつと言つた。

「今から一階のトイレに行つて掃除用手袋を一人……いや、四枚取つてきてくれ」

「何？ 眠いんだけど……」

千央は暗闇の中でチクタク動く柱時計を見た、午前1時だつた。

千央は一気に眠くなつた。

「こっちのには手袋が置いてないんだ。お願ひ」

毅の家では一般家庭にはめずらしくトイレが男女別になつていた。一方は男用の小便器のあるもの、もう一方がバリアフリーになつている女用で、皆はなんとなく使い分けている。ここは寝室からだと、男用の方が断然近い、女用は客用もかねて一階にあり男用は二階にあるからだ。だが、とりあえずそなつてはいるだけで、実際のところどちらのトイレを使ってもかまわないのだ。

千央は思つた、一階で寝ている夜中にわざわざ普段使わない上、遠い一階のトイレに行くのは怪しまれるというのはわかる。しかしなぜこんな夜中に掃除用手袋がいるのだろうかと。

「さつき言つたら、園さんと鉢合せた。次見つかつたら変に思われる」と毅は言つ。

「別にいいけどさあ、何で？」

「いいから、いいから」

毅は千央の肩をつかみ強引に階段のある方へ向きを変えさせ、背中を押した。少し歩いて振り返ると、早く行つてと毅は声を出さずにまた千央を急かした。

階段を下りると居間にはまだ明かりがついていた。毅に押し出され

れて一人で前を通り過ぎようとした時、千央は後ろから声をかけられた。

「あら、毅まだ起きてたの？」

千央が半睡眠状態で振り返ると、寝巻き姿の園さんが立っていた。園さんはびっくりしたようすだった。

「あ、その……お手洗いに」と、千央。

「そうだったの。姿形が似ていたから、わからなかつた。毅はもう寝た？」

「さあ、多分、寝てると思いますが……、わかりません」

本当は起きていると知っている、だが寝る所は別々なので本当に毅が寝ようと部屋にいたら、千央にはどちらかわからないはずだ。園さんに目礼し、千央はトイレに入った。

夜中のトイレは涼しく、月明かりがあたる床はまるで水面のようになつとりと光つてゐる。千央は一番手前にあるドアをそつと開いた。そこは掃除用具入れになつていて、バケツやホウキの上に棚が作つてある。千央は背伸びをし、そこを手で探つた。

見つけた。千央の手がひらべつた箱につき当たつた。「天然ゴム製極うす手袋」とかいてある。そこからティッシュのように手袋を四枚取り出すと、千央は手の中に隠した。

寝室に向かう途中、園さんにおやすみなさいを言つて、千央は階段を駆け登つた。

元の所に戻ると、毅は普段着に着替えていて、小さなリュックを背負つて待つっていた。「ありがとうございます、助かっただよ」

毅はそう言つて千央の手から手袋を受けとると、リュックの小ポケットにそれを入れた。中から何かの金属音がする。

「何に使うの？しかもわざわざ着替えて、どつかに行くの？」これで何度もだらうと思ひながら、千央は尋ねた。

「まさか家出じゃあないだらうね」

千央は不信がつて毅を見た。半分冗談だったが。

「違うよ、まさか。違う違う」毅はそう言つて手近な窓を開けた、

程よく冷えた夜風が吹き込んだ。

毅はそこからリュックを放り投げた。黄色いリュックは闇の中放物線を描き、庭の中頃辺りに静かに着地した。そして毅は振り向こう言った。

「いや、家出ではない。今からゴッちのどこに行く、行つてもう一度死体を見て死因が何か調べてみるよ」 毅の正気とは思えぬ言葉に千央は肩を竦め、眉根を寄せた。そして今度こそ不信がつた目で毅を見つめた。千央はどんどんと目が覚めてきた。

「何を言つてるの？ 見たじやん。傷なんてなかつた、病氣の跡も見つけられなかつたのに。これ以上一体何を調べるのわけ？」

「昼間色々調べただろう、見るものは沢山ある」

毅はポケットから一枚の紙切れを取り出して、振つて見せた。まぎれもない、昼間図書館で千央が書いたメモだ。それを取り返そうと、千央は毅に飛び掛かつた。毅は素早い動きでひらりとかわした。メモを勝手に持ち出したことへ怒りは、ひとまず置いといて、千央は糾弾した。

「そんなの見たつて素人にはわかりっこないよ。それにもう腐りだしてゐるかもしねいんだよ、そんなの見たつて氣分が悪くなるだけだよ」

「じゃあなおさらすぐ行かないど。君の言つ通り後に回すほど酷くなる」 毅はこちらに背を向けて歩きだした。

「やだ、病氣になるつて、絶対！」

千央は少し声を大きくして脅しをかけた。もう汚いとか言つて辞めさせるのは無理だと分かつたからだ。

「うるさい、静かにして。皆が起きるだらつ」 毅は慌てたようすで人差し指を立てた。

いや、むしろその方が都合がいいのだ、千央は思った。しかし、口ではああ言つたものの、千央は心の中で賛同していた。毅のゴッチへの親しみや愛着を今やうとしていることでなんとなく理解したからだろう、多分。さらに言えば、それには執着も含まれている

のだ。

だがあくまでも心の中でだけだ。千央は腐臭を放つゴッチを土から引きずり出す毅をの絵を想像した。いくらなんでもまともじゃない、狂ってる。病気だ、ホラー やスプラッター映画じゃないんだぞ。

スプラッター？ゴム手袋に、投げ落とした時のあの妙なリュックの音……金属か？それに毎回の会話……。アハハ、おい、待てよ。まさか……。

これである考え方に行き着き、千央は完璧に覚醒した。どうやら毅は始めて思ったよりヤバイことをやろうとしているらしいぞと直感した。どうにかして引き留めなければ……、と千央が思った途端。

「それでも行くよ、だつてね……」毅は真面目な顔で言った。

「なぜなら、ゴッチはもしかしたら殺されたかもしれないから」

リュックはのインパチエンスの茂みの中で見つかった。千央は靴を脱いで裸足になると、拾いに行く毅の後を追いかけた。ここの中庭は至る所に砂利がしいてあり、突っ掛けで歩くととんでもなく派手な音がでてしまうのだ。

「待つてよ」

「静かに！一聲を低くして、ねえもうそれ履いてもいいんじゃない？」毅は言った。

そうだね、と言い千央はサンダルを履いた。

毅が庭の勝手口を通り、道へでて、山道へ入つて行つてしまつた。千央は中庭の柵にしがみついて見ていた。

「ねえ、やめなよ。夜だし危ないよ……」千央は半泣きで言った。しかし尻窄みだった。もう、引き留める効力は期待していなかつたのだ。

毅は勇ましく、チガヤの茂々と生えた道を歩いて行つた。暗い中で、寝巻きの黄色の色が異様に目立つていたが、それはやがて黒い人影になり、山道のカーブを曲がるとそれも見えなくなつた。千央

は毅が怖じけづいて帰つてくるのをじつと待つっていた。十秒……、二十秒……。姿が消えて、三十秒。毅が戻つてくる気配はない。千央は不安を覚えた。毅の後ろ姿は真剣だけども、まるで幽霊のようを見えたのだ。

“いや、もう戻つてはこないのかも……”

そしてある瞬間、何となく思いついたことだつたが、千央はそれに支配されてしまった。一人で行かせたらもう一度と毅と会えない、なんだか死ぬような気がしてきたのだ、根拠はないけれど。

それで千央は覚悟を決めて、白い柵を突き放して思い切り山の方へと駆けた、なんだか高いビルから飛び降りたような心境だつた。少し走ると毅に追いついた。毅は何も言わなかつた、しかし帰れとも言わない。二人は前後に並んで歩いた。ここには土と砂利の道しかなく、人工の明かりは望めなかつたが、月が満ちていて空と山影の色は明るかつた。林の中では、鈴虫がリンリン鳴いている。じや、松虫はどこだろう？ チヨンチヨンスーイッチヨンと鳴いているはずだけど、なんて無理矢理明るいことを考えてはみたけれど、千央の気分は一向に盛り上がらなかつた。まあ、今からやろうとしていることを考えれば、むしろ当然といえた。

途中から二人は山中の獸道に入つた。

一人はひたすら黙々と歩いていたが、千央の頭の中はいつもよりずっと騒がしかつた。

“ゴツチが殺されたと毅は断言したが、どういうことだらうか？ 証拠はあるのだろうか？”

“何が動機だ？ 恨みとか？”

なわけやない。

“犯人はただ面白がつて、ゴツチを殺したのだろうか？”

そういうことを趣味にする人がいるのを千央は知つていた。そしてそういうやつは大抵犯罪者予備軍で、将来、マッドサイエンティスト的な事件をおこすのだ。

“もしそうなら危険人物だ。そんなことするのは一体誰だ？”

“やはり……同じように毅も、例の脱走者を疑っているのだろうか

？”
誰つてそりや……ホラ、あの……。

千央は不意に、髄膜をカリカリ搔かれているような気持ちの悪さに襲われた。何だかそわそわしてきたし、多分自分は不安なのだろう。考えてみれば、チビ太の話をした時からこうなることは決まっていたのだ。全く、余計なことをしたものだ。今のように黙つて話さなければよかつた。千央は今、猛烈に後悔していた。

「本気でやるの？ やめとこうぜ」いい加減、頭カリカリに堪えきれなくなつた千央は言つた。なんだかさつきから落ち着かない気分だつた。家や布団がとても恋しかつた。何も考えなくていい頭空っぽの睡眠時間が……。

「自分から来たんじやないか。やりたくないなら、ここで引き返せばいい。じゃ、さよなら、バイバイ」毅は素氣ない調子で、後ろ手に手を振つた。

「へえ、じゃあ、なんで手袋を四枚もとつてこさせたんだよ、道連れが欲しかつたんじゃないの？」

千央は思いきつて毅の背中に向かつて指摘した。返事次第では家に引き返そうと思った。これはただ単に予備のつもりで言つたのかもしれない。しかし、仮に当たつっていても来てほしいなら、否定すればよいだけだ。

その質問に毅は何も言わずに振り返つただけだった。眉根をよせている。

今、山中の鈴虫が鳴いていた。しかし、千央たちのいる辺り一帯だけは押し黙つていた。毅は歩き出し、千央はまた黙つて付いて行つた。ここで何となく自分は頼りにされているのではないだろうか、と千央は思つた。

目的の場所に辿りつくと、毅はリュックを下ろした。ゴッチのお墓に供えられた花は、すっかり萎れてしまつて、以前見たクモの巣が月の光を浴びて完璧な銀色になつていた。

二人は塚をくずし、毅が持つてきたスコップで地面を掘り返した。二人は暗闇の中穴を掘り進めた、月が皓皓と照っているのは幸いといえた、手元がはつきりと照らし出されたからだ。ある程度まで掘り進めた後は、千央はいつゴッちが出てくるのかとヒヤヒヤしながら、少しづつ慎重に掘り進めていった。記憶では千央の掘っている側に頭があるはずだった。会話は一切しなかった。

しばらく掘ると、茶色一色の土から少し白い体毛が覗きだした。また一息掘ると、それはゴッちの鼻面であることがわかつた。

「あつたよ」千央は毅に教えた。

それからは速かつた、毅はかなり乱暴に掘ったし、千央も死体がそれほど傷んでいないのがわかつて、にわかに元気づいたからだ。ゴッちの死体は発掘された化石のような格好で、前に見た時と、なんら変わっていなかつた。虫に食われてもいす、ウジも湧かず、今のところ変な匂いも感じない。むしろ生きていたころより匂いはしないかもしない。生前は常に獣臭さが鼻についたものだ。ゴッちの体は毅に脚を引っ張られ、穴から引きずりだされた。

毅はリュックから銀色のアルマイトのバットや皿を何枚か取り出して地面に並べた。まるでピクニックのようだが、今からやろうとしていることは程遠い。千央は額を拭つたが、実は全く汗などかいていなかつた。それから毅はリュックからバットの上に、持ち物を移し始めた。それらは次の通り、小型の剪定ハサミ、メモ数枚、ゴム手袋、砂遊び用の玩具バケツ、ポケットサイズの植物図鑑、懐中電灯、軍手、箸と鎧びた大きなスプーン、ビニール袋、金魚用の網、そして喉が乾いた時のためだろうか？ペットボトルに入った水

……？

毅はゴム手袋を千央に渡し、一人ともそれをはめた、サイズは少し大きい、大人用だから当たり前だ。その上から軍手もはめた。真っ白い二組の手とゴッちの体とが闇の中で、とても映えた。毅はゴッちの前にしゃがみこんだ、千央は自ら後ろで皿を持ち、待機した。阿吽の呼吸でまるで有能なアシスタンントみたいだ。おやつをもらう

のを待つている子供みたいな格好だった。とても妙だと、千央は自分でそう思った。反対してたのに、当たり前のように手伝つたりして。

そして到頭、毅はリュックから刃物を取り出した。それは、ちびた小さくなつた包丁だつた。刃が持ち手と同じくらいしかないのが、持ち手も短く細いので、もとは果物ナイフやペティナイフだつたのだろうと千央は推測した。

千央はいざ刃物を見て疑問に思い、考えた。ヤギのような四つ足の動物の開腹は、アジとかイワシの干物みたいに開くのかしら、それとも胴体の横に穴を開けてやるのかなど。

毅はナイフをゴッチの腹に突き立て、引き下ろそうとした。しかし、皮にひつかかつて中々切れない。その上、おつかなびつくりしていくなんだか危なつかしい。力が刃に入つていないので。

「もつと力を入れないと」

千央は後ろから言つた。

毅は黙つて持ち方を変えると、鋸のよつにぎこぎこと動かして、少しづつ傷口を広げていつた。鼻息がとても荒くなつっていた。そのうち、毅が大きな溜息をついてゴッチから離れた。その胴体の真ん中の辺りには、小さなチャックのような穴が空いていた。続いて、毅は剪定バサミを手に取つた。これは多分鷺崎さんのものだ。そのハサミの先をゴッチの切り目に入れて慎重に切り始めた、まるで二ツパーで爪を切つてゐるような感じで鈍く、それはそれはゆっくりが、皮は確実に切つてゐる。やがてゴッチの腹にはL字型をした三十五センチの大穴が空いた。千央は感嘆の声をあげ、ひと安心した。しかしその途端、わつ！－くせえ！－ムツとした悪臭が漂いだした。外側はともかく、中身は腐つていたのだろう、腐つたピーナッツのような匂いと、使い古しの絆創膏が混じつたような嫌な匂いがし、千央はむせこんだ。

毅は何度も畳まれ小さくなつてゐたメモ用紙を開いていた。その内容のほとんどは植物や中毒のことだつたが、うちの一枚は牛の解

剖図をわらばん紙を「ペー」したものだった。牛の四つの胃袋にそれぞれ番号がうつてある絵だ。第一の胃が異常に馬鹿でかい。しかしなぜ牛の解剖図なんだろう? 今から解剖するのはヤギなのに、千央はそう思つて聞いた。

「ヤギのやつがなかつたもんでね」毅は息を継ぎながら答えた。「牛とヤギの体の構造はよく似通つてゐるらしいから、参考になるかと思つて」

千央はふーんと声を出し、懷中電灯の明かりの下に紙を持つていつて、かいてある注釈を読んだ。

反芻動物の牛は、第一の胃に草をためこむ。後に口に吐き戻し、噛みなおす。

第一と第一の胃には消化酵素はなく、多くの細菌が住んでいる。牛の他に、ヤギや鹿が四つの胃を持つ……。

毅はメモ用紙をよくよくチョックした後、臭いに辟易したように吃りながら言つた。「よし。ま、まずは胃を見てみよう」

最初にゴツチが生前何を食つていたかを調べるのだ。毅は軍手を取ると、はいつくばるよつにしてゴツチに覆いかぶさつた。そしていざ、ゴツチの腹の中に左手を、それから右手を突つ込んでいった。明らかに手袋の丈が足りていなく、毅は肘まで内蔵のプールに浸かっていた。千央は顔をしかめた。毅は平氣なのだろうか、勇ましいな。

「どれが胃だらう? ないな」毅はつぶやいた。

そんな訳無いだらう、千央は思つた。

「あつた、これかな。ナイフを寄越して」

千央は地面に転がつている包丁を渡した。

毅は右腕も体の中に入れて、腕を動かし、また他の箇所で動かした。

「気をつけて」千央は言つた。

そして両腕を引き出し、一旦刃をタオルで拭き、また穴に手を突つ込み、なにかを引っ張り出した。それから、毅は無言で皿を要求

した。千央は皿を差し出したが、振り向いた毅の持っていた胃があまりに大きいのでひ一つと恐れ戦いてしまった。毅はきよとんとした顔をして巨大な肉の袋を生まれたての赤子のように抱いていた。それは大変な色白ぼっちで、単なる脂肪肝にも見える、もしくは白皮でできたハンドバッグだ。そして表面はしつかりしており、丈夫そうに見えた。

千央はアルマイト皿をシンバルのよつにして、それを受け取った。それはかなり重く、かさ張つた。また胃袋がスライムのようにとろとろと動き続けるため、前方にこぼれ落ちるのを防ぐのに、千央は上体を反らして持たないといけなかつた。それで腹部に胃が触れ、とても不快だつた。千央は馬鹿でかい赤子を抱いて、途方に暮れ突つ立つていた。非常に不本意なことをやらされているのは違ひないのだが、妙に現実味のないこの感覚、夢か幻かという感じだ。しかし、腕は痺れ、筋が痛くなつてきた。どうやら都合よく夢とはいかないようだ。

仕方がないので、千央はゴツチの胃袋を直接地面に打ち上げた。胃袋はボロリと落ち、その衝撃で胃壁がぶるぶると波打つた。

毅はまたハサミを取り出し、食道と思われる管にひつかけ、おそらく第一の胃の管までをちょきちょきと切り、胃を開いた。

千央は眉をひそめながらもそれを凝視した。「うへえ」

その内側は細かな突起が沢山ついており、中にはどろりとした半消化されたものが入つていた。粗微塵に切つた雑草類を水分たっぷりに蒸しあげ、そのまま数日の間放置したかのような代物だ。色は緑に乳を混ぜた色をして、明らかに大量の細菌が繁殖している。それは吐瀉物というより、嗅いだことのない変な匂いがした。醣酵臭というのだろうか、おそらく腐りかけの匂いなのだろう。

毅はペットボトルを指差して、バケツに水を注ぐよう千央に言った。千央がそれを実行する間、毅は取り分け用の大きなスプーンを使つて、胃の中身を全て皿へ移した。結構な量だ。練つた緑の半ペーストのようなものが掻き出された。水分がした垂れ、搾れば青汁

がたつぶり取れそだつた。

「ねえ、これは一体何だろうね」

毅は溶けかけの葉のぐずに絡み付いている薄黄色の泥状のものに興味をしめしていた。

なあに?と、千央は言った。

「これだよ」

わざわざ毅は人差し指と中指でかき集めて見せ、それを寄越した。千央は顔をしかめつつ受け取ると、親指と人差し指に挟み擦り合わせた。触り心地は何の抵抗もなくさらさらしている、バナナの皮のような渋い匂いが鼻につく、まるで溶けたビスケットだ。色と質感からこれが草でないことは明らかだった、カビの一種のようにも見える。少し粘りがあるが、それは胃の中に収まっていたせいだろう。毅は千央のようすを片膝をついてずっと見守っていた。

「何だろ? わかんないな」

毅は千央の返事を聞いて怒りの表情に変わった、しかしすぐ笑みを浮かべ、

「へー、ないのか」

とふざけた様に言い、頬杖千央の顔をジッと見つめてきた見上げてきた。

「本当に?本当に心当たりない?」

毅は首を傾げて詰問した。

千央は首を振った。千央は何がなんだかわからなくなつて固まってしまった。毅も何も言わず静止していた。一人ともしばらく動かなかつたのでとうとう鈴虫たちが鳴き始めた。虫が鳴きだすのを制止させるかのように、毅は喋りだした。

「あのや。お前、ゴッちに変なもん食わせただろ? あのホットケーキ。そのせいで鼓脹症になつて「ゴッちは死んだんだ」

千央は始めて毅が怒っていることに気がついた。何となく顔が赤く、険しくなつている。鼓脹症は反芻動物が穀物の多い餌を食べてなる病気だ。胃の中で異常醸酵がおきてガスを抜がないと最悪の場

合、窒息死するのだ。それは知っていたが、しかし千央は、毅がいきなり何を言いだしたのか訳がわからなかつた。それに千央はゴッちにホットケーキなど一度もあげていかないのだが……。

しばらく黙つた後、千央は言った。

「それ私じゃないよ」

毅は、はあ？という顔をした。

「第一、ヤギつてホットケーキとか甘い物食べるの？お菓子でしょ？」千央は聞いた。

「食べるよ」毅はムスッとした表情で言つた。

「そう……、でも本当に違うんだけど」

毅はしばらく黙つていたが、立ち上ると木立の脇へ行き、地面を蹴つた。

「ゴッちが死ぬ前、水野さんちに預けてただろ？そこにホットケーキが何枚か捨ててあるのを見たんだよ」

毅が大変氣まずそうだったので、千央は特に何も突つ込まず会話を続けた。

「えーと、つまり毅はゴッちがホットケーキを誰かに食べさせられたせいで鼓脹症になつて死んだと思つたわけね」

毅はこつくりと頷いた。では、ゴッち殺しの容疑者とは他でもない自分のことだつたのか、しかし、頼りにされてると思ったら、疑われていただけだつたとは、千央はがっかりするとともに、恥じ入つた。千央は自分の知つていることを話した。

「あのホットケーキ、半分くらいまでは自分で食べたんだけど、いつのまにか残りが冷蔵庫から消えててさ。てつきり、誰かが食べてしまつたものかと思つてたんだけど……」

「ゴッちの寝床の上に何枚があつたよ」と毅。

「ゴッちが食べてたんだね」

さらに千央は言った。動物に人間の食べ物をやるのはあまり良くないと知つている、少なくとも進んでやろうとは思わない、とにかく自分の仕業ではないし、信じてくれど。

「君がゴツチにやつたものかと思つてた」「違うよ。本当に」

毅はしばし無言だったが、

「……わかつたよ、『めん』としむらしへ言つた。どうやら信じてくれたようだつた。

「別にいいよ」

「でも、千央でないなら誰が？」毅は当たり前の疑問を千央に投げかけた。

「そこまでは、わかんないけど……」

とりあえず、犯人は家の中の人に違いない。それに質問すればぐに誰だか分かるだろ？。しかし、

「でもさあ、ホットケーキは無くなつた時、そんなに残つてなかつたよ。それを全部食べていたとしても、あんな少ない量で異常醣酵が起きるとは思えないよ。病氣になるには、もっと沢山いるんじやないの？」

「ゴツチの巨大な胃に入る量から考えて、小さな数枚のホットケーキの割合は、3%にも満たないのではないかと千央は思つていた。それさえ問題だというなら、どうしようもないけれど。

「まあそうかもね……」

毅は脱力したが、やがて気を取り直し、

「とするとフライラリアかな」と言つた。

「中毒、というセンもあるけどね」

千央は皿を見て言つた、フライラリアは衰弱して死ぬのだから、中毒の方が有力だと千央は考えていた。しかし、この縁ヘドロをじっくり見分するのを考えると……ああ、嫌だ。千央はとてつもなく憂鬱な気分になつてくるのだった。

さて、千央は一体何をするのかと思いながら、毅が作業するようすを見ていた。毅はまず、ゴツチから採つた緑粥を少し取り分け、金魚用の網に入れた。それを、バケツの水の中に持つて行き、そこで振り洗いした。すると、草の周りのドロドロしたものが大方取れ

て、大きな纖維のところだけが残った。それらは箸を使って慎重に回収され、タオルに並べられていき、水気が取り払われた。なるほど、これでゴツチが食べた草がなんという名前かを調べることが出来るわけか。

千央と毅は懐中電灯を持つて、そのわずかな特徴からどついう植物なのか見極めようと、図鑑と葉っぱとを見比べていた。しかし、残った纖維のほとんどは、まるで糸くずのようになつていて正体が全くわからないか、細長くて尖った平凡な葉の形をしていた。後者は多分、ササカイネの仲間だろうと思われた。調べによるとササもイネ科の植物もヤギが食べても毒にならないようなので、これは全部ゴツチの死因候補から除外された。

一度目を調べ終わると、二人はまた網に草を入れ水洗いし、じっくり観察した。三度目からは毅は水洗い、千央が取り分けて分析する、もし気になるものが見つかればお互いを呼ぶという風に役割分担したので、いくらかスピードがあがつた。

そのうち毅は、トロ草の中からうまいこと葉脈だけが残る骸骨状態の大きな葉っぱを引き当てた。それを見た千央は思い出した。以前やつた葉っぱを水酸化ナトリウム水溶液で煮て葉脈だけにし、しおりを作るという体験だ。その時に見た煮込んだ葉の状態がこれによく似ていた。

大きさは千央の手の平くらい、横に広い橢円形で縁には摩訶不思議な丸っこいフリルがついていた。まるで池に浮く水草みたいだが、ゴツチが水草を食べるわけがないし、またこんなもの川で見掛けたこともない。

「これはアジサイじゃないか？」

毅はよく見て言った、確かにこれはアジサイの葉によく似ているのだ、さらに近所に生えているし、ヤギが食べると毒になる。ちなみに人が食べるてもいけない。

しかし、千央は同じ意見ではなかつた。

アジサイの葉はもつとスペードみたいな形で、これより一回りは

小さく、縁はぎざぎざしていなかつたかという覚えがあるので。

「私には水草のように見えるけど……、それにアジサイの葉つて大葉みたいな形じゃなかつたか」

千央が図鑑で調べるとその通りだつたので、毅は引き下がつた。続いて見つかったのは赤紫の蔓性植物だつた。これも図鑑の出番だと思ったのだが、開くまでもなかつた。蔓を何気なく見遣つただけで、毅はすぐに答えをだした。

「それ、多分芋だよ。たまに畠に入つて葉つぱと一緒に食べていたからな」

「ゴツチは薩摩芋の蔓や葉が好きであつたらし」。

結局全部の検査を終えても（最後の方は少々雑だつた）、毒草らしいものは見つからなかつた、正しくはもしあつても、見つけられなかつたのだろうが……。

千央はバケツをひっくり返し、汚水を捨て、タオルで手を拭いた。「心臓を見てみようか、フイラリアの痕跡があるかもしれない」千央にタオルを渡されて、毅は初めて自分の両腕が血みどろなのに気づき、そのせいで思い出したかのように言つた。

「どうぞどうぞ」と千央は言つた。疲労困憊であり、今日はショックな出来事が多すぎて何事にも簡単に動じなくなつていった。あるいは自暴自棄になつたともいえた。ゴツチがフイラリアに罹患していたとするなら、心臓にそうめん虫が巣くつているはずだつた。毅はまたゴツチの体に手を突つ込んで探り始めた、また千央は後ろで待機した。不愉快な音がまた聞こえだした。

そんな中で、ボーッと千央は考え続けていた。

毅が鼓脹症の件に、いつ気づいたかは知らないが、その時に怒ればいいものをわざわざ夜中にこんな所に呼び出して責め立てるなど、結構手がかかつてゐる。

いや、と千央は思い出した。そういえば、千央がここにくることになつたのはたまたまであつた。毅が無理矢理連れてきたわけではない。多分毅は、夜中にこつそりゴツチの胃の中を確かめてから言

おうとしたんだろう。しかし、もしゴッちの死んだのが千央の過失のせいだつたら、その可能性を想像するとなんだかゾクゾクして怖い。自分の犯罪を自分で暴いてしまうという、ちょっとした怪小説のような展開になつたはずだ。いや、毅はそれに気づいてからしばらくの間、自分のことを「ゴッチ殺しの犯人だと思つて見ていたのだから、それはそれで後味や氣味が悪く、十分怪小説らしいなとも千央は思つた。

おそらく、毅は確信がもてなかつたのだろう。だからメモで病気のことを知り、千央のことを疑つたが何も言わなかつた。それで聞くかわりにヤギを解剖することにしたというわけだ。だが、いくらなんでも腹をかつ裂くのはさすがにやりすぎというものではないか、と千央は思つた。遠慮するにもほどがあるというものだ。ある意味慎重深いともいえる、もしくは執念深いとも。一体こいつはどういう性格をしているのだらう、千央は毅の後ろ姿を見てそう考えていた。

ついにジュボッという不愉快な音が聞こえ、毅はゴッちから手を引き抜いた。心臓を取り出した。毅はゴッちの心臓を玉子をもつよう大切そうに包みこみ、二人は魅入られたかのようにじつと見ていた。

ゴッちの心臓は想像どおりの鮮やかな赤をしており、まるでルビーのようだつた。レバーがいくつか重なつたような形をしてついたが、しっかりとていた胃袋とは違つて、こちらは形が多少崩れてしまつていた。

毅はまたナイフを取り出すと、中を見るために心臓に十字の切り目を入れた。

千央はここにきて、初めて自分らのしていることに罪悪と嫌悪感を覚えた。死後にこんな扱いをされて、全くゴッちが何をしたといふのだ。しかし、傍観者とともに実行者なので文句は言えない。

心臓を切つた後、二人はさまざまな角度からそれを眺めた。しかし、虫の侵食どころか、虫のカケラさえ見つけられず、組織自体は

綺麗なものだつた。

「どうやらフイラリアでもなかつたようだね」千央は言った。

「そうだね」

毅は心臓を地面に置いて、溜め息をついた。

これでフイラリアだつた可能性も消えてしまつた。どうやらこの決死の冒険は、徒労に終わつたようだ。千央も溜め息をついた。眠い。二人は、ひどく疲れたようすで後片付けを始めていた。

その時、冷たい強い風がドツと吹いてきて、千央は鳥肌がたつた。さつきの風で周りの空氣すべてが入れ代わつたような気がした。そして同時に何かの気配した。千央は周りをキヨロキヨロ見た。

「あ、あ、何だらう、動いてる」

毅がゴッチを指して言った、見ると本当にゴッチの窪んだ腹の皮が、ウサギくらいにぼこっと膨らんで、ぴくぴく動いている。

それはゴッチの腹の中を壊れたねじまきのおもちゃのように、グルグル、グルグルと焼き回っていた。しばらくして動きをぴたつと止めるとき、思い出したかのようにゴッチの尻の方へ、つまり傷の方へとじわじわとせまっていった。膨らみは、一時の間、恥ずかしがるかのようにモゾモゾと動いていた。そして、次の瞬間、それは外に出でこようと、ゴッチの腹に手を掛けた。

「げえっ…………！」

二人はお互いを支え合ひ、やつと立つていたが、毅がナイフを放り投げたのを合図にしてクルリと振り返ると、先を争い暗い森の外へと一目散に逃げ出した。千央は大声で叫びたかったのだが、恐怖のあまり声も出やしなかつた。

十八、最高のＴＶショウ

「ことがおこつた時、千央はかなり遅めの朝飯を食べていた。

普段なら食卓以外で食事をするのは「法度であるが、その時は家の大人たちは皆出払つており、それで鬼の居ぬ間に洗濯というわけだつた。しかし千央がふと見た光景は、千央にご飯の塊をはき出させた。そして大声で叫び皆を読んだ。そのあまりの劇的な瞬間は皆をその場に凍りつかせた。

まるで宗教的なお題の活人画みたいだが、その中心で注目を集めているのは、偉大な救世主でも美しい女神でもなく、部屋の隅に置かれた無機質なテレビであった。

アンコは目をパチクリと動かし、慶幾は頭を鶏のように突き出し、唾を音をたてて飲み込んだ。真琴は今しがた疾走してきたばかりみたいに、肩を揺らしていた。公平は遠い物を見ているように目を細めてそれを見た。伊鶴は、ああウツソお、と小声で呻いた。

テレビ画面には鮮やかな五色のタイトルと、毎度お馴染みの司会者が大写しにされた。この人物は、いつも奇妙な色のネクタイを付けている。おそらく、毎日違う色柄のネクタイをつけなければならないため、どんどんと奇抜になつていったのだろう、そう千央は認識していた。

早速司会者は、よく動く口と明瞭な声でニュースを伝え始めた。

「地方商業活性法の施行を受けて、地方経済が今、活発に動き出しています。現在全国92の自治体で106の計画が申請され、国のお許可を待っています。これらの事業がうまくいけば、今後地方発展のみならず日本経済活性化の小さな芽になるでしょう。しかし、その影でおこる、人々の欲望が起こす犯罪、住民同士や自治体との軋轢、露呈する長年の政治腐敗、暴露された不正、などは、急激な変

化で起こった摩擦熱であるとも言えます。そしてこれは我々日本人が富めるため歩んできた長い道のり、その間に起こった光景の縮図でもあるかもしれません。前回は、自治体ぐるみで行われた酒田村談合事件を放送しました。また前々回はプラント設計士脅迫事件、これには四人の逮捕者もしました。今回は九州の市にある団体についての取材です。今回は少し、色を変えてお伝えします」

信じられないことに司会者はここまでを一息で言い終えた。

場面が変わり、画面にはアスファルトの地面と足先が写しされた。カメラは大きくぶれ、荒い息と蝉の鳴き声を背景にして、男の低い喋り声が聞こえてきた。

「すごく太陽が高くて……、ものすごく暑いです。ただ今の時刻、午後1時5分前、温度は32度」

テレビ画面には真っ青な空が映し出された。しかしカメラの問題なのか、太陽が真っ黒に影つている。

やがてカメラが下ろされ、ある人物のシルエットが写しだされた。逆光のため時間がかかったが、じわじわとその顔が見えてきた。それはいつか声をかけてきたあの人間違いかつた。

「今回は建設反対運動の事務所一つである、お宅にお邪魔するの予定ですが、少々変わった訪問になるかもと近所の方から忠告を受けました」

そう言って、歩きだした。

何やら音がするので何かと思っていたら、紙袋を持っているのが見えた。これには確かに見覚えがある。

一旦画面が消え、また写しだされた。目線が変わった、以前より低い位置になつていて、おそらく違うカメラに切り替わったのだ。しばらく前進すると見慣れた光景が見えてきた。白い建物部分にはモザイクがかかっているが、間違えようがない、増田家の入口である。今まで何度も見た、生け垣の形そのまんまだ。そして玄関が写った。千央はたつた今訪問を受けているような錯覚に陥つていて受けた。千央の心臓は肋骨の中に收まりがつかなくなつてきて

いた。

千央は隣を盗み覗き見た、毅は目を見開き、口を抑え、音をたて息をしていた。

インター ホンを押した。ピンポーン。チャイムがなり、皆は飛び上がった。

ハルエさんがいつものように愛想よく出迎えた。顔にモザイクがかかっているが、間違いなくハルエさんだった。

ピンポーン。チャイムがなり、皆は飛び上がった。千央たちはカーテンの部屋に忍び足で向かつた。皆はカーテンに潜り込み、頭だけ出した、十の生首が、声を押し殺して笑つた。

これから最高のショーアが始まるのである。

千央は以前やつたのと同じように物の間から覗き込んだ。他の子も、それぞれ自分の見やすいところを探して覗き込んだ。

千央の目に、男性が女人の人をエスコートし部屋に入つてくるのが見えた。男はポロシャツにダボツとしたズボン、女の方の服装は体にぴつたりとした上衣にデニムという格好だった。

女性は大変ビクビクオドオドとしていて、見ている方も落ち着かない、かなり警戒したようにしている、周りを見ないようにしていで、目は虚ろであるからだ。まるで怖がりの千央が強引にお化け屋敷へ連れていかれた時みたいだと思った。お化け屋敷はたいてい真っ暗だが、暗視スコープ等を使って中にある千央を見たら、まさしくあんな感じだろうと思つ。そうすると、視覚だけでなく、耳も鈍感になる氣がするのである。

二人は妹とそれを見守る、優しい兄の兄弟のように見える、またもしくは彼氏と彼女だ。彼らの関係は恋人同士にもまた単に兄妹にも見えるのだ。カップルだった場合、男の方は随分手間のかかる相

手と付き合つてゐるな、と千央は思わざるをえない。しかし、仮にこんなところに来ることを提案したのが男だった場合ならば、それはまた別の種類で厄介な人物と言えるだらう、と数メートル前にいるこの一人を見て考えた。だから他の人には知らないが、千央の目にはこの一人が同じくらい変わつてゐるようと思えるのだった。とりあえず、妙に釣り合いの取れた似合いのカップフルだ。男は霊能者の目前に座り、女はその斜め後ろに座り落ち着かな気にモジモジとした。

「今日はどんなご用でいらっしゃったの？」霊能者はいつものように言った。

「はい、えーと、今日はこの子のことでお尋ねしたいのですが……」男は女の表情を伺いながら言った、女はこちらを感情のない目でさらつた。

「あの、この子が何か最近変なものが見えると言いだしして、ちょっと困っちゃつてですね……」

「大変ね。それはどんな格好をしてるの？」

「あー、ただ変な影みたいのが見えるそいで」

「どんな形かわかる？」霊能者はやさしい声で女に尋ねた。

男はの方を見てわかる？と、聞いた。しかし女は、わからない、とこう風に首を振つた。

「あ、そう。なら……こつどうこう風にしてたら見えるのか教えて下さる？」

「それが一つと、よくわからなくてですね……、ご飯の途中とか家に居るときとか……、僕は全然わからないんだけど、そういう時彼女はすごく怖がつてるんです」

依然女は黙つたままだった。いきなり、うたた寝する時のよつこ頭をガクッと垂れた。

「んー、どうしたねー？ 大丈夫ねー？」

霊能者は下から覗き込むようにして、女の顔を見た。まるで迷子で泣きじゃくる子供を宥めるように。女はしつかり目を開けていて、

それを見返していた。千央なら絶対に笑うだろうが、女はピクリとも顔の表情を変えなかつた。

「うーん、何かをきっかけに変なものにとり憑かれたのかもしれませんね~」

靈能者は女の手を取り、また何やらぶつぶつ言いはじめた。

「最近どこか神社かお寺に行きませんでしたか?」

やつと女は首を振つた。靈能者の質問に直接反応を示したことにより、千央たちも、男も、そして靈能者もホソとしたに違いない。

靈能者は女の手を擦つた。

「仏閣には稀に低級靈がいましてね、心の弱つどる人についてくることがあるんですよ。手入れのしないところはね、特にそがん」「そういうところに行つた覚えはないですね」男は少々申し訳なさそうに笑い、首を捻つた。

「んー、違うみたいね。何か小さな影のようなものが見えます、人みたい。あなたの近くにいた人。手を振つている、男……、だと思います。心当たりはありませんか?」

「さあ、思いつかないです……」

「そんなに大きい男の人ではないの」

「あと、そうね、その靈は会いに来たつて言つて、さんに気づいてもらおうとしてる」

「大柄ではない男の人……、思いつかないです……すいません」「いいのよ、謝らなくて、正直に答えてくれれば。じゃ、小さい時に亡くなつた知り合いの方はいませんでしたか?」

男はピクッと動くとゆつくりと言つた。

「えーと、そうですね……、最近というか……この子の家族が……マオって名前だったんですけど……。去年の……今ごろに交通事故で亡くなつたんです。まだ小さくて……」

ビンゴ、今回の標的が決まつた瞬間だつた。靈能者はそこに攻め入る気だ、千央はわかつた。

靈能者は女を見た。そして女が否定しないのを見て慰めた。嘘は

ついても慈悲深いのが彼女だ。

「まあ、そがんね……、お氣の毒に……。亡くなつたのが今「」るな
ら、今年が初盆ね？」

「……そうだよね？」と彼氏が聞くと、女が頷いた、少しずつだが
やり取りに参加するようになつてきていった。

「お盆だから帰つてきたのかもね」

「えーと、何で来てるのかわかりますか？」男は聞いた。
「ちょっと待つてね。やつてみるから……」

靈能者は千央の時と同じように、手を摩つて意識を集中させてい
た。

しばらぐして頷き、「とても寂しくて会いに来たつて、家族にも、
友達にも会いたいって」女は大きな溜息をついた。

「でも、知り合いがお墓参りに来てくれます。おもちゃとかおやつ
をもつてきて供えてくれたり……」女がようやく語りはじめたので、
千央はホッとした。

「ふーん、おもちゃつてどんなものを供えるの？」

「そうですね、流行りの玩具だとか……、野球のボールとかサッカ
ーボールとか……、子供用の小さいやつを……好きでしたし」

女は指でボウリングのボールより一回りほど小さい輪を作つてみ
せた。

「マオくんはそれに感謝してる、忘れないでいてくれても嬉しいつ
て、でも直接会いに行きたって」

「あなたはどんなものをお供えするの?」「私は料理をした時とか
……、少し取り分けてやつたり……、生きてた時みたいに」
靈能者は女の手厚い世話ぶりに満足したのだろうか、ずいぶんよ
い声をだして言つのだつた。

「美味しいものを供えてくれて嬉しいよ、つて
笑いながら女は言つた。

「下手で申し訳ないけど……」

「そんなことない、美味しいって、いつも楽しみにしてるつて」

女は鼻を啜つた。

「おもちやは天国で使つてくれてるんでしょうか？」

「そうね、あの世では年は関係なく遊べるから、年上のお兄さんお姉さんと一緒に元気に野球とかサッカーしているわよ」女は目を潤ませ、声を震わせた。

「遊んで貰えて、喜んでるでしょうね」「そうね。天国での生活は穏やかで樂しいって言つてるわ」

靈能者は頷いた、しかし、また女の手を擦りはじめ言つた。「でも何かご家族に伝え忘れたことがあるみたい。謝つてる、約束のことだ」

笑顔で小首を傾げた。

「何だろ?……、何かあったかな……、遊びに行く約束のことかな……。ああ、……一人で外に……行っちゃいけないって注意したのに……それで……」

女は衝撃を受けたように言つた。

靈能者は頷き、素早くそれを肯定した。

「約束を守らなくてごめんねって言つてる」

「マオくん……、いつもこそ謝らなきやいけないのに」

女は嗚咽を漏らした。「お姉ちゃんは悪くないんだよ」靈能者はマオくんに成り代わり女人を慰めていた。

千央は考えた。どうやら、この女人のマオという弟は、幼くして、交通事故で亡くなってしまったらしい。年齢は話からして、幼稚園から小学校低学年くらいだろうか。

気がつけば靈能者は又女の手を摩り、必死の形相で念を送り続けていた。

「ご両親とお姉ちゃんとまた会いたいって言つてよんさつよ。またいつか会えるのはわかってるつて、それまで待つてるつて、だから急がなくていい、待てば待つだけマオは幸せだって」

女は瞼を一杯に綴じて、声をたてないように泣きだした。

「他に何か言つてますか?」と男は聞いた。

「死ぬ時は痛くて悲しくてとても苦しかった、けど今は暖かいところにいて幸せだから、お姉ちゃんたちももう悲しまなくていいよ」

女は喉をヒクヒク鳴らし、頻りに頷いた。

「お盆に戻ってきたことはちゃんと納得して成仏したとさうですよ。」

始めと比べて大分うるさくなつた。女は大きな大きな溜息をついた。

「よかつたです……、ホッとしました。とても」そう言い、大きく息を吸つた。「でも、少し気になることがあって……何か怒つてるようなんです。ずっと見ていると、何かに怒っているような、その……空氣というか、オーラを感じるんです」女はオーラ、と言うのを少し躊躇したが、手で自らの周囲をゆっくりと扇ぐよつな動作をして、オーラが自分をどう圧倒しているかを見せた。

「怒つてる……」霊能者は手を摩り、何かを探つていた。「ああ、それはね……ご家族が落ち込んでいるからじゃない、普段の生活が疎かになっている。マオくんはそれで自分で自分に腹が立つてる。何で自分は死んでしまつたんだって、自分のせいでお姉ちゃんや両親を苦しませているつて。それをあなたが感じとつたの。ご家族に対してはむしろ悲しみの気持ちがあるようね」

女は思い当たることがあったのか、納得したように頷いた。

「そうですね、私もだけど、母もマオが亡くなつてから、変に病気がちになつて……、一日寝たきりみたいな日もあるくらい弱つちゃつて……」

女はグスグス泣きながら言つ。

「親御さんも辛かつたやろうね、親やもんねえ……変わつてやりたいと思つたやろうねえ」

「はい……」なぜか男が返事をした。

「もつと遊んでやりたかった、美味しいものを食べさせてあげたかった、と後悔ばかりしているんです」

「でもそれじゃね、弟くんはこの世に心残りができるしまう。死者

にとつて残されたご家族のことが一番、気になることなの。心残りがあると成仏できないで、ずっとこの世をさ迷い続ける、死ぬ時の悲しみを抱えたまんまで。それでもいいの？」

女は首を横に振った、激しく。

「駄目でしょ、う？」今度は縦に振った、何度も。

「絶対に駄目」

女は手の甲で田尻の涙を拭っていた。

普段靈能者に複雑窮まりない感情をもつている千央だが、それでも不覚にも感動してしまっていた。そして、残された家族が幸せになればいいなとさえ思えてきた。

靈能者が笑いかけ、女もそれに応えるように笑っていた。一瞬その場は一件落着の雰囲気に成りかけた。

しかしその後ろから、嗚咽が聞こえてきた、見ると今度は男の方がさめざめと泣きはじめたのだった。何事かと、千央たちはそれの大注目した。

「ぼ、僕が悪かったんですね」男は奮えながら訴えた。「マオのことは一人で決めたことなのに、僕は学校で忙しいのを理由に全然遊んでやらなかつた！！」

男は頭を腕に埋めて、子供のように泣いた。

「マオは僕のことを怨んでいないでしょうか？」

あまりのことに千央はついに吹き出してしまった、それは千央が薄情だからではなく、ちゃんと理由があるので。

「僕には責任があったのに……」男はヒィーッと息苦しそうに言つた。

「マオが死んでから、くんはそのことをずっと悩んでいて……、す、すいません……」やっと泣き止んでいた女も男につられたよつによよと泣いた。

千央には訳がわからなく、「はああ？」といい声が洩れてしまつた。

「まあ、そうだったの……」

しかし霊能者は何となく合点したようだつた。何がまアそつだつたのだよ、と千央は思った。あんたが見破らなきやいかんことだろうが。嘘なのはもうわかつていたが、素直に観客になつてどうするんだよ、と。

「じゃあ、アンタが男親なの」

男はゴクリと唾を飲み込み、頷いた。

何てことだ、千央は混乱していた。どうやらマオくんは、この男の息子でもあつたらしい。だがそれでも、あの女の弟でもあるようだ、これは一体どういう訳だ。男が女の母親と浮気していただつてことだらうか。……もしそうなら酷い話だ。家庭内が大変な修羅場になつてしまつだらう。相関図が難し過ぎて、頭がだんだんこんがらがつてきた千央だった。

「あ、そうだ。今もマオの写真をいつも持ち歩いてるんです」男はしきりに鼻をすすると、照れ隠しのように一枚の写真を差し出した。場所はどこかの家の庭だろうか、大きな木が後ろにあり、中央には幼稚園生になるかならないかくらいいの男の子が、コリーッぽい灰色斑の子犬を抱いて微笑んでいる。冬場なのか随分厚着をしてモコモコである。

霊能者は写真を見て微笑んだ。

「あら、あなたによく似とんさつね」男は泣き笑いの表情で頷いた。それに同調し涙ぐむ霊能者、なんだかとても嫌な気分だ。心が痛む。

「あの、僕らはマオのために何ができるでしょうか? マオを安心させたいんです」

今度は男は女に貰つたハンカチで鼻水を拭いていた。

「それはね……、それは、あなたたちが協力し合つて立ち直つて、息子さんを安心させるしかないのでしょ。悪靈にとり憑かれたわけじゃないんだから、追つ払えばそれで終わりつてわけじゃないからね」今度は霊能者が震えた声を出した。

「あなたたちとマオくんはずつと繋がつていますよ」

女は微笑んで嬉しそうに頷き、男も後ろで満足したように頷いた。千央はどうしようもなくソワソワして、落ち着きがなくなってきた。千央はこの、感動的な瞬間をいつまでもそのままにしておきたかった、格別に上手く飾り付けられた特別なデコレーションケーキのようだ、しかし、これが運命、ケーキはナイフで切り分けられ、粉々に噛まれて胃の中へ……。千央は知っていた、今回の場合は、目もあてられないほどグシャグシャになる運命なのだつた。

感動的な場面に水を差すようだが、彼女の弟とやらは死んではない。それどころか、本当に存在しているのかすら怪しいのである。

靈能者に会いたいという男に千央たちが会つたのは、真が入院してしまう前のことだった。とても暑い日で、上からの太陽光線とアスファルトの照り返しが千央たちを直撃するなか千央たちはスーパーまでの道を作つて歩いていた。その時一番遅れていた真は、見知らぬ男に話しかけられた。

「あ、君、君。そう、君だよ」

その男は若い学生風で軟らかい声をしていたが、最初は妙に馴れ馴れしく不気味な印象であったという。

「増田さんって人の家、どこにあるか知ってる？」

真はジッと男を見た。近くでみると肌がソフトビニールのようにキメがない、そしてオレンジ色によく日焼けしている。歯は白いが非常に小さく長く、まるで米粒のようだつた。歯ぐきが異常に痩せているのだ。その歯のすき間を唾液が波打つてるのが見えたそうだ。真が頷くのを見るや、男は続けた。

「知ってるー？ そうかー！ ありがたい。確かに、その人の家で集会みたいことやつてるよね？」

その時真は質問の意味が分からず、首を傾げた。この頃は反対派の出入りもあるのでどちらのことを言つているのかが、分からなかつたそうだ。

ここまで千央たちは遠目にそれを眺めていたが、あまりに長話なのを怪しく思い、皆は道路を引き返して真のところへ引き返した。「僕、増田さんのお宅に行きたいんだけど、誰か道を教えてくれない?」男は子供がわらわらと集まつてくるのを見て、こう言った。この時千央たちは名刺をもらつた。だが、大学生にしては歳をとりすぎているような感じがする、逆に講師としては若すぎる。それを尋ねると、自分は確かに学生だが、ただし大学院生だという。年齢は27歳だった。

○ 大学

佃 憲人

佃さんは続けた。「僕は大学で文化人類学の研究をやつててね。その関係で全国のシャーマンの類、つまりイタコや靈媒師の取材をして回つてるんだよ」

公平は名刺を見て言った。

「それで、増田さんに取材をしたいと」

「うん。と、言つても一般の客として潜り込むだけなんだよね。地図はあるんだけど、どうも迷つてしまつたみたいでね。わかるかな」

皆は佃さんの持つていた地図を我も我もと覗き込んだ。

「でも、その靈能者は偽物ですよ」

千央は人を群れに割り込むようにして言った。期待ハズレであつてはならないと思ったのだ。千央のあつさりキッパリした口調が面

白かったのか、佃さんは笑いだした。

「ハハッ！！なんでそう思うの」 なんど言われても、偽物だから偽物なのだ。千央が返事に困つていると、毅が佃さんに尋ねた。

「あの、予約はしてあるんですか？」

「いや、ない。飛び込み取材だよ」

「じゃ、行つたとしても今日会つのは無理ですよ。紹介がないと。

「ね」 慶幾は断言した。毅は頷いた。

真琴はここで素つ頓狂な声を出した。

「え？ 紹介？ 紹介ってどういうこと？ そんな制度があるの？」

「何驚いてるんだよ」 公平は低い声を出した。 「真琴も誰から紹介されてきたはずだよ」

父のやつ、いらぬ口ネを使いやがつて…… 千央は心の中で毒づきながら、言った。

「私も今までそんなのがあるの知らなかつた。まるで会員制のクラブか何かみたいじゃん」

「」のやり取りに佃さんは大いに興味を惹かれたようだつた。

「じゃ、君たちの何人かは増田さんに占つてもらつたことあるの？」
ありますよ、という調子で皆は次々に頷いた。あるどころか当の靈能者の孫がここにいるのだ。伊鶴は言った。 「僕らはそこに泊まりに来てるんです。だから……」

「ああ、夏休みだもんな」

「ええ。だから、よかつたら案内しますよ」

「え。でも、紹介がないといけないんなら、行つてもしょうがないだろう。どうすんのさ？」 慶幾は言つた。

「ああそつか、どうしよつ」

「そんなことなら……」 毅が言つた。

「今日じゃなくてよかつたら、予約を代わりに入れときますよ。どうせ、名簿に名前を書いておくだけなんだから」

それを聞いて、佃さんは顔を綻ばせた。

「本当かい？ ありがとう、助かったよ。じゃ、とりあえず道だけ教

えといってくれる？」

それから、毅は日程の相談をし、他の子は地図を見ながら佃さんに熱心に道のりを教えてやつていた。一方千央は、森に少し入ったところで朽ちて倒れた木に座つて待つていた。そこはイノシシの泥遊び場で、じめじめしてて涼しい。足元には色取り取りの茸が生えていて毒々しい。森を抜けた、すぐ手前には、佃さんのものと思われる赤い軽自動車のエンジンが低い音でうなつている。

千央は、先日熱中症で倒れてしまつてから炎天下にいるのを意識的に避けていた。あの体の芯が抜けていくような気持ちの悪さをまた味わうことと比べたら、多少怠け者と思われるくらい構わないと思えた。しかし、千央は離れたところにいる毅たちを眺め、溜め息をついた。千央はこの件で少し臆病になつっていたのだ。具合が悪くなつてしまわなかつたと、いつもいつも心配なのだつた。

くそつ、なんだか腹立つな！！苛立ちつつ千央は、緑青色の茸と赤、黄色の茸を順繰りに踏み潰していく。

「さつき偽物だつて言つてたけどどういうこと？何でそう思うの？..」急に声が聞こえ、千央は驚いて顔を上げた。眞と一緒にいると思っていたのに、目の前には公平が立つていた。

「だつて、外したから」千央は顔を擦り、ふて腐れた声で言つた。
「あの占い、絶対に嘘だよ。公平たちは信じてるかしれないけど。あの靈能者、お父さんが私のことで間違つてることを話したのに、まるで気づかなかつたもん」ふーん、と言い公平はポケットに手を突つ込んだ。

「そりゃあさ、俺だつてそのまんま信じてはいないけど……」

そういうえば、と千央は思い出した。公平にとりついている先輩の靈の話を。それは放火で捕まつて、今は少年院にいるという、不良の幼なじみだ。公平は彼を警察に売り、逮捕の原因を作つたのだ。

いや、間違つている。千央は首を振つた。逮捕の原因を作つたのは、他でもない、そいつ自身なのだ。公平は悪くないのだ。

だが公平は多分、背信感のためか、飛び込み競技が出来なくなつ

た。もし千央が公平の立場ならば信じないし、また信じたくもないだろう。しかし競技が出来なくなつたということは、公平が何分の一かでもそれを信じてしまつていいことではないのか。これに嘘だと証拠があり、公平の自信が回復するならどんなにいいだろうか。

「僕はさすがに嘘だと確信が持てなくってさ」

「よおー君たち、そんなに占いが嘘か本当か気になるのかい?」

急に後ろから声をかけられ、一人はびっくりして飛び上がつた。エンジン音で気がつかなかつたが、佃さんがすぐ近くまで来ていた。毅たちとの話は終わり、集まりは散会したようだ。

佃さんはまた言った。

「そんなに占いが嘘か本当か気になるのか?」

「んー、まあ、色々と振り回されてますからね」公平が言ったことに千央はウンウンと頷いた。

佃さんは繁みから顔を二コツと覗かせて言った。

「でもね。たかが占いだよ、信じるのも信じないのもそれは自由さ」「あの佃さんは占いは信じてないんですか?わざわざ研究しているのに?」公平は目を細めて言った。

「僕は文化の觀点から占いを見ているからね。特に占い好きなわけでも、信じているわけでもないんだよ。興味があるのは、その人独特のスタイルだったり、イタコや祈祷師の何が人々を引き付けているのか……?とかだね。当たるか当たらないかを調べるのは、それは他の人の仕事だ」

「取材で本物に会つたことはあるんですか?」千央は興味を持つて尋ねた。

「あー、今までこれは…!ってのはいなかつたな。単に数が少なかつたのかもしれないが」

「それじゃ、そいつら全員が詐欺をしていることになりますよね?そういう場合はどうするんですか?警察とかに通報するんですか?」公平は聞いた。

佃さんは一気に吹き出した。

「まさか！ そんな大袈裟なことしないよ！ 結局は無害な人たちなんだから」

千央は佃さんの言葉を不満に思つた。今まで千央や公平たちを怖がらせ、苦しめてきた人たちがとても無害だとは思えなかつたのだ。また、公平はあーあ、と失望しがっくりと肩を落とした。そして歯を食いしばり、その間から獣のような唸り声を出して言つた。「どうせ、どうせ大人にはわかりやしねえよ。大人に振り回される子供の気持ちなんてもんは」

いつものようすとあまりに違つて、千央はびっくりした。公平をよく見ると、目は潤み、体は細かだが震えているのだった。

佃さんはそれを聞いて、少し驚いたように眉をチョッと上げた。そしてしばらくの間考えていたが、千央に君たちは×日まであそこにいるの？と質問してきた。千央がはいと頷くと、佃さんは「じゃあねえ……」と言い、こう続けた。

「もし」「希望なら靈能者が偽物だつて、君たちにもわかるように取材するよ。ただし偽物だつたらな」

「ええ！ ……どうやつて？」それが出来るのなら田茶す！」ことだ、少しニヤつき、だが疑いながら千央は聞いた。公平は眩しそうに佃さんを見ていた。

「何何、ちょっとといつもとやり方を変えればいいのさ。……もし上手くいけば靈能者はまあ、恥をかくだろうよ」

佃さんは片目をチカツとつぶつて合図し、早速と立ち去つた。千央たちはそれをポカンとした顔で見送つた。恥をかく、この言葉がこんなにも大きな意味を持つことはなるとは、それに気づいたのは、大分後になつてからであつた。

さて、靈能者はまた鑑定の態勢に入つてゐた。千央の時と同じように、靈能者は女の手を撫で言つた。

「ねえ、家の引き出しに臍の緒があるでしょ？」

唐突に臍の緒の話なんか始めた靈能者に、一人共わけがわからぬ
いという顔になつた。千央もそれは同じだつた。

「ほり、赤ちゃんが産まれた時についてくる。それをたんすの一番
上の位置につつすといいわ」「臍の緒つて……、ああ……」女は合
点がいつた顔をした。「誰のですか？私の？彼の？」

「違う。マオくんのよ」

女は不安気な顔つきになつた。

「マオのですか！？はあ、そんなの家にあつたかしら」

「きつとあるはずよ、探してみなさい」女は持つていた手帳にそ
れをメモした。

「あの、マオに是非聞いてもらいたいことがあるのですが」なんだ
か改まつたようすで男は尋ねた。

「何？」

男は照れながら言つた。

「えと、欲しいものを聞きたいんです。もうすぐマオの誕生日なの
で……」

「そうね」靈能者は微笑んだ。

「勉強したいから、絵本とかがいいつて」

「本、ですか……わかりました。おもちゃはもう飽きたかな？」力
ツブルは満面の笑顔になつた。

「魂は天国でも成長を続けるのよ」言い聞かせるように靈能者は言
つた。

「じゃあ、ランドセルも必要ですね」

「中学高校にも行けるし、大学にもね。天国大学よ」天国大学、
のところで靈能者はフフフと笑つた。すごい名称だ。きっとあの世
やこの世のことが学べるに違いない。是非行ってみたいものだ。

「アハハ……。わかりました……」

薄ら笑いしながら女は言つた。

「あつ、そうだ最後に……厚かましいお願ひなのはわかってるんで
すけど……」女は言い難そうに切り出した。「マオの形見のお祓い

をいくつかお願ひしたいんです、死ぬ直前まで使つていたもので…

「少し気になることがあります」

「いいですよ」 灵能者は快く引き受けた。

女は微笑みを浮かべ、ぶつぶつ言いながら、カバンからおもちゃを取り出し始めた。

まずは小さな「ボール」、薄いピンクの「ぬいぐるみ」、薄汚れた「ハンドタオル」……。

「これは、マオのお気に入りのおもちゃです」

「あらー、随分とたくさん持つてきたのね」と灵能者は苦笑いした。女はそれを無視して、またカバンに手を突っ込み言つた。「これは割と最近に買つたものです」

そうしてまず女は、太い「ロープ（縄）」を取り出した。あれ？ なんか変だな。

次は木製の「ブーメラン」、さて、雲行きがだんだん怪しくなってきた。幼児がブーメランで遊ぶだろうか。

続いて、ゴムの「ホネのおもちゃ」。いよいよもつておかしい。

千央はカーテンの影で顔を歪めた。これじゃまるで、マオは……。
「おっと、忘れちゃいけない。これで最後です」 そう言つて女はパンチンと手を鳴らして、取り出した。

それは、＼＼ 犬の首輪だつた。

灵能者はマオくんは犬だという、決定的な証拠に衝撃を受けたようだつた。それは千央も同じだつた。確かに佃さんも女の人もマオくんが人間だとは一言も言つてなかつた、しかしこれはあまりにも

「あの……これは……？ 何ね？」

灵能者は小さい声で言つた。

いくら年寄りのといつても犬の首輪を知らないはずはなかつた。

しかし、灵能者は自分からそれを口に出すことは出来ない。今までマオくんを人間の子供のつもりで色々喋つていた灵能者だつたが、たつた今マオくんは本当は犬であると悟つた。灵能者は一人がそれ

に気づいてないと思つてゐる、これから彼女はそれをなんとか取り繕わなくてはいけないだろう。

「灵能者がしばらく何も言わないで、の方から話しあじめた。「これは、マオをペツトショツプで買つた時に購入したものです。体が大きくなつてきて、そろそろ新しいのに換えてやらなきやと思つてた矢先に事故に遭つてしまつて……。どうでしょう？ 何か靈についてませんか？」

「灵能者は何も言わずに、おもぢやの靈鑑定を黙々とやり始めた。いつもの何倍の速さでそれを終えると、

「あ大丈夫、何もつゝとらんよ」

とさつさと宣言した。灵能者は完全に脱力したのか、今までとは打つて変わって声には全く霸氣がなかつた。千央は灵能者がなんだか氣の毒になつてきていた。

「そうですか、よかつたあ」

二人はホツとした顔を見合わせて笑い、いよいよ腰をあげて帰ろうとした、灵能者も一安心したことだらう、しかし「あの、ねえ

え

「女の方が振り返り、灵能者の側に駆け寄り、いきなり甘い声で言った。

「あの、ねえ増田さん。私ちよつと、思うんですけど、もしかして途中までマオが人だと思つてたんぢやないですかあ？」

ズバリ女は尋ねた。

「まあ、まさかそんなことはないですよ」

少し笑つて灵能者は否定した。そりやそりだらう。

女はまた言つた。

「えー、そりかなあ。聞いててそりは思えなかつたなあ、私は……」

「さあさあ、次の客が来るから早く帰りなさい」灵能者は手で追い返した。

しかし、女の方も食い下がつた。

「では、犬の臍の緒が見つからなかつたら私たちどうしたらいいん

ですか？呪われてこのまんまなんですか？」

「見つからなかつたら……、その時はしようがない。何もやらんでよかよ」

「そうですねー。普通犬の臍の緒なんか取つてゐるわけないですもんねー」

女はぴょこんと正座して靈能者と向かい合ひ、笑つた。

「ねつ、素直に認めて下さこよ。最後までマオが犬だつて氣づかなかつたんでしょう？」

今度は女がさつきの靈能者のように手を掴もうと、腕を伸ばした。靈能者は文机から手を引つ込んで、それから逃げようとしたが、結局無理矢理握られてしまつた。

流石にやり過ぎてるよ。もうやめてくれ、千央はそう思いながらも、カーテンのすき間からなす術もなくその光景を見ていた。

「ちょっと、何ばするとねアンタは。もうはよ帰れ、帰れ。もうすぐ次の客が来る時間けんが」

「えつ！…ちょっと待つて下さこ、マオが大学に行くつて話はどうなるんです？本当なんですか？」そう言つて、女はむくれた。

今思えば、犬が大学に行くなど荒唐無稽な話である。

「ああ、本当よ本当。天国にも学校があつて……」

「本つ本当にそなうなんですか？適当なこと言つて、誤魔化してるんじゃないですか？私たちは眞面目にマオのことを心配して今日来てるんです。それなのに、臍の緒やら……フン、天国大学やらつて……ひど過ぎます、フハハっ」

「私は眞面目に言つとると……」

女はちょっと困つた顔をして、首を振つた。それは宥めすかすような表情にも見えた。

「いやいや。嘘です。いくら眞面目だろうが、あなたは嘘を言つてます。だつておかしいもん。つてゆうか自分でも嘘だと分かつてずっとやつてるでしょ？」

チツ、と靈能者は舌打ちをした。

年寄りの舌打ちってあんまり聞く機会がないよな……、って珍しがってる場合じゃなかつた。

「そがんして人を信用せんけんおかしかもんの見ゆつとくさい」 精能者はやり返した。

「信用？」

「そつ。心が汚れとるけん、犬の靈につかれて頭のおかしくなつるとるとよ」「よ

「はい？私の心が汚れてる？あなたが嘘つきの責任を私に押し付けないで下さいねえ。じゃあ聞きますけど、幽靈が見れるのはどうしたら治るんです？あなたの嘘占いなんかで治るんですか？あんなへば占いでえ？」

嘘つきめー！確かに精能者にこれを言いたいとずつと思つていたが、まさかこういうかたちで実現するとは、こんなことになるのを望んだわけではなかつた……、千央は後の日、またそれを強く思つたのだった。

精能者はまた舌打ちをした。

「ところで、マオが大学に行くつて犬の大学なの？ああおかしい」と女は言い、魔女みたいに思い切り蔑み笑いをした。

「この女、女優だ。どこかの劇団員だろ、千央は思つた。

「あー、もうよか。あんたのような性根の曲がつた女子は死ぬまでこの病気は治らん。終わり終わり。もう治らんけん、一度と来んによかよ。分かつたね」

精能者はそう言い捨て、よつこじりしょと立ち上がり、舞台の脇に退いて行つた。

「あーらまあー、それはたーいへーん」

女は座つたまま、首を伸ばし、精能者を見送つた。彼女の首は尋常じゃなく長く、クビナガリュウのようにものすじぐく伸びていた。女の声のない笑いがこちらの方まで届いてきた。

“「そがんして人を信用せんけんおかしかもんの見ゆつとくさい」

「信用?」

「そう。心が汚れとるけん、犬の靈につかれて頭のおかしくなつるとるとよ」「

「ヒーリングで、マオが大学に行くつて犬の大学なの?おかしい」「あー、もうよか。あんたのよつた性根の曲がつた女子は死ぬまでこの病氣は治らん。終わり終わり。もう治らんけん、一度と来んでもよかよ。分かつたね」

千央はこれを頭の中で何度も何度も再生した。

番組のVTRはこれらのやり取りで靈能者が言つたことを継ぎ接ぎにしたもののが使われており、靈能者がまるで、精神病患者が憑きものせいでおかしくなつてゐるかのように編集されていたのだ。

「丁寧なことに所々には舌打ちの音までついていた。

それを見終わつた後、司会者とコメンテーターはコメントした。

はあ、確かに以前は、精神病の原因が靈に憑かれたせいだと考えられていたこともあつて、狐憑きと呼ばれて、患者さんたちは長い間、迫害やいわれのない差別を受けてきましたよね、先生。でも流石に医療が発達した現在では、精神病はそういうものではない、病気は治療で治るものだということは当然分かつてゐるわけで……。

ええ、そうですよ。こういうオカルトティックなこともふくめてね、病氣に関して誤解をされますとね、精神病に対する間違つた認識や偏見を生み、また、増長してしまいます。今も病氣で苦しんでいる患者さんがたくさんいらっしゃるのに、大変迷惑です。このような主張のできる人達がいることに僕は一医療従事者として本当に強い憤りを感じますねえ。

言つた内容からしてどつかの医者らしいコメンテーターはテレビの前の千央たちに、怒りの一瞥を向けた。そして番組の最後を司会者はこう言つて締めた。

このよしば病院増築の件に関して、今住人の間で反対運動が起つてゐるようですが、この根拠のない誹謗中傷が増設反対の理由として含まれているならば、我々人類が逆に衰退していふといふとしか思えず、大変残念です。当番組は引き続きこの問題を取材していきたいと思っています。さて、次回の“五色のKurasu”は神月町のシスター強盗障害事件についてをお送りする予定です。それでは皆さん来週のこの時間まで！…さよなら！…

司会者は笑顔で手を振り、軽やかなエンディング曲をバックに東京のビル街のSHINE風景、という感じで番組は終了した。

「マーシャルが始まった途端、毅はへなへなと崩れ落ちて、一言言つた。

「なんなんだ、あれは」

皆は津波の直撃を受けたような顔になつていた。一方千央は自分が魚になつたような気がし、口がパクパク動いた。

佃さんたちが増田家にやつて来て、靈能者をペシャンこにしていつてから大分日にちが経つてゐた。あの後、千央たちは一時靈能者に対して少し同情し、それからあの女の演技について意見を述べ合つた。大概が怖かつたという意見だつた。真はある人はまるで妖怪のようだつたと言い、伊鶴は女にろくろ首というあだ名をつけた。しかし、なぜ単に取材をしたいと言つていた佃さんが突然に牙を剥き、靈能者を攻撃するようなことをしたのか、その訳を皆は知らない。千央は直後、毅にことの真相を話そうとも考えたが、公平に止められたのと、あんまり毅が動じていなかつたので今だに黙つたままだつた。だが、話すのなら今ではないのか。千央は横目でチラリと公平を見た。公平は、青い顔をして具合が悪そうにしている。千央は何か言おうとして一步踏み出した。

しかしその時、電話が鳴りはじめた。

十九、チリリと電話は鳴る

そのあまりのけたたましい鳴り方に、毅は一瞬怯んだが、すぐに立ち直り、受話器を持ち上げ耳にあてた。

「もしもし」声が嗄れている。

「今親はおりませんが」

隣で千央が見ているうちに毅は見る見る険しい顔になつていった。生返事を繰り返して毅は受話器を置くと、恐れ慄いた顔で言った。

「風間さんの奥さんからだつたよ。家に電話がたくさんきてるって風間さんは以前イノシシの話をしてくれたあの馬面の人で、彼は反対運動の役員も勤めていた。「さつきのテレビは一体何だつて……でも、あんなの出鱈目だよ」

毅はめそめそ泣きそうになつて、首をふつた。

使われた映像にはモザイクがかかり、音も加工されていたものの、見る人が見ればわかつてしまつに違ひなかつた。知り合いならば尚更だらう。

「ねえ、何でまたあの時のビデオがテレビなんかで放送されてるんだよ?」憤然としたようすで真琴は言つた。

「佃さんて本当はテレビ局の人だつたの?」

「いや大学院生つて言つてたでしょ」

「でもそれは、警戒させないための嘘かもしれない」

「名刺までくれたのにか?」

「偽造かも知れないぞ」

佃さんのくれた名刺には所属する大学名と、名前があつた。確かに見たのだが、どうしてもその学校名と佃さんの下の名前が思い出せないのであつた。

「いや。そんなことするか?だいたい名刺を見せなくとも、大人なんだからそのくらい信用させられるだろ?。馬鹿のやることだよ、名刺を渡してわざわざ嘘の証拠を残しておくなんてのは」慶幾は推

理して言つた。「だから僕はあの名刺は本物だと思うよ。多分あの後、なんらかの経緯があつてテレビ局にあのビデオが渡つたんだ」「じゃ、そのなんらかの経緯つてなによ?」アンコは怒りながら尋ねた。

さあそれは知らん、といつぶつに慶幾は首を竦めた。

「成り行きはともかくとして、許可もなくテレビに売り渡すなんて、なにを考えてたんだろう?あの佃のやつ」季生子は機嫌が悪げに呴いた。相当頭にきてるようだつた。まあ当たり前か。

「ところどざ。その名刺はどこにあるの?僕見てないんだけど……」

その途中で、伊鶴は突然思いついたかのように言った。「あつ!! もしかしたら、それに佃さんの連絡先がかいてあるかもしれない!」

これは大変重要な閃きになつた。伊鶴の言つ通り、名刺にはたいてい表か裏に普通住所や電話番号などの連絡先がかいてあるものだからだ。

「私は持つてないけど」

「俺も、つーかあれ以来見てないぞ」

皆は、知らないよと口々に言つた。

しかし、千央にはそれを持っている人の検討がなんとなくついた。あの日最初に佃さんに声をかけられ、尚且つここに唯一いない人物だ……、「それさ、真が持つてるんじゃないの?」あれ。慶幾に先に言われてしまつたが、そう、仙谷真くんである。真は一番最初に名刺を受け取り、順番に皆で回して見た後でまた最後に受け取つていた気がするのだ。

「じゃ、病院に電話して真に聞こう。ナースステーションに連絡すれば、取り次いでもらえるはずだ」伊鶴は電話をかけようと机に近づき受話器を取つた。

「でも伊鶴さ、病院の番号知ってるの?」アンコは聞いた。

「え、あれ。ううん、わかんない」

仕様がないな、と慶幾は電話台の下から電話帳を取り出し、よし
ば病院を調べはじめた。しかし、それを見つける前にまた呼び出し
音が鳴りはじめた。

毅は電話を恐ろしげに見遣つたが、意を決して伊鶴から受話器を取り上げ電話に出た。しかし、毅はすぐ弾けるように受話器を遠ざけた、相手が耳をつんざくような大音量でいきなりがなりたてたからである。雖はすばやく耳をふさいだ。

金返せええええ――！！」のバカヤロウ！！

そして乱暴に受話器を置く音。これを見た毅はすっかり白んだ顔になつて、ゆつくり受話器を元の場所に戻した。そして意氣消沈して一番近くの部屋に入つて行つてしまつた。それを止める間もなく、直後また電話が鳴り出した。

今度は千央が毅を助けるつもりで出たが、運のよいことに相手は怒鳴ることもなくまともな人であった。千央は毅がこの電話に出ればよかつたのにと思った。

千央たちは毅の後を追いかけて部屋に入つた。そこは多分普段使われていなかつた洋間のようであつた。青銅色と淡黄色の壁に東洋風の布織物が掛かつており、隅にはマントルピースが備えられていた、その上には古い洋酒の瓶が置かれ、その大半がぶ厚い埃を被つている。千央たちが毅を慰めていると、公平はやつと喋りだした。

「え、どうこい」と?」と真琴は聞いた。

「佃さんはもしかしたら市長の差し金でうちに密偵に来たのかも知れないってこと」そう言つて公平はワインの瓶に被つた埃に息を吹き掛けた。埃は薄暗い部屋の中を舞い、なんだか妖しく光るのだつた。「皆もあの記事を読んだだろ？患者の脱走事件で、今まで反対してなかつた人たちまでが怒つてゐるって話を」

千央たちは頷きながら聞いた。その通りだ、その記事なら真がくれた雑誌で見た覚えがあつた。

「それで、病院増設の住民の説得が一段と難しくなったわけだ。さらに悪いことに隠蔽疑惑もうもろで反対派に調度いい攻撃材料を与えてしまった。それで市長はこのような反撃方法を考えた……」

“反対派に仲間が裏切ったと思わせて、内部抗争を起こさせればいいんじゃないかなって”

そう言い、公平は窓の桟から垂れ下がった重厚なカーテンを興味深げに見た。ここに壁に貼られた壁紙は、なぜかカーテンと色違いの布製だった。

「でもそりゃないじゃん。間違ってるよ」

鼻息を荒くして千央は反論した。しかしそうは言いつつも、確かにこんな報道をされでは、今まで通りに反対運動を行うのはいくらか弊害がでてくるだろうな、と千央は思っていた。いや、それくらいの支障では済まされないだろうとも千央は直感した。別の箇所で不都合が起ころう。実際、さつきのテレビ放送で、霊能者の仕事がすでに危うくなっているのだから。“心が汚れてる”犬の靈につかれて”頭のおかしく”“性根の曲がった”“死ぬまでこの病気は治らん”……、これらの言葉が上手く編集され、まるで霊能者は精神病患者が自らの落ち度が招いた因果のせいで靈に憑かれ、発病したと考えているかのようになっていたのだ。それに、死ぬまで治らないという言葉をかぶせると、遠回しながらもその意味は……。

「そりや事実とは違つてるので、疑心暗鬼にならざるをえない訳だし」

佃さんは市長が差し向けた刺客だ、なんて、何やら陰謀がかっていてとてもすぐには信じられない話だった。しかし、季生子もそれに賛同するように言つた。

「反対派の結束を弱めるのが目的かもね、うん。有り得る」

「ええそんな……」

千央はこの病院建設の件に関しては特に賛成でも反対でもなかつたが、なぜだかとても残念な気持ちになつた。なにかに妨害され、自由に意見を言う機会が減るというのは、なんとなく惜しい感じが

するのだった。たとえそれが自分に全く関係のないことでも。

しかしふと千央は疑問に思った。なぜ、市長がこんなことをするのだろう? この件で住民の批難を浴びていたのは、よしば病院と院長であつたはずなのになあ。

「でも何で市長が、そんなことあるの?」千央と同じことを思ったらしく、伊鶴は質問した。

「馬鹿だな」慶幾が一喝した。と、すると千央も馬鹿らしい。

「この計画が決まらないと、国から補助金が出なくなつて困るんだろ?」

「ううが」

「そうなの?」アンは真琴に聞いた。

「うん。まあ、そうだろうね」真琴は頷いた。

「そうなのか」伊鶴は青い壺にさしてあつたゴルフクラブを弄るのを辞め、驚いた。

「でも、そのやり方だとテレビ局と繋がりがないとできないんじやないのか?」毅はやつと復活して公平に聞いた。公平はやつと笑顔を取り戻し、言った。

「う……まあ、そのへんは、僕にはわからないけど……」

まあ、そりやそうだよね、と千央は思った。いやもしかしたら、テレビ局も騙されたんじゃないのかといつ説もある、千央はテレビ局に勤める母親に聞いてみようかとも思つたが、よく考えるとローカルテレビ局の一社員のある母が都会のテレビ局の事情にそんなに詳しいはずもなく、それは止めておいた。

その後しばらくの間、電話は鳴りつけた。千央たちは代わる代わる電話番を勤めて、大人は今いないと断りをいれた。そのなかには相手が一切喋つてくれない電話もあった。普段なら無気味で怖く思うであろう無言電話も、今回はむしろありがたかった。「切りまーす」と言つてすぐに切つてしまえばそれで終わりだからだ。しかしたいていの場合、相手は元気いっぱいなのだつた。千央たちの断りには納得せず、構わず喋り出す人もいて、千央たちはか

なりビクついた。だから話す間はハンズフリーにしておき、いつでも助け舟がだせるよう皆は電話の周りにずっと集まつて聞いていた。彼らの言い分を大まかにまとめると、このような感じだった。まず、胡散臭い商売をして怪しからんだとか、差別行為だととか、お前たちの方がよっぽど社会の弊害害悪だ、信者もろとも地獄に墮ちるとか、市長がお前らを信用しないのも当たり前だと、妨害するなどとがだとがだ。

これには千央としても、あおむね賛成であった。ただ増田家が反対活動の参加動機や活動で担う役割について、つまり、精神病人が靈に取り憑かれていると主張し、それで信者を反対活動へ煽つていう報道が正しければの話だが。なにせあのテレビ番組は、こを住民たちに精神病患者に対し差別的解釈を植え付ける、胡散臭い集団であるかのように報じていた。そしてその意見を根拠に住民らが反対運動を展開しているかのような雰囲気を醸し出していたのだ。そういう電話が殺到するのもある意味無理もない。しかしそれは、まるで間違った情報なのだ……。

千央たちは相手が聞いてくれる限り、一生懸命説明した。あそこは数回反対活動の人達に貸しただけだということ、そもそも信者は地元の人間ではない人が多く、反対活動のメンバーとは全く別の人達だということ、靈能者は反対運動を煽りたてたりしてはいいなどいうこと、それどころか、本人は賛成でも反対でもないこと等を。しかし増田家が靈感商いをしていることについて（元々番組の造りがこっちが主だったし）、相手方にそちらのモラル、というか道德観はどうなってるのよ、と問われると、これは紛れも無くこちらに落ち度があるわけだし、下手に否定もできず、後ろめたいのもあって黙らざるをえないのであった。これはどんなに納得させても決まつて最後に聞いてくる質問だった。その時千央たちは、本当にその通りですねとしか思えなくなってしまったのだ。

慶幾は長々と抗弁を垂れる女性の相手をよつやく終え、受話器を置いた。だがまた電話が鳴り出して、皆はうーんと唸つた。もう氣

力は尽いてしまった、次は誰が出るのだ？

しかしすぐにそんな心配は無用になった。ありがたいことに、アンコが「こんなもの抜いてしまえ」と言つて、電話についていたプラグを颯爽と引っこ抜いてしまったからだ。それで呼び出し音はピタリと止まり、忌まわしい電話はもう鳴らなくなつた。皆は彼女にやんやと拍手喝采を贈つた。アンコはまれに男氣あふれる行動をするので、千央は面白いと思つた。さて、なんといつても、今日のハイライトは増田家に住民たちが訪ねてきた出来事ではないだろうか。彼らは案の定、怒った顔をしてやってきた。

大部分の人間は単純にテレビの取材を受けたことや、都合の悪い会話を撮られたことを怒つていた。しかし、彼らの一部はビデオは反対派を陥れるため靈能者が住民を裏切つて、取材に協力し作られたものではないか考えていた、それで問いただしにやつて來たのだ。果ては増田ヒサノは市長側のスパイなのではないか、という疑惑まで巻き起こつている始末で、この人たちには水野さんが対応した。

「さつきの報道で反対側の活動がやりにくくなつたのは申し訳ないと思います、本当に謝ります。でも私たちが裏切つたというのは完全に貴方がたの誤解です。テレビが無断で取材に来て、勝手に放送されたんです……、テレビでインチキと批判されたのをそちらも聞かれたんじゃないですか？協力しているのに評判を落とすような扱い許すわけないじゃないですか。こちらもとりあえず商売してるんですから」

“私たち”水野さんがそう言つてくれたので、千央はなんだか心強かつた。

「あ！？単に裏切られたんじゃなかとか？口車にのせられて、用がすんだけん切り捨てられたとさい。トカゲのしつぽ切りのごとな」

周りにいた大人二、三人がウンウンと頷いた。

違うのだ、そいつらをこちらに引き入れたのは自分たちなのだ。断じて水野さんたちが仕組んだわけじゃない、そう言つたが、あんな恐ろしい集団に飛び込んで自らの罪を告白するような度胸や

勇気を、悲しいことに千央はまるで持ち合わせてはいなかつた。

「あいつら腹の中真っ黒やけんな」

「の言い方だと、あいつらが市長のこととかテレビの人のこととかよく分からなつたが、もうこの際どっちでもよかつた。」

「とにかく増田ヒサノば出さんか。話しあつけん」おじさんの一

人が水野さんに詰め寄つた。

「今は話せません、今いりんですよ」

水野さんはお手上げという風に両手の平を見せて、困った声を出した。

「お前、隠しどうとやなかとか」

「まさか、そんなことしません」男性は水野さんを突き飛ばして、玄関をあがり家中に入ってきた。おじさんがこちらに歩いて来たので、千央たちはクモの子を散らすように逃げた。その時、水野さんと田があつたが、彼の目には不安の色が浮かんでいた。彼も恐いのだ、そして為す術もなく戸惑つているのだ。ああ、ごめんなさい、ごめんなさい、千央は心の中で水野さんに謝つた。こんな風になつたの、私たちのせいなんです。

「ねえ、そもそもこちらが貴方がたに係わつたのは成り行きですし、僕らは住民の皆の頼みに応えて協力しただけ、そちらから貸してと言つてきたことじやないですか」

「ああ、おいはそいば悔いとるよ」男は部屋をいくつか廻つて、靈能者の姿がないのを確認していく。

「僕だつてなんでこんなことになつたのか聞けるもんなら聞きたいんですよ……、あの、ちょっと、おじさん……！」

そして水野さんに追いつかれるといきなり振り返つた。

「だいたいお前らが全国テレビで批判されるような胡散臭い商売しどるどが悪かとやろうが」

水野さんの背後にはもう一人が近づいた。こりひらは土足で入ってきたのだった。「お前らは本当に町の恥よ。インチキ商売ば止むつかな、ここから出でいくかしらや。女にうつつを抜かしとする場合じ

やなかぞ、にーちゃん」

おじさんはそう言つて、水野さんの肩を叩いた。そして、住民たちは嵐のように帰つて行つた。後に残された千央たちは、水野さんを見た。水野さんは顔の筋肉を一瞬ひくつかせたが、またすぐいつもの表情に戻つた。そしてゆっくりと、大きな溜め息をついた。

その日の夜中、千央は布団の中で今日起きたことを考えていた。一番最初はテレビの内容に大慌てして、続いてかんはつ入れずに入々の怒りの凄さに戸惑つた、五十を過ぎたいい大人が若者のようにキレるのはなかなか見物であった。

今日、今まで千央の感情は確かに驚きと興奮で占められていた。しかししばらくして興奮から覚めた時、千央はすでに、悔悟の念から逃れられなくなつっていた。自分たちのほとんど故意といえる失敗が起こしたこの事態、その責任をどうどるのか、あるいはどうとらされるのかを考えると、千央は気が狂うような思いだ。いや、もうどんな方法をでもとれないだろう。

“靈能者の商売が駄目になつて、反対運動にも影響が出るみたいで、もう取り返しがつかないよ。これから毅の家人たちはどうやって稼ぐんだろう？”“そうだ、その前に毅たちに知つてることを全部話さなくちゃいけない……”“こんな時に相談できる大人が側にいたらいいのに……”“父は変人だし、母は無関心で、おじいちゃんは耳が遠いし……、水野さんと園さんか……一人にはなるだけ嫌われたくないよ……”

しかし、もはやこのこと隠し続けることはできないのは分かつていた。千央はしくしく泣き出し、そのうち嗚咽がもれた。秘密を告白することは千央にとって、一番苦手で恐ろしいことであったのだ。ねえ、誰か泣いてるの？、布団の外から小さく真琴の声がした。さあ知らない、千央は慌てて声を整えて言つた。そう、ならいい、と真琴は言つて再び静かな寝息をたてはじめた。

千央もやがて、すつと深い眠りについた。平氣なふりをすると、

本当に平気になつたよいな気がして樂になつたのだ。

一一、天花粉とテソンーン糖

あの最悪のテレビ放送のあつた次の日、真はめでたく全快し、病院を退院することになっていた。しかし増田家に帰ることはなく、本来なら福岡の自宅まで真っ直ぐ帰っている予定であった。だが真是星祭りが終わるまで滞在を許してくれるよつとに母親に頼み込んだ。

いや、正しくは千央たちの田の前でめぢやくひやに駄々をこね、ゆすり、齧しをかけたのだ。

「僕もお祭りに行きたいよ。ねえ、お母さんお願ひ。ええー絶対行きたいったら！お願い！ねええー……。くつそ、行けないんだら病気のままの方がずっとマシだつた！マジ死んだ方がマシだよ！死ぬ！僕死んでやるから！」

と、真はすさまじく場違いで不謹慎なことを大声で言い、ナースセンターの机を叩いた、終いには足をばたばたさせ、他の入院患者の注目を浴びていた。それはサルの挑発行動に似ていた。こうして彼は母親に恥をかかせて、しつこく粘った結果、とうとう許可をもぎとり、増田家に帰つて來た訳なのであつた。真のひどい振る舞いに千央たちは少し引いたが、本人は全く気にするようすもなかつた。

「真、あんた普段からものすごく甘やかされてるでしょ？」

季生子の至極真つ当な指摘に対し、真は苦笑いしながら、こう答えた。

「今までの経験から言つて、冷静に頼むと逆に聞いてもらえないくなるからそういうだけ。わざとだよ、わざと。アハハ」 その真に千央たちはまず、退院おめでとう、と言つたが、他にも早急に言うべきことがあつた。先日増田家に来た佃さんの名刺の行方についてだ。あのテレビ放送で起こつたパニック以来、皆は軽いショックを受けこの件はしばらく忘却の彼方にあつたのだが、今日真に会うことになつて慶幾が思い出したのだ。

慶幾はそのことを真に聞いた。しかし、真はまず佃さんのビデオがテレビで放送されたことすら知らず、大変驚いたようすを見せた。「もう、すごくびっくりしたんだよ。あの時は本当に心臓が止まるかと思った」

辛いものを食べた時のように真琴はヒーッと音をたてて息をした。真は顔を歪めながら言った。「そういうえば昨日、病院の駐車場にテレビカメラを持った人が何人かいるって他の人が騒いでるのを聞いたよ。テレビが取材に来てるって言つてさ。……じゃあ、あれはこのことに関係があつたのか」

話を聞いて、千央の気分はさらに憂鬱になつた。テレビは外の世界でも騒ぎになつてているのか。

「それって生放送だつたの？」

さあ、と真は言つた。「僕は見てないから分からぬけど」

じゃ、これから放送されるかもしれない。千央はあれ以来、とてもじやないがテレビを見ていられなかつた。付けていないテレビでさえ恐かつた。その四角い箱と真っ黒い画面の組み合わせを見るだけで、あの時のショックを思い出すのだ。頭の中が混乱状態になつて、急激に肋骨が一回り縮んだようになる、気分も悪い。多分これは何かの発作なんだろうが、どこが悪いのかは全く良く分からぬのだ。

しかし、これからは注意して見ていかなければならない、ああ嫌だ、憂鬱だ。

「で、肝心の名刺はどうやってたのさ?」と公平は聞いた。真はこう答えた。

「それがね……。覚えてないんだよ。確かに僕が最後に持っていたような気はするんだけど、あの後どうしたかの記憶がないんだ。人から貰つた名刺を捨てるわけないんだけどな……、どこかに置き忘れたのかなあ」

「それか落としたか」とアンコは言った。もし、そななら名刺はそうそう見つからぬだろう。もうずいぶん日が経つてゐるし、広大

な山道を探すなど無茶があつた。

「でも名字はわかつてゐるんだから、あとは大学の名前さえ分かれば。なんとか……」

「それがさ。だあれも覚えてないんだよ。」

公平はがっくりとし、失望した声を出した。

これは千央たちの間でも何度か話された話題だつた。とりあえず、候補からはものすごく有名な大学は除外された。名刺にかかれた大学名が例えば、東大とか早稲田とかであつたら、誰かがそれを指摘するなり記憶しているはずだからだと真琴は主張した。いや、案外大学名などは見てるようで見てないのかもしれない。人の目はかなり注意力散漫だから。しかし、佃さんの大学がハーバード大だらうがイエール大だらうが、今回重要なのは結局どこの学生だか千央たちには全くわからないということなのであつた。

とにかく、最後の希望も崩れ去り、これで皆は名刺から連絡先を知ることは無理であることを悟つた。佃さんと連絡を取るには何か別の方法を考えなければなるまい。

それから一日後の今夕、千央たちは出かけるために浴衣を着付けてもらつていた。まず風呂に入り、天花粉を体にはたいた後、アンコは藍色に金魚の泳いだ浴衣に青い帯、季生子は黄色に赤の帯を合わせてもらつて、それははしゃいだ声を出した。千央は緑色の浴衣に白い線の入つた帯を着させてもらつていたが、千央はその祭の前評判を聞いて、すっかり気分が重くなつてしまつた。

西昇町の隣、原崎町にある仁奈八代神社では、8月の16日から18日にかけて天仁星祭りが開催される。この行事は一風変わつていて、子供たちが馬や牛の格好をしたり、かけっこや力比べなどが催されたりするのだ。今夕千央たちはその催し物の一つ、井戸場でんでん巡りという行事に、ほとんど強制的参加させられることになつたのだ。

その井戸場でんでん巡りはまず、川に向かい水を汲み、村の一番

古い井戸まで歩いて行く、そこへ着いたら、水を井戸の中に流して終了なのだが、この作業に参加できるのは小学校高学年から中学生までの子供のみで、さうにほとんど明かりのない中で行われなければならないのだった。

祭りの会場に行くまでの間、毅はこの行事の由来について話を聞かせてくれた。

今から300年程昔、原崎町の村々では長い間全く雨が降らず、川や井戸は枯れて、畑の農作物はあるか人々は自分たちの飲み水も苦労する有様だった。

だが、不思議なことに水が枯れていらない井戸が唯一、一箇所だけあつた。その家に住んでいたのは、婿をとつてきたばかりの若い夫婦だった。その若夫婦は村の皆さんに水を分け、与え村人は命を救われた。

しかしその水もやがては尽き果て、そのうち体の弱かつた夫は病に倒れ亡くなってしまう。“おれが死んだら村の脚が一等速い馬と一番力持ちで大きな牛をきつと用意しておけ。織り姫様と彦星様にお願いして、天の川から水を汲んできてやる”という言葉を遺して。遺された妻は夫の希望を叶えようと、村中を奔走し、最後は村の地主に頼み込んだが素氣なく断られてしまった。彼女は涙に濡れた手で泥をこね、本物の代わりに馬と牛の土人形を作った。次の満月の夜、人形はもぐもぐと動きだし、本物の馬と牛になつた。また次の夜には村に雨が降りだし、井戸は水で満たされ、川の流れも元のように戻つたといつ。今でもこの亡くなつた若者は神通力の持ち主だったとか、この村には土人形から生まれた牛の子孫がいるといないとか言われおり、そのため町民たちは若夫婦への感謝の気持ちと鎮魂の気持ちを込め、馬や牛を真似て仮装したり、普段家で飼っている牛を連れ出して町を歩かせたりする。井戸場でんでん巡りもその一貫なのであった。

会場の仁奈八代神社に着いた時には日は沈んで暗くなつており、幾件も並んだ店の前には丸い提灯が吊され、朱く光っていた。美味

しそうな匂いがそこら中に漂っていて、辺りはもう賑わいをみせていた。

「私、射的がやりたいの。得意だし」と、アンコは嬉しそうに言って出店に駆け付けた。

それに対しても季生子は、「お祭りの出店は高くつよく」などと、所帯じみたことを言いいながらも後を付いて行つた。

「僕らは何か食べ物を買つてくるけど、君たちはどうする?」水野さんたちと別れて、人込みに入つてからすぐ毅は言った。

千央は毅に言った。

「私はアンコが射的をするのを見物してる」

「僕もそうするよ。慣れないものを食べるとたいていお腹壊すからと真。

「そう」「公平は言った。

「じゃあ、お巡りが始まるまでは別々に行動して、後で神社の前に集合な」慶幾はそう言つて神社を指差した。そして伊鶴ら四人は連れ立つて人の波の方に消えて行つた。その後、千央とマコト二人はアンコのいる的屋に向かつて歩いた。草履は地面の砂と擦れてざりざりと音をたてた。神社までの道のりには金魚すくいに、水風船釣り、綿飴や、りんご飴、フランクフルト、などたくさんの出店が並んでいて、千央は色々目移りした。おじさんたちが汗をかきかき、それぞれ客の呼び込みをしている。千央はその客の群れの中に見知つた顔を見つけて、少なからず驚いた。

それは、台風で小学校に避難した時に会つたあの悪ガキのボスだつた。毅の親を「人殺し」呼ばわりしたやつだ。今日も数人の取り巻きを従えて、スーパー・ポールつりなどに興じている。

「どうしたの?」千央のぎょっとした顔を見て真琴は聞いてきた。

「ああ、あいつらさ。本当に最悪なんだ」

千央は彼を指差して静かに言った。一人にあの台風の日に起つたこと、自分が聞いたことをすつかり話した。

話を聞き終えた二人は一様に怒り、そして不思議がつた顔をして

いた。

「毅のおばあちゃんと親父さんがあの子の弟を殺しただつて？」

真琴は千央に聞いてきた。

「それってどういうことよ？」

「知らないよ、そんなの」千央は首を振った。

「てゆうか毅つてお父さんいたのかよ？一度も見たことがないから、てつきり両親はいないものだと思ってたなあ」確かに今まで毅の両親らしい人を見かけることはなかつた。千央は毅の両親は死別しているか、あるいは離婚したのだろうと勝手に決めていた。もしくはなんらかの理由で別居しているのかもしれないが、ことの真相は毅本人に聞かないかぎりはわからないであろう。

「ねえ、その人を殺した罪で刑務所に行つてるんじゃないよね？」と真琴。

「まっさかー、そんなわけないじやん」と千央は言った。千央はとりあえずあの男の子に腹を立てていたのだが、ひたすら想像力を巡らした結果、彼の弟の件についてわかることは全くなかったのであつた。

さて、三人が遅れて射的屋につくとアンコはすでに射的を始めていた。ここはわりと大きな店で、真っ赤な暖簾に達筆な筆使いで「娯楽・射的・遊戯」と書いてあり、その周りを金色の房が縁取つていた。広さは他の店の一倍ほどあり、的になる商品と発射台は六メートルくらい離れていた。商品はお菓子やヌイグルミ、おもちゃの箱が置かれて、なかなか豪華な品揃えだつた。

アンコは鉄砲にコルク弾を込め、よく狙いを定めて引き金を一気に引いた。お見事。弾は命中し、前方にあつた薄い箱はふらふらと揺れてぱたりと倒れた。アンコはまた狙いを定めて鉄砲を撃つた。またも命中。今度は小さなヌイグルミの入つた袋を跳ね飛ばした。それを見た隣の子供がうわあ、と歎声をあげていた。

的屋のおじさんは苦笑いをしながら、アンコに景品を渡した。発

射台にはもういくつかの商品が積み重なっていた。アンコが射的が得意だと言っていたのは、どうやら本当らしかった。

千央たちが見ているのに気がついたアンコは、言った。

「マコトたちもやりなよ。楽勝だよ」

それに対しても千央はうつんと、首を振った。千央は空氣銃のポンポンいう破裂音とか、そういうのは苦手であった。ましてやこんなにたくさんの人々の注目を浴びながら撃つなど、とんでもないと思つたのだった。

「私はてんでダメだつたわ」季生子はなにやら口をモグモグさせながら言つた、アンコの取つた商品のキャラメルを食べているのだ。

「僕、やってみる」

と真は名乗りをあげた。料金は7発500円。真はおじさんにもう0円を払うと、小柄な真にはいくらか大きすぎる鉄砲と皿に入つたコルク弾を受け取り、銃身に弾を始めた。

真琴は柱によりかかり、千央は腕を組んで、そのようすを興味深げに眺めていた。

真は棚の一一番奥、ど真ん中にある大きな箱に狙いを定め、一発撃つた。乾いた音をたて、弾は飛び出した。当たつたが、しつかりとした作りの箱に跳ね返された。もう一発。しかしまたも、弾は弾かれてしまつた。

「ねえ、ちょっとおじさん。当たつたのにあの箱全然倒れないよ」

アンコは店のおじさんに抗議した。

「ああ、当たつても倒れないとだめつてことになつてるんだよ。頑張つて倒してな」

おじさんはタバコを吹かしながら、唇の端をちよつとあげ、笑つた。

真はもう、と面白くなさそうに舌打ちを打つて言つた。「箱の中身が重くて倒れないんだ」

「でも、大きな箱が軽かつたらむしろ難易度が下がるでしょう?だから、調度いいんじゃないの?」真琴はそう言つて、宥めた。

あの角を狙つたら？と千央は言おうとしたが、その後ろから新しい客が賑やかにやってきて、おじさんに声をかけた。それでその機会は失われた。客は一人の小学生らしい、話し声がこちらまで漏れ聞こえてきた。

背があまり高くなく、太つている方が言つた。

「じゃあ、負けた方がヤキソバを奢るってことで」

「ああいいよ。まあ、俺の方が上手いと思うけどね」もう一人は背が高く、瘦せている。

彼らには見覚えがあつた、さつき千央たちが見かけた一団にいたやつらだった。千央たちは素早く目配せをし合つた。あちら側はこちらの方に全く気がついていないようで、たくさん景品を取つたら勝ちだとか、いや大物を取つた方が勝ちだとか、色々賭け事の内容を話していた。

やがて、太つた方が銃を構え、菓子箱に狙いを定めてこれを撃ち取つた。次に背の高い方が小さなおもちゃ入りの袋を取つた。千央たちはそのようすを盗み見ていた。7発全てを撃ち合つた結果、数では太つた方が上回り、商品の豪華さでは長身の方が上だったようだ。

「お前はいつでも小物狙いなんだな」数で負けた背の高いのは腹立たしそうに言つた。

「どうも、俺はあくまでも堅実な性格なんですね。無理はしないんですけどよ」太つた方はそう言つて、商品棚に視線をやつた。「ならさ。あのくらいデカイやつを取れたら、小さいの5個分のカウンントってことはどう？」

彼が見ていたのはさつきまで真が取ろうと試みていた箱であつた。パッケージには有名なキャラクターがプリントしてある。ノッポはそれを請け合い、二人は新たに弾を買ってまた撃ちはじめた。ノッポは最初からあの大物に撃ち、太つたのはまた小さな箱や袋狙いだつた。

しかしながら、太つたのは今までのように景品を取れなくなつて

いた。不思議なことに狙いを定めて引き金を引くと、その一息前に誰かがその景品を撃つてしまうのだ。実はこれは、ちょうど隣にいたアンコの仕業であった。

彼の驚いた顔を見てアンコはにやり笑うと、わざとらしさによらずで彼の手元を観察し、撃つタイミングを計っていた。

一方ノッポも苦戦中だった。何発か撃ち込んでも重いためか少しぐらつとするだけで、すぐ元に戻ってしまう。これにはアンコのようすに気づいた真が参戦し、ノッポに張り合つてまたあの箱を狙いはじめた。二人が撃ち出すと、その衝撃で箱は前にぐらり後ろへぐらりとし今にも倒れそうなまでに揺れた。アンコもそれを見て一緒に箱に向かつて撃ち出した。太ったのは呆れた顔をしてそれを見ていだが、真とアンコが仲間同士であると察知したのか、彼も標的を変ってきた。

箱はさらに大きくぐらりと揺れていった……が、なかなか倒れてくれない。

「おじさん！　一回分ね」

真琴はいきなり大声を出し、鉄砲と弾を手に取った。そしてすかさず、箱目掛けて発砲した。続いて千央も、お金を払い真に加勢した。それに最後には季生子までが加わり、最終的には総勢7人が一つの的に向かつて弾を撃ちまくる、という変な事態になつた。

辺りにはポップコーンが爆ぜる時のような、パンパンパンパンという音が連続して鳴つていた。

箱は長い間、前にもぐらぐら後ろにもぐらぐらを繰り返した。大きく後ろに傾いた反動で前に傾いた時、真の撃つた弾が箱の右下隅にヒットした。すると箱は人が転ばされた時みたいに一気にボテッと倒れた。実にあつけない感じであった。

「終りよー！　勝負あつた！！」おじさんが手をあげて叫んだ。いつの間にか射的屋の親父が勝負を仕切っていたのだ。

景品は最後に弾を撃つた真に譲渡された、真はとても嬉しそうな顔をした。あの一人は舌打ちをし、面白くなさそうにこちらを振り

返りながら店を出て行つた。

このよくわからない張り合い合戦は千央たち側の勝利で終わった。しかしこの勝負で大分小遣いを消費してしまい、皆の財布は一様に軽くなつてしまつた。結局、今回の本当の勝者は射的屋の親父なのがもしれないと、千央は思つたのだった。

店を出た後、季生子は聞いた。

「何のおもちゃをとつたの？」

「開けてみなよ」と真。

「何じやこりや」箱を開けてみて、真琴は笑つた。

中にはキャラクターの姿をした、一対のおもちゃ電話が入つていたのだった。

アンコは笑つて言つた。

「可愛いじやん。でも子供用っぽいかも」

「これは……、湖水にあげようかな」電話を見て、真はこいつぶやいた。

それからしばらくして、神社の前で千央たちと合流した毅たちは、一体何事だ、という顔をすることになった。

「あいつらを僕らが負かしたんだよーーーばんざーーー！」

真は毅の周りをスキップして、ぐるぐる回つて言つたからだ。つい最近退院したとは思えない、厄介なくらいの元気さだった。

毅はことの次第を聞き、ふーんと面白がつたような苦しいような顔をしていたが、やがて、「よく殴られなかつたよなあ」とだけ言つた。

公平と伊鶴の手には、透明の袋に入つた金魚をぶら下げるつた。赤い魚には祭りの明かりが当たり暗い中で金色の光を放つていた。黒の出目金は闇にまぎれて、静かに尾を振つていた。

大人たちは子供の間に割り込んで、井戸場でんでん巡りのためにグループを作らせた。これは一つが4、5人の組で、千央たちは毅と公平、アンコ、千央と、真と真琴、伊鶴、慶幾の二つに分かれ（季生子は高校生なので参加しなかつた）。グループには提灯と

バケツ、予備の懐中電灯が一つずつ配られて、提灯の蠟燭には火が点された。それから、たくさん集まつた子供たちの前に骨張つたおじさんが登場して、説明をはじめた。

「皆さんは最初に川の下流へ行って、バケツに水を汲んで下さい。そこに係の人がありますのでカードにスタンプを押してもらつて……」骨おじさんは自分の持つている二つ折りの厚紙を見た。これは千央たちは毅が持つっていた。「尾形さん宅のお庭にお邪魔して、井戸に汲んできた水を流します。それから水の事故がないようにとお参りして下さい、スタンプを忘れずに、それが終わつたら帰り道は……」「……

他の子たちはうんうんと頷いて聞いていたが、千央はあまり聞けていなかつた。ちょうど側にいた園さんの腕の中で湖水が僕も行きたいと、駄々をこねはじめたからだ。

「僕も行こう。僕も」

湖水は体を一杯にのけ反らせて、ばたばたと暴れた。最近見たような光景だ。千央は正直うらやましいと思った。この夜の散歩に行かないですむのなら、どんなにか気分が楽になるだろうか。

「だめだめ、湖水はまだ小さいんだから」園さんは言い聞かせた。

「泣かないで、湖水。ねえこれをあげるよ。ほらっ、金魚だよ」伊鶴は金魚を見せて慰めてやり、湖水の小さな指に引っ掛けたやつた。

それでやつと湖水は笑顔になつた。

真琴は湖水を抱つこした園さんと隣にいる水野さんとを見比べると、こう言った。

「あの二人、こうして見るとなんだか夫婦みたいに見えるね」

「うんうん。付き合つちゃえばいいのに」

アンコはふふと笑つた。

そういえば、この間おじさんたちが水野さんは女にうつつを抜かしてゐと言つていた。あれは少々言い掛かりばかりだが、もし二人がカップルになるのなら、美男美女でとてもお似合いだと千央は思つていた。それからいくらか時間をかけて神社からいくかのグル

足元では虫がピィピィと鳴いており、いきなりチビの蛙がピヨンと跳ね、きやーっと幼い奇声があがつた。この一団には出発間際、僕が連れていくつか?と言つて結局毅が預かつた湖水も一緒だつたのだ。

周りには街灯もなく、提灯の光だけが頼りであつた。所々にある丸い明かりは監視員の人たちで、先の道にうねるヘビのような形に配置されていた。五人は目的地に向かつて、田畠だらけの暗い道をすんずんと歩いていった。

第一のチエックポイントは案外と近い場所にあつた。川音が聞こえてきて、それで少し林を抜けるともうそこは川だつた。監視員が黄色い提灯を持つて立つていた。ここは川の下流で川幅は広く、深さはかなり浅い。監視員さんにスタンプを押して貰つた後、毅はサンダル履きの足を片方川に入れて、バケツに水を汲んだ。

いくら下流とはいえ、この涼しい夜に山の水に触れるのはかなり辛いのだ。千央も川に手を突っ込んでみた。水は黒灰色をしており、なにかの鉱物が溶けて流れ出たもののように見えてきた。

水を汲み終わった千央たちは、冷たい風の吹きすさぶ川原には長居せず、次の行き先へすぐに出発した。提灯が強風に煽られて、ばたばた音をたてた。次の目的地である尾形さんの家は元来た道を一旦引き返して、しばらく歩いてから小路に入つて行つた場所にあるらしい。その道すがら、千央たちの目にこちらに来る一つの提灯明かりが見えはじめた。それはどんどん近づいてくる。

「ゲッ！！！石室だ！！！」

毅はそれを見ておかしな声をあげた。

毅は道路を渡り、向かい側の歩行者用道路まで行ってしまった。千央たちも慌てて追いかけた、そして道路脇の低木の繁みに固まって身を伏せた。枯れ草が薄い浴衣を通して尻に突き刺さり、とても痛かった。

彼らの持っていた提灯が不意に揺れ、一瞬顔を照らし出し、千央もその顔を確認することができた。なるほど、毅が逃げた理由がわかつた。またあいつらだった。さつき射的屋で張り合つた太つたのとノッポ、例のボス格のやつ（こいつが石室だろう）と千央の知らないのが一人いた。提灯を携えて四人で歩いている。彼らもこの行事に参加していたらしい。しかし、今晚はよく会うなあ、そう千央は思った。

「何なんだよ？ 知り合いか？」公平は繁みから覗きながら言った。
「何で隠れるんだ」

これは毅にとって耳の痛い質問だろう。

千央はボソと答えた。

「毅の敵だよ」

「マジで卑劣なやつらな」とアンコ。

「ああ……？ 確かに柄は悪そうだな」

仲間の一人が川面に乱暴に石を投げつけはじめたのを見て、公平は目を細めた。

「くそ、不法投棄だ。環境破壊だ！！」アンコは怒りだした。別に川原の石だし、別に不法投棄にも環境破壊にもならないどうと千央は思ったのだが、黙つておいた。

「なあ折角鉢合わせたんだし、俺が行つて一発シメてきてあげようか」

そう言つて、公平は繁みから立ち上がるひつとした。

「駄目だよそんなことやつたら、余計に悪化するよ。お願ひだから静かに座つてよ」

毅はそれを慌てて押さえ込み、一人はしばらく揉めていた。

「やられてばっかりじゃダメだろ。反撃しないと、ナメられるぞ。

まさかずっと黙つてゐるわけじゃないだろうな?」

「無理無理。相手は『デカいし、話しも全然通じないんだから」

「ねえ一人共、隠れてるのに声が大きいって。このままじゃ見つかるよ」とアンコが言って、やつと静まった。

それからすぐに、石室たちは千央たちの前を通過して行った。

そうだ、千央はやつと気がついた。あの番組が放送された、今後あの石室たちから毅への風当たりはよりひどくなるに違いない。今は夏休みだからまだいい、今みたいに隠れたらいいんだから、でも新学期が始まつたら一体どうするんだ。学校に行けば会いたくなくとも会わざるを得ないのに、毅にとつて9月1日からの新学期は地獄になるんじやないかと千央は心配になつてきたのだつた。

公平はそれに気付けないのだ。毅が家の仕事のことでいじめられているという事情を知らないんだから。千央は公平に訳ありな感じの視線を送つたが、公平はまるであさつての方向を向いて、暇そうに草をむしっていた。

「こちらからは石室が川岸に近づき水を汲んでいるのが見えた。彼らは結局こちらには気づくこともなかつた。千央は道を通り遠くへ過ぎて行く石室たちを静かに見送つた。

「おい、燃えてる、燃えてるぞ」

公平がいきなり慌てた声を出した。

「熱つい」アンコが言って、急に飛び上がつた。

見ると、傾けて置かれていた提灯の外張りが風に煽られた炎に触れ、パチパチ煙りをあげはじめっていた。その場はたちまち大パニックになつた。三人は一斉に立ち上がりつて、提灯の上で地団駄を踏み、必死になつて火を消した。浴衣姿でぴょんぴょん跳びはねたりして、傍から見ればかなり面白い光景だつただろう、千央は肩で息をしつつ思つた。

やがて騒ぎも收まり、気づくと千央たちの辺りは光もない暗闇になつていた。毅が予備の明かりとして持たされた懐中電灯をつけたので、千央はホッとした。

「ああ良かつた。危うく山家事になるところだつたよ」歩き出しながら、毅は言つた。その手には焼け焦げた提灯があつた。

「あつ僕ら馬鹿だなー。水があるんだから、これで消せば良かつたんだ」公平がバケツを持ち上げた。「忘れてた」

「アンコ、どうかした?」毅は言つた。

ふと見ると、アンコが何かに気を取られているようにして一人群から遅れていた。アンコは自分の後ろを振り返つて言つた。

「ねえ、さつきからあれ、何だろう? 何に見える?」

アンコは少し離れた山の斜面を指差した、そこには一つの赤い玉が漂つっている。和紙を通した光のような仄明かさだ。

「提灯?」千央は言つた。

「どうしたんだろう? 誰か迷子になつたのかな」

「向こうに隠しルートがあるのかも?」毅は言つた。

「そんなゲームみたいなことないだろ、だいたい夜の山に入らせるなんてそんな危ないことさせないよ」公平は思いついた顔をした。

「ああ、そうだ。もしかしたら人魂かもしれないな」

「はーん。そういえば、昔この近所に墓があつたと聞いたことがあるな……。無念の死をとげたあの若者のさ」毅は早速便乗した。

うわ、冗談でもこんな暗い中でそういうこと言うのはやめてくれ、と千央は思った。それとも大人たちがこういうことをして、驚かすという余計なイベントがあるのだろうか。どつちにしろ恐いので、やめてほしかつた。その時、千央の目に不意にあるものが一瞬だけ見えた。

カーテンを開ける人の手のような格好で、竹林の間からにゆるり、細く伸びた炎が覗いたのだ。それは人魂よりも現実的で直接的な脅威だった、あれは提灯じやない!! 火事だ、山火事なんだ。

「まだ、燃えてる!!」公平も気づき、大声をあげた。「大変だ!!

!」

千央たちは猛スピードで山の中に造られた階段を三段飛びで上がり、現場に駆け付けた。

案の定、炎が燃え上がっていた。火は竹のすき間を縫うように縦に成長していく、長く伸びたようだつた、火は周辺の竹林と地面に溜まつた枯れ葉とを焼いていた。竹がまだ青かつたため、あまり燃え広がらなかつたらしい。炎が当たると竹の葉は一瞬濡れたようになり、その後すぐくしゃくしゃに丸まり黒く焦げてボトと落ちた。

「早くバケツを寄越して……！」

と公平は言つたが、そのバケツを持っていた毅は、まだ到着していなかつた。湖水を連れていたからだ。千央たちは急いで引き返し、また階段を一気に駆け降りていつた。そして階段途中にいた毅と湖水に合流した。もう、浴衣も髪も乱れまくつていた。

「毅、水、水。バ、バケツは……？」息を乱しながら、アンコは毅に聞いた。

「あっ！…まずい！…僕、下に置いて来ちゃつた」

毅はバケツを持っていなかつた。下を見ると確かに階段の上り口にバケツがあり、黒い水面が波だつていた。嘘だろ？

「何で置いてきたのさ！？」千央は怒鳴ると、アンコとまた階段を駆けた。

下まで降りて、二人でバケツを持って上つた。途中でアンコの体力がつきてしまい、それからは千央が一人で持つていつた。

しかし千央が現場に到着すると、火事はすでに鎮火していた。焦げた地面の上では金魚がピチピチ跳ねていて、その側で湖水がぎやあぎやあ泣き喚いていた。

「もう間に合わないだろうと思って」

察するにどうやら、公平が金魚の袋の水を火にかけたらしかつた。公平は湖水に「ごめんね、ごめんね」と言いながら金魚をかき集めていた。

毅は拾つた赤い金魚にとても手こずつていた。

千央は毅にバケツを差し出そつとして、不意にあることを思い出し、恐ろしくなつた。金魚は急激な温度変化に弱いのだ、以前飼つていた時も新しく買つた金魚は時間をかけて水槽の温度にならして

から入れていた。熱過ぎると当然茹だつてしまひし、冷た過ぎてもまた……、

「ダメだよ川の水じゃ、冷たすぎて心臓発作で死んじゃう……どこか別のところで水を貰わないと……」千央は思いつ切り叫んでしまつた。

千央はイラついたようすのアンコと階段ですれ違つた。

「ねえどこに行くの？火事はどうなつたの一？！」

アンコの声は遠く後ろの方から聞こえてきた。

両手で作ったお椀に何匹かずつ金魚を入れて、千央たちはぬい水を求めて暗闇の中を疾走した。早くしないと、金魚が窒息死してしまう。

前を走る公平がこんな叫び声が聞こえてきて千央は思わず吹き出し、少し失速した。

「くっそ！！こんなに掬わなければよかつたああああ！！」

千央たちは結局神社まで走り帰り、金魚すくいのお店の水を貰い、金魚たちはなんと無事生還したのであった。さすがにバテバテになつてしまい、井戸場でんでん巡りはリタイアした。

帰りに千央たちはでんでん巡りの参加賞として薄い琥珀色をした棒付き飴を一つ貰つた、胴体から四つの手足と丸い頭のついた人型の飴だつた。中には金箔が混せてあり、それが綺麗に光つた。この飴は祭りの由来になつた若者を模して作つているらしい。感謝しながらも、片や若者を菓子にして食つてしまふのだ。理由はよく分からぬが、なんとなく千央はこのことを不気味に思つたのだった。

翌日のお昼のこと、真は母親の運転する高そうな車に乗り、家に帰つて行つた。

別れ際、皆は連絡先を交換仕合い、湖水は電話のお礼を言つていった。サンサンと太陽が照り付ける外にでたので、皆顔をしかめつたが、それは眩しかつただけのせいではないよつに思つた。少なくとも、千央はそうだつた。

一一一、灰色な手

人生避けて通ることのできない道というものがある、と千央は考えていた。

例えば、虫歯の痛い治療とかだ。しかしこれは行つてしまえば後は楽になるのだから、まだ救いがあるといえる。だがこの場合、進んでも退いても別の災難が待ちうけているのだ。

それでも、もう少し早く動くべきだった。今さらだけれど、千央は後悔せずにいられなかつた。

大規模な搜索が行われることが決まつた、今回は山もその範囲に入つてゐる。その噂を耳にしたのは千央が川遊びをしていた時だつた。千央は、そのあまりの衝撃のためゾエアだか、メガロパだかの大量にいる水を誤飲し嘔せてしまつた。

「どうした？ 大丈夫か？」

ミズスマシのようにスイスイと泳げる公平の声に頷きながら、千央は川からあがつた。そしてタオルで顔を拭きながら、千央は本格的に焦つてきていた。

山の中には今もゴツチの解剖死体がそのままになつてゐるはずだ。腹をさかれ、胃袋と心臓とを晒された死体が。もしそれが見つかつたとしたら、どんなに恐ろしいことになるだろう。

千央は毅のところに行き、彼にそのことを伝えた。そして考えて

もみる、と千央は前置きし、毅に言った。

「精神病院の患者が逃亡した、かもしれない先に、ヤギの惨殺死体が見つかつたらどうなる？ その人がやつたと絶対大騒ぎになるよ」

「いや。あれは、惨殺死体なんかじやないよオ」

毅は異議を唱えた。

「じゃあ、何なんだ」 千央は反抗した。

「……解剖死体じやないの？」

まあ、確かに間違つてはいないが、そういう意味で言つてるんじ

やない。

「いや、だからさ。惨殺死体に見えるのが問題なんだよ。あれはどうやっても、自然に死んだままのようには見えないよ」

きっと、今の状態であれを見つけられたらそうとしかとられないだろう。それに会つたこともない人に罪を被せるわけにはいかんのだ、と千央は思っていた。それに真犯人である、千央たちも名乗りでることは極力避けたいのだ。

「うーん。どうかな。あるいは、動物に漁られたように見られるかも」毅は希望的観測な意見を展開した。「例えばさ。ミルコが鷺崎の家から逃げ出したとする……」

急に毅は息をのみ、カラカラと笑い出した。

「そういう、ミルコは歯がなかつたっけか」

千央はビシッと言つた。「冗談はいいから、こんな重要なことを起こるか分からぬ運に頼つてどうするのさ」

とにかくなんとかして捜索隊がそれを見つけ出すまでに、ゴッちの死体を再び土の中へ埋めて隠さなければならない、そうしないと無実の人に迷惑をかけることになる、千央はそれを必死になつて訴えた。すると、毅は急にこちらに向き直つて言つた。毅はかなり腹を立てているようだつた。

「迷惑！？迷惑だつて！？ねえ、本当のこと言つとね。僕はその人に対するごく怒つてるんだ。そいつが病院から逃げだしたせいで家がこんな面倒なことに巻き込まれちゃつて。こつちはもう十分迷惑かけられてるよ。知らないやつに疑いがかかるうが、そんなことまで気にしてられないんだよ！！」

毅はひどくキレたようすで言つた。

確かにあの番組に取り上げられたせいで、靈能者はお客様から信用を失い、大変な打撃を受けたに違ひなかつた。それに、これから石室たちのいじめがエスカレートすることは確定だろう。祭りの日、毅は一足早く今後の学校生活を体験したのだから、それで失望したり、怒るのは無理もないようと思つた。

「そうだったね……」「ごめん」千央はしおしくなつて言つた。

毅は笑つた。

「もうさ、ほつとけばいいじゃん。面倒なことはしないでおいてさ」千央が謝ると毅は急に柔軟になり、鈍感な様子になつた。その変わり身速さと無頓着な物言いで千央はなんとなく感づいた。

毅がこの件で行くのを渋つている本当の訳は、靈能者のことでも、いじめつ子のことでもないのだ。確かにそれは含まれているだろうし、迷惑しているというのも嘘ではないだろう。しかし主たる理由、それはおそらく、あの正体不明の生物の出た場所にまた戻るのが恐いからだ。あれとは解剖をした夜、開いた腹に手を掛けて出てこようとした灰色の謎の生物のことだ。実は千央と毅はある時起こつたことの話を全くしていなかつた。それは取るに足らないことだからというわけではなかつた、怖くて仕方がなく一人は自然と口を噤む格好になつたのだつた。

このことはまるで重い枷にでもなつたかのように、二人のこれまでの生活を変えていつてしまつた。

毅はあれほど遊びに行つていた山を避けるようになり、千央はその逆で誰かが山で遊ぶ時は必ず付いていくといつ、今までとは違つた俄然付き合いの良い人物になつた。というのも、この数日、千央が恐れていたのは山に行つた他の子が悲鳴をあげて家に逃げ戻つてこないかということだつたからだ。千央は、山に遊びに行くと言う度にできるだけ他の遊びを持ち掛け引き止めた、それでも行つてしまつた時は、その間ずつとヒヤヒヤしながら皆があの現場に近づかないように、あの惨状が他の誰にも見つからないようにと祈りながら、始終見張つていた。我ながら不気味だなど千央は思いながら笑つたものだ。

確か、たつた一度だけ本当にドキッとした瞬間があつた。数人が慌ただしく帰つてきて、玄関で騒いでいた。千央はその時心臓を突かれたかのように感じ、息が詰まつたが、結局はイノシシ捕獲ようの落とし穴に誰かが落ち込んでお尻を泥だらけにしたというのが真

相だつたのだ。 今日まで千央はこんな大変になるのなら、あんなことやらなければよかつたと千央は何度も何度も後悔した。

いつまでこのプレッシャーに耐えなければならないのだろうか。

「そうだね」 千央はさつきの毅の言葉を軽く受け流した。

今までやばいと思つていながらもそのままでいたのは、あの森についてゴッちを埋める恐怖とその後の安心感とをのメリットをデメリットを天秤にかけても、どちらがより楽ともイマイチ判断がつかない、宙ぶらりんの状態であったからだ。しかし今、やつとこのままでは確實にマズイことになる、という核心ができた。今回の状況はある意味千央にとって待つてましたというような事態であった。煩わしさからすつきりと解放されたい、千央は何よりそれを期待していた。

「じゃあ、あんなに可愛がつてたゴッちはどうなるの？死体は野ざらしでいいの？」 千央はじりじりと詰め寄り、脅しの文句を言った。

「ゴッちをちゃんと埋葬してあげなきゃ、私たちの他に一体誰がやるの？」

毅はしばらく苦い顔をしていた。

もとはといえば、掘り返して解剖したのも愛情からといふ話だったし、これを拒否すれば辻褄があわないことになる。千央はそこを刺激してみたのだ。

やがて毅はげんなりした顔で言った。

「あー、わかったよ。行くよ、行けばいいんだりう~氣が乗らないけど」

そして、付け加えた。

「ただし今度は明るいうちに行こう」 その言葉に千央はしつかりと頷き、心の中でこつづぶやいたのだった。

“そして、できるだけ早いうちに”

しばらくの後、川にそつた山の坂道には、やる氣なヤギにゴッチの墓へと向かう一人の姿があつた。

その最中、千央は考えていた。

「ゴッチの死体は一体どんな状態になつてゐるだらうか」と。きっとひどく腐つてしまつてゐるに決まつてゐる、解剖した時だつてあんなに臭つたのだから。そして、あの不可解な現象については今から思うと、死体をいじくりまわした呪いか、あるいは地球外生命体の出現なのだと半分信じ始めていた。しかし、また一方ではそれが白虹夢だと思い、まるで現実感のないもののように感じていた。

千央は深呼吸した。どうせ避けられないなら怖がるよりも、楽に終わらせられるように神経を使おうと決心した、そして後少しごの苦しみから解放されると思つと、久しぶりの山の空気がいつにもまして清爽に思えてきたのであった。

そこへ、ヤギヤギ、ヤギヤギと聞き慣れない不審な音が聞こえてきた。

遠くの方に急な坂道を木の幹に抱き着くようにして、滑り降りてくる人影があつた。よく見ると、それは一人の青年であつた。斜面はどこも茶色い木葉のカーペットが敷いてあるようで移動する度に、木の葉が舞い上がつていた。彼は坂を降りるとポケットに手を突っ込んで近くまでやつてきた。

「あれつ、君たちどこに行くの？」

青年は毅を知つていたらしく、川の向こう側からこびりて呼びかけてきた。

「えーっと」毅は考え言つた。「お墓参りです。ヤギの」「ああー、あれ君たちのヤギだったのか？ そつか、そんなら……、まあとにかく今ヤギの墓にはいかない方がいいと思うよ」

青年が訳知り顔なので千央は不安になつた。

「えつ、何ですか？」毅は素つ頓狂な声を出した。
千央たちは随分と遠くにいるのに、青年は身を乗りだし、ヒソヒソ話をするように喋りだした。

「きつと、あいつがここに逃げて来てるんだよ」

「あいつって？」毅は聞いた。

「実はさあ、さっき山に行つたらそのヤギの死体がばらばらにされてて、これは大変だと思って今父さんたちを呼んだんだよね」

ここで、青年は顔を歪めた。

「多分あいつの仕業なんだよ」そこにガヤガヤと騒がしい声が聞

こえてきて、何人かの村人たちが林の間を通して行くのが見えた。

「お、早速騒いでるね」

青年は嬉しそうに言い、向こうへ戻つて行つた。

彼が走り去つて周りに誰もいなくなつた後、毅は「こりあ、マズ

イ」と言い、眉毛をついとあげてみせた。

とうとう悪夢が現実のものになつてしまつたと、千央は恐ろしさに身を震わせた。

この状況からいつてゴッちの死体荒らしはほぼ間違いなく、あの逃亡患者のせいだと思われるだろう。そしておそらく、皆は患者（実際の彼の人格はわからないが）をサイコキラーの異常者だと思い、パニックになつてしまふのだ。そしてマスクミに嗅ぎ付けられ、そして興奮した住人に患者はリンチされ、最悪殺されたりするかもしれなかつた、勘違いのために。千央は何度もした恐ろしい想像をまた繰り返した。

しかしそれでも、千央たちが名乗り出ることはもう無理だろう、もちろん殺人の元凶になりたくないが、すでに千央たちが住人に許される余地はなくなつていたからだ。こうなつたのも、あの憎たらしいテレビ番組のせいだ……。

ゴッちが死んだ時、佃が道を尋ねて來た時、公平との話を聞かけた時、一つだけでも違つていたら、もう少し早く気づいて対処していたら……。今の状況も全く違つたものになつてしまつたのである。千央は深く後悔した。結局これは必要なくなつてしまつたと、千央は手に持つていたゴム手袋を見た。その時千央はあることを思い出して、あつと声をあげた、血の気がひく思いだつた。毅は何事かとこ

ちらを見た。

「ねえ、あっちにはまだ毅のリュックとか、ナイフとかがあるはずなんだけど、大丈夫?」

毅はしばらく考え、思いだしたのか、何か苦い物を含んだような、ゲツツという顔をした。

あの得体のしれない物体が頭を出しかけた時、毅は藪の中にナイフを放り投げた。そして必死な思いで逃げ帰ってきたのだ、千央たちはその時、確かに手ぶらであった。千央は頭をフル回転させて考えた。それを見つけて、自分たちと結び付けられる人はどれぐらいいるだろうか?と。それはたくさんいるだろう、毅のリュックに増田家のバケツ、皿……ナイフ。そう。それから、使った道具の一つに鷺崎さんの剪定バサミもあるのだった。

二人はゴッチの墓に急行した。

そこにはすでに数名が集まつていて、例の死体の周りをうろつき、死骸の検分をしていた。千央たちは杉の木の後ろに身を隠して、遠くから様子を伺い見た。

「本当に腹の裂かれとおこたる、こつから……ここまで、胸から腹まで一直線に」

「どうから持つてきたのヤギやろうか?近くにヤギば飼つとる人はおつたつけ?」

「わからん。こいはなんこ?あつ……内蔵か……腐つとる」

ふと千央は毅がいなくなつてゐることに気がついた。周りを見渡すと前方で、毅が身を屈めてコミカルな動きで抜き足差し足といふ風に走つている。低木の影や林のすき間を次々渡つて行く……、千央はつい噴き出してしまつたが、毅が至極真剣な顔でこちらに戻つて来て、ナイフがなくなつていると重々しく告げられるとたちまちそれも失せた。どうやら毅は後ろに放り投げたナイフを回収しようと出向していたらしい。

「ちゃんと捜したの？」千央は聞いた。

「うん、周りをぐるっと回ってきたもの。多分、先に来た人にもう拾われちゃったんだよ」

毅は泣きそうになつて言った。千央も同様だつた。どうやらもう証拠隠滅の機会は永遠に失われたようなのだ、といふか、すでに先に見つけられた時点でなかつたのかもしないが……、千央は遠くの現場を見遣り、思つた。

「斬り殺したとやろうか？ そいにしちゃ血の少なかよつて見ゆつけど」

「いや、こにはもう死んどつたもんば掘り返しとおじたつよ」

「……わざわざ墓ば掘り返したとか、一体なんのために」

「こにはもう……警察を呼ばないかんな」その中の一人が言つた。

この言葉は千央の耳に爆弾のように響いた。とっさに千央は飛び出して、それは自分たちがやつたのだと白状したい衝動にかられた。しかしそれはまた薦進するダンプに飛び込むくらい恐ろしく危険なことに思えていた。

千央は何か行動する前に後のことについて想像するのだが、今回は焦りすぎて何も考えられなかつた。つまりは何にも行動に移すことができないということであった。今の千央に出来るのは、ただ恐い顔をしてそれを見守ることだけだつた。「もう、家に帰ろうよ」持ち帰る物がないとわかつた今、ここにいてもストレスになるだけだと思い、千央は言った。

千央たちが立ち上りかけたその時、ふと、背中からロケット花火の様な音が聞こえ、二人はとっさに振り返つた。それを見て千央は大きく息を呑み、とっさに立ち上がらうとしたのだが、毅に押さえ付けられた。千央の目には視界の端から端へと、ものすごい速さで横切つていく黒い影がうつつていた。

その謎の物体は「ゴツチの墓までを一直線に向かうと、おじさん達の間を大きく8の字を描くようにして飛びだした。影は木が燻るよう黒い煙を猛烈に吹き出しながら、彼らの腰のあたり高さで素早

く飛行した。それは、眩しいものを見た後に視界に出てくる黒点みたいな色をしていて、動きは速すぎて黒い線に見える程だった。

「ゴッちが生き返ったんだ……」

小さくつぶやく声が聞こえ、千央は隣を見て仰天した。毅が涙を目にいっぱいにためていたからだ。

千央は慌てて否定した。しつかりしてくれよと、思いながら。

「でも、普通魂なんかは白いんじゃない？あれは黒いよ」

「そつか。確かに真っ黒だ……くまんバチかな」毅は目を凝らして言った。

千央はそれを指差したまま、しばらくの間固まっていた。あんなに近くにあるのにも関わらず、おじさんたちはまるで気づきもしない。しかし、あれは本当にハチなのだろうか？そのうち、水蒸気が蒸発しきる時のように謎の黒い影はしゅっと、一瞬で消滅してしまつた。その後千央たちがいくら目を凝らしても、黒い影が見つかることはなかつた。

肝を潰すような目にあつた二人は、山をとろとろと降りていった。

「の人たち、リュックについては何も話してなかつたよね」毅は千央に何度も確認してきた。

「うん、でも拾われたんなら証拠として、警察に渡すつもりなんじやないかな」

もし、警察に調べられたとしたらとても敵わないだろうと千央は思った。おそらく、持ち主は簡単にわかつてしまうだろう。そして多分増田家に道具が盗まれていないかと尋ねにやってくるのだ。その時は観念して白状するしかないだろう、それともそんなに長いこと精神が持たないだろうか。

千央は言った。「道具は誰が持つていつちゃつたんだろう？」

「分からぬよ」毅は肩を竦めて言った。「ねえ、もしこれがばれても解剖は違法ではないよね。つまり逮捕されることはないよね」

「知らないよ。……警察が来る前に誰かに言つてしまつ？」

「そんなの無理、大体どう説明するんだ。犯罪者予備軍みたいに思われるのは嫌だよ、ボク」

確かに凶悪犯が少年時代に小動物をいじめていたというエピソードはよく聞く話だった。だがしかし、千央たちは決して楽しくてやつたわけではなかつた。だつてあんなに怖かつたじゃないか、今となつてはあの恐怖が免罪符のように思えてくる。まあ毅はあまり怖がつていなかつたようだけど。

しかし千央たちが恐々解剖していよつが、残酷な楽しみで解剖してようが、今さら外に与える印象や影響は悲しいことに、何にも変わりはしないのであつた。

「そりやあ、私だつてそうだよ」千央は自嘲笑いをした。
知られたくないのは千央も同じだつた。

この間のテレビの件で酷く責められたばかりでなのだ。異常呼ばわりされて、その孫たちがヤギかつさばきの犯人だと知れたらどうなるだろうか、千央は考えたくもない。今でさえ家の中で異常者扱いされているのに、このうえ動物の虐待癖有などと思われては、もう立場がないではないか。

「ああ、もういつそ肩代わりしてもらおうかな、あの入院患者に」
もう投げやりな調子になつて毅は言つた。

それは名案かもしけない、と千央は思つたが口には出さず、代わりに泣き声を言つた。

「私はもう家に帰りたいよ」

「いや、君だけが逃げるのは許さないから」

しかし、毅にこう言われてガシッと肩を捕まれ、千央は大きく脱力してしまつたのだつた。

一一一、タヌキ巡查殿

園さんは玉子をボウルに割り入れ、箸を使って搔き混ぜた、黄身と白身が混じり斑状になつた。真琴は鍋をコンロにかけて、お湯を沸かしていた。アンコは焼豚を細く切ついていたが、伊鶴と慶幾にそれをつまみ食いされ、二人の肩をど突いた。そろそろ昼餉の時間で、増田家の台所では昼食の準備が着々と進んでいたのだった。

千央はといふと、竹で編まれたひらべつたい籠を持たされて、畑までキュウリとトマトを取りに行かされていた。千央は庭で白熊の絵を描いている季生子を颯爽と横切つて行き、男跳びで生け垣を越えた。そのあと何かの気配を感じ振り返つて、ギョッとした。なぜなら後ろに毅がついて来ていたからだ。

「ねえ、あれは一体何だつたと思う？」

どぎまぎする千央に毅はいきなり切り出した。

「何のこと？」驚かされたことの怒りもあって、千央の声は自然と刺々しくなつた。

「あの黒い影のことだよ」毅は全くめげるようにもなく言った。目が生き生きと輝いている。「本当にゴッちの靈かも知れない」

「止めてよ。私苦手なんだよ、そういう話は」

千央は早足のまま答えた。しかし、毅も早足になつてついて來ていた。

「それは知つているけど、君以外に話しができる人はいないだろ。普通、一人そろつて幻を見るか？しかも一度もだよ」

毅は一本指を立てて言った。彼は多分解剖の時に見た手と重ね合わせて考へているのだ、と千央は分かった。つまり、あの時見たのはゴッちの復活シーンで、先日おじさんたちの間を飛び回っていたのは、ゴッちの靈魂だというわけだ。

「僕山へ探しに行こうかな。また会えるかもしれないし」

千央は立ち止まつた。

「いや。やつぱりあの手は見間違いで、黒の影は毅の言う通り、ただのくまんバチだつたんだよ。私昨日調べたんだもの」

昨日帰つてから千央は、増田家の書庫にお邪魔して、そこにあつた昆虫図鑑を使いくまんバチについて調べたのだ。千央は毅に教えた。くまんバチは全体が真つ黒のずんぐりとした大型のハチで、飛び時はかなりやかましい音がでる。あの時、影はロケット花火みたいな音を出して飛んでいた。それを考えると、条件がピッタリ合致するのだと。

「どつちにしろ死んだものがまた復活するなんてことは有り得ないよ」

しかし毅はまだ納得がいかないようすだつた。

「そうかなあ……僕はそつだつたらいいなと思つてるよ」

毅は夢見る表情で言つた。千央は返事はしないで、代わりにもいだトマトを、乱暴に籠に放りこんだ。

「あつそつだ、あとね。鷺崎さんに今日聞かれたよ。僕の剪定バサミを知らないかつてわ」

「何て答えたの?」千央は聞いた。

「知らないつて言つたに決まつてるでしょ。どう答えればいいわけ?」

毅はしばらく考えて言つた。「そうだな。ハサミはゴッチを切り刻むためにちよつと拝借しました、そして現場で無くしました、とか?」

千央は途方に暮れた。もしかしたら、鷺崎さんまで厄介に巻き込むかもしれないのだ。少なくともこれで犠牲者の候補が一人増えてしまつた。

ふと、思いついたかのように毅は言つた。

「ねえ、僕思うんだけど。もしかしたらさ、反対派の人たちはゴッチの死体が見つかって喜んでいるのかも知れないな? あいつらはこのネタで勢いづいてるぜ。きっと……」

「それは分かつているよ

「下衆なやつらだよなあ、本当に……」毅は歯を見せて、言った。

千央はぶつぶつとつぶやいた。「なんとかして、攻撃が彼……、

男かは知らないけど、その人に攻撃が向かないようにしなくちゃ

「無茶だよ。そんなのが出来るものなら、もうとっくにやってるだ

ろ」毅は言つ。

「そうだけど……」千央はまたがっくりと落ち込んだ。

でも、無実の人に罪を被せたままにするわけにはいかないのだ、
と千央は自分のつい最近の経験から強くそう思つたのだった。沈黙
を守る真犯人の、それは義務のような気がするのだった。

千央たちは野菜籠を持ち、増田家の庭に足を踏み入れた。しかし、
前を行つていた毅が歩みを止めたのでそこでつかえてしまった。千
央が毅の背中を肘で突つつくと、彼は答える代わりに屋敷の方へと
恐々指を差した。「おい！ あそこを見て！」

毅は囁いた。「警察官がいる……」

毅の指差した先、増田家の玄関口には紺色の服をきた背の高い大
人が一人いた。中へやたらと頭を下げている。その頭には服と同じ
色の帽子が乗つていた。彼はでつぱりと肥えており、遠目からでも
制服がきつそなのがわかつた。顔は日本風屋敷の庭に置いてある
タヌキの置物にそつくりで、天然のアカンベ目をしていた。ちょうど
警官は玄関から出て行くところらしく、千央たちは彼が完全に増
田家の敷地から出でていくまで、全身を膠着させ、そのようすを見送
った。

「えらく時間がかかったね」

二人が増田家の玄関に入ると、そこには公平と伊鶴がいた。それ
から、

「遅かつたね」

園さんもいて、こう言いながら千央から野菜の入った籠を取り上
げた。

公平に話を聞くと、一人が話している合間に警察が増田の人達に話を聞きに来ていたそうだ。とはいっても、ナイフの持ち主がどうとかという話は全く出なかつたらしく、その点で千央はとりあえずホッとした。

お喋りな伊鶴は教えてくれた。ヤギは解剖の前からすでに事切れていったことを警官はすでに知っていたらしい。こういうことは傷の具合で分かつてしまつというのだ。警官が聞きたがつたのは、一体どういう風な経緯で「ゴッチを埋めることになつたのか」ということであつた。死ぬ以前ヤギを世話していく、埋めたのは千央たちだとうのを誰かから聞いてやつて来たのだろう、おそらくはあの青年からだらうなど千央は推測した。

「あのヤギは君たちが世話をしていたつて聞いたけど? 本当の飼い主は誰なの?」

中年警官は汗をかきかき、伊鶴たちに問うた。

「飼い主はわからないです」伊鶴は言った。「山でそこいら辺をふらついていたのを見つけて、なんとなく……餌をやつしていただけなんです」

「じゃ。どうしてヤギは死んじやつたのか、分かるかね?」ヒタヌキ氏。

慶幾は首を横に振つた。

「イエ。僕、山に遊びに行つたら死んでたんですね。いきなり、1週間くらい前に。なぜ死んでしまつたのかはまでは分かりません、直前まで元気だつたはずなのに」

「穴は深く掘つてきちんと埋めた? すぐ浅かつたとかない? もしかしたら匂いに惹かれて動物が掘り返したのかも知れない」

今度は公平が答えた。「もちろんちゃんと掘つて埋めました、多分大人のあたりの深さまで。土も大分盛つたしね……。えつ!! 墓の場所ですか? それは僕らしか知らないはずです。まあ、不思議ですよね」「不思議ですよね」公平のこの言葉に千央はドキッとした。僕らしか知らないはず公平はなんの気なく言つたのだろうが、

千央にとつては犯人はこの中にいると明言されたのと同然であったのだ。

タヌキ警官の話を聞いて、千央と毅は結局現場ではナイフもリュックも皿も何も見つからなかつたようだと結論づけ、大いにホツとした。しかし、まさかナイフに足が生えて勝手にどこかに歩いていくわけがないし、やはり誰かが拾つていつてしまつたとしか考えられなかつた。そしてその人物は、この大騒ぎの中、今だんまりを決めこんでいるのだ。拾つた人には反対派に攻撃の要素を与え続け、存分に活動を続けてほしいという思惑でもあるのだろうか？いや、仮にナイフが出てきてもそのことの妨げにはならないはずだ。ということは、ナイフの元の持ち主を知つている人物かもしれない、だからこの事件の真相が例の脱走患者のなどではなく、ただの子供のいたずらであるとわかると、都合が悪いということなのかもしだい。

唯一底う理由のある人物に毅の保護者たちがいるが、反対云々は当てはまらないし、さすがにそのことについて尋ねてくるだろう。リュックを見つけて気が付く位親しくしてゐる人も同じだろう。ど、いうことは結局なぜなのだろうか？一体何のために？拾つた時、ゴッチの死体に気づかなかつたのか？そんな馬鹿な、あんなに間近につたのに。もしその人がこの恐慌のような雰囲気を面白がつてゐるのなら、かなり趣味が悪い、もしかしたらそいつは愉快犯的な思想を持つてゐるのかもしれない、千央は思つた。

得体の知れない不気味さというのを千央は噛み締めていた。そしてまた頭痛がし始めてきた。千央は自分がゆつくりとした混乱の中にいることを、このところ自覚し始めていた。知らない人の手が自分の方に迫つてきたのに、驚いて身構えたが、しかし、それは自分の手だつたり（髪を整えようと手を上げただけだつたのだ）何かの気配がして、後ろに誰かいるのかと思って振り返つてみると、それが自分であつたりするのだ。そのときは誰かと一瞬目があつたような気がするのだが、周りには誰もいないので、そんなはずがない。

千央はこの件で癪癩も泣き言も言わずにじっと堪えていた。

冬の厳しさに体が慣れていくように、このうつすら霧がかかったようなストレスにもいつか慣れていくだろうと考えて……。それが何時になるかはわからないが、千央は正直それが待ち遠しくて堪らないのであつた。

そうやって考え込む千央の前には、彩りの良い美味そうな冷し中華があつたが、それを見ても千央は全く食欲を感じなかつた。

結局、ヤギの死体の件は世間で大々的に取り上げられることがなかつた。唯一かなりマイナーな雑誌『エモ・モザイク』、一つのみが取り上げていた。

特集【注田の村】森の中で悪魔崇拜の痕跡発見される…?

「現在、よしば病院の増設問題で揺れるX村の山中で、地域の子供たちが飼っていた牝ヤギのバラバラ死体が発見され、周辺住民は一時騒然とした。死体はX日の昼前、男性が発見した。ヤギは死後数日が経過しており、内臓は体外に引きずりだされ腐乱し、實に凄惨な現場であつたという。

記者はこの不可解な事件について、当雑誌では毎度お馴染み、世界の魔術儀式における第一人者で魔術現象研究家の岡崎貞一さんに話を聞いた。岡崎さんは、これは悪魔崇拜の儀式の痕跡である可能性があると主張する。（以下岡崎さんの話）

『この絵（図1を参照）を見てご覧なさい。胃、心臓が一定の感覚を置いて散らばり、ヤギの頭がちょうど東を向いていますでしょ？この点をそれぞれ直線で結びつけ、それをヤギの角の間、その位置から覗き込むと……特殊な二角形の図が浮かび上がってくるのがお分かりになりますね（図2）？これは精靈を呼び出すため、古

代より脈々と伝えられてきた隠し魔方陣の一種です。

中世のヨーロッパで魔女狩りが行われた際、一見分かり難いものへと段々と改良され、進化していく一系統にあたります。しかし、専門家が見れば一目瞭然です。古来から魔術使いたちはこれを使い、精靈たちと面会し、契約を交わすわけなんですね。なお、ヤギの胃は従属と傲慢を意味し、心臓は肉体的な力や最も重要なものや出来事、つまりは生命を指します。そこから推察するに、この魔方陣に込められた願い、この場合は呪いのようですが、それはある人物の抹殺であると思われるのです。

こういうエネルギーの必要な呪詛の場合は普通、雄の動物がよく使われるのですが、この牝ヤギが飼われていた、沢山の子供たちに可愛がられ愛されてきた環境を考えてみるとより生命パワーの強いこのヤギを生贊としてより好ましいと彼ら、もしくは彼女たちが考え選んだのでしょう。ですからヤギの腹から生命、安らぎ、安全を意味する子宫が取り除かれていれば、これが死の呪いだということはほぼ間違いないと思いますね。』

『え？ その呪いを受けた対象ですか？ それはあるものに従属し、傲慢なる人物です……。ここで名前を出すことは控えさせていただきますね、下手に指摘なんかしたら、脅迫になってしまいますから（笑）なので各自読者様の方で推理していただくということに……（苦笑い）』

『…………そちらにヤギの死んだ推定日の月の状態、潮の満ち干から考えると、呪いの儀式に最適の日なんですよ、この三角形に……』

……ここで当記者が気になつたのは、以前よしば病院の増設反対運動に参加し話題になつていたある宗教団体の存在であつた。

この宗教団体の教祖である、女性は現在七十八歳と高齢であり、長年靈能者として地域に密着し信頼され活躍していた。しかし、ご存知の通り、彼女はあるテレビ局の行った暴露によつて反対派の運動から退くことを余儀なくされている。

だが、それでも今だ反対運動を構成する一部に霊能者側と深い親交をもつ人物が少なからずいるという。記者は村に住むある人物に話を伺った。

『ああ、確かに人の出入りは頻繁ですなあ。あそこは本当に人気ですよ。それに信者と近所に住む子供同士とが遊んでいるのを何度も見かけました、家族ぐるみでも付き合いがあるようですね。』と、いうわけである。

さてこのヤギは文字通り人間たちの争いのスケープゴード（生贊）にされてしまったのだろうか？？

ここで記事は終わっていた。隅っこには『丁寧にも現場の見取り図までついていた。そしてちょうど現場にいたという人物が描いたスケッチは、サインペンか何かで乱雑に描かれておりそれが余計に緊迫感を醸しだしている。

千央は思った。この記事の内容はものすごく間違っているし、言いたいことは沢山あり過ぎた。世間でも、まゆつば物だと思われたのに違いない。しかし、これを読み終えた千央は、とりあえず記者の謎の推理力に舌を巻いた。何故なら、ヤギをバラした犯人を脱走した患者（仮にそんなことを書いたら大変なことになるだろうが）ではなく、霊能者側の人間だと指摘していたからである。さらに、これの隣にあつた記事を読んで千央は初めて知ったのだけど、よしば病院の院長が今病氣で入院しているらしかった。

「なお、よしば病院の院長はX日より入院中であり、現在は面会謝絶の状態。」とある。

この雑誌では、明らかに霊能者たちが院長に死の呪いをかけたのだと案じていい訳だけれど、雑誌編集者に聞いたとしても、記事がたまたま隣り合っているだけだと言うのだろうな、千央はそう思つて怒りを感じた。しかし、誰かに抗議することもできないので、奥歯を食いしばるだけで千央の怒りの表現は終わってしまったのだった。

一一三、穴うめ

「いいでいいだらう、と公平は倉庫の壁に立てかけてあつた大きなスコップを取り上げて、こびりついた泥を何とか削つた。乾燥した土がポロポロと地面に落ちていった。

「思つてたより、重いんだなあ」伊鶴はスコップを持つて言つた。
先日、取材に来たテレビ局のカメラマンが千央たちのイノシシ捕獲用落とし穴にはまるという事故が起こつていた、彼は鎖骨にひびが入り、その上高価な機材を壊しかけたのだ。

その穴は埋めたが、他にも穴がいくつかあるということを知つたハルエさんは、穴を掘つた張本人たち、つまり毅たちに至急すべての穴を埋めてくるようにと言付けたらしい。それならと、当然千央たちにもお呼びがかかり、久しぶりに皆揃つて山へのお出かけ、とこついうわけになつっていたのだった。

最近ハルエおばさんは何をするにしてもピリピリとしていて、大変反論しにくいのだ、と毅は言つた。当たり前だ、真琴は後ろから言つた。

「あんなに近所の人達から誤解されてさ」

園さんは増田家人間ではないし、靈能者は高齢過ぎて不満をぶつけるのには遠慮がある。だから年齢も適当で靈能者の娘であるハルエさんが一番辛い立場にあるのはある意味当然かも知れなかつた。しかし、真琴は同情していた。もちろん千央たちも同様であつた。

さて、あの取材の件で靈能者と決裂して以降、反対派の集会は増田家で開かれることはなくなつていた。だが、反対活動の集会は今では異様なほど盛り上がりを見せており、側におらずともその活動内容が聞こえてくるほどだつた。

慶幾は釘抜き付きのデカいトンカチを投擲するように振り回しながら言つた。

「今ではゴッちが反対活動のシンボルみみたいになつてるんだから…

…、可笑しいもんだね」

彼の言つた通り、ゴッチの惨殺死体（解剖）発見事件はもはや反対派内でマスコットと化していた。

使い方としてはだいたいこのよつた事件は一度と繰り返してはならないという教訓的な暗示と、次はあなたの家族がこのヤギのようになつてもいいんですか？という脅しがけの二つである。

しかし慶幾の話を良く聞いてみると、彼の言つた可笑しいという意味はどうやら違うところにあつたらしい。

「西洋文化でヤギは魔憑きの化身としてあつかわれているらしいんだよ。そのヤギの死体をバラされたことをあんなに怒つて、マスコットにまで祭り上げるなんてさ。あいつらは自分から魔憑きの仲間だと自称していることになるんじやないのかな」

それを聞いて千央たちは笑いこけた。

さらに言えば、可笑しいところは他にもあるのだ。反対派は世間が自分たちを精神病は魔憑きのせいだと思っているカルトチックな差別主義者だという誤解を否定するために、靈能者から遠ざかつたくせに今度は、ヤギを殺した魔憑きを許すなどと言つて、自らオカルト的な活動へと歩み始めたのだ。

これらを踏まえて、千央は反対派の人達をとても馬鹿だなと思つたのだった。

それから千央たちはスコップをまるで鉄のように扱いで、山を登つて行き、地図を頼りに落とし穴を順々に巡つていた。

「やれやれ」毅は地図を見て息を継ぎながら言つた。

「僕ら張り切り過ぎて、数を多く造り過ぎたようだよ」落とし穴は全部で九箇所あり、都合の悪いことにそれぞれ万遍なく離れていて、埋めてくるのには随分と時間がかかりそうだった。穴埋め作業自体は土を被せるのみの単純作業だったが、その穴を見つけることは難しかつたからだ。勘でつけた地図は言わずもがな、あまり役に立たなかつたのだ。

皆はぶつくを言いながらも、また作業にかかることにした。千央たちは大体見当をつけた場所から蜘蛛の子を散らしすように離散し、穴を見つけたら大声で他の子を呼び一気に埋めてしまう、という方法をとることにした。このやり方でなら皆あまり離れなくてもいいし、効率もそれ程悪くない。その証拠に千央はこの方法で四つ目と七つ目を見つけた。

なぜこんな少し面倒くさい方法をとるのかといふと、捜索が行われ何も見つからず、何度もテレビ局員が出入りしているとはいえ、それでもまだ心配だと考えているハルエさんに出発の際、口を酸っぱくしてこう言われたからだ。

「山では絶対一人になっちゃいけんよ、皆固まつて行動すること！分かったね？」村人にとつて、この山は今やや危険とカテゴリ分けされているようである。しかし、ゴッチを切り裂いた武器は今だ見つかっていないし、そうなるのも当然かもしれない、と千央は思ったのだった。

八つ目の埋め戻し作業後、九つ目に向かう途中、千央は自分のトラウマが何かに刺激されるのを感じた。

次の目的地は沢の近く、つまりゴッチが最初に捕獲された場所なのだ。

落とし穴に嵌まってしまったゴッチを皆で引き上げたのは、もう遠い遠い過去のことのようだ。当時、悩んでいたいたことが、今や取るに足らないものだと思った、千央は過去が恋しく、無性に戻りたかった。しかし、別人になれないのと同じように、過去の自分にもまた戻ることはできないのだ。

それに、やっている時は何も感じていなかつたが、死んだ動物を解剖したというその異常な行動に今さらながら千央は気づいた。以来、定期的にどす黒い感情の波に襲われているのだ。それは異様な臭気を放つ、とても無視できない種類のものであつた。だから、いくら面白いことが起こりうと、何故だか全く関係の無いそのことが思い出されて、一瞬で神経質な領域まで引き戻されるのだ。何を呑

気に笑つてゐるのだ、それどころではないぞと千央の潜在的な意識がどこからか話しかけてくるのだった。もう、すんなり笑えるのは皮肉がかつたものしか残されていなかつた。それだけはゴッちの死体を思い返しながらでも努力なく樂に笑えるので、ついそちらの方面の笑いに走りがちだつた。さつきも、患者が穴に落ちて捕まるかもしれないし、そのままにしどたら、首の骨が折れて死んどるかもしれんけど……あつはつは、と軽い気持ちで笑つたら、隣にいた伊鶴の顔が凍りついていた、それで初めて自分の異常さに気づき、千央は前にもましてますます打ち沈んでしまつたのだった。

千央はそのことで少し毅を恨みに思つたものだが、しかし、毅も千央と負けないくらいに氣分が落ち込んでいるようで、前のような元気がなかつた。こんなときに責めるのはさすがに可哀相だと千央は思つたのだった。

「皆、あつたよ」公平に呼ばれ、千央たちが向かうと、確かにそこには穴があつた。時間が経つたせいか、フタの部分には雑草が生え、地面とほとんど同化してしまつてゐる。それと分かるのはゴッちが落ちた穴があるせいだ。突き抜けた板葺き屋根のようになつていて了。

千央たちは早速スコッップを持つて、穴の周りを囲い、作業をはじめた。脇には山のように盛つた土が大量にあつた、穴を掘つた時のことだ。土は長い間空氣に晒されて、すっかり乾燥してゐた。皆は一息に埋めようと素早く動き、ざらざらいわせ周りの土を穴へ流し込んでいった。とたんに土煙がそこら中に舞つていつた。するとどこからかゲホゲホ、ゴボゴボと弱々しく咳こむ音がし、皆はビクツとして作業を一時中断した。

「あれ、大丈夫？」真琴が言つた。

千央はきょろきょろと辺りを見渡した。伊鶴の顔色は良いし、アンコでもでもない。お互の顔を見てようすを伺つたが、何も変わつたことはない。森は沢と鳥と虫のたてる音以外、いつも通り静か

であった。

しばしの無言の後、千央たちは氣を取り直し、また埋め戻しの作業をはじめた。ざくり盛り土に突き立て、一杯の土を取つた、そしてそばの穴に流し込んだ。

だがその一瞬か、一瞬後、とにかくすぐ後に、また咳こむ音。噎せこむ音。激しいヒュー・ヒューという吸氣の音が聞こえてきた。皆はその場に凍りついた。どうやらこの音はこの穴から聞こえてくるようなのだ。

毅は一步退いたが、「何だ!!」と大声で言つた。

穴からはまだ濛々と土煙が立ち上がり、周りの空気は白んでいた。しばし待つたが何も返答はなく、千央たちは目配せをしあつた。怪しい。は青い顔をしている。すぐにお互いがお互いの考えていることが知れた。千央もピンときた。

彼である。

千央たちは穴の中に向かつて、何回も呼びかけた。しかし全く返事がないことに痺れを切らし、皆はこわごわと上から覗き込んだ。真つ暗な穴の中には人間が一人いた。胎児のような格好で丸まつて、形や大きさからして人間の男だ。年齢は分からなかつた。頭にはミイラのように何故か布がくるくると巻いてあり、顔が見えなかつたからだ。ここまで見定めたところで、千央たちは顔を上げて、お互いの驚愕した顔を確認しあつた。

「どうしよう」真琴は恐々として言つた。

男は一生懸命に息をしようとしていたが、とても苦しそうで、陸にいるのにも関わらず、まるで溺れているようだつた。咳込み、背中が大きくしなり続けていた。見るからに衰弱している。

「とりあえず、助けないと」慶幾が声を潜めて言つ。

「助けるつて、どうしたらいいのよ？」アンコは負けじと囁いた。

「よし。じゃ、まずはここから出そう」毅は覚悟を決めたように頷きながら言った。「引っ張り上げるんだ」

皆は穴に入つて男の腕を掴み、引っ張り出しにかかりた。が、彼の腕は汗や湿気なんかでとてもべとついていて、かなりやり難かつた。さらに土がくつついでいて、触るとゴワゴワとした毛がちくちくした。男は、よなよなした感じでおとなしく従い、地上へ上がつた。その後は、すぐに座り込んでしまい、土の上にぐつたりと寝ついてしまった。

千央たちはそれを見て、まだびっくりして顔を見合せた。渦中の人を見つけたことにも困惑していたが、まさか死にかけのようにしているとは。

皆して途方に暮れていると、突つ伏したまま彼は唸りだした。ウーン、ウーンと、まるでサイレンのように。

「あのー、もしもし？ 大丈夫？ 大丈夫ですか？」

公平は男の中肉中背の背中をペシペシと叩いたり、ゆすったりして話しかけた。

彼の着ているTシャツはかなり薄っぺらく、土や泥で薄汚れている。千央たちは黙つて深刻な思いで注目していた、歯を食いしばつた口からはゼイゼイとした嗄声がもれたが、ハツキリとした言葉になることはなかつた。

「何を苦しがつてるのかなあ」同情した表情で伊鶴は言った。

「喘息かなんかの発作じゃない？」とアンコ。「とにかく大人を呼んで来ないと」

「それなら、僕が呼びに行く。君たちはそこで見張つててよ」と伊鶴が言い、森を飛び出して行つた。

千央たちは言われた通りに、男の周りを包囲した。相変わらず男は咳込み続けていた。千央は男のミイラのような顔を指した。

「ねえ、これは何か怪我をしてるのかな？」

「いや、これは包帯ではないようだけど……」慶幾は言った。彼の

言つ通り、それは本物の包帯ではなく、単に布を破いて作った物のようなのだ。

真琴は推測して言つた。「多分、逃げている途中で怪我をして、急いで作ったんじゃないの?」「それにしても怪しい。怪しそうだよ」

毅はしかめつ面で言つた。その通りだ、と千央は思つた。そして毅は男の顔の布に手をかけ、それを外していった。布はクルクルとリンゴの皮を剥くようにして外れていった。

「よせ」と、公平が言つた。しかし、すぐに最後の一弾が顔から離された。

……その時、千央は信じられない思いであった。とにかく全員がアツと息を飲んで、彼の顔を見下ろしていた。なぜなら、男の顔は一部の隙もないほど銀色の毛で覆われていたからだ。

「一体何だ。これは」と慶幾は言つた。

それは広範囲に生えた白髭のようにも見えたが、しかし全体的に柔らかそうな感じで太陽の光を浴びてツヤツヤと輝いた。毛の長さは一cmか二cm程、鼻柱と眉間に中心にして、つむじ嵐のように生えている。

毅はその男の顔をまじまじと見た後、顔を上げた。そして大至急伊鶴を呼び戻してくるように、と誰にともなく告げた。

千央たちの会話が刺激になつたのだろうか、そこで彼はいきなりゾンビのような爆発力で一気に起き上がつた。さらに毅の腕を強い力でがつし、と掴んだ。その掴んだ手も、もじやもじやだった。

男は急に痛みに堪えるように、顔を歪め、しばらく何か話をそうと頑張つた。そして、よつやつと男の口から出てきた言葉、それは、「腹が減つたよ……」であつた。

男は毅の耳元でそつぶやくと、ウツと息を飲み、力着きたかのようにまたぞたりと地面に倒れ込んでしまつた。

冷蔵庫を開けると、オレンジ色の明かりが皓皓と千央の顔と両腕を照らし出した。アンコはペットボトルの冷たいお茶、昨日のお惣菜の余りを、伊鶴は戸棚からバナナ、ポテトチップスを取り出した。一人は最高にワクワクしているようだった。

背後からは真琴と慶幾の会話が聞こえてきた。真琴は得に不安気だった。

「本当にあの人逃げてきた患者なんだろ？か」

「さあ、とにかく早く誰かに知らせないと」

「でも毅の言う通り、下手な人に教えると騒ぎになるよ」

「とりあえず引き留めておかないと」

「引き留めるも何も、ほとんど昏睡状態じゃないかよ」 確かに男が弱り切っている今、拘束するには絶好のチャンスだ。それなのに、食べ物を与えて元気にしてしまつてもいいものだろ？かと、千央はちらと考えた。

しかしそれから数分後、男のもとには食べ物がどつさり並べられていた。増田家から持つて来たものの他に、庭にうんざりするほど成っていたいちじく、そしてどこかの家の庭から失敬してきたりしいびわなどがあった。

公平はペットボトルの蓋を開けて、男の口元へとゆっくり持つていった。男はうつすらと目を開け、それを見ると、食るようにしてお茶を飲み下した。続いていちじくに手を伸ばし、そのままかぶりついた。彼は噛みながら身を起こすと両手で食べ物をつかみ取った、それは素早く、次々に彼の胃の中へと消えていった。から揚げは一口で飲み込んだし、バナナは数秒でなくなつていった。ものすごい食欲だ。千央は彼の胃袋が心配になつた。

やがて果物が消え、水が消え、食べ物が大方なくなると、彼は落ち着いて穏やかな顔になつてきた。そして胡座に座り直し、変な口調で千央たちにこう言った。

「あの、皆さん。助けてくれて、どうも御有難うございます」

彼は胸の前で手刀を切り、それから両手について、千央たちに頭

をぺこりと下げる。

「一体何日くらい食べてなかつたんですか？」

公平は言った。公平は何よりもまず男の暴食ぶりに驚かされたのだ。
「いや別にそういうわけじゃ……ただ腹がへつていただけです」彼はこう言い笑つた。

顔が毛で覆われていて年齢ははつきりしないが、声の質からして相当若いようだった。はじめ千央は奇妙な話しから彼を外国人かとも思ったのだが、どうやら彼には元々この辺りではない、遠い地方のなまりがあつて、無理矢理標準語で喋っているようなのだ。とにかく皆はその言い訳を聞いて、お互に困った顔を見合せた。

千央は思った。これはどこまで突っ込んでいいものだらうか、どもし自分の身分がばれていないと思つてゐるのなら、黙つている方が都合がよいであろう、暴れられては確保できない、気づいていることを悟られてはならないのだ。

また千央は氣の毒な思いで、また食物にパクつきだした彼を見下ろしていた。なにせ彼は、千央と毅の軽率な行動のせいで、ヤギで悪魔の儀式を行つた異常者と思われているのだ。千央は申し訳なくて、心の中で彼に謝つた。

やがて真琴が恐る恐るといつた調子で話しかけた。

「あの、知らないなら言つときますけど、ここら一帯は私有地で、立ち入り禁止なんです。だから勝手に入られると困るんですけど」
千央は分かつた、真琴は多分遠回しでお前はどこの誰かと聞いているのだ。

「でも君たちは入つてゐるけど……いいんですか？」

男はあっけらかんとして言った。

「この子の家の土地なんで」真琴は左にいた毅を指さした。
「はあ……、それはなんともすごい広い庭ですね。これは遊びがいがあるでしょ」

男が昔話の登場人物のような語り口で感心したので、千央は可笑

しさに吹き出しそうになつた。それから男は毅に頭を下げて言つた。

「あの、お庭に勝手に入つてしまつて、本当すみません」

毅は苦笑いしながら言つた。

「あ、いやでも、普段は立入禁止になつてないんです。入っちゃいけない本当のわけは、最近危ない人が山に来ているからなんです」
多分これは男の罪悪感に対するフォローのつもりだつたようだが、色々な前置きを端折つて、結構大胆な探りをいれていた。千央は内心冷や汗をかいてウワーッと慌てた、と同時に彼の表情の変化に注目した。何か心当たりのあるよつすを見せないか……と。しかし、じきに気づいた。毛もじやな彼の表情の変化など、ここからでは全く分からなくな、と。

「危ない人？」

やはり当人の顔の変化は全く分からず、彼は至極自然な声で聞き返した。

公平は慌てて取り繕つた。

「いや、正しく言つとテレビでここが紹介されてから勝手に入り込んで怪我する人たちが出てきてですね……。」

成る程、少なくとも嘘は言つていない。

「へえ……」男は唸つた。

少々余裕の出てきたよつすで慶幾は言つた。「その上、最近は幽霊も出るんですよ」

その話は余計だよ、と千央は思いつつもニヤついた。

「幽霊が……？」
彼はうつすら口角を上げて笑い、唇を舐めた。「それって、どんな幽霊なんですか？」

千央たちは彼に湖水から起こつた幽霊捏造騒ぎの一件を説明した。その幽霊とはイノシシのような硬い茶色の毛に、白い木のキバ、茶と黒の翼を持つてているのだ。

男は興味深そうに話を聞き終えて言つた。

「それは随分良いことをしたんですね」彼はぽつりつぶやいた。

「僕は小さい子供を怖がらせるのは大変な罪だと思います」

それから千央たちはじばりく、彼と当たり障りのない会話をした。その間千央は彼が捕まつた後の展開について、少し考えを巡らせていた。もちろん彼はヤギの解剖したことを否定するだろうと思つ。それは真実だ。しかしそれを他の人が信じるかだ、信じないかもしない。そもそも、彼とヤギが結び付けられたのは、逃げたのと、死体が見つかったのが運悪く重なつたせいだ。彼はどうやら暴力的な人間ではないようだし、警察の信頼を得られるかもしれない。

この事件がうまいこと被疑者不明、名無しのゴンベ工の仕業になければならないと千央は考えていた。それに、ヤギがすでに死んでいたのを警察は知つてはいるはずだから、警察が本気で捜査しているのかも疑しい。きっとあんまり住人がうるさいために、表面上聞き込みをせざるをえないのではないだろうか?? そう考へると、彼のことを通報するのも多少気が楽になつた。

千央たちは予め談合していた。彼を皆で引き留め油断させておき、途中でさりげなくアンコと千央が抜け出して増田家に帰り、園さんなり、水野さんなりに話す手筈だ。アンコはそろそろだと千央に合図し、二人はゆっくりと後退りしだした。そして森へと振り返つた時、

「あ、ちょっと君」

千央は男に話し掛けられた。

「僕どこかで君の顔を見たことがあるよつて思つ」

「え……、どこですか?」

千央はどうせ飼つていたペットか何かに似てるとかだらうな、と軽い根拏で聞いたが、やめておけばよかつた。

「うん、つい数日前なんだけど」

男はゆっくりかみ砕くように言つた。

「僕は森の中を散歩していたの、そしたら君とアノ長い髪をした女の子、その子がヤギに何かをしていたのを見たんだ」

「うわあ、全部バレてるんだ、千央はそう直感して全身がギュッと

なつた。あの夜何かの気配は感じていたが、それは彼だつたんだ。

千央はどつかの管から空氣の塊がせりあがつてきて苦しくなつた。

「いや、彼はああ見えて男なんですよ」公平は言った。

「そうなの？でもあれは真夜中で……、えーと、まあいいや」男はとつさに複雑な表情になり、口ごもつた。

千央は皆から不審な目を向けられた。否定すればよかつたのに、千央は見られていたショックと注目されたのとで、自分が赤面しているのがわかつた。それが何より眞偽を雄弁に語つてしまつていた。伊鶴は勘違いしたらしく冷やかして、年長組は顔を見合させた、慶幾はニヤついていた……。アンコは目を数回しばたいた。

千央は毅の細腕を捕獲して、助けを求めた。毅は顔面蒼白であうあうと狼狽していたが、やがては觀念したよつすで切り出した。

「それは……うーん。分かった、話すよ……。……その時、僕らは

ゴッヂの病氣を調べに行ってたんだ」

「えつ、わざわざ夜中に？なんで誘つてくれなかつたの？どうせなら僕も一緒にきたかった」伊鶴は不満気に言つた。

「まあ、黙つて聞いてろ」公平は伊鶴を遮つた。「で、ゴッヂに何をしたんだ？」

「うん。それは……」毅は言いづらそうに黙つてしまつた。

「ねえ、何をやつたの？」公平は少し怒つていつた。「おい

「ゴッヂの解剖はこの人じゃない、私たちがやつたの」千央は一気に言つた。

その場は一時静まり返り、やがて騒然となつた。毅は苦悶の表情を浮かべて、続きを話していつた。

「少し前に図書館で毒草とかフイラリアについて調べてただろ？それで、胃の中の物や、心臓を見ればゴッヂの死因がはつきりすると思つたんだ。だから僕らでゴッヂの胃を調べに行つたんだ。それから、心臓も」

話が進むにつれ、真琴は肩で息をはじめた。慶幾のニヤニヤ笑いは拭い去られていき、徐々に困惑した表情になつていつた。そし

て、ボソリと言つた。

「じゃあ、あれは……」

皆は事の重大さに黙りこくれてしまった。しかし、しばらくなしてアンコが聞いてきた。

「それで、「オッちの病気が何かわかつたの？」

「いや、結局分からなかつたよ」

毅は首を振り、

「それにあの灰色の手……。あれは……、あれは一体なんだつたんだろうか……」

とつぶやいた。そして突然膝から崩れ落ちて、

「「めんなさい」「めんなさい本当に申し訳ない」

と皆に謝りまくつた。

「僕は知つていたよ」公平はぽつりと、びっくりするようなことを言つた。「まあ、正しくいふと、一人が何か隠していくと思つてただけなんだけどな」

真琴は手をあげた。

「私もなんとなくは気がついてた

「二人がよく話しているの何度も見掛けた、単に仲がいいだけかと思つたけど、全然楽しそうじやなかつたし。千央も明らかにようすが変だつたからね……」

「でもさ、一人は本当に隠し通せると思つてたの？こんな大事になつたのに？」

公平は千央と毅に言つた。

千央と毅は首を竦め、しょんぼりとうなだれた。空気がピンと張り詰め、ことの重大さに辺りは水をうつたよつな静けさになつた。
「何？どういうこと？」いきなり、この場の雰囲気にそぐわない声がした。

「」

この中にただ一人事態把握できないものがいたのだ。むろん例の男だった。彼は特別鈍感そのようすで聞いてきた。

公平は説明しながらも、話の核心に迫つていった。

「少し前に、そのヤギの死体が見つかって村は大騒ぎになつたんです。なぜなら、近所の精神病院から患者が逃げ出して……そのままつかまつていなんです。村の人はあなたがヤギを解体した犯人だと思つてるんです。つまり、病院から逃げて、武器を盗んでヤギの解剖をして山にいると、あなたがヤバいやつだと言つて、村中がかなり怒つてます」

そしてそれが反対運動の反撃の材料にもなつてゐるのだ。

「はあ……なるほどね……ハハ、なんか怖くなつてきたな。うーん。まあ、何かされたわけじゃないから別にいいんですけど……」

男はしかめつ面だつたが、多少面白がつた調子で言つた。告白してできたダメージが強過ぎて分かり難かつたが、彼はこの発言でさらりと自分がその患者であることを認めたのも同然だつた。

それから彼は俯いて、腕に嵌めた輪ゴムを弾いた。しばらくたつた後、ふいと顔を上げてにわかには信じられないことを千央たちに言つた。

「そつ。君たちがそれで困ることになるのなら……、むしろそれは僕がしたことにしてもいいですよ」

千央は驚き、思つた。それはありがたい申し出だけど、彼の名誉はどうなるんだ? それに何故そんなことをしてくれるんだ? と。さらに男はこう切り出した。

「ただしね、これには交換条件があります。通報を待つて、もう少しだけここに居させてほしいんです。まだ僕はここでやることがあるんです。お願ひします」

そして男はジーとこちらを見た。

「それに、もし僕が掴まつたとしても、少なくとも君たちのことを教えない約束します。今日の食べ物と宿の恩がありますから……」

それを聞いて毅はしばらく黙り込んだ。そして、こくりと頷いた。

契約成立の瞬間だつた。千央たちは彼の通報をしばらく待ち、男はこの先ゴツチ解剖の眞の犯人と千央たちに会つたことを秘密にしておくのだ。

彼のこの提案の訳、それはおそらく千央たちと同じように名乗り出る勇気がまだないのだろうと千央は思った。

毅は尋ねた。

「あの、一つ聞きたいんですけど。僕らがいた場所の近くで皿とかリュックを見かけませんでしたか？」

千央はリュックのことはすっかり忘れていたが、持ち主の毅はちゃんとそのことを覚えていたのだ。

「ああ、それはちゃんと返しておきましたよ」男は言った。

「えつ……どこに？」毅は驚いた。

「そりや、君の家に」

「家ですか!? なんで僕の家を知ってるんですか？」

「ええ、だつて……ハサミに鷺崎って名が彫つてありましたから。そこの家にまとめて置いたんですけど、あの山の奥にある……、いけませんでした？」

千央たちのびっくり顔を見て男は慌てて言った。

いけないもなにも、返すところを間違っているのだ、千央は衝撃を受けた。だから鷺崎さんは庭仕事に関係ない毅にわざわざ訊いてきたのか。それから、ゴッちの死体が見つかった次の日、千央は野菜畑にハサミを持っていった。もしかしたらあれは……あれは、鷺崎さんのハサミではなかつただろうか? 千央は自分の鈍感さに愕然とした。

毅は息を荒くしながら言った。

「僕の名字は喜屋武で鷺崎じゃありません。鷺崎はハサミを借りた人の名前です」

「じゃあ、僕まずいことをしちゃったのかな? どうしよう」

「いや、でも……。それってまさか血まみれのままで返したりは? 「川でちゃんと洗いましたよ。でもそんなに血はついてなかつたと思いますよ」

「そつか……、なら大丈夫です。多分」

彼の情報に毅はホッと胸を撫で下ろしたようだった。

しかし、千央は逆に不安になつてゐた。鷺崎さんが全くの馬鹿だとは思えなかつたのだ、少なくともそれなりに勘が働く人物であるはずだ。じゃないと遠回しにハサミのことを聞いたりしてくるはずがないだろうと思つて。

夕暮れ時、山道には夕口が一杯に差し込んで、皆の顔は揃つてみかん色だつた。次の日も必ず行くと彼に約束した千央たちは、意氣揚々と山を下つていた。

しかし、公平だけはようすが違つていた。

「なあ、さつきの話、本気なのかよ？！」

公平は脱走男を匿うのには反対なのだ。これを倫理に反する行為だと彼は考え、益々事態を混乱させてしまうと主張した。

怒る公平に向かつて、歩きながら千央は言つた。

「あの人があそしたといつて言つてるんだから、しばらく黙つててあげようよ」

千央は思つた。彼の意見は尤もで、本来なら自分も同じことをしていただろう。しかし、状況が状況なので千央としてはもう選択肢がなかつたのであつた。

「そうだよ。ゴッちを解剖したとか言われてたけど結局何もしていなかつたんだし、全然普通だつたじゃん」と伊鶴。

公平は呆れ返つて言つた。

「あのね。そう見せてるだけかもしれないだろ、お前らは子供だから簡単に大人に騙されるんだよ。もし油断した隙に襲われでもしたら大変なことになる」

「そんなこと言つて自分もまだ子供じゃないかよ」慶幾は言つ。

「何？人間不信なの？」アンコが笑つた。

「違うよ。お前らが間違つてるから忠告してるだけだ」

公平は否定したが、そういう最近、彼は佃さんの件で大人に騙されたばかりなのだということを、千央は思い出した。このことで

公平は人一倍過敏になつてゐるのもあるかもしない。

「だいたいそんなことがバレたら、益々村の奴らから村八分を食らうぞー！」公平は大きな声で言つた。

「もうされてるだろ」前を歩いていた毅は振り返つた。

「責任は僕が全部取るよ。公平たちほどつせもうすぐ帰っちゃうんだから。だから好きにやらせてくれ」

そう言つ、毅の目には有無をいわせぬ凄みがあり、公平は黙つてしまつたのだつた。

一十四、傷痕

千央たちが泊まっている増田家別宅の風呂はとても古びている。湯舟は狭くて底がかなり深いし、滑りやすい床はタイル張りで間違つて転ぼうものなら、頭が掲ち割り氷みたいにどーんと砕けそうだ。そのお風呂に今夜、千央はアンコと一緒に入っていた。本当は真琴も誘つたのだが、真琴は中学生で少し年上なのもあり、子供と風呂に入るのは嫌だよと断られた。しかし千央たちはまだ幼いので、その点においては全く平気だった。

千央は膝をかかえて湯舟に浸かると、とっくりと考え込んでいた、ついさっきまで起こっていた出来事のことを。今日は本当に色々なことがあつたなあと想いながら。

「あつ！…痛つ！…」

いきなりアンコは声をあげた。彼女は鏡の前に座り石鹼をもこもこに泡立てて、さっきまで体を洗っていたのだが、今は自分の足を見て顔をしかめていた。

「どうしたの？」千央は湯舟の端から覗きながら言った。

「うーん。これに泡がしみるの」

見るとアンコの脛には赤く長い擦過傷がいくつもあるのだった。

「そんな怪我、いつしたの？」千央は少し驚いて聞いた。

「うん、祭りの時に階段のどこでね。降りてきた人とぶつかって転んだの。ものすつごく痛かった」アンコは怒りつつ答えた。「しかも、その人謝りもしなかつたんだよ！…あー、今考えても腹が立つ！」

「絆創膏は貼らないの？」千央は聞いた。

「いいよ、かすり傷だし。でも擦れて火傷みたいになつたところがまだ痛くてさ……。これ、ちゃんと綺麗に治るのかなあ？」

アンコはつぶやき、傷をあちこちから眺めた。

「そうだ、盲腸の傷見る？」

といきなりアンコは言いだし、上半身を捻った。成る程、鼠蹊部に近い右の下腹に斜めの傷がある。でも完全に治癒して、もう半分消えかけていた。

「去年切ったんだ。千央は、入院したことある？」

アンコにこう聞かれ、千央は横に首を振った。今のところ千央は入院どころか麻酔の経験すらなかつた。それはいいことだが、しかし、こういうことは小さい時に体験してある程度慣れていった方がいいのかもしれないと思うこともあつた。なぜなら大人になって初めての入院となると、多分、親身になつて世話してくれる人も甘える人もいないだろうから、とても心細く不安だろうと思つたのだつた。

「手術、怖かつた？」千央は聞いた。

「ううん、とアンコは言つた。「別に。それより、食べたり飲んだりできないのがかなり辛かつたな」

アンコの話によると、手術前にはたいていの場合、飲み食いが禁じられるらしい。確かに腹一杯の状態で腹を切つたりしたら、色々不都合がおきそうだと千央は納得した。

そしてアンコは言つた。絶食が明けて最初に飲んだ、紙パックのリングゴジュースほど美味しく感じたものはない。千央はそれほどに食べ物に感動したことがなかつたので、少し羨ましく思い、是非そのリングゴジュースを飲んでみたくなつた。しかしその前の辛い絶食期間を考えると、やっぱり普通のジュースの方がいいな、と考えを改めてた。

それをアンコに伝えると、彼女はけらけらと笑つて、「そりゃあそうだよね、私だって一度と入院したくないよ」と言つた。

千央もちょっとだけつられ笑いをした。しかしそのうち、本当の笑いになつた。ただつ広い風呂場に二人の小さな笑い声が響いて浮き上がつていき、湯気と一緒になつていつた。

その時、千央はふとアンコの後ろに人型の大きなシリエットが浮かび上がっているのを見つけた。

ここに風呂場は、低い位置に大き目のガラス窓がついていた。も

ちろん窓は透明ではなくすりガラスだったが、それでもすぐ近くにいると人影がうつりこむ。つまり今、窓の側には誰かが立っているのだ。

千央はウワーッと声をあげた。アンコは驚いて振り返り、影を見つけてヒッ、と息を飲んだ。

「鍵、鍵」と千央はアップアップしながら言った。

窓にはクレセント錠が着いていたが、恐ろしいことにその鍵は今かけられていなかつた。アンコは急いで錠を開めた。その後は、しばらく氷オニをしているみたいに一人は固まって、微動だにしなかつた。そのうち、謎の影はゆらりと揺れて、窓の前から立ち去つて行つた。

「誰なのあれ」とアンコは震えながら言つた。

千央はあの影が覗きかと思い、しばらく心臓がバクバクどきどきしていたが、よく考えると自分たちがまだ全くの子供だつたと気がついた。ちょっと自意識過剰で被害妄想が過ぎたかな、と少し落ち着いてきた千央は湯につけたタオルで顔を拭きながら思つた。

だがアンコはピリピリとして、まだ警戒しているようだつた。さらに寛大にもアンコは窓を少し開け、そこから顔を覗かせて外を窺つた。漆黒の暗闇がすき間から覗いて見えた。「ちょっと、怖いから閉めてよ。早く」

千央はアンコに頼んだ。しかし、アンコは急に窓のすき間から猛犬のような狂つた声でわんわんと吠え、そして振り向いてこう言った。

「だつてまだ外にいるんだよ」

それを聞き、千央は今度こそ恐ろしくなつた。しかしアンコは大分遠くを見ているようなので、千央はタオルを肩にかけて立ち上がると、頭をアンコの上に乗せ、千央は串刺しだんごのような格好で野外を覗き込んだ。

暗闇の中には忙しなく動く一つの影があつた。遠くの芝生を早歩きで通り過ぎ、花壇に近づいていた。顔形は暗闇でよく分からなかつた。花壇の奥には、木立が見え隠れして、木の葉が風でささやいていた。

つたが、そいつは前屈みの上、ひどい猫背歩きで草原を駆け抜けていった。

「うわあ、変態に会っちゃったよ」アンコは戦々恐々として言った。千央は言った。「別に綺麗な女人の人がいるわけでもないのに、覗いてどうするんだろう。相手も子供でなんだがつかりつて感じだよね」

アンコはふっと吹き出した。

「馬鹿だね、千央は。知らないの?世の中には子供に欲情する奴もいるんだよ?」

「それはテレビのニュースとかで知ってるよ。でも大人の人なんだから相手は大人の女の人が良くない?」

男の人は胸の大きな人が好きだと聞くし、千央としてもその方が魅力的に見える。幼児体型の千央たちの体など、キュー・ピー人形や長ひょうたんと大して変わりないし、何の面白みもないではないかと思うのだ。

「普通はそうだろうね。でも、ロリコンは案外とそこら中にいるのだよ。うじゅうじゅと……」

アンコは指をひらひらとさせて言った。

千央は苦笑いをした。

「そんな、なんかノラ猫みたいに言って……」

「だつて、私も前にあつたことがあるもん」

アンコは力を込めて言った。そして、以前にあつたロリコンの話をし始めたのだった。

「6歳か7歳の時に市民プールに遊びに行つた時、確かに夏休みだったかな。いつも私は子供用の浅いプールで泳いでたんだけど、そこがすごく混んでたから、大人用の25mプールの方に行つたの。でも背が低かったから、泳がないでつま先立ちでプールを歩き回つた。途中、何回かある男の人とすれ違つたんだけど、その時なんか変な感じがしたんだ。初めは多分気のせいだろうと思って、私は折り返して行つた。でもまたすれ違う時に変な感じがした、さつきと

同じ人とすれ違つた時に。それでやつとこれが気のせいなんかじゃないって気がついた。そんで急に怖くなつて、プールからあがつてさつさと逃げ帰つたんだよ。それで……それで……おしまいなんだけどね」

話は唐突に終わった、千央は何と飯能すべきか迷つた。アンコはあまり辛い体験を語つているようではなかつたため、同情地味たことを言うべきではないような気がしたのだ。

「ふーん、それは嫌だつたね」 千央はアンコの突然の告白に、考える時のように顔をしかめた。それから、困惑もしていた。アンコが痴漢にあつたのは可哀相だし、同情もする。しかしそれをどのくらい表していいものかと、千央は迷つていた。

もしこの話を笑いとばしてほしいのならそつするし、怒つてほしいのなら千央は喜んでそつするだらう。人を罵るのは結構得意だ。しかし、今のところはヒントが少な過ぎる。どちらの場合かが全く分からぬのだ。それにアンコがこのことをもう氣にしてないくらいにふつ切れているのなら、千央の（アンコにとつては）過剰な反応によつて、その時の不快な氣分をまた蒸し返すことになつてしまふのではないだらうか、そして自分は可哀相な目にあつたのだ、と再認識させてしまうのではと思つたのだ。なので千央はこう言つて、とりあえずすぐ答えを出すのは保留した。

「まあねえ」 アンコは感情の読めない顔をして、のんびり答えた。

千央は聞いた。

「このこと、誰かに言つたの？」

「ううん、言つてない。だつてあの時はそんな人がいるなんて知らなかつたから。でも、今度あつたらさ……、前は逃げることしかできなかつたけど」 アンコは大きく息を吸い込んだ。

「その時はきっと、そいつの人生を終わりにしてやるんだ」

「いいね、それ」 千央は賛同した。

変態野郎に対して、千央ならこうするだろつ。大きめの鎌を対象者の首にネックレスのようにかけて、取つ手を持ち、一気に全体重

をかけてその場に座るのだ。力のない子供にはどうしてともよい手だと思う。アンコはさらに続けた。

「会社も首になつて、奥さんも子供も泣くんだよね。最低だね」

千央はここで気がついた。どうやらアンコの言つていた人生を終わりにするの意味は、殺すというわけではなく、警察に通報するという意味だつたらしい。

もしかしたら、自分は少し凶暴なかもしない、と千央は気がついた。被害者のアンコの復讐^{ふくしゆ}に對して、被害にあつていなし千央の意気込みは、過激過ぎるからだ。なのでもう少し優しくなるべきなのかもしない。いや、アンコが被害者だからこそ、引け目になつてゐるのかもしれない。どちらのかは分からぬが……。

しかし、とりあえず千央は言つた。「それくらいじゃ、まだ足りないんじゃないの」と。

これに対し、アンコは首を竦めてこの復讐話は終わった。

あつそうだ、と千央はふと気がついた。警察といえば、この間祭りの途中で遭遇したボヤ騒ぎは一体なんだつたんだろう？ あれは下手したら放火になるのじゃないのか？ ここまで考えたところで、千央はあることをひらめいた。

「ねえアンコ、その怪我はいつしたつて言つてたっけ？」

「言つたじやん、祭りの時だよ」

「細かく言つと、祭りのいつ？」

「火事を消そようと一緒に水を持って階段を上つてたでしょ？ その途中で別れた後すぐだよ」

やつぱり、と千央は思つた。

アンコが本当のことを言つているのなら（そもそもアンコには嘘をつく理由はないはず）、その話には違和感がある。あの日千央たちが火を消すためにのぼつた道は、山のてっぺんまで一本道だつたはずなのだ。しかし、千央たちは運んでいる時も火事が消えた後も、誰ともその道ですれ違つてはいない。それは確かだ。では、アンコにぶつかってきた人物はどこからやつて来たのだろうか？ ……多

分それは途中から森から抜け出したことになるだろう。その人物はなぜそんなことをしたのだろうか？夜中の暗い山に一体何の用があつたのだろうか……？

千央はしばしの間考え込んだ。答えはとっくに出ていたのだけれど。

風呂上がり、千央たちは扇風機の風に当たりながら、あの日の夜階段でぶつかつた人について話し込んでいた。

「で、詳しく述べとどんな人だったの？」 真琴は障子戸に肩を寄せつつ、訊ねた。

「別に、ごく普通の男の人だつたよ」 アンコは答えた。

議題は当然、放火があつた直後、現場の林から急いで立ち去った人物の正体についてであった。議論を始めて間もなく、千央たちは一つのある結論に難なく行き着いていた。

毅に確認したところによると、千央たちがあの日駆け上がつた山の道はやはりあれ一つつきりだそうで、周りは竹林ばかりであるといふ。それも密集した細い竹に邪魔されて、山に慣れた毅でも歩き回るのはかなり困難らしく、子供である毅でもそうなのに、いい歳をした大人が道草するのに選ぶとはとても思えないと言うのだ。

唯一まともな寄り道理由として思い当たるのは、山の中腹にあるお墓へのお参りぐらいだが、それももうほとんど廃墟のように朽ち果ててしまつていて、墓の持ち主も誰なんだかよくわからない状態であるという。

「確かにものすごく怪しいよなあ、そいつ」 慶幾は後ろに重ねてあつた敷布団にバッタリ倒れて言った。

真琴も言った。「ねえ、その人が火事を起こした犯人で、逃げる途中にアンコとぶつかつたんじゃないの？」

「ありうる」 伊鶴は頷く。

「それにさ。どんな物好きがわざわざ夜中、山中の墓にお参りに行

くんだよ。めちゃくちゃ不気味だろ」と毅は付け加えた。

「夜中にヤギの解剖しに出掛けたお前が言つことかよ」慶幾は言つた。

「本当だよ」もう仰向けに寝転んでいた真琴がお腹をひくつかせて笑つた。

千央も笑つた。千央も一応当事者であるだが、それでも可笑しかつたのだ。

「ねえアンコ、そいつってどういう人だつたつけ?」伊鶴は向かいに座つていたアンコに尋ねた。しかしこれは、さつきから散々繰り返されてきた質問なのだ。

「だからもう何回も言つたじゃん」

アンコは少々苛立ちながらも答えた。

「身長170cmくらいで、瘦せても太つてもない。それと年寄りか若いかはわからん」慶幾は少し不平たらしく言つた。「ちやんと覚えといってくれとけばよかつたのに、そうしたら後で搜すもの楽だつたはずだ」

アンコは眉根を寄せ、恐い顔をして慶幾を睨みつけた。

「だつて、あとからこんなに重要ななんて思わなかつたし、それに夜だから暗くてよく見えなかつたのよ」

と、このようにアンコの記憶による犯人像はかなり頼りなかつたのだが、しかし、なぜ放火をしたのか、という動機付けを考えるにあたつて、千央たちはほとんど苦労をしなかつた。なぜならこの数日間近頃周辺で続発していた事件と、この放火を重ねて考えるのは子供の千央たちでもあまりに簡単であった。

「つまり」慶幾は肩をついと竦めて言つた。「公平たちが見た、逃げたの男が犯人つてこと? 今日会つた脱走患者じゃなく……」

「……脱走事件に便乗した、模倣犯つてこと?」真琴が後を引き取つて言つた。

「模倣犯つて? 何なの?」千央は誰にともなく聞いた。

「それはね……」と毅は目をグルリ回した。「今起きてる事件を真

似して、他の奴が別に事件を起こすこと。手口は同じだから当然最初の事件と同一犯だと考えられる訳だから、真似した方の犯人は罪を逃れられる訳。もつともこれは真似する事件の犯人が野放し状態じゃないと意味ないんだけどね

「何で？」アンコは聞いた。

「何でって……、警察に捕まつてたら悪いことできないからでしょと、真琴。

「ああ、そつかあ」

「別の犯人が存在してるって……？」公平はうーん、と唸り声をあげた。「まあその可能性も無きにしもあらずってところかな。あんまり期待しすぎるのもよくないと思う。……でももしかしたら、一連の事件はあの男の人の仕業じゃがないのかかもしれない。生きるために食べ物を盗んだのならまだしも、林に火をつけたり、刃物を盗んだりするのは確かにおかしいよ。彼にとつては派手な事件を起こして注目を向けられることはむしろ避けたいと思うんじゃないかなあ」

千央は頷いた、そして考えていた。いくつかの事件の犯人が別人であつた場合、それはとてつもなく迷惑千万な人物なのではないか、と。動機はどうあれ脱走した彼に放火やら空き巣の罪を被せ反感をもたせることで、結果村人と病院と市長側の対立をより煽り立てることになつてているわけだから。

「いや、それはわからないよ」慶幾は首を振りつつ、にやけ顔で言つた。「あるいは夕方公平が言つていた通り、あの人はまともなふりをしているだけかもしれないしね」

公平はそれを聞いてのけ反り、ハハハと引き攣り笑いをした。

「どちらにしろ、明日にはまた会えるよ。その時にあの男の人へ聞けばいい。いまさら嘘つかないだろ」毅は手をひらつかせながら言った。

今日の帰り際、千央たちは、明日同じ場所でまたあの男に会うこと約束をしていたのだ。夜が明けて、外出できる時間になるまで

後半日以上はあるだろうが、千央は明日彼に会うのが楽しみで、明日が待ち切れなかつた。千央がこんな気分になつたのは久方ぶりだつた。千央は腹に手を当て、満足げに息を吸い込み、やがてうとうとし始めた。

そこへ“早く風呂に入つてくるよつこ”と、言つ園さんの催促の声が部屋まで聞こえてきて、千央はハッと目を覚ました。

「じゃあ私、入つてよつかな」

真琴はそう言つて、タオルと寝巻きを持つて立ち上がつた。そもそもこの話を初める前、彼女は風呂に入らうとしていたのだ。

真琴が部屋を出でてよつとした時、アンコは思い出したように言った。

「あ、そつそつ、真琴。覗きに注意してね、もういなことは思つけど」

「覗き？」真琴は立ち止つて振り返り、顔をしかめた。

「さつきアンコと風呂に入つていた時、窓の外に人の気配がしたんだ」と千央は言った。

「それ、厳密には覗きとは言えないんぢゃないか……？」慶幾は半笑いで言つた。

「でもどっちにしろ、不審者つてことには変わりないぢゃない。こつちが声かけたら、振り返りもせず逃げていつたんだもの。ねえ？ 千央」

うん、と千央は頷いた。

「声かけたのかよ」慶幾は声をあげて笑つた。

「危ないかつたんぢゃないの？それ。不審者を刺激するよつなことして」と公平。

「違うよ。ただ、本当に不審者か確かめたかっただけよ」とアンコ。

「危ないのは同じだる」

アンコはそうかなあ、という顔になつた。

「アンコは変な所で肝が据わつてるんだね」慶幾は呆れて言つた。

「うわー、気持ち悪う」話を聞き終えて、真琴は寒気がするように

腕を組み言った。

「一人でお風呂入んの怖いな、どうしよう。誰か一緒に入ってくれない？」

誰か、と言つても、一緒に入れるのは千央とアンコしかいなかつた。しかし、千央は困つて苦笑いをし、アンコは、私もつお風呂はいいわ、と言つた。

これを受け、毅は提案した。

「じゃ、季生子を誘つて一緒に入つたらどう？」

真琴は納得したように言つた。

「そうね、そうしよう」「うう」

そうして、真琴は部屋を出て行き、足音は廊下を曲がつて消えていった。

布団に倒れ込んでいた伊鶴は言つた。硬そうな黒髪は扇風機の風で揺れている。

「ねえねえ、こいつ言つちゃ悪いんだけど。その犯人つてもしかしたら鷺崎じゃないのか？庭に普段から出入りしてるだろ」「ひう」

「まさか」公平は飛び起き、田を細めて叱るように言つた。「そんなわけないだろ」「うう」

「鷺崎は違うよ」毅は言つた。あくびをしてそんなこと取るに足らない、というように。そして、ふと言つた。

「ああ、そういうえばさ。今思い出したんだけど。あそここの墓には面白い逸話があるんだよね。聞きたい？」

皆は何？という顔をした。

「そこは古い墓だつてのはさつき話しただろ？で、墓石はそのせいかかなりガタがきててさ。台座からずれて隙間ができるた暮がいくつかあつたわけ。そこで僕は見つけたんだ。その墓の隙間の一つに、骨が入つてるのが見えるところがあるってのをね。僕はそれを友達に教えて自慢したんだけど、全然感心してもらえないくてさ。それどころか、墓に骨が入つてるのは普通だから何もすごくないって一蹴されちゃって、以来すっかりこのことは忘れてたよ。真っ暗な

闇の中で、大きな真っ白い骨が浮かび上がった。すくなく綺麗な骨だつたな。異常なほどに白くつて……、白過ぎてむしろ偽物のようにも見えたよ」

「大きな？」千央は一瞬疑問に思つた。

「でも最近、初めてお葬式に行って火葬されたおじさんを見たんだけど、変なんだ。お墓には骨をそのまま入れるわけじゃないんだよね。骨は焼いた後砕くから、普通僕が覗いて見たような大きな骨がお墓に入っているわけがないんだよ。そうだろう？でも僕が見たのは、全く崩れていらない完全な骨だつたんだよ」話の内容がいきなり重大になってきて、千央を始め他の皆は身を乗り出して聞いた。

「じゃあ、それはちゃんと納骨された人の骨じやないかも、ってことか？」

公平は目をきらつかせて言つた。

「まあ……、あるいはそうかもしれない」毅は頷いた。

「骨はそこにまだあるの？」千央は尋ねた。

「さあ、知らないけど」毅は首を横に振りながら言つた。「ずっと行つていないし、今気づいたんだから」

慶幾は喜々として言つた。

「なら、明日山に行く時にお墓へ寄つてみよう。もしそれが本当の人骨なら、正真正銘の殺人事件じゃないか」

「こつわー」アンコは口笛を吹くようにして、口をすぼめて言つた。それからしばらくして毅は突然、髪を摑独り言を言つた。

「僕、髪を切ろうかな」

それを聞いて、公平はまた目を細めていた。

一十五、アリジジ

次の日、青空には朝日が登り、一方千央たちはいくつかの持ち物と食料を持参し、アリジジのいる山へと登つっていた。

ちなみにアリジジとは、まず彼の顔形（とは言え、はつきりとはわからないのだが）や、よれよれの服を着た見た目などがアリババと40人の盗賊に出てくるアリババの挿絵になんとなく似ていると伊鶴が言いはじめ、結果付いたあだ名である。そこからさらに普通に話していると十代に見えるが、思案顔でいると顔中を被う髭のせいか、どこまでも老け込んで見え、それがお爺さんみたい、ヒアンコが指摘し、それでアリババヒジジイで、アリジジという風になった。アリジジは昨日申し合わせた通りに、最初に見つかった落とし穴の側にいて、大人しく座つて待つていた。彼は肘をつき、背後の石に寄り掛かり、大変くつろいだ様子であつた、そして千央たちを見つけると、嬉しそうに手を振つた。

毅は早速持つてきていたオレンジ色のTシャツを渡した。これは毅がパジャマ代わりに着ていたもので、かなり大きめのサイズのものだった。それから毅は彼の汚れた衣服を引き取つた。病院から脱走した時から着たままであるうそのシャツは、汗やら泥やらでとても汚れていた。

アリジジはTシャツを着替え終えると、千央たちが持つていてペットボトルの水を少し手に取り、目の周りを擦つて洗つた。顔に密集して生えた白い毛に水滴がつき、それは太陽の光をうけて、輝いていた。

いくらかさつぱりとした様子のアリジジを見るや、千央たちは早くこの奇妙なことの顛末、といつかなりゆきをことの起こりから今まで、なるたけくわしく話して聞かせようした。

アリジジが疑われ特別警戒されている理由、なぜヤギを解剖したのか、それが悪魔祓いの儀式だと一部で取り上げられたことなどを。

アリジジはそれにとても興味があるよ、と聞く気満々の興味津々の顔をしていた。

「これこそ授業中に生徒が求められる理想の姿なのだろう、アリジジの顔を見て千央はそう思つた。

まず最初に公平が切り出した。「最近、こじらへんで精神病院増設の反対運動があつてたことは知っていますよね?」

「ああ、それは知つてますよ」アリジジは頷いた。

それなら話は速いと、千央たちは安堵した。だがそもそも考えてみれば当事者にある入院患者たちが知らないはずがないのだ。

「でもそれがどうかしたんですか?」アリジジは少し笑つて言った。

「今の僕らに何か関係が?」

それが大有りなのだ。よしば精神病院増設反対運動は千央やアリジジをこのような状況にした原因の大きな一つなのである。

毅は話を始めた。

「いや、その方が都合が良いから、ちょっと聞いてみただけです。えーと、そもそもうちを取材したいって人に声をかけられたのが始めて」

「待つて、違うよ。その前に部屋を貸したことを話さなくちゃ」慶幾は話を遮つた。「反対運動の集会に使う部屋がないというので、一度集会の場として貸したことがあつたんです。その後、大学から取材がきて、除霊するところを撮つて行つたんですけど、それがひどいんです!! その時の映像が出鱈目に利用されちゃつて……」

慶幾は語氣も荒く訴えた。話が本題から少し逸れ始めていたが、しかし間違いなくそれが、この騒動の一つの始まりになつたわけだ。千央は自然と頷いていた。

話の途中だつたが、アリジジはそれを止めた。

「ちょっと待つて、話が飛びすぎて何のことだかわからない。除霊つて……? 何を? 言つているのは反対運動の取材じゃなくて?」

困惑しながら慌てて聞き返すその様子に、皆は少し驚き、思い出した。

まあ、なんということだろ。反対運動の件に気を取られて、靈能者のことはずつかり忘れていた。まずそこから説明しないといけないようだ。なんて面倒臭くまどりつこしいのだろう。しかしそれが普通の感覚であるとこことを、千央はすっかり忘れていたのだつた。

公平は思案しながら言った。

「えーと、僕らの親はある靈能者の信者なんです。僕らは今その靈能者の家が企画した集まりに参加している最中なんですよ」

聞きながら千央はなんだかミジメな気分になつた。

「はあ……？」アリジジは言った。どうやら、のつけから引かれてしまつたようである。

「靈能者、というとアノ靈能者？」

アリジジは聞き、千央たちは頷いた。彼がどのよつな姿の靈能者を思い浮かべたのかはわからないが、千央は別段、補足する気にはなれなかつた。

公平は一本調子で話を再開した。低くてぼそぼそとした話し方であつた、しかし集中していたのか、不思議と聞き漏らすことはなかつた。

「とにかく靈能者のうちは何度か、反対運動の集会に利用されていだんです。それである時、大学で地域宗教学かなんだかを研究しているつて男に声をかけられた。その人は靈能者本人には秘密で人を見る様子を取材したいと言つていて、僕らはその手引きをしたんですね。本当なら紹介が必要なのを省いてやつたりして。そしてその取材からしばらくたつた後、テレビを付けたんです。そしたら……」

公平は唾をごくりと、飲み込んだ。千央も息が詰まる思いだつた。
「そしたらなんでか、靈能者がニュースに出てたんです。紛れも無く、の人たちの取材を受けた時のやつがですよ。その番組ではなぜか、反対運動はこの宗教団体が扇動していることになつてたんです。僕らは本当にびっくりしました」

公平の話しさは唐突な尻切れトンボで終わつた。しかし、それなり

に状況は説明できていたと思う。アリジジは始めのうち、困ったように苦笑いして聞いていた。だがやがて奇妙な表情を維持しつつ、黙りこくれていった。少なくとも良い印象を持つていないのがわかつた。

しばらく眞は沈黙を守っていたのだが、いきなり伊鶴が長い指をひらひらさせてアブラカタブラ…と囁き、魔女のようにヒエッヒエッと笑った。その場違いで唐突な態度とアリジジの深刻気な困惑具合との対比がおかしくて、千央たちは肩を揺すって笑ってしまった。

一笑いの後、アリジジは気を取り直したようすで、切り出した。「話の内容はだいぶ飲み込めましたよ、多分。すごく変で面白い話だとは思う。でも僕が危険だと言われているのにはそれは関係はあるんですか？」

全然無いな、と千央は思つた。公平は言つた。

「いや、あんまりありませんね。山でゴッチの死体が見つかったのはそれから少し経つたあとなんです。近所の人たちはあなたの仕業だと思ったみたいで大騒ぎでした。本当はこいつらが（言いながら、公平は千央と毅を見た）やつてたみたいんですけど、僕もあの時はそう思つていました。なぜなら、最近ここらで空き巣が多発してたんですね。食べ物も盗られたらしいし、他には鎌とかもね……」

いや待つて、と千央は思つた。アリジジがゴッチ解剖の犯人だと疑われていることと、靈能者が反対運動の扇動だと思われていること、この二つの事柄は全く関係が無いとも言えないのだ。というのも、この間見た雑誌にヤギの死体の周りに悪魔祓いの痕跡が云々、というようなことが書いてあつたことを思い出したのだ。しかし、どちらにしても間違つた情報なわけだから、言つてもしようがないだろう。

さて、午後過ぎから千央たちは昨日話していた骨のある墓へと向

かうことになった。話を聞いたアリジジも一緒に行きたがったので、普通の道は使えず、一行は山の中を横切つて行くことになった。遠回りにはなるがアリジジを人目に触れさせるわけにもいかなかつたからだ。

この山は杉の木がとても多く、当然ながら杉は落葉樹なので、地面全体には痩せたりスのしつぽのような枝が降り積もつていた。それも、これでもかといふほど厚く大量にあり、そこを歩く時はまるでスプリングベッドの上を渡つてゐるようだつた。

また、それを突き破るようにしてイネに似た葉や、薺のような植物が生えていた。「近所に出てたドロボウって、やっぱりアリジジだつたの?」

「こんもりとした枯れ草の山を踏まぬように気をつけながら、伊鶴はアリジジにこう尋ねた。そのような場所は居心地が良いのだろうが、千央たちが体重を掛けて乗ると、わずかなすき間から小さなクモが這い出でくるのだつた。

「そうですよ、僕です。生きるために食べ物は必要だつたので。もちろん申し訳ないとは思つてたんですけれど……餓えには勝てなくて」

アリジジは答えながら、首を振つた。質問に対し、アリジジはこのように罪をあつたりと認めたが、後から独り言のように言つた。

「でも、変ですねえ。鎌とかの武器は盗つてないんだけどなあ」そして、ズボンのポケットをおもむろに探りながら急に声を大きくした。「だつて、武器はもう持つているからね」

ワッ、と伊鶴は声をあげて、アリジジの側から逃げ出した。他の子も心底びっくりして、顔を見合わせた。しかし、アリジジがポケットから取り出したのはただの石ころであつた。

「どんな時でもユーモアは忘れずにってね。アハハ」

アリジジは爪のような形をしたその石を取りあげて笑つた。正直、全然冗談になつていないと千央は思った。公平もそう思つたようで、呆れてこう言ったのだった。

「いいやう時、そういうゴーモアはいらないすよ」皆はこれに同意して、一斉に頷いた。伊鶴はそうだそだと言つた。

「アリジジは今まで一本バヒーで生活をしてたんですね
か?」

真琴は細長い枯れ枝を拾つて、それを振りながら聞いた。

「どうして……、山の中をただひたすら迷い歩いて、喉が渴いたら川で水を飲んだり、お腹が空けば食べ物を漁つて、眠くなったら寝て……浮浪者というよりは人間でない、まるで野生生物のような生活でしたね」

アラジジは呟いた。

この“野生生物”という例えはかなり的を得ていると千央は思ったのだった。野生生物といつても肉食のライオンやチータなどではなく、シマウマやキリンなどの草食動物である。なにせアリジジはこの数週の間、村の人たちから狩られる立場にあつたのだから。それに、アリジジの特異な容貌を見ていると益々そう感じる。千央はアリジジの顔にビックタリと張り付いた銀髪の剛毛を見て思つた。すると急に白毛だったゴツチのことが思い出され、なんだかアリジジが今にもメーメーと鳴き出しそうに思えてきたのだった。

「夜とか、一人でいて怖くはなかつた?」

千央は聞いた。真夜中の真っ暗な山で、一人取り残されていることを考えるだけで、千央は恐ろしかつた。それとも、アリジジくらいの年齢になれば暗闇など自然と平気になるものなんだろうか？千央はまた考えていた。けれどもそもそも、千央はアリジジの歳がいくつか知らないのだった。

「この疑問に対し、アリジジは『気楽なよつや』の答えた。

「いや、得には。唯一恐ろしかつたのはいつだつたか、夕方川に近づいて蚊の猛襲を受けた時ぐらいですね。服にも口に入つてくるし。それがあの後しばらくはかゆくてかゆくて、気が狂いそうになりました。薬も無いしね」

そして、不意にアリジジはクスリと笑つた。

「なんて、僕がこんなことを言うのも変な話だけど」

しかし、流石子供と言つべきなのか。ほとんど全員がアリジジの今言つた自虐的発言の意味が分かつていなかつたらしく、慶幾がまたすぐ新たな質問をした。「あの、逃げている最中、人には会いませんでしたか？ずっとあなたを探して随分たくさんの人山に入つていたはずなんだけど」

アリジジは考えるように黒目を上方に向けた。

「うーん。確かに気配は感じてました。盗みに入った時も、山に入る時も。ですがはつきりと姿を見定めたのはあなたたち二人が最初です。あまりに人には会わないものだから、僕はむしろ少し寂しくなつたりして……」

しかし、この運の良さがアリジジを今まで逃げのびさせたのだ。それにしても……、真っ暗な山へ着の身着のまま逃げ出し、長く不便な野生生活に我慢ができるくらい、そんなに精神病院とは嫌なところなのだろうか？千央は以前にも占い師の元に通うくらいなら精神病院の方がまだましだと思った覚えがある。しかし案外とそうではないのかも知れない。千央はそう考えながら歩き続けていた。

その後千央たちは喋りながらいくつか坂を下り、またいくつかの坂を登つた。そのうち周りの木々は杉から竹に変わつていつた。しばらく歩いた後、千央たちの進行方向に竹やぶに紛れて、茶色の竹製の囲いが出現した。

千央たちは転ばないよう気をつけながら柵を乗り越え、墓場に入つていつた。

「こっちだよ」

毅に導かれてアリジジを含む千央たち8人は、骨があるという奥の方まで歩いて行つた。この墓場も他の例にもれず、灰色、または黒っぽい墓石が等間隔に並んでいた。しかしすつかり荒れ果てて、そろつて石のツヤはなくなり、砂ぼこりがついてしまつてゐるのか、

表面は粉を吹いていよいよになっていた。

地面は草がぼうぼうとしてのびっぱなし、端っここの竹やぶに近い場所にあるお墓には枯死した竹が積み重なつていてかなり陰気臭かつた。このようすに幽靈なものアレルギーの千央でさえ、ご先祖のバチが当たるのではないか、と心配したのだった。

「この場所に骨があつたんだ」毅は中ほどまで進んだ角地にある、小さなお墓を指で差し示した。

これは高さが他のものの三分の一ほどしかなく、横に長い墓石と台座だけのもので、四角い石の積まれて作られた台座には乱杭歯のような隙間が空いている。

アンコは早速、地面に膝を付けて屈み込むと、土下座のよつた形でその真つ暗な隙間に顔を近づけて覗き込んだ。アンコの髪は垂れて、地面に着きそうだった。その後ろで千央はワクワクして待つていた。

だが、アンコは言った。「ねえ、見当たらぬけど。骨なんて」

アンコの声は空洞の中に響いて、くぐもって聞こえた。

えー嘘だ、と毅が言い、今度は毅が地面に突っ伏した。そしてこう言った。

「本當だ、なくなつてる、からっぽだ」

それから千央たちは交代で次々と穴を覗き込んだ。

やがて千央の番もきたが、確かに穴の中には少し湿つた地べたがあり、暗闇の中数本の貧弱な雑草が生えるのみで骨のカケラも見つけられなかつた。

「おかしいなあ……」毅は首を傾げた。

「本当にここで間違いないの？」真琴の質問に毅は頷く。

「うん。僕の記憶ではここで一番小さな墓のはずだから。他にないでしょ？こんなに小さいの」

千央は周りを見渡した。毅の言つ通り、これが一番チビなお墓のようだ。

慶幾は言った。「もしかしたら、バクテリアかなにかに分解され

て土に還つたんじゃない？」

「いや、それはいくらなんでも早過ぎだよ」と、アリジジ。「骨はそう簡単に消えないって」

しかし千央はそうだろうか、と思つた。千央は以前、通学路の途中にあるツツジの生け垣の中でスズメの死体を見つけたことがある。見つけてすぐのスズメはとても綺麗で茶色い羽を掛け布団のように広げ、まぶたを眩しそうに細めており、死んですぐに見えた。しかし、数日経つと死体にはすごい数のアリがたかつてあり、もはやスズメではなく黒い鳥のように見えた。数日後には肉どころか羽まで失われており、スズメは全身骨格標本になっていた。このころまでに、千央のスズメに対する興味は大方失せていた。

そして次に千央が気づいた時にはとうとう骨すらどこかに消えてしまい、その場所にはスズメの跡すら残らなかつた。ここまで数週間くらいしかなかつただろう。だから死体というものは案外とすぐ姿を消してしまうものなのではないか、と千央は思ったのであつた。

「そうだ、いいこと考えた」

伊鶴は突然そう言って林の中へ消え、長い手頃なサイズの枝を持つてきた。そしてそれを墓穴へ突つ込み、中の土を力任せに掘り始めた。

「止せよ。墓荒らしだぞ」公平がやんわりとした調子で止めたが、あんまり効果はなく、伊鶴は「地面に埋まっているかも」と言つて構わず掘り進んだ。

伊鶴はしばらくガリガリという音をたてていたが、やがて嬉しそうな声をあげた。彼は何かを掘り当てたようで、それを枝で持ち上げた。

その大きさは大人の握り拳ほどの丸っこい骨は、確かに何かの頭蓋骨のようだつた。目玉が入る一つの穴と逆さ涙型の鼻の穴があり、顎もあつたからだ。だがしかし、明らかに人間の骨ではないのが千央にはわかつた。大きさについては言わずもがなだが、その口の中には鋭い一对の犬歯が生えていたからである。

「これ犬の骨？」アンコは顔を歪め、隙間の向こうで歯を剥いている頭蓋を見ながら言った。

「いや、鼻が短いし、丸いから猫じゃないか」と公平は言った。

「あるいはチワワかも」

言いながら伊鶴はさりに掘り進めていった。「なりに曲がった（おそらく）肋骨が何本も発見され、やがてその大きさから、これはチワワではなく、猫であろうという結論に達した。

「何で、こんなところに猫の骨があるんだろう。この中で死んだのかな？」アンコは不思議そうに言った。

「まさか、こんな小さい入り口に猫が入つていけるわけないよ」伊鶴は言った。「多分、死んでから入れられたんだよ」確かに、墓に出来た隙間は猫の頭でも通るのは無理なくらいに狭かつた。何か通れるとしてもせいぜいネズミくらいだろうと、千央は思った。

「そもそも、これは誰のためのお墓なの？石に何も彫ってはいけない。普通は家族の名前が彫つてあるでしょ。増田家の墓とか、家の墓とかさ、ねえ」

アンコの言う通りだ。それに、一体誰が猫を人間用の墓に埋葬するなんてことをしたんだろうか？ここは人間専用の墓場ではないのか？それとも動物靈園も兼ねているんだろうか？？

とにかく見つかった骨の状態から考えてみると、これは死体を燃やした後の納骨ではなく、死んだまま埋めた埋葬なのだから、どちらにしろ正式に埋葬されたものではなさそうだなと千央は思った。

「うん、まあ、そうかもね」アリジジは大層気のないような返事をし、墓の前に座りこんだ。そして、土台にあつた角の石を一つ掴み、グラグラと左右に揺すり始めた。皆はそれを注意深く見守った。やがて、がりがり、ボリボリという鉱物や砂が擦れる音がして、石は意外とすんなりと土台からはずれた。どうやら墓石はコンクリートで固定されたりはしないらしい。土台はボツカリした穴が開き欠けた虫歯のようになつて、暗い中身が覗いていた。

それからアリジジは、指を開いて熊手のようにすると、中にある

地面の砂を掘り始めた。するとやがてひびの土から一本の骨が現れた。これは弓なりに曲がっていた。

「これは肋骨みたいだ」

アリジジはそれをつまみ上げて、観察しながら言った。
続いて、砂からは溶けかけの白いプラスチックのような凸凹した代物が出て来た。

「これは背骨かな？」公平は覗き込み言った。

「多分ね。でもこつちはもつと小さいから尾の部分だらつ」とアリジジ。

それからしばらく、アリジジは時間をかけて名無しの墓の中から幾つもの骨を探していった。一通り搜索が終わると、骨は頭から尻尾まで猫の形に並べられていった。だいたいの大きさを見たところでは、墓には成猫一匹が眠っていたようだった。

「完璧に出来た」まるで猫の開きのように並べられた骨たちを見てアリジジは言った。

千央には専門の知識はないが、その数の多さからして、おそらくほとんどの骨を集められたようだ。

隣では真琴が眉を寄せて気色悪そうにしていた。一方千央はといふと、猫の骨を見ても特に悪い気分にはならなかつた。普段見慣れている生きた猫とあまりに違つていたし、むしろ大きなアイホールを持つた顔がコミカルで、いつか見かけたゲームだかアニメのヤラレ役に思えてくる。それは骨を糸で繋げたマリオネットのような動きをするのだ。

千央たちは、相談の上また猫を元のところに埋葬することに決め、間もなくそれを実行した。

墓に人骨疑惑事件はこうして終わりを迎えたわけだが、結局あの猫の骨はまだ人間の墓の中にあるのだと思つて、千央はなんだか妙に思つた。

「あーあ、期待はずれだつたわね」帰りがけ、アンコは失望するのと同時に、責めるような声を出した。

「どうして嘘なんかついたんだ。ただの猫の骨じゃないかよ」

毅は言い訳をした。

「小さい頃は確かに人の骨に見えたんだよ」

それに対しても慶幾は、

「あんな牙の生えた人間がいるかよ。幼稚園児だって普通わかるだろ」と言つて責め立てるた。

「もしかしたらこるかもしれないじゃん

「どこに?」「……地球のどつかいさ」

毅はこのような負け惜しみを言い、いじけたようすだった。

「でもホラ」千央は毅をフォローするつもりである骨を一本指差した。

「これは小人だかの骨に見えなくもない」

それは細く真つすぐで小さな足の骨にも見えた。

「まあまあ、その話はもつそのぐらいにして……」アリジジが慶幾を宥める声が聞こえ、ぎゅっと木の葉と土の擦れる音がした。彼はこちらに向き直り、皆に向かつて尋ねた。

「ねえ、さつき取材に来た人に協力したって話してくれましたね。

“協力”って言つと具体的に何をしたのか教えてくれませんか?」

「それは……」慶幾は口ごもりながら言つた。急に毅への攻撃的な口調から方向転換を迫られ、とっさにそうなつたのだ。「受付の場所に忍び込んで客の予約表に名前を書き込んだだけです。あそこは一見さんお断りになつてゐるから」

アンコは横から言つた。「それでカメラで撮つてつて、数日後にテレビでそのとき撮つたものが使われてたの。まるで違うのに反対運動の拠点みたいに言われてた、それに”反対意見の根拠はこのカルト集団の差別偏見思想に下づいてる、そして危険な方に扇動してゐる”って言つてた。でも、それは本当じやないよ」

「うーん、とアリジジは唸つた。「じゃあ、実際のところ靈能者は病院移転についてどういう考え方をもつていたんですか?」

「実際のところ? そう。興味ゼロって感じだったよ。そのことに一つ

いて話すところさえ見ていないよ。ましてや反対運動の先導なんですか、ありえないよ」

「やうだよ」公平は強い調子で言ひ、皆は顔を見合させて頷きあつた。

「じゃあ……、どういうわけでテレビの取材をうながことなつたの? 病院建設に反対でも賛成でもないなら、巻き込まれて面倒になるだけではないですか?」

アリジジの指摘に、皆は黙りこくつてしまつた。これは取材と言つても実際には靈能者側には全く知らされていない、秘密のものなのだ。

「取材の許可は靈能者本人が受けたわけではないんです」

公平が相當言いづらそうしてに切り出した。この公平の態度こそ皆の後悔を代弁するものだつた。

「あの取材は僕たちが勝手にセッティングしたものでした……。取材の何日か前、真が知らない男の人と話しかけられたんですね」

「ああ、君?」

アリジジは真琴の方を見た。

皆はアリジジに自己紹介を済ませていたが、しかしもちらんこの場にいない真のことは知るよしもなかつた。

「いや、その真琴じゃなくて、真はつい最近までここにいた別の子です。けど、ハチに刺されてアレルギーになつて帰つてしまつて」

「ハチアレルギー?」アリジジは顔をしかめて言つた。

「ええ。アナフィラキシー・ショックとかで過呼吸になつて……入院したんですよ」

「それ大変じゃないですか」アリジジは白毛の中に埋まつた黒眉をくつとあげて言つた。

「でももう回復して退院したから大丈夫ですよ」

慶幾は話を元に戻そうとした。

「それで……、とにかくその真が道端で声をかけられたんだよなあ?」

「うん」毅は頷いた、今回の彼はすっかり聞き役に徹していた。おそらく自分の家の話題に肩身がせまいとはいからまでも、なんどなくの遠慮や参加のし辛さを感じているのだろう、千央はそう思つた。

「道端でかい？なんだか怪しい人ですね。よくそんなものを引き入れようと思いましたね」

「あの時は怪しく見えなかつたんですよ。大学でをテーマに研究してゐて言つてたし」公平は早口になり、弁明した。しかしごく、「まあ、今から考えると怪しいですね」と認めた。

「それで靈能者の占いが嘘だと証明してくれるって言われたもんだからさあ」

伊鶴は硬そうな自分の髪をつまみながら言つた。

「嘘？なんの？」

「靈能者がインチキだつてことを証明してくれるという話です」千央は淡々とした調子で話しながら思つていた。そういうえば、毅たちにこのことは話しただろうか？と。佃という人物は千央と公平の会話を聞いて嘘を暴くことを決めたという件については……？？千央は思い出せなかつた。

「私と公平が話していた時にそう言われたんですね」

「あれはすごく面白かつたですよ」

慶幾は眉をしかめ、口元をゆるめながらアリジジに詳しいことを話して聞かせた。

あの約束の日、靈能者の家には若い男女が一人、連れ立つてやってきて“マオくん”について相談をはじめた。最初は女性の早世した弟が二人の子供のことかと思われた。靈能者もそのつもりで会話をしていたのだが、どうも両者の様子が噛み合わない。それもそのはずで、実はマオくんというのは犬で人ではなかつたのだ。臍の緒だの、学校のことだと散々アドバイスをしていた靈能者は赤つ

恥をかいた。

慶幾の言つ通り、あのちぐはぐな面談は相当面白味があった。いつも持つていた靈能者にたいする不満や反抗心、疑念がすっかり解消されたように思えた。

しかしそれは一時期のことで、あのあと数日もしないうちに、その状景が番組で放送され、千央たちが陽氣でいられた時間はいくらい間であった。

だいたいの話を聞き終えて、アリジジは言つた。

「じゃ、君たちは靈能者のことは信じてないんだ？」

「まあそうですよ。それは確かに証明されましたから」

公平は自信あり気に答えた。

「ふうん……じゃあ靈能者の占いが嘘だと分かつたのはある意味その佃、つて人のお陰つてわけなんですね」

アリジジのこの言葉に千央はなんだか動搖し、唇を噛んでしまった。痛いところをつかれたからだ。この出来事で千央たちうち何人かが、靈能者の占いの呪縛から解かれたのは確かなのだ。しかしアリジジにはそういう意図はなかつたらしく、かまわざ言葉を続けた。「でもそのビデオをテレビに売っちゃつたのはさすがに変かもしきませんね。都合が良すぎませんか。その大学の人はテレビ局にコネでもあつたんでしょうかね」

アリジジはしばし考え込んだ。

「さあ……」毅はため息をつくよつに言つた。

公平は毒づいた。「きっと金でも詰まれてなびいたんだろう。金持ちには見えなかつたし。でも腹が立つな」

やつぱりさあ、と真琴は横槍を入れた。

「私ちよつと思つてたんだけど、その人本当に大学の関係者だつたのかなあ？」

「……だつてほとんど時間をおかずにテレビに売つぱらつてるじゃない。あの時、世間にはまだこの反対運動のことは取り上げられていなかつたはず。それなのにあの人は反対運動の集会場に来て、

靈能者のビデオを撮つて……その上それをすぐテレビ局に売るツテがあつたのよ。これはいくらなんでも出来過ぎよ。偶然ではこんな風に需要と供給がピッタリあうことってないと思うの。もしかしたら、あの人は依頼されて来たかあるいははじめから特ダネを狙つたテレビ局の人だつたかもしないつて思うの」

「でも、名刺をくれたでしよう? なら本当に大学生だつたんじゃない? わざわざ嘘を紙に書いて相手に渡すなんて変だよ、用意が周到過ぎる。大人相手にならまだわかるけど……」と慶幾は言つた。これはすでに千央たちの間で何度も交わされていた会話だつたが、アリジジのためにそれがまたなされた。

「僕らも直後は電話でもして聞きたかったんだけど、折角貰つた名刺を無くしちゃつてさ、いくら探しても出てこないんだよ」毅はアリジジに説明するに言い、その声は最後は独り言のよつとなつていた。

「とにかく連絡先さえわかればなあ」真琴は大変惜しそうなよつすで言つた。

「でも肝心の名刺をどこにやつたのか、全然思い出せないよ」と伊鶴。

「誰か間違つて洗濯に出したとかじゃないのか? ポケットとか心当たりのところは見たのか?」公平は慶幾に尋ねた。

「もう思いつくところはとづくに搜したけどなかつたよ、服とかまじ大変だつたよ」

「おまえ、ポケットがたくさんついた服好きだもんなア」

「アア、やれやれ」毅はわざとらしく肩でため息をついた。しかし少し笑顔だつた。

「……やつぱりさ。あの番組はなんか仕組まれていたんじゃないかな? あれで反対運動の勢いが鈍くなつて市長達が得をしたのは事実だらう? 病院賛成派にとつては本当にいいタイミングだつたし……」

公平は早速陰謀論を吹つかけた。千央は、「またその話か」と小さな声で呟いた。

千央自身は、佃が実はテレビ局の人間で身分を大学生と偽るという話は、まあ考えられるかもしないと考えていたが、しかし院長やら市長の差し金というのはあまりにぶつ飛んでいる説であり、正直眉唾ものだと千央は思っていた。

しかしアリジジはしばらく考えた後、それはありえなくもない話だ、と言い、一定の興味を示したようだつた。

千央たちはもといた山に帰り着くと、林の奥でアリジジの寝床を作りはじめた。

まず、ストロー状の枯れ草を敷き詰め、上に毛布をしき床にした。低木からしなる枝を周りから一つにもつてきてまとめ、テントのように麻布をかけて天井にし、少し突き出ている枝には懐中電灯の取っ手を引っ掛けた。最後によく絡まつた茂みで周囲を覆い外から見えないようにした。すると、ちょっとした秘密基地のようなつた。

このころになると、アリジジと皆は大分打ち解けてきて、話もはずんだ。それはアリジジの特異な風貌に慣れてきたというのもあつた。といつてもアリジジの毛むくじゃらな見た目を別段怖がつていわけではない、むしろ墓場への散歩と軽作業の時間を通して、それを特別だと思わなくなつた、というのに近かつた。

正午頃になると、皆は出来立ての寝床に座り、増田家から持つてきたおにぎりを食べた。寝床はそんなに広くはなく、すし詰め状態だつた。距離が近すぎて、お互ひのひざ小僧の匂いがしていった。

おにぎりにかじりつきながら、公平は例の陰謀説についてまた喋りだした。彼が以前から言つていたその口論みの内容は、市長が反対派の内紛を起こさせようとしたというものだつた。

アリジジもその意見に大方肯定的だつたが、しかし、その見解は少し変わつた風であつた。あの反対派＝得体の知れない宗教というイメージの番組作りは、内部分裂を狙つた反対派や信者のみを対象にしたものではなく、市長はもっと大きなところを対象に、訴える

ためのものではないかと言つてゐる。

「もつと大きなところ? それって何?」慶幾は囁くように聞いた。

「それすなわち……」

アリジジの眩きに千央たちはアリジジの方へ頭を寄せた。

「世間の一般大衆のことだよ」

千央はそれを聞いて顔をあげた。皆も驚いたようす、もしくは何がなんだか訳が分からぬといった表情である。

「わかりやすく説明するね」

アリジジはそう言つと、一体どこからか拾つてきたのだろうか、白い棒を使い、砂をガリガリいわせながら地面に図を描きはじめた。まずははじめにアリジジは円の中に（反対派）という文字を書いたものをいくつかつくり、一つに信者、もう一つに市民などと書き込んだ。

「これが反対派の全体像だとする……」

と言いつつその円の脇には風船ガムのような形をしたふきだしをつけて、病院建設反対!!と言わせた。

「で、これが反対派の主張だよね」

「そして、これが今回テレビがやつたことさ」アリジジは地面にあつた丸をふきだしもろとも大きな円で囲んだ。そしてそれにアブナイ宗教団、という注釈をつけた。

「こうやって病院建設反対の意見丸」ことを胡散臭い集団だというイメージの膜で包み込んでしまうんだ。すると外から見るとこの集団から出ているのは皆胡散臭い宗教に基づいた反対意見なんだよ。の中身は實際にはどうでもいいんだ。例えるなら……そうだな、全體が木に覆われた山から煙があがれば、川や岩が燃えてても外からだと木が燃えてるようにならぬか? それと同じさ」

しかし、川や岩が燃えるだろうか? と千央はちょっと首を傾げたが、それにかまわず(といふか、気づいていなかつたようだ)アリジジは続けた。

「これで病院建設に反対する奴ら=カルト教団という印象が反対派

全体にもたれるんだ。信者や市民関係なくね

だけど千央には、テレビの報道のされ方が、市民の認識にすぐに直結するとは思えなかつた。少なくとも今の段階ではそんなに浸透しているとは思えない、当事者・関係者以外、全国のほとんどの視聴者は、気にも留めていないか、数ある「シップの一つとしか思つていないのでないだらうか。

千央は、それをアリジジに言つた。

「うん。僕はむしろ反対と言うと頭のおかしい集団と同列だと思われるというのを反対派に認識させるのが目的じゃないか、と思うんだ」「もちろんしつかり理論武装して主張する人もいるだろ。でもそんな人は少数派だらうし、他の大多数の人にとっては反対意見を言うときの動機の説明が難しくになつてしまつ。補足もなしにただ単に反対だとだけは言えなくなる。意見を言うハードルを高くするんだ。そうして主張する機会を少なくして、反対の数をどんどん減らしていくわけ。反対意見を言うだけでアブナイ呼ばわりされる恐れがあるのなら、そういうの熱意がない限りほとんどの人は黙つちゃうつてことさ。僕でさえそうするね」

簡単に言つと、あちらの味方は不利であると戦況を読ませ、敵を尻込みさせる作戦であろうか。やはり年上といつのは違うのだなと千央は思つた。説明を聞いて、公平は頷いた。「確かに一般の…」
「普通の人らなら、十分及び腰になるだらうな」

千央は名前すら覚えていない市長に対しての怒りがむくむくと湧いてくるのを感じた。とは言え、この説が正しいかはまだ全くわからない。だからこの話に完全に感化されてはいけなく、余地を残しておかなくてはいけなかつた。なので千央は一応怒りを感じておく、という程度に気持ちを留めておいた。

「じゃあ、あの呪いだとか悪魔の儀式だとかのへんな記事もその作戦の内の一つなのかしら?」アンコは上を見て眉をしかめながら言った。

その言葉は千央たちに以前読んだゴッちについての珍妙な記事の

ことを思い出させた。どこかの魔術研究家だというおじさん（おそらく）が、ゴッちは呪いをかけるための生贊にされたのだという説を主張しているものであった。

アリジジはその話の詳細を聞くと、驚いたのか茶を飲みそこねて、むせだした。あんまり咳込むので真琴が背中を摩つてやる始末だった。しかし、しばらくして喉のつかえはとれ、一息いれるとアリジジは

「そんな話があつたのかい」

と言つてきた。それから、

「是非とも見たいな、その記事。面白そう」とも言つた。

もちろん千央たちはアリジジの頼みを快諾した。しかし、一つ重大な問題があつた。その記事の載つていた雑誌『エモ・モザイク』はまだ家にあるのかしらということだ。

「出来たらそうしたいけど、捨てられてもう残つてないかも知れないよ」

毅は顎に手を当てて考えながら言つた。

「またそれかよ」

慶幾は、突つ込んだ。慶幾はあるの名刺のことを見つてているのだった。

アリジジは言つた。「とにかく、その佃つて人の連絡先が分かれば色々と事情が聞けるかもしない……。まず、その最初に会つた真つて子に詳しい話が聞きたいね」

それに対して千央は答えた。

「じゃあ、今日帰つたら様子を伺いがてら真に電話して聞いてみましょうか？」

アリジジは頷き、そして頼んできた。「うん。でも出来たら、僕も立ち会いたいんだ」

「わかりました。なら明日、電話を持つてきますね。今から取りに行くには時間が遅いから……」と、毅は言つ。

確かに、千央たちの秘密基地には西日がさし、太陽はゆつくりと

山の陰へと引き寄せられていたのだ。

慶幾はこう言った。「けどさ。今さら新しいヒントが見つかるとは思えないんだけど……もう何回も話しだら？」

「そうかもしれないね。だけど、とりあえずね」

アリジジは笑いながら、顎をぱりぱりと搔いて言った。
「藁をも掻む思いなのさ」

× × × × × × × ×

毅は親指を使い素早く、リズミカルにプッシュホンを押した。

プルルル……、プルルル……、ブツツ……。

長い呼出しどと一瞬切れたような音の後、受話器からは明るい女性の声が聞こえてきた。その声からして、真のお母さんが電話に出たらしい。

『もしもし、あら……増田さんとの……、こちらでお久しぶりです。元気だつた? 夏バテはしていない? ……そつ。……うん、真でしよう? 待つて、今代わるからね……』

千央は増田家から持ってきた白い子機電話に耳を近付けた。電話は一応ハンズフリーになつていって声は周りの人間に問題なく聞こえていたのだが、真が電話にでてくるというので。電話口ではしばらくガサゴソという音がしていたが、とうとう千央たちは懐かしい声を聞くことが出来た。

『もしもし、毅かい? 久しぶり、元気だつた? 鮎は? ……僕はまあまあ元気。……何? ハチアレルギー? それはもうとっくに大丈夫だよ、知つてるでしょうが。うん。……ところで、今日はまた何で急に電話なんかくれたの? ……佃さんの名刺が? ……まだ探していたの……いい加減諦めたらどう?』

おそらく宿泊会を途中で抜けた真には、事の重大さが十分わかっていないのだろう。真は千央たちがアリジジを見つけたのを知らないし、もしかしたらゴッヂの死体が見つかることも知らないかもしない。ゴッヂは一部で逃亡患者の獵奇的な犯行の犠牲者だと思われている。しかし、其の実ゴッヂの墓を暴いたのは千央た

ちなのだが……。

「それが僕らを、どうしても諦めきれなくて。佃さんに電話するなりして詳しく事情を聞きたいんだよ。だから皆で記憶をたどって名刺を探そうとしたんだけど、結局、見つからなかつた。それで真のことを思い出したんだ。その時のことでもう一度よく思い出してくれないか。もう、真だけが最後の頼みの綱なんだよ」

『……それはいいんだけど。でも何度も言つたように、今さら新しい話はでないよ。あの時名刺を皆に回した後、それを誰が最後持つてたのかなんて僕、全ツ然覚えていないよ』

「それをさー、腦みそ搾り出すとかしてなんとか思い出してみてよ」毅は急いで言つた。

『無理言うなよ』真は冷たく言つた。当然である。『忘れたもんは忘れたんだ』

そこで、アリジジは隣にいる毅にコソリと囁いた。

「なら、声をかけられた時の話をはじめの方から話すよう言つてくれ」

毅は分かりましたといった調子で頷き、言つた。

「……じゃあさ、まず最初に会つた時から順番に話してくれないか？それで思い出すかもしいから」

毅は真を説き伏せるように言つた。

『うーん。OK、いいよ。分かった』

真は喋りはじめた。

『あの時は確かスーパーに行つた帰りだつたよね？皆は漕ぐのが速くて、僕は少し遅れて最後尾のところにいた。それで遅れて曲がり角に差し掛かつた時、人の影が見えてきたわけ、その人が佃さんね。僕は急いでいたけど、の人んどつかで見たことあるなあと思つてちよつとだけスピードを緩めたんだ』

『佃さんを以前に見たことがあるつて？一体……』

毅は勇んで聞いた。しかし慶幾と真琴が横から口をはさんだ。

「どこで？」

「まさか、知り合いだったの？」

『やあ。今の声は慶幾と真琴？いや、知り合いなんかじゃなくてさ。実はあの何日か前にも一度だけ見かけてたんだ。ほら、あのマンガを読みによく行くコンビニの近くの道路。そこで佃さんは車の運転席で地図を広げて見てた。僕は多分道に迷つてコンビニに道を聞きにきてるんだろうと思って、特別その時は気にしなかった。でも、そしたらまたあの人人がいるだろう？僕は、いつまで迷つてるんだつていよいよ変に思つて、自転車をとめてジッと見たんだ。そしたら佃さんとバッタリ目があつちゃつてさ、僕に話かけてきたんだよ』

真は矢継ぎ早に新事実を並べ立てた。

それを聞いて千央は推測した。もし本当に佃さんが増田家までの道のりを本気で迷つていたのだとしたら、彼は本当に飛び込み取材にきていたのだ。だつて市長の差し金で取材に行くのに、対象者の住所を知らないなんて、そんなこと有り得るのだろうか？

「じゃあ、佃さんは何度もここに来ていたというわけか」

公平は言った。

『よお公平か。うん、多分ね。あるいは何日か滞在していたのかもしない。だつて見かけた日の間隔が短すぎるから。めんどくさいだろ、こんな山奥に毎日通うのは』

「でも、どこで寝るんだよ。この辺にホテルなんてないだろ」

『車の中で寝ればいいじゃないか』

「ああそつか」公平は合点がいった顔をした。

『いや、ホテルじゃないけど宿泊施設ならあるよ』毅は言った。『僕は行つたことないけど、ここから少し下つたところに一つだけ。そこに泊まつっていたのかもね』

「こんな辺境に一体だれが泊まりに来るんだよ。お客様は来るのか」「詳しくはわからないけど、社会保健施設らしい。スポーツとかも出来るみたいだよ」

『何でどこ？』

『確かラ・パージュだかア・ニュールだか……なんかヘンな外国語

みたいな名前だつたよね」

毅は自信なさげに慶幾に同意を求めた。

「うん。ラパージュだつたよ。あそこテニスコートがあるでしょ？僕、何度かそこにテニスしに行つたことがあるよ」慶幾は頷いた。

『そこに行けば、佃さんの連絡先がわかるかもしけないな。普通、ホテルとかに泊まるときは連絡先を書かされるだろ？住所とか電話番号とか……』

「でもホテルの人が簡単に教えてくれるかしら？」と真琴。

「子供相手なら教えてくれるかも」と伊鶴。

「いや、いくらなんでもそれは無理でしょう。クビになっちゃう」とアン。

「その辺なら、僕にちよつと考えがある」とアリジジ。

『今のはだれ？』

真が言つたので、アリジジは慌てて口をつぐんだ。

真にはアリジジのことを話していなかつた。それは、彼を仲間外れにしようと思つてのことではない。真は今現在この場にはいない、だから」との重大さが分からず、話をばらしてしまつかもしぬなつた。また申告さが理解できても、余計な苦労を負うことになる。病み上がりでせつかく日常生活に戻つた真に、それらせたくはなかつた。だからこれは単なる仲間外れではないのだ。むしろ千央は出来ることなら、眞の立場と取つて代わりたいくらいに思つていた。その方が気が楽になるであろうから……。

さて、例によつて増田家には自転車が3台しかなかつた。だからホテル『ラ・パージュ』まで行くのは3人までに限られていた。なので問題の箇所へ向かう影は毅、千央、真琴の物のみであつた。一同はセミの声を右耳で聞きながら生暖かい風をうけて、坂をどんどん下つていつた。

『ラ・パージュ』とはほとんど山のふもとにある灰色と小豆色の建物だつた。ここは町でただ一つのホテルと聞いたが、実際は自治

体が運営する社会福祉宿泊施設なのだった。千央たちは建物の隅に自転車を留めると、大きな自動ドアから中へ入った。中はクーラーがよく効いていて涼しく、薄暗かつた、ドアが開いたとたん冷たい空気が吹き出してきて一時千央の肌に鳥肌を立たせた。千央は周りを見渡したが、他に客はないようだつた。

ところで千央には普通のホテルとの違いが良く分からなく、唯一気づいたのは内装がとても地味なのと（しかし実際このくらい地味なホテルがないこともないだろう）、スポーツ施設と風呂の入口がフロントの真横に作つてあるくらいだろうか。フロントには女人が待機していて、制服らしい桃色のベストと半袖のシャツを着ていた。

隣の敷地には健康増進の為のスポーツクラブやテニスコートが併設してあり、ミーティングに使われる大部屋も、その中におまけのようにして宿泊部屋が存在する。

この情報は、フロア脇に置いてあつたパンフレットを千央がとりあえず勝手に要約してみたものだ。さらにパンフレットの写真を良く見てみると、そもそもこの施設はホテルとは名乗っているわけではないようだつた、高くあがつた看板には『健康増進施設 ラ・パージュ』とだけ書いてあつた。

千央たちは床にひかれたベージュのカーペットを渡り、フロントまで行つた。

真琴は受け付け嬢に近づくと全く躊躇うこともなく話しかけた。

「すいません、ちょっと……、お尋ねしたいんですけど」「はい、どうなさいましたか？」

見た目よりも幾分か若い声で、彼女は答えた。受け付けの机には松笠で作ったフクロウとガラス製の犬が飾つてあつた。

「えーっと、だいたい週間かな？ それくらい前に大学生ぐらいの二人組がここに泊まつてませんでしたか？」

お姉さんは困ったように眉根を寄せた。

「さあ……、それは分かりませんけど……。どうかなさつたん

ですか？」

「あの、その大学生くらいの人たちが家に来て、忘れ物をしていつたので、……割と高価なものだらうし、困つてるかもしねないと思つて」

毅はそう言つて、用意していた木綿袋から「デジタルカメラを取り出した。

「でも連絡しようにも名前すらわからないし、それでここに泊まつてるつて言つてたのを思い出して、よかつたらその人の連絡先を教えてほしいんです」

お姉さんはなるほどという顔をした。佃さんの名前を伏せたのは、彼が偽の名前を使つていた時のことと考えてのことだ。もし名前が違つていいたら選別の候補から外れてしまうだらうから。

「ああ、それなら……とりあえず名簿を調べてみますね。ちょっと待つて下さいね」

お姉さんは立ち上がり、奥の部屋に消えた。恐らくそこに書類棚があるのだろう。

しばらくしてお姉さんがファイルを抱えて部屋に戻ってきた。そして椅子に座り、残念そうに言つた。「調べてみたけど、それらしい年齢の人はいないみたいですね、一人で泊まつていった人は何人かいるようですけど」毅は食い下がつた。

「見た目は痩せ型で……よく田に焼けた人なんですけど」

「さあ……、顔や背格好までは覚えていなくつて」

「そうですか……、ありがとうございました」

「力になれなくてごめんなさいね」

受け付けのお姉さんは済まなそうに言つた。

どうやら佃さんの泊まったところはここではないようだ。毅は礼を言い、千央も頭を下げて帰ろうとした。しかし真琴は言つた。

「あのー、その二人組は同室じやなくて別々の部屋に泊まつていると思うんですが……それでもいませんか？」

お姉さんは真琴の言つたことを聞いて、しばらく考へるような顔

をした後、また利用者名簿を調べてくれた。しばらくすると、宿泊していた時期と年齢が合うのはこの一人だけだということが分かった。

・佃 憲人 26歳

・実ハルナ 21歳

運のいいことに、この施設の利用者はたいていが団体でくる中年か、もしくは部活合宿で来る高校生なので、それだけでかなり絞り込むことができたようなのだ。早速千央たちは、喜び勇んで連絡先を教えてもらおうとしたが、規則か何かで個人情報は第三者に知らせることはできないと言われた。なのでまず、ホテルから連絡し、確認がこれ次第、その人に連絡をしてもらうという話になつた。ホテルの人にそう言われては千央たちももう食い下がる余地はなく、受け付けの人から渡されたメモ紙に増田家の連絡先を書きこんでおいた。

「ちゃんと折り返し連絡があるかしら」真琴は自転車のストッパーを外しながら、心配そうに例の木綿袋を見た。「覚えのないカメラの忘れ物で」

実はこのデジタルカメラ、佃さんが忘れていった物ではなかつた。本当の持ち主は真琴で、あわよくばホテルの人から情報を引き出すための小道具だつたのだ。これはアリジジの案で、うまくいけば怪しまれずに連絡先を聞き出せるだらうという話だつた。

「大丈夫だよ。僕たちの名前を残しておいたんだから、相手も気になるはず」毅は言った。

「利用名簿にも佃憲人って書いてたつてことはやつぱりあれが本名だつたつてことだね」

「いや、そもそも名簿の名前からして嘘を書いてるかもしない。

どうせバレないだろうしさ」と千央。

「確かに名前も住所も偽物だという可能性もあるよね。もしそうだったら、もう本当に分からなくなっちゃうわね」

真琴はペダルを踏み出しながら言つた。千央は彼女を追いかけながら聞いた。

「ねえ、なんで男と女の一人だ、って言つたら分かつたんだろうか」「だつて二人組の学生で、男がカメラを忘れて行つたつて聞いたら、普通一人とも男だと考えるんじゃないかと思つてさ」

「ふーん、まあ言われてみるとそうかも」千央は口の中を舐めながら言つた。帰りは全部上り坂なのを思うと、憂鬱だった。

「暑いー、どうかで休憩しようよー」

走り出してすぐ、千央は弱音を吐いた。

太陽は千央たちの肌を真上から容赦なく焼いたし、山にはないアスファルトの強烈な照り返しのせいで汗はだらだら、全く情けないことに千央はもうバテバテだった。それを聞いて毅は、本当の道から逸れた小さな横道を指差した。

「じゃあ、あそこの方に入ったところに駄菓子屋があるから、飲み物を買おう」

こう言つて振り返つた毅は、下まぶたにまで大汗をかいていた。

それから千央たちは駄菓子屋に寄り、なんの謂れがあつてそんなに邪険にするんだ、と言いたいくらい無愛想な店番のおばちゃん（毅の話では、彼女はいつもこうらしいので特に気にすることではないらしい）からそれぞれジュースを買った。三人は店の前にあつたベンチに座つてジュースを飲み、汗がひくのをまつた。

店の前はくすんだオレンジと緑縞のテントが張つてあり、日陰になつていて、外は眩しく露出を強くしたカメラのように全体が白色に見えていた。わずかに植物の緑や茶、空の青が見えるのみだった。一部ではオレンジ色の明かりがチラチラと光つた。さらに鳥が飛んできたが、薄い二つのシミにしか見えなかつた。

さらに辺り一帯には長い芝に似た植物が生えていた。太陽の光にあたり椿のような艶で強烈に輝いて見えて、奥の方は蜃気楼のように歪んでいた。きっと、向こう側の空気は濃厚な草いきれで満ちているのだろう。

だが、千央の周りでは十分に涼しい風が過ぎ去つていっていた。隣では真琴がひくつとしゃっくりをし、胸をとんとんと叩いていた。千央がボーッとしていると、また赤いチラチラが視界に入つてくる。これどこかで見たことあるなあ、と千央が朦朧とした頭で思つた途端、横で真琴が鋭い声で「あれ、なんか燃えてるんじゃない? 大丈夫?」と言つた。

真琴の視線の先を見ると、まさにさっきまで赤の布切れのように見えていた所から、黒煙がモクモクとあがつてゐるのだった。三人が駆け寄つてみると、ゴミ置場に置かれた漫画雑誌が派手に燃え盛つていた。それを見た毅はすぐに踵をかえすと、店の方へ慌てて走つて行つた。しかし燃えているのが薄い紙である上、コンクリート製の壁で囲われているのでどこにも燃え移らず延焼がなかつたせいか、一瞬爆発するように燃えたあと何もせぬうちに炎はみる見る鎮静化し始め、毅が大騒ぎで店のおばちゃんを引っ張り出してきた頃には完全に消えてしまつていた。

遅れてやつておばちゃんは後ろから首を伸ばして今まさに炎無しの現場を覗き込むと、おもむろに自分の拳固を振り上げ、ゼイゼイしながら毅の肩を一発ぶん殴つた。なんとも鈍い痛そうな音がした。毅は「はわ！」と言い、うずくまつてしまつた。

おばちゃんは今度は平手で毅を叩きながら切れ切れに言い、噎せだした。

「年寄りを……、無駄に……、走らすんじや……、ないよッ……ガホツ」

「すいません、すいません」

毅は座つたまま後退りして謝つていた。

一方千央と真琴はというと、氣の毒そうにその光景を見下ろすの

みであつた。

一十七、鼠と猫と特製ボブリ

ホテルへ行つた翌日、アリジジは青のバケツに入つたまな板、塩、果物用ナイフを千央たちから受け取つた。

これはアリジジは昨日のうちに所望していたもので、まな板は余つた板切れを適當な長さに切つたままごと用。刃物は本当は牛刀を持つて行きたかったのだが、それではあまりに大袈裟すぎ、という意見を受けて、ほとんど使われていない小さな果物用ナイフを毅が砥石を使い、切れ味鋭く磨いた物だった。

それからアリジジは千央たちを畠まで走らせ、タマネギを幾つか採つて来させた。一方自分は山の中を散策し、色々な野花を摘んできた。

アリジジはナイフを持つて、タマネギの上下を切り落とした。それから皮を向き、格子状に切り目を入れて、1cmほどの粗微塵にした。同じように他の材料も刻むと、手元にあつた塩袋を開封した。これはなんの変哲もないただの食塩であり、増田家の台所から失敬した物だった。

アリジジは、まずプラスティックバケツに薄く塩をしくと、その上からタマネギを乗せ、さらに塩、またその上に野花、また塩、タマネギという順で積み重ねていった。横から見てみたら、塩と野花、タマネギの色が横縞な層になる感じだ。最後にまた塩をまぶし、それから、ツバキの葉を並べて蓋をしていった。

材料が塩にまみれた状態で、なんだか漬物でも作つてゐるかのようだが、もちろん食べるため作つてゐるのではなかつた。実はこれは住人を騙すために使う、小道具の一つなのだ。

ここ最近、近所で空き巣やボヤ火事（昨日のものも含めて）がやたらに増えているという話を千央たちから聞いていたアリジジはあることを以前から推理し、話していた。

「もしかしたら、これらの事件は反対派が運動を有利にするために

空き巣とか放火を装つていてるんじゃないかしら」

考えてみると、この件では唯一アリジジ一人だけが犯人はアリジジ（自分）ではないと知っていた人なのだから、他の犯人説を思い至つても全く不思議じゃない。近所ではこれらの事件はすっかり病院からの脱走者の仕業ということになつていていたが、アリジジは犯人が他の誰かであると前から核心を持つていたのだ。アリジジ本人が疑われていたのだから、それは分かるのが当たり前といえば当たり前だ。だけれど、村全体で集団詐欺を働いているというのは、あまりに突拍子もない話だし、それに住民の人達のとった行動、病院の増設反対運動や、山の中を追いかけ回されたことを恨みに思つて、そう考へているのでは？という疑念があつたのだ。

これを千央が指摘すると、アリジジは答えた。

「いや、僕は反対運動だけで住民の人達を恨んでそう思つたわけじゃない。ただ住民たちの増設に対する反感から考へると、可能性が一番あると思つただけ。別に犯人が住民たちじゃなくても構わないんだ。僕は単に濡れ衣を着せ続けている奴が憎たらしいんだよ。あと、一緒になつて騒いでる奴らもね。これはいらないかも知れないけど、とにかく、こんな不名誉を受け続けるのはもう堪えられないんだ。だから一刻も早く犯人を探して辞めさせることにしたんだ」

慶幾は言つ。「犯人探しなんてさあ……、どうやってやるの？ 待ち伏せでもする？」

「うん、それはちゃんと考へてあるよ。僕の無罪を知つていてる人は他にもいるはずだろ。それは紛れも無い本当の犯人さんさ。もしだよ、見に覚えのない同じような事件が起こりだしたら本当の犯人どう思う？きっと混乱しだすはず。それで騒ぎが収まるのならいい」

要は模倣犯の犯行にオリジナルが割り込んでくるという、小説めいた展開にしたいらしい。

自分はこれから放火や空き巣（空き巣はしていたようだが）をしますという旨の発言を今さつきアリジジはしたのだが、それを無視して毅は聞いた。

「でももし、それをやっても收まらなかつたらどうするんです？」

この質問にアリジジは少々諦めモードになつて答えた。

「收まらなかつたら……、それはどうしようもないねえ」 とりあえず処処の問題は置いておくとして、千央は思つていた。これが個人の犯行ではなく集団の犯行でその上、計画的なものではなかつた場合はどうなるのだろうか？と。もし暗黙の了解で個々にやられたしたものであつたら、他の事案と差別がなされず、結局ただの一協力者で終わつてしまふ気がするのだけれど……。

「でもそれと、この塩漬けは関係があるの？一体何に使うの？」

アンコはバケツを指差して言つた。

「これも無意味じやない。使い道はちゃんと考へてあるよ」

アリジジはにっこりと笑つた。

「ほら、以前ヤギの死体が近くで発見されたつていう事件があつたろ？何かの記事に載つたやつ」

「ああ、ゴッちのやつですね」と公平。

「そつ。あれは悪魔の儀式がどうとかつて言われてたよね。もちろん実際は違つけど」

そう言つてアリジジは毅と千央を見てきたので千央は多少の罪悪感を感じて首をちょっと竦めた。この一人がゴッちの死体を墓から掘り出し、すき放題バラバラにしてそのまま帰つてしまい、それを見つけた住民たちが大騒ぎしたというのがこの事件の真相であつた。しかし千央は言い訳をしたかった。別にめんべくさいという理由でゴッちをそのまま置いてきたわけではないのだと、あの時はゴッちの腹から変な影が飛び出して、こちらは逃げるのが精一杯であつた。 「あれの真似事をして、悪魔の儀式っぽくやって、いかにもあのヤギ殺しがまだ活動しているように見せ掛けるわけさ。あのこの真相を知る人は君たちと僕ぐらいしかいないからね、好都合なんだよ」

この発言で、アリジジは犯罪を犯すつもりはないようだとわかつたので、千央は一旦はホッとした。しかし、またすぐ別の問題が千

央の頭に浮かんできた。

「でもそれだと動物の死体が必要ですよね。一体どこで都合するつもりですか？スーパー・マーケットで鳥の足でも買つてくるんですか？」

「まさかとは思うけど、どつかの家のヤギを殺してこいとか言わないよね……」千央の後に真琴はこれ以上ないほど顔をしかめて聞いた。

アリジジはハハハと笑つて、首を振つた。

「いや、まさか……、もちろん都合よく何かの死体があればいいけど、そんなもの簡単に見つけられないだる。ただそれっぽく演出できればいいんだよ。だからこれを作ったんだ。これを振り撒けばそれらしくなるんじゃないか？」

「そうかあ……？」と伊鶴は言った。

どうやら、この植物類の塩漬けは胡散臭い呪術風のアイテムとして使われるらしかった。とりあえず、近所中に死体をばらまいて回ることにはならなそうなので、千央は安心したのだった。

それからアリジジは紙一枚とペンを毅から借り、このよつなメモを作つた。

・必要なもの

・ローソク

・乾燥剤

・布(白っぽいもの)

・麻ひも

アリジジはそれを渡しながら言つた。「あの塩漬けが出来て、これらが揃つたらいつでも作戦決行できるよ」

毅はメモを十字に折りたたんで、ポケットに入れてた。

その毅の横で慶幾はぼそりと呟いた。

「もしかしたら……僕、近いうちに死体を幾つか用意できるかもしない」

これに、皆は驚き目を見張つた。公平は少しおどけた調子で言った。

「何？ 近々大量虐殺の予定もあるのかよ？」

驚いたことにまた慶幾は頷き、言つた。

「まあな。遠からず」

慶幾の言つ“大量虐殺”については最初、意味が分からなかつた。しかし、話を聞くにつれて、それが特別異常でも大事件でもないことに眞氣づくのだった。

慶幾の話はこのようなものだった。

先日、台所の戸棚から茶色い羽虫が次々と飛びだすのを見て不審に思つた慶幾のお姉さんは戸棚を点検してみて驚愕した。保管しておいた米に大量の羽虫が発生していたのだ。

慶幾の家は農家で、家族が食べるほど一年分の米を大量に保存していた。米はスーパーで売つてる密閉されたビニールパックの袋ではなく、丈夫な紙の袋に入つていた。そのため密封性があんまり良くなく、虫の出入りが自由状態で卵産み放題だつたのだろう。たくさんの羽虫はそれぞれ身体を震わせ、今にも飛び立たんとしていた。それを呆然と眺めながらお姉さんはあることを思い出して青ざめた。倉庫には備蓄された米がまだ大量にあつたのだ。

倉庫へ向かつたお姉さんは不幸にも、また別のことでも驚くことに

なつた。倉庫の米に虫は湧いていなかつたが、床に鼠のフンが散乱しているのを見つけたのだ。そして米袋の一部は底がすでに破れており、米が流れ出てしまつていた。このままにしておいては、鼠に米袋を全て食ひ荒らされてしまうだろう。そこで、お姉さんは殺鼠剤を使って鼠を退治することにした。

「ちょっと待て、確かに前んち猫いなかつたっけか？そいつに捕らせりやいいじやん」毅は慶幾の話を遮つた。

「いるよ。いるけど、本当にいるだけなんだ。何の役にも立たないお飾り猫だよ」

“お飾り猫”って何？と千央は疑問に思つたが、慶幾はまた話しが出した。

お姉さんは殺鼠剤を鼠の通り道にばらまいておいた。それから、忘れずに飼い猫を家の中へ入れた。猫が間違つて毒餌を食べないようにするためだ。

慶幾は言った。

「うちの馬鹿ネコは食ひ意地がはつてて何でも食いやがるからな」しかし、結局鼠を退治することはできなかつた。鼠が少ししか毒餌を食べなかつたのだ、使つた殺鼠剤は毒が徐々に蓄積されて効くタイプだつたので、少し食べただけでは殺せないらしい。もしかしたら別の場所で死んでいるということも考えられたが、お祖父さんが倉庫の壁裏に鼠が走り回る音を聞いたらしく、それはなさそうだった。

そこで慶幾の家は古典的な方法に乗り換えることにした。ねずみ捕りである。

これは金属の網で出来た長四角の籠で、餌を置いて鼠を誘い出す。だが入り口が鼠返しになつていて、もし中へ鼠が入つたら外へは出られなくなるのだつた。慶幾のお姉さんはねずみ捕りの中に小さく切つたカボチャを入れ、鼠の通りそうな道に仕掛けた。

ねずみ捕り器にはこのカゴ式の他に餌にふれると籠がはずれるバネ式がある。慶幾の家では過去に一度だけ、このバネ式が使われた

ことがあつたらしいのだが、鼠の後処理が恐ろしく不快で、この方法は早々に廃止されたそうだ。

「あれは本当氣持ち悪いよ。潰れた鼠が張り付いててさ、知らずに庭で見つけた時はびっくりしたなあ。誰も触りたがらなくて、機械はほとんど使い捨てになつたな」慶幾は頷きながら言つた。「またにかくさ、そういう訳。捕まえた鼠をこの計画に使えるかもしねいだろ」

「でもさ、カゴで捕まえたら鼠は生きたままじゃない? どうするの?」アンコは誰にともなく聞いた。

公平は首を傾げて言つた。「知らないけど、多分水に漬けて殺すんじやないかなあ?」

「なんとも氣が進まない仕事だらうな」と毅。

しかし、バネ式はグロい死体を片付けなきやいけないわけだし、どつちにじろその大変さはあまり差がないようだ、と千央は思つた。

数日後、慶幾からとうとう鼠を捕獲できた、との連絡があり、千央たちは慶幾の家へ出掛けた。以前一度行つたことのある山の麓にある大きな家だ。慶幾は千央たちを前庭まで誘導した、

「今朝見つけたばっかりだよ」

そう言い、慶幾は草むらから一つカゴ式ねずみ捕りを持ち上げた。ねずみ捕り器はハムスター何かを飼うケージに似ていたが、サイズはもつと小さく、カマボコのような形状をしていた。

一番の違いはカゴの片側にはにらつぱ型に作られた針がねで、外側にある大きな方から入つたら最後、先細りになつている内側からは針がねが邪魔して出られないのだつた。

さて、鼻の尖つた凶悪なドブネズミが入つていいたらどうしようかと思っていた千央だつたが、中にいる物の姿を見てホッとした。そこには一匹のちっちゃな鼠が入つていた。

「あらら、可愛い」と真琴は言つた。

それは茶色の毛皮に長細いしっぽを持つた、ハツカネズミだった。子鼠は捕獲されたばかりなためかとても元気があり、チューチュー鳴きながら駆け回っていた。そのためにカゴは頻繁にぐらぐら揺れた。

慶幾は持つていたパンをちぎって鼠にやつた、鼻をひくつかせパンぐずを受けとった子鼠は、それをクルクル回すと小さな顎を忙しく動かしてお食事をはじめた。千央たち皆がそれを眺めていると、伊鶴が声をあげた。

「あ、あそこ。猫が鼠を狙つてるぞ」

見ると確かに千央たちから五、六メートル離れた生垣の側に一匹の猫がいた。鼠の匂いが猫を引き寄せたのだろうか、しつぽを振りながらこちらをジッと眺めていた。

「あれが、うちの猫のナガだよ」

慶幾は言った。

さては以前慶幾が言つていた、鼠を全く捕らない“お飾り猫”だな、千央が見ていると、ナガは柵から飛び降り、皆の方へ悠々歩いて来た。鼠に興味を示すかなと思つたが噂通り、小さいお友達には全く興味がもてないようすで素通り、それどころか慶幾の持つているパンを欲しがりはじめた。

長毛の三毛猫であるナガは、まんまとパンを獲得すると、その場でがつつきはじめた。慶幾はちょっと憎たらしそうに言つた。

「猫なら猫らしく鼠を狙えよ。全く、急け者のこいつのせいで、うちは鼠増え放題の鼠天国状態だよ」

だが、側にあつた雨水を貯めた甕を見た千央は子鼠の残酷な運命思い出し、ここはとうてい鼠天国とは言えない、と思つたのだった。パンを食べ、満腹したナガは寝転がり腹を見せ慶幾に腹を撫でてもらっていた。

それからしばらくの後、千央たちは鼠入りのカゴを持って山ヘアリジジに会いに行つた。アリジジはいつもの場所にいたが、こちら

に背を向けて何か作業をしていた。

公平が後ろから声をかけると、アリジジは振り返った。脇にはあのバケツがあった、どうやらまた例の塩漬けを作っていたらしい。

「鼠を持ってきたよ」

ねずみ捕り器を寿司屋の土産のようにぶら下げ慶幾は言った。

「おお！…よく手に入つたね……やっぱり僕らは運がいい」

アリジジは盛んに動き回る鼠を見つめていた。それからおもむろにカゴの蓋を開け鼠を取り出し、自分の手の平に乗つけ、指を開いた。その途端一寸散に逃げてもおかしくはないのに、鼠は鼻をひくつかせアリジジの手の上で大人しくしていた。やがてアリジジの腕を登つて肩までくると、袴元からTシャツの中に滑り込んでしばらく中を探索した。そしてアリジジの人差し指にたどり着くと、オッサムのようにぶら下がり、チューと鳴いた。

アリジジは可愛さに心打たれたのかジッと鼠を見た。

「ねえ……僕にはこの子を殺すなんてできないよ。こんなにも元気で目がいきいきとして、まるで黒イチゴみたいなんだから」

千央はいきなりアリジジが詩人みたいなことを言い出したので、困惑した。

「こいつ、僕のペットにしようか」アリジジは目を輝かせて言った。

慶幾は少し怒ったように言った。

「じゃあ作戦に使う死体はどうするの？…都合よく死体なんか見つからないって言つたのはアリジジじゃん」

千央は慶幾が怒る気持ちが少なからずわかつた。アリジジのため鼠を捕獲したのが無駄になつたら、それなりにがっくりくるだろうから。しかしこの子鼠を殺さずにするようなので、千央は安心した。「ごめん。せつかく捕まえてくれたのに、こんなこと言つて。でも僕なんか寂しくてさ。昼は君たちが遊びにきてくれるからいいけど、夜は真っ暗な中で本当に一人きりなんだから。鼠でも一人よりはマシかなと思って」

「まあ、仕様がないかな」慶幾は地べたに座りながら溜め息をついた。「お前命拾いしたな」

アンコも慶幾の隣に座つて言った。

「ただ他の手を考えなければいけないわね」

「セミでも取つ捕まえて使うかい？馬鹿みたいな数いるし」と、慶幾。千央たちの周りではセミが叫ぶように鳴いていた。

「ああ、それならもう考えてあるよ」

こう言い、勢いよく乗り出したアリジジは背後にあるバケツに手を突っ込んで、あるものを引き出した。数日前までバケツに入っているのはタマネギや葉っぱなど植物だけだったはず、しかしアリジジの手には5センチほどのカエルの塩漬けが持たれ、こちらに白い腹を向けていたのだった。

千央たちは当然、ギヤアなりキヤーなり言いながらそこから散り散りに逃げていった。その時のように悲鳴の起こり具合といい、逃げる際の皆の素早さといい、まるでアリジジが中心になつて起きた爆発のようであった。アリジジが爆心地で千央たちが爆風や粉塵というわけだ。

「ああ、嫌だ、私駄目なの。カエルとかそういうの」

千央より十五メートルほど先へ逃げていた真琴は、氣分が悪そうにこう言つて溜め息をついた。

「それ一体どうしたんです？捕まえたの？」

恐々近づいて慶幾は言った。

「うん」アリジジは素直に頷いた。

「なんてね、まさか違うよ。多分昨日の夜、僕が知らないうちにバケツに飛び込んで勝手に塩漬けになつたやつみたいなんだ。全く肝を冷やしたよ。昨日は僕の周りでものすごい数のカエルが鳴いてうるさいくらいだつたからそれだろう。本当迷惑なカエルもいたもんだ」

言いながらアリジジはカエルをあさつての方向へほうり投げた。

千央たちはビクッとしたながらそれを田で追つた。塩で漬けられ、恐

ろしい顔色になつたドでかいカエルはヒューイとよく飛び、脇の林の方に派手な葉音をたてて消えていった。

「昨日そんなにカエルが鳴いていたんなら、今日は雨が降るかもしれないよ」公平は森の隙間から空を覗くように見て言った。

確かに木々の隙間から見える空は少し曇つており、辺りの空気は何時もより少し涼しいようだ。

「でも、どうするんです？」

階で空を眺めていると、唐突に毅が言つた。

「ゴッちの死体の代わりになるような物ですよ。鼠も使わないんでしよう？」

「さあ、どうするかな。セミも今日は鳴いてないし……、このことは後でまた考へることにするよ」

少し考へた後、アリジジはこつ言つた。それから彼は以前毅がカメラを入れるのに使つていた、木綿袋を取り出した。それまではいいがいきなり力を込めて左右に引っ張り、ビリビリ破ろうとしたので千央はびっくり仰天した。

「ちょっと待つてそれ、毅のでしよう? 何をするつもりですか?」

「ああ、いいんだよ」毅は言つた。「アリジジにあげたんだ、素朴な白い布が欲しいって言つてたけど家にはよさそうなのが無くてさ。それを破つて使つたらいいと思つて」

「白い布は何に使うんですか?」

「その……」アリジジはバケツを指差した。「作つたやつがあるだろ、それを包むのに使おうと思ってさ」

「はあ……」分かるような分からぬような気分で千央は頷き聞いていた。

さらにアリジジは続けた。

「この葉っぱとかを少しずつ取つて、布と麻ひもでくるつと巻いて小包みたいにするわけ、君たちが来た時、ちょうどそれをはじめようとしてて……っと」

アリジジはビクッとし、自分の首を触つた。千央も自分の頬を撫

でた。皆は空を仰ぎ見た、しとしと小雨が降りはじめ、途端に辺りではカエルが一斉に鳴きだした。そのカエルの声に答えるかのように、雨はだんだんと冗談にならないほど強くなってきた。そのようすを見た千央はあることを閃いた。そんななか、毅は雨音に負けじと叫んだ。

「とりあえず、雨宿りできる所まで行こう。」

仲良く濡れ鼠になりながらも、一行は毅の向かう方へと走り出した。

二十八、バーガー岩にて

滝のように降り出した雨を岩の影から見上げながら毅は言った。
「この雨だとまた増水して川が濁るな。しばらく川で遊べなくなる
かもしないぞ」

「え、泳げるようになるまでどんくらいかかるの?」岩に寝転んで
いた伊鶴は飛び起きて言った。彼はこのところ、川で泳ぐのを田課
にしているのだ。それも、午前と午後の二回もだ。

「んー。僕の経験から言って、だいたい十日間くらいかな」毅は答
える。

「そんなん、つまんねえ」伊鶴は脱力したように言った。

「まあそれは嘘なんだけどね」飄々と毅は言った。

「夕立だからすぐに止むよ、多分」

公平はシャツの袖で耳を拭き、笑って言った。

「雷がなるぞ」とアリジジは言った。「そら」

その通り、間もなく辺りがフラッシュを焚いた時のように、一度
白く照らし出された。それから千央たちがいるところからそう遠く
ないところでゴロゴロ音があり、ドーンと大きな音とバリバリと割
れるような音がした。アンコは耳をパツと塞ぎ、縮こまつた。しか
し千央は、堅固な岩の下にいると守られているような感じがして安
心だった。千央たちが雨宿りしている場所はとても変わっていて、
大きな平たい岩を背後の木が上下を割るような形で裂いており、ま
るでホタテ貝のようなハンバーガーのような感じで、その間に皆は
入りこんでいた。天井も床も乾いていて、張り出した岩の屋根のお
かげで雨は降り込まず、難をいえば正体不明の動物のフンらしいも
のが奥にべつたり張り付いていることくらいだった。

アリジジはどこからかキイロの餌を取り出すと、全員に一つずつ
配りはじめた。皆はそれぞれ礼を言って受け取った。

千央は餌を舐めながら（それはなんとも奇妙な味の餌だった）、
千央は餌を舐めながら（それはなんとも奇妙な味の餌だった）、

なぜこんなものをアリジジが持っているのかとふと疑問に思つた。

誰も餌などは持つてきていなければずなのだ。千央はそれを尋ねたが、どこかの家から盗んだものだという答えが返つてくるような気がしたので、止めておいた。

アリジジは餌を碎いて、鼠の力ゴロの中にそれを振り掛けた。

「餌なんか食べるかな」真琴が言つた。

「どうかな……。あつ、食べるようだよ」と慶幾。

皆の熱視線の中、鼠は臆することもなくシャリシャリと音をたてて餌を噛みはじめた。ちなみにこの子鼠の名前はいつの間にか決定しており、鼠なのになぜだかスズメになつていた。スズメとの共通点は毛の色くらいなのだけれど。

千央は言つた。

「ねえ、あのさ。動物の死体の件で私に考えがあるんだけど」

口中をモグモグさせながら、すごく奇妙でへんてこな話題を振つているなと自らも思いつつ、千央は話した。

「植物を入れるつて言つてた袋に生きたカエルを入れて代わりにすればいいんじゃないかつて思うんだ。生き物の死体を使うんじゃないつてさ。カエルなら魔女っぽさも出し、その辺に大量にいるから無理矢理死体を探さなくていいから」

大音量で鳴くカエルの合唱を聞きながら、千央は言つた。

それに対して毅は「死体を使わないと不気味さが出ないのでは」と言つた。

「そこは他のところで怖く演出すればいい」と思つ「公平は言つた。

「たとえば血とか意味不明のマークとかを……」

それならといつた感じで身を乗り出すと、慶幾は言つた。

「雑誌に載つてた三角形の魔法陣とやらは？あれならすぐ真似できるし、ゴッチで儀式をしたやつと同じだと思わせられるよ」

「いいかも、それ。他に案のある人は？」公平は皆に聞いた。

「ローソクを使う」

「呪いの藁人形……」

「何かを釘で打つて吊しておくとか」

……それを本当に実行する実感もないままに、千央たちは熱中しアイデアを次々に言つていった。この会議は雨の降る間中続き、アリジジは黙つてそれを聞いていた。

雨が上がった後、千央たちは皆でカエル取りに行くためにバーガー岩を離れた。カエルは葉を踏んだり、揺らしたりすると飛び出でくるのでそこを捕まえた。

カエル嫌いの真琴は当然それを嫌がつたが、雨上がりで時機がかつたのか真琴抜きの7人でも十分な数を集めることができた。しかしどれも最初に見た塩漬けカエルほどの大きさはなく、ポップコーンくらいしかなかつた。そいつらは全て例の木綿袋に入れられたが、中で必死になつて飛び跳ねているのが見えて、それを見ているうちに千央は何となく気が滅入つてしまつた。

それから千央たちはアリジジの寝床に戻つて、呪いの魔法陣の予行練習をやることにした。

まず、公平が木綿袋からカエルを2、3匹取り出し、ハンカチサイズの布に置いた。それから、対角に向かい合つている角同士を合させて二回折つてカエルを包み込み、三角に折れた布を地面に置いて角を釘で固定させた。

次に、真琴が仏壇用の白いローソクを取り、ライターで火を点した。これはしばらく横向きに持つて、ロウを何滴か地面に落とさなければならぬ。

「これは失敗したら駄目なのだ」

ロウを垂らした地面にローソクを立てながら、千央はつぶやくようになつた。「もしローソクが倒れたりでもしたら大変、全く関係のない人に呪いが降り懸つてしまつてわけ」

これは千央が勝手に作った設定なので、もちろん本当にそうなるわけではなかつた。しかし、こついう取り決めがあつた方が呪いの儀式らしい気がしたのだ。最後に作つて置いた乾燥葉っぱを周りに散らして完成だつた。

帰る時千央たちは、捕まえたカエルは程よく湿った地面に掘つた穴に入れて逃げないように蓋をしておき、いつか使う時まで取つておこうとした。

明くる朝、千央は庭で洗濯物を干していた。最初の頃と比べると、大分上達はしたもの、下手だった時の無茶な干し方でほとんどのシャツの衿がだらしなく伸びてしまつたのがたまにキズであつた。

千央が途中ふと目を外すと、慶幾の家の猫ナガが生け垣を抜けて増田家の庭に入つてくるのが見えた。千央がナガがこちらに歩いてくるのを待つっていたところ、後ろから今度は子供の影が見えてきて、あつという間にナガを追い抜いて千央の側まで来た。影の持ち主はナガの飼い主の慶幾だつた。

慶幾は手に何か白く四角い物を持っていた。彼はそれをひらひらさせて開口一番、こう言った。

「あつたよ！名刺、見つけたよ！」えつと千央が驚く間もなく、慶幾は速歩で通り過ぎ、ベランダから家中へと大声を出し入つていつた。

千央は洗濯物干しを終え、それからナガを撫でて中に入ると、皆はテーブルで慶幾を囲み盛り上がつていた。

「名刺あつたつて！」

アンコは名刺をくれ、受け取つた千央は洗濯カゴを足元に置きながら聞いた。

「これ、どこにあつたの？」

慶幾は椅子の上で伸びをしながら尊大な調子で言つた。

「それがさ、漫画雑誌のページに挟まつてたの」

「漫画雑誌？」

「うん、昨日さ、アリジジが布のバック破ろうとしてただろ？」慶幾は興奮気味で話しおした。「僕いつかどつかで同じ物見たなあつて思つて、ずっと考えてたわけ。で思い出してみたら、佃さんにつた日に毅に借りてたバックだつたんだよ。んで、そのバックに何

入れてたかというと、その日買った漫画だつたんだよね。だからもしかしたら間違つてその漫画本の中に挟まっちゃつてるんじゃないかと思つて調べてみた、そしたら見つけたんだ。本当びっくりしたよ

「犯人はお前だつたのか」公平はわざとドスの効いた声で言つた。

慶幾はおちやらけた調子で謝つた。

「ゴメン、ゴメン。でも見つかつたんだし、許してくれ

「ふざけてんじゃねーよ」

公平は慶幾の背中を手刀で叩き、それから首を絞めた。慶幾はぐえーっとカエルのようなうめき声をあげて苦しんだ。

「ちょっと止めなさいよ」真琴は一人の間に割つて入つた。

千央はそんな三人をうつちやつて、再度名刺を見た。わざわざホテルに行き、嘘をついたのは無駄にはなつたものの、佃さんの連絡先は無事判明したのだから、千央は嬉しかつた。だが、今さら佃さんと連絡してもどうにもならないかもしれないと思った。近い先にいくつかの困難が待ち構えてるのは分かつていいものの、効果は期待薄ながらも自分たちで対処法を決めたことやアリジジの存在が、千央たちに一定の落ち着きを与えていたからだ。とは言え、今の状況になる一因を作つた人物ではあるのだから、怒りをぶつける相手には調度よいであろう。

「Jの名刺の裏側には、大学の電話番号と佃さんの携帯番号が並んで載っていた。

公平は廊下からコードレス電話を持ってきて、早速電話をかけようとした。だが毅は公平を制止し、アリジジがいるところに電話した方がいいと言った。

そこで千央たちは、子機を持って山へ入った。しかし、アリジジの寝床には風に揺られる草しかなく、もぬけの殻。アリジジの姿はなかつた。今までいつ行つても、アリジジは門柱のように当たり前にそこにいたから、一同は完全に面食らつてしまつた。

慶幾が不安そうな顔で下草を踏み締めた。

「アリジジがいないなんてめずらしい、何かあつたのかなあ」

「誰かが側まで来たんじゃないか?だから場所を変えたとか」

「まさかと思うけど、見つかつたりしてはないよね?」真琴は言った。

「怖いこと言わないでよ」

もしそうなら、大変な事態だつた。千央は平静を装いつつ、脳内で静かにパニックを起こはじめていた。

「まさか、もしそうなら、それならそれで何かしら騒ぎになつていいはずだよ。の人たちのことだもの」

公平は冷静な意見を述べた。

とにかく探そと林から飛び出した一同に耳にかすかな水音が聞こえてきた。音を頼りに行つてみると、アリジジは山の沢でのんきに水浴びをしているのだつた。川の深みで浮いたり沈んだりを繰り返して遊んでいたアリジジは調度こちらに気づくと、眩しそうにこちらを見上げ、ニッコリと笑いオーラと、手を振つてきた。その脳天気な様子に心配していいた千央はがくつと脱力させられてしまつた。しかし考えてみると、逃亡生活とは言え、アリジジにもそれなりの生活があるのでから、留まつてゐる義務なんぞない。トイレやら行水もしなきやならないし、ある程度運動なども……。そういう

ば、アリジジは千央たちのいない時は何をして過ごしているんだろうか？それは今だ謎だ。

伊鶴は川辺に駆け寄つて行つた、千央たちも後に続いた。伊鶴は

元気よく言つた。

「ねえアリジジ、いいニュースだよ！佃さんの連絡先が分かつたんだ！」

アリジジはウワーッと歓声をあげ、シンクロのように一回転してみせた。

「そりあすごい！」そして水面に浮かび、ざぶり、ざぶりと一掻き、二掻きし、岸へあがつてきた。「じゃあ、カメラのことホテルから連絡があつたんだね？」

慶幾はニヤツとして言つた。

「いいえ、その……名刺が見つかったんです。実は、僕の本だなにあつて……」

「なんだ、違うのかあ」アリジジは少し残念そうにした。
「それで……、これがそなんです」

慶幾は名刺を差し出した。

アリジジは腕を振り、手の水を飛ばした。そして濡れないように名刺を指で挟んで受け取つた。

アリジジの体にはそれなりに毛があつたが、やつぱり顔の毛の方が断然濃かつた。千央はアリジジの顔のモジヤモジヤについて、本人に尋ねたこともなく、またこれから尋ねる気もなかつた。別に聞くことにタブーを感じたからではない、あまり気にならなかつたからである。というのも、千央の体にも他の人とは違う場所があるせいかもしれない。千央には右半身に大きめのアザがあつたのだ。だが、今のところあまり気にしたことはない。だけど、あまりにくつきりと茶と白に分かれているため、小さい頃、自分は一人の人間を半分ずつ継ぎ接ぎにして作つた人造人間なのではないか？と馬鹿馬鹿しいことで悩んだことはあつたが……今ではそんなことは有り得ないと分かつっていた。

しかし、他の子はビックリ思つだらう。皆は、アリジジの顔をビックり思つてゐるのだろうか？

名刺を見終わつたアリジジは名刺を慶幾に返しながら言つた。

「この番号に電話はしてみたの？」

「いいえ、まだ、だから今から電話しようと思つて……」

毅は持参した子機電話を見せながらこう言つて、皆は頷いた。
それから千央たちはアリジジが体を拭いて服を着るのを待つてから、またアリジジの寝床の場所へと向かつた。アリジジと一緒にないで、あまり一日につくところにはいたくないからだ。

寝床に到着した一行は、岩に座つたアリジジを囲つよつて集まつた。

「相手を怒らせないよつて気をつけろよ」アリジジは言つた。「じつくりと時間をかけて聞き出すんだ」

この電話の目的は、どういう経緯で取材ビデオが佃さんの手からからテレビ局の方へ渡つたのかを聞き出し、もし叶つのなら、佃さん本人が何者かの差し金で毅の家にやつてきたのではないかというのを探り出すことにあつた。

「わかりました」と、公平は電話持つて頷いた。公平が一番佃さんと接点があると思われたので、まず彼が電話をかける役になつたのだ。彼はアンコに名刺にあつた携帯番号を読み上げさせ、黄色く発光するボタンをポチポチと押した。一拍置いて、電話口から呼び出し音が鳴り出しが聞こえてきた。千央はその音を心臓をドキドキさせながら聞いていた。それから急に公平が背筋をピンと伸ばした、それで千央には相手が電話に出たのだな、と分かつた。公平の唇がせわしなく動くのを千央はじつと眺めた。

「あの、もしもし……僕

一人がしばらくやり取りしている間に、千央は注意深く耳をしました。すると、紛れも無い、あの佃さんの声が受話器から聞こえてきた。

『……ああ……、そつか。思い出した思い出したよ、久しづり

だなあ。あの後電話しようと思つたんだけど、連絡先を知らないでさ、そつちがくれるんじゃないかと思つてずっと待つてたんだよ。

思つたより遅かったね』

「はあ、それがですね。実は僕ら名刺を無くしちゃつてて、つこをつき見つけたんですよ」

『そつなのか。で、あのテレビは見たか?』

「はい、そりや勿論見ましたよ。見たから電話をしようつと……」

『ああ、あれはすゞい番組だつたねえ。カルト教団対市長……ただ今時悪の巣窟つてのはないよな。でも、結構楽しめただろ?』

「あー、そつでしょ?うか……」

公平は困つた顔になつて言つた。千央たちもお互に顔を見合わせた。

『あそこ今じやす』とい話題になつてゐるようだねえ』

「はあ……、確かにおかしな騒ぎにはなつてますね」佃さんは嬉しそうに言つた。

『おかしな騒ぎなんてもんじゃないよ。しかし俺らが発端だなんで思つとなんとも感慨深いと思わないかい?』

“全然感慨深くないな”と千央は思つた、公平や他の子たちも多分そつ思つたことだらう。

公平は佃さんの質問を無視した。

「でも、僕聞きたかつたんですけど、何であれがテレビで放送されてるんですか?あんなの聞いてなかつたです」

公平は相手に警戒されないよつて、興味ありげにそもそも、それを面白がつている調子で聞いた。

『あああ、あれね。まあね、でもいいじゃん別に、気がすんだだろ?』

?

「全然良くないんですよ、それが。こつちは袋叩きにあつて参つてるんですよ。変な電話はかかるべくして、近所の人には怒鳴られし、もう散々なんです」

佃さんは驚いた声を出した。

『えつ！？まだそこにいるのかい？もうとっくに家に戻っているかと思つてたよ。じゃ、他の子もいるのかい？』

『ええ、一人を除いては……』

公平はまず真が入院した話をし、ちょうどその頃にあつた怒り狂つた近所の人たちが靈能者宅に乗り込んできて、大変な修羅場になつたという話もした。

『へえ……なんというか……、大変だつたろうねえ。でも、面白い経験になつたんぢやないか？大人相手に本氣で怒る大人なんてめつたに見れないからね』

佃さんの言い方はまるで他人事のようだつた。実際、千央たちは帰れば本当に他人事になるのだから良いが、毅には靈能者の家の子なのだから単純に面白い経験、というわけにはいかないのだ、ふざけるなと千央は怒つた。しかし、そもそも佃さんは千央たちが靈能者を嫌つているものと思い（これはとりあえず間違つていなが）、毅が靈能者の家の子だなど全く知らないわけだから、これは自分の感じるほど意地の悪い発言ではないと千央はすぐ気付いた。

『で、いつ帰るの？』

「あと、何日間かはここにいる予定です」

公平は言った。これにたいして佃さんはこつ返した。

『ふうん。ならさ。どうせなら、またそちらの取材をさせてくれないかね？どうだろ？手伝つてくれないか？』

このとんでもない提案に、公平は唸り声をあげた。

「無理ですよ、そんなこと。だいたい佃さんたちはあそこ出入り禁止ですって、きつと袋だたきに合いますよ」

『そこんところはちゃんと考へてるから大丈夫。別のやつを寄越すからね』

佃さんは抜け目なく言った。

「いや、だからやつらの本当に無理です」「佃さんはそれでも食い下がつた。

『なら、せめて電話取材だけでもやって協力してくれよ。呪いとか、色々聞きたいんだよね。……そーだ、あの死んだヤギの件。あれはどーなつてんの？黒魔術だとか呪いとかの噂があるらしいけど』この唐突な問いに千央はこれ以上ないほどドンキリさせられた。そういえば、佃さんの専門はジャーナリズムがどうのうのではなく、オカルトやらの怪しげな方にあるのだったと千央は思い出した。だから佃さんが、その情報を知っていたとしても不思議ではないだろ？。

『そつちで実際にそういう儀式の習慣はあったの？』

「あるわけないでしょ？」

公平は冷たい口調になつて答えた。

「ないよ、そんなもん」

毅は怒鳴つた。話し口から相当距離があつたので、相手に聞こえたかは分からぬが。

『じゃあ、霊能者本人はこの事件のことをどう言つてるの？獵奇犯の仕業か、例の逃亡中の患者の仕業か……』

ついに自分の話題が出たので、アリジジは前に垂れていた頭をあげて、電話をじっと見た。そして、微妙な顔つきになつた。

千央の心臓はまたドキドキと強く脈打つてきていた。実はそれを自分たちは再現しようと計画している、偽の犯人を演出して本物をあぶり出す、もしくは錯乱させるため、なんてことはとてもじゃないが言えまい。

「知りませんよ、そんなの」

『警察とかは来なかつた？何か聞かれた？』

毅は人差し指を招くように動かして、公平を呼んだ。

「特には……」

公平の頭から受話器が浮いたので、一瞬やり取りの声が聞こえやすくなつたが、すぐに受話器は毅の側頭部に押し付けられたので、

聞こえは元通りになつた。

「ねえ、そんなにしつこく聞きたがるなんてあなたあのテレビの人じゃないんですか?」『誰だ君は?』

電話の相手が急に変わつたので佃さんは聞いた。

「僕は……、あの……髪の長い……男……」

まさか靈能者の孫だとは名乗れず、毅は見た目の特徴をちらちらしながら述べた。

『……髪の長い……？……ああ、ああ、思い出したよ』

「佃さんは本当に大学院生なんですか?嘘じやないんですか?」

早口で毅は言った。

『まさか、嘘じやないよ。名刺を渡しただろう』

「でも名刺を作るのに、本当の生徒である必要はないでしょ?」

『馬鹿馬鹿しいなあ、もつ。君たちを騙すのに大学院生を名乗る必要なんてあるか?全然ないだろ?』

「……じゃあ何でテレビで流れたんですか?」　今度は毅が食い下がつた。

『あのねえ』少々イライラしてきたようで投げやり気味に佃さんは言つた。

『帰り道にね、反対運動を取材しているテレビ局の人たちに会つたんだ。まあ話し合つて双方に折り合いがついたから、いくらかのお金を貰つて取り引きしたんだよ。の人たちも運がいいって喜んでたよ。確かにすごい偶然だものな、お日当ての映像をもつた一般人に取材当日鉢合わせするなんてね』

「何で売つちやつたんですか!それにテレビの内容はまるで出鱈田じやないですか!!」

声を荒げて毅は言った。

『一体君は何を怒つてるんだ?』

佃さんはあきれた声で言い、溜め息をついた。

『だいたいさ、お忘れのようだがね。仕返ししたいって自分から俺らに協力したのは君たちだろ?そのためになんかわかりやすい芝

居をうつたんだろうがよ。普段はあんなに攻撃的じゃない。いつもならからかうだけで終わりだよ。外国人のふりをしたり、アフリカの帰国子女のふりしたりしてさあ……』

「アフリカ？」と毅。

千央も眉根を寄せた。

『まあ、こっちの話。それに、そんなこと言われても、俺らは何もしないよ。売ったもんを局がどう使おうが口出しできないものね。テレビで誇張なんてよくあること、それも含めて詐欺行為の報いさ、僕は自業自得だと思うな……。おーい、聞いてるか？』

「僕は別に仕返しなんかじやなくて……、騙されてる子たちを楽にしたかっただけです」

毅はボソボソと言つた。

『ああ、そうなの。まあ、どっちにしろ、君らにはもう関係ない話だろう。親を引っ張つてやめたらいい』

「やめるなんてとても無理ですよ」

『無理じゃないさ』

毅は地面を睨みつけながら、叫ぶようにそれを暴露した。

「だつて僕のお祖母ちゃんが靈能者なのに、どうやって抜け出せつていうんだ！」

そして毅は電話の「切」ボタンを押すと、子機を地面にたたき付けた。電話本体は地面にボトッと落ちそれきりだつたが、衝撃で薄いプラスチックで出来た四角い何かが外れて勢いよく跳ね上がり、周りはびっくりして同じように飛び上がった。

電話を切つた後の皆の落ち込みっぷりは相当なものだつた。特に毅は佃さんへの告白（自白と言えるかも）、で精神をすいぶん消耗したようで、ひどく気を落としていた。子供にこんな表現をするのはおかしいのだが、この数分間で何歳か老けたようだつた。

一方、千央の頭も複雑な動きをして、ものすごくこんがらがつていた。おそらく佃さんがスパイではないことが分かつてホッとしたのと、やっぱり佃さんが流していたのかというのと、両方の考えが

あつたためだろ？

アリジジは毅の小刻みに震える肩をやさしく叩いていた。毅は泣いてはいなかつたが、顔を歪めて喉を獸のよつにグーグーと鳴らして明らかに涙を堪えていた。アリジジは背後から毅の耳に何かを囁いており、毅はそれに合わせて頷いている。おそらく、慰めの言葉を言つているのだろう。

もしかしたら、アリジジのやせしさに堪えきれなくなつて、逆に泣くはめになるかも知れないぞと、千央はハラハラしながらしばらく一人を注視していたのだが、毅は突然フツと吹き出し笑い出した。同じくアリジジも笑い、最後に毅の肩で摩擦熱を起こすように強く擦ると、毅から離れた。

それからアリジジは千央たちの方に向き直ると、こう言つた。
「計画を決行することに決めたよ。今夜中に全部やつてしまつ、本当は隙をみて一件ずつやつていいくつもりだつたけど、諸事情により早まつたので……」

そして、アリジジは口の端に笑みを浮かべ毅を見た。おそらく、毅のために作戦を前倒しにしたのだろうということを千央は悟つた。

「えつ！なら、私も一緒に行きたい」

アンコは部品の欠けた電話を直そうと試行錯誤しながら言つた。

「僕も」伊鶴は拳手して言つた。それから、
「僕も手伝いたい」と、公平。

続いて我も我もと千央、真琴、慶幾の手があがつた。しかし毅は
といふと、側に繁つた草を筆るだけだった。

その光景を見て、アリジジは首を振りこう言つた。

「いや、今回は真夜中に実行するし、危ないから僕一人でやるよ。
だいたい夜間に子供がいなくなつてることが親御さんにバレたら、
それこそ大騒ぎになつてマズいことになる。もし警察に通報され
もしたら、僕は絶体絶命のピンチや……。それに皆が夜外出した次
の日にゴソソり呪いの跡が見つかつたら、どう考へても君たちが怪
しまれてしまうだろ？」

アリジジの言い分は確かにその通りで、納得がいったが、これがもし実現したら楽しい夜の散策になりそうだっただけに、千央はかなりがっくりときた。

それからアリジジはポケットから四つに折った紙を取り出して開いてみせた。それは千央が以前見せてもらった毅お手製の山の地図で所々にいくつかバツテンがつけてある。“悪魔の儀式捏造作戦”を行なうにあたって、千央たちに任されたことの一つに今まであつた事件（火事なり空き巣なり）の場所を予め調べておくというのがあつた。地図にあるバツテンはこれまでの事件の数はボヤ火事6件と空き巣9件の計15件の目印だつた。なんのためにこのような調査が必要だつたかというと、アリジジの個人的な復讐のためだ。アリジジは事件が住人たちが談合し共謀した狂言である可能性があると思っている、これらの家はその計画に確実に協力しているのだから、アリジジの仕返しリストに上がるのも、まあ当然といえた。しかし何の知識もない子供が作った地図なので正確さはなんとも頼り無かつた。とはいっても、こちらへんの家屋はほとんどが山の裾野や麓にあり、それも点在しているので、山の麓の形さえ分かつていればだいたいの家の場所の特定は出来るのが救いである。

「正直に教えて欲しいんだけどさ」アンコは言った。「この9件の空き巣被害の中でアリジジのやつたのは何件なの？」

「3件……いや4件かな？でもそれらはちゃんと抜いておくから大丈夫だよ」

アリジジは笑い出した。

「店で万引きしてもよかつたんだけど、このルックスじゃんでもなく目立つてしまうしなあ」

「確かにそうだね」公平は吹き出し、頷いた。

ボロを着た毛むくじやらのアリジジが商店で人目を憚ろうとして全く憚れていよいよ想像し千央も一瞬吹き出しそうになつたが、そのようすがあまりにも反省の色ゼロなので、代わりに千央は脱力してしまつた。

「あああ、明日が楽しみだな」アンコは興奮して飛び跳ねながら言った。

それに対してもアリジジは警告した。

「楽しみにするのはいいけど、くれぐれも君たちが第一発見者にならないように気をつけておいてくれよ。出来るだけ村の人を見つけてもらいたいからな」

確かに第一発見者が容疑者になつたりはドラマとかでよく聞くものなど千央は思った。それに、もし千央たちが第一発見者になつてしまつた場合、それはあながち間違いとはいえないだろうから。

一十九、飛ぶ夢

その日の夕飯には、白身魚の唐揚げ、焼きナス、くし切りにしたトマト、ジャガ芋を醤油で煮た物、スペゲツティミートソース（何せ大人数なものだから、主食が一つだと足りない時があるのだ）の大皿が出て、なかなか豪華だった。

しかし、千央はそれらの料理を尻目に、食卓の方にやられていた漬け物に手を伸ばし、引き寄せる、醤油をかけて食べ始めた。千央はこれまで沢庵や梅干しく述べしか普段漬け物を食べつけていなかつた。しかし毅の家では朝食のみならず、昼食や夕食にも漬け物が食卓に登場し、千央はこれがすっかり気に入つたのだ。漬け物を食べ終わると、千央は次にご飯を口に入れた。そしてゆっくりと咀嚼しながら考えた。どうやらアリジジは今日の晩にも計画を行するつもりらしい。もしこれが上手くいけば、犯人のアリジジへの濡れ衣計画をぐじくことができるだろ？。これに関しては、千央は期待していた。

だがそれと同時に、自分たちが今までやつてきたことは、世の中の道徳に背いてまでする価値のあることなのだろうか？と千央は今さら不安になつてきていった。これを考える度、千央は後頭部の毛が逆立つような感じがした。そもそも、今や指名手配犯のような扱いのアリジジを匿うことからして普段の千央ならありえないような行動だつた。彼女は自分の置かれているこの状況と自分の行動に少し恐怖を感じていた。普段彼女は、規則を守ることにおいては、とても厳しいのだ。

千央は同じ食卓についている仲間たちを見ながらこう思った。しかし、皆は嬉々として最高に嬉しそうなようすだつた。皆は決まりを破ることに恐怖を感じないのだろうか？それとも、決まりを破ることによって自分が勇敢なのを証明しようとしているのだろうか？それこそ千央は今までとつた行動の節々で何度も思ったものだ。千

央は皆の様子を見ながら、決まりを破つて楽しそうにするなんてとんでもない奴らだと驚き、と同時に勝手に憤慨してもいた。

けれども、実は千央が決まりを守りたがる理由は彼女が特別ない子だから、といつわけではなかつた。ただ決まりを破つてトラブルになるのがひどく面倒くさいからなのだ。つまり自分に迷惑がかかるのが嫌なのと、その後の対応を考えるのが面倒くさいからなのである。だからそこに千央自身の道徳的な考えはなく、何も考えずに、ただの強迫的、習慣的、あるいは機械的なこととして行動をするだけだつた。

だが千央は今回、決まりを破り、アリジジを匿つた。仲間内での保身の精神からだけではない。千央はこの性格の欠点について、前々から薄々気がついていたのだ。

それは、自分を指導する人物の精神や行動が悪かつたりした場合、自分は破滅してしまうだらうということだつた。彼女はそれなりに順応性が高く、同時に依存度も高い性格をしているからだ。というか極端な事勿れ主義者だといえた。だから、もし間違つた方についたり、あるいはついていたら、千央はどんな悪人にもなつてしまい、二度とくら替えすることはなく、一度も逆らわず、後は悪い方へ悪い方へと、奈落の階段をひたすら下つて行くだけなのだ。千央はそうなることを普段からなんとなく危惧していた。だからこそ今、反骨精神を持つてこのような行動を起こしたというわけだつた。

アリジジの件について、千央は現在、こう考えていた。ルールを取り外した上で考えれば、自分たちのしていることは割かし正しいんじゃないか、と。なぜなら、半分暴徒となつた村人たちから守つているのだから。そしてこれからアリジジの誤解を解くために協力もしている。だから決まりを無視してもやる価値はあるだらう、と。

いや、でも。千央は静かに自問した。今やつてることとは本当に正しいことなのだろうか？しかし今のところ、千央には判断がつき

かねた。しかし、多分アリジジには味方になつてくれる人は自分たち以外もういやしないのだ……。

そうだ、これはもう決めしたことだから、千央はこれを頭の中でそれを何度も繰り返していた。走り出した電車内に存在するのと同時に片足で駅のプラットホームを踏むことは無理な相談なのだ。それに、もう電車は走り出していた。すでにはじまつっていたことなのだ。もし一力所同時に存在しようと頑張つても、そんなことはとうてい無理だ、きっと二つに裂かれてしまうだろう。とりあえずそれだけは避けたかった。だから黙つて時間が経ち、物事がある程度落ち着くのを待つていよう。

ここまで考えて、ふとあることに千央は気づき、途端に暗い気分になった。あれ、話がまた元のところに戻つてきてやしないか?と。食事の後千央は、少しテレビを見て、風呂に入り、またテレビを見た。時計が11時半を回つた頃、布団に入り眠つた。そしてとても妙な夢を見た。

夢の中での千央はなぜか服を着ていなかつた、しかし裸ではなく、アリジジのような毛が全身に生えていて、その上雨にでも降られたのか、びっしょりと濡れていた。その姿で暗く狭い洞窟の中をひたすら歩いているのだ。体には何かよく分からぬ縄のようなものが引っ付いていて、千央を洞窟の奥へと誘つていた。壁や床は雨の止んだ直後のように濡れており、つるつるぬるぬるとしている、見た目の色といい質感といいまるで蝋燭の様だ。後ろからは風が絶えず吹いてきていた、風は生暖かかつたが千央の肌には鳥肌が立つた。転ばないようその壁に寄り掛かりながら、千央は毛先から水をポトポトと滴らせつつ、暗い道の先へと進み続けた。

そのうち、千央はある袋小路に辿り着いた。そこは丸い暗室のような場所で、ありがたいことに全く風の侵入がなかつた。

ああ、よかつた!助かつた!

千央は安心したのと同時に急に疲労を感じて、地面に丸くうずくまり、夢の中なのにもかかわらず(もちろんその時はここが夢の中

だという自覚がなかつたのだが）そこで眠むつてしまつた。

しばらく寝た後、千央は良い気分で目を覚ました。体はすっかり乾き、ぬくぬくと温まつていた。しかし、どうも周りの様子がおかしい。地面が揺れだしているのだ。何かが起こつているようなのだ。地震だろうか？ そう千央が意識した途端千央のいた袋小路の壁という壁が天地がひっくり返るような勢いでくねくねと変形しだした。その変化に合わせて千央は吹つ飛び、天井で頭や体を何度も激しく打つた、もしかしたら床だつたのかもしぬないが、とにかく壁は柔らかくなつていて怪我はしなかつた。

まるでスーパー・ボールのようにぽんぽんと跳ねる途中に、千央は壁の色が灰色から真つ赤に変わつてることに気がついた。それから暗い中で自分が白熱灯のように発光していることにも。どうやら、千央の知らぬ内に体毛は抜けてしまつていたらしい。

また、袋小路の中は風が吹きすさびはじめていた。そして壁にはオレンジ色の明かりが見えだした。風はそこから吹いているらしいのだ、多分洞窟の壁に穴が空いたのだ。

なぜだか分からぬが、その時千央は早くここから出ないと自分は死んでしまうと思つた。

そこで千央はくにやくになつた壁をトランポリンのように使い、明かりに向かつて力いっぱいに跳んだ。しかし跳躍の途中、突然足首が空中に投げ出され、続いて胴体、頭が引っ張られた。何かの力が引き止めているのだ。その正体は、千央の体についていた綱だった。爪を立てて傷つけ、千央はそれを引き離しにかかりた、しかし硬く丈夫でなかなか切れてくれない。まるでゴムのようなのだ。埒があかないと思った千央は今度は噛み付いた。原始人のように犬歯と奥歯を使って強く、これでもかというほど攻撃した。綱は段々弱く細くなつて、とうとう……切ってくれた。もはやなんの拘束もなくなつた千央の体は、飛んだ時の勢いそのままを保ち、何もない外の世界へと向かつていつた。こういう時は息を吸つたらいいのだろうか、それとも吐いたらいいのだろうか、千央は混乱し仰天する

自分を見送りながら思つた。

朝4時。

「あー、もう起きたの？早いわね」

と、階段を降りてきた千央に園さんは驚いて言つた。

「うん」呻くように千央は答えた。

いつもよりかなり早く目覚めたはずだったが、あせもと全身の引
っ搔き傷がひどく、爽やかな目覚めには全くほど遠い。ふらふらと
部屋に入った千央は、乱暴に畳に座るとひたすらボーッとして時間
をつぶした。

三十一、隠れんぼ

その日の午前中千央たちは、増田家の前庭で酒粕漬け用のウリを切つたり、ワタを掻き出す作業にほとんどの時間を費やした。園さんから頼まれたというのもあつたが、昨日のアリジジの忠告のために山へ遊びに行くことができなかつたので、じつにしろ暇だつたのだ。

漬け物にするウリはシロウリという名前の割に見た目は全く白くはなく、外皮は薄い緑色だつた。大きさは20センチ強、形は長細かつた。しかし、縦半分にウリを切ると、名前の通り白い身が顔を出した。そして胡瓜のように並んでいる種とワタを大きなスプーンで掻き出すのだ。ワタはバケツに捨てられ、ウリの方は笊に重ならないように並べて干す。という例え子供でも失敗しようのないような単純なものだつたが、ウリの外皮が中途半端に柔軟性があり、また硬くもあり、これがくせ者だつた。

作業を続ける内にワタのぬるぬるが手に付いてしまい、スプーンの方に力を入れると、手から飛び出していくのだ。かといってしつかり持とうとすると何かの拍子にウリを掴み損ね、引っ掻いてしまい、爪の間にウリの皮が入り込んでくるのだ。といつても、たいして痛みはないのだが、皮が挟まった指は使いづらいし、毎回何とも言えないもどかしい気分になるのだつた。

「ああ！くつそ、もう！まだよ！」

真琴は毒づいて立ち上がると、ウリを拾いあげた。

しうがないので千央たちはスプーンの方に力を入れていたのだが、案の定ウリは口ケットよろしく地面に向かって勢いよく飛び出して行くのだ。これまでウリについた汚れを落とすために洗い場を行つたり来たりしてきた。真琴ので何度目になるだろうか。前庭から出て行く真琴を見ながら千央は思った。

「ねえ呪いのことだけどさー、朝から全然おとたさがないね」

アンノは切り出した。

「それをいうなら、音沙汰だろ」公平は間違いを訂正した。

「午後になつたら近所を少し回つてみようよ、あとアリジジにも会に行こう。もしかしたら中止したのかも知れないし……」千央が起きた朝4時のような早朝はともかく、日が昇り皆の活動時間になるころにはいくらか騒ぎになるだろうと期待していただけに皆は拍子抜けし、もしかしたら何か都合の悪いことが起こったのではないかとやきもきはじめていた。

「……ねえこれ、なんだか胡瓜っぽい匂いがするよね」

突然、慶幾は手の平に鼻を近づけて言った。

「胡瓜もウリの仲間だもんね」と毅は言った。

「そうか？僕は全然熟れてないメロンみたいな匂いだと思つんだけど……味はどんなのかな？」

伊鶴はスプーンでウリの身を少しだけ掬つて口の中に入れた。が、すぐに地面に吐き出してしまった。

「ヤバイ。味がなくてマズイ」

「漬け物用なんだからそんなものだよ」

これはこの後、塩漬けにされ酒粕に漬けられるらしいが、今日で起きる作業はここまでだった。ウリが完全に漬かつて、茶褐色の奈良漬けになるまで約一ヶ月はかかるそうだ。

公平は唐突に顔を上げて、言った。

「ね、なんかめっちゃ人の声してない？」

確かに真琴がさっきまでいた方向（道路側）から何やら賑やかな声が聞こえてくる。一体何事だろ？

千央が振り向くと真琴が小走りで帰つて来る途中だった。真琴はこちらに着くと息を整え、指で指しながら説明した。

「なんか誰か山の中で熱中症なんかでぶつ倒れちゃつたらしくよ。今、救急車が来てるってさ」

「ふーん。救急車がくるなんて、ずいぶんと重症じゃないか」

おそらく、最も暑い時期を超えたのでその人もついつい油断して

しまつたのだろうと、千央は思つた。

「にしてもさ、これはちょっと騒ぎすぎだらうよ」

まるで運動会のリレー や綱引きの時のような声に慶幾は言った。

確かにかなりやかましかつた。野次馬が相当数集まつてゐるようだ。

「ここらは娯楽がないから、救急車でも大騒ぎなんだよ」

千央は普段周りで良く使われる言葉を引用して言った。まあ、千

央の住んでいる所も田舎なのだが。

「しかし最近は行き倒れるのが流行つてゐるのかね？」

公平は少し可笑しそうに言つた。多分、釣りの時に熱中症になつた自分のことをからかつてゐるのだとわかつて、千央も笑いに加わつた。

「誰が倒れたの？もしかしたら知つてゐる人かも」毅は真琴に聞いた。

「さあ、顔見てないから分からないな。周りに人がまるでアリみたいたむろつてたし」

「じゃあ、おじさんだつた？それともおばさん？」

真琴は少し考え、首を振り言つた。

「いや、多分若い人。“兄ちゃん”て呼ばれてたから」

さつきまで笑つていた公平は少し黙つた後、一転して顔が強張り、見る見る変な顔になつていつた。

「ねえ。まさか、とは思うんだけどさ……、倒れたのつてアリジジじゃないよね？」 皆はヒエーッとし、顔を見合させた。とりあえず立ち上がり、全員が持つていていた半割のウリとスプーンは地面に投げ捨てた。

前庭を突つ切り、柵を乗り越えて道路に出た千央たちは、遠くに見える人混みに向かつて走つた。

そこには近所の人たちが大勢たむろしており、がやがやと賑やかな喋り声がしていた。救急車はまだ到着していないようだつた。

千央はぎゅうぎゅう詰めの人垣から隙間を探し、そんなことは勘弁してくれと思いながら、人の波を押しのけ人だかりの核へとなん

とか進んでいった。途中、隙間からはチラとオレンジ色のシャツが見えた。最悪なことにアリジジがいつも着ていた服の色そのものだつた。待て待て、まさかまさか……。それから全体が見えてきた、ばつたりと倒れ、仰向けに地面にのびているようだ。真琴の言ったとおり、確かに若い人らしかつた。体つきもアリジジにそつくりだ。大変だ大変だ大変だ……、大変なことになつたぞこれは……。千央は唇を噛んだ。胸の中で心臓が猛烈に動いているのが千央にはわかつた。心臓の鼓動が爆裂弾のように響いてくる。

やつと人垣を抜け、千央は大人の足の間から頭を突き出した。そのようすはまるで檻から顔を出す動物のようだつた。千央はもうほとんどの分かりきつていたが、改めて倒れた男を見やつた。
…………しかし思つたような衝撃を千央は受けなかつた。ただ何倍も大きい、別の種類の衝撃を受けた……。

問題の男は地面に大の字に伸び、目をつぶつっていた。誰かが水分を摂らそうとして失敗したのか、男は苦痛そうに顔を歪め嘔せた。眉根をよせている、そう、眉毛が確認できるのだ、そして瞼には黒い睫毛があつた。オレンジの半袖から伸びる腕は肌色をしている。男には人並みの体毛しかなかつたからだ。短髪をしばらくほつたらかしにしたかのようなボサボサの頭に、眉毛に睫毛、それ以外はつるつるで表情や顔の造形がはつきりとわかつた。腕などにももちろん毛は生えているが、アリジジと比べると無いに等しかつた。

見知らぬおじさんやおばさんに揉まれながらも、千央は向かいにいる似たような状態の毅の顔を見つけ、口の動きだけで聞いた。

(知り合い?)

毅は激しく頭を横に振り、口の動きだけで答えた。

(いや、全然。全然知らない人)

同じく毅もかなり困惑した顔つきをしていたが、むろん双方おしゃまんじゅうの件で困つてゐるわけではなかつた。二人は“こいつ誰?”と、心中で叫んでいた。しかし本当に叫ぶわけにはいかない。このアリジジに限りなく似ている男、しかしこいつは多分ア

リジジではない……、じゃあこいつは一体何物なんだ？一体何が起きてるんだ。千央は言いようのない不安な気持ちになつた。千央の耳にはえつ？とかはつ？と小声で言つているのが遠くから聞こえてきた、多分慶幾と伊鶴だ。一足遅れてやつてきたアンコも千央の隣で何だ？という顔をしていた。公平は放心し、真琴はというひたすらたまげた、というような顔であった。

途方に暮れている千央の上空では大人たちが噂話をしばじめた。

「〇〇君が見つけて、ここまで運んできたらしか」

「××に のあつやうつが、そこに倒れとつたつて」

「こんなに瘦せて、今まで何ば食べて生きとつたとやううか」

「ねえ、この兄ちゃんはよしば病院に運ばるつと？」

「ここからなら一番近かけんが、多分そがんやううね」

「こりゃあ院長たまぐつやううな」

年長者らしきおじいさんはこう言つてアハハと笑つた。

「いや、よしば病院の院長は今、床にふせつていてそれどころじやないですよ。もうずいぶん悪いとか」

野次馬の中では比較的年若のおじさんが真面目に言つた。

「あの院長……歳はいくつくらいやつたね？」

「だいぶ歳よ、あの先生は。息子が子供の時から院長やつたけん。いつぼつくり死んでも不思議じやなかくらいばい」

千央は信じられない気持ちで男（アリジジ？）を見た。じゃあこいつがあのアリジジなのか？でも、そのわりには毛が全く無い。それは変だ、まあ普通の人からしたら毛むくじやらの方が変わつていふんだろうけど、しかしアリジジの場合は毛無しの方が逆に変なんだ。千央は目が合いさえすれば、アリジジがどうだかはつきり分からはずだと思い、ひたすらこちらを見るよう念力を送つた。だが男は千央と目を合わすどころか、かたく閉じたまま、ただ息をしているだけ。取り巻きの人々は興味津々ながらも決して話しかけたり、触れようとは決してしなかつた。その扱いはあるで、傷ついた危険な野生動物のようだつた。

そうしてゐる間に、背後でサイレンが響き救急車が到着した。男はストレッチャーに乗せられて、人々に大注目されながら車の中へと吸い込まれていった。そして出発するのを千央たちは見送つた。救急車が坂を下つて影が小さくなつていくのを見届けた。

やがて近所の人々たちは何やらぶつぶつ言いながらも、ぼつりぼつりと自分の仕事や家へ帰つて行つた。しかし、子供たちは身動きがとれずにいた。ウリを洗う仕事がまた山積みなのだが、全然その気になれなかつた。

千央は、動搖しながら考えていた。おぼろげながらも以前から頭の中でモンタージュしていた、もしアリジジがすつきり髪を取つてしまつたらこうなるだろうな、という想像の顔をだ。それは行き倒れたあの人顔に怖いほどよく似ていた。その後、わざと倒れた彼の顔に紗をかけてみた。するとまた恐ろしいことに、お馴染みのアリジジの顔がそつくりそのままの形で現れてくるのだつた。ああ、間違ひない。そうだ、あの人アリジジだつたんだ……なんてことだらう。

千央はこの確かめの作業を何度も何度もやつた。だが、あまりこの妄想を繰り返すと気がどうにかなりそうになつてくる。だから別のことを考えるように千央は努めた。

…………アリジジの容態は大丈夫だらうか？とりあえず、病院に行つたのだから大丈夫であろう。もし熱中症であるなら今ごろ千央の時と同じように、点滴をバンバン打たれて、そのうち回復するはずだ。目覚ましたアリジジはベッドにいる自分をどう思うだらうか？ホツとするだらうか？それともしまつたと残念に思つだらうか？また、山に戻りたいと思うだらうか？もしかしたら過酷過ぎる生活にうんざりしていて、やはりホツとするのかもしれない……。

いや、そういうれば、とふと千央は思った。そもそもアリジジはどこで病院を抜け出したのだろう？千央たちがはじめてこの質問をした時、アリジジは何かやることがあるとかなんとか宣つていた。しか

し、子供である千央にも単に話をばぐらかすために言つたことにしか聞こえなかつた。その雰囲気から、多分彼なりに言いたくない事情があつたに違ひないのが分かり、以後この質問は遠慮していたが、こうなつてしまつた今、それはそれで知つておきたかつた、といふか、もう少し突つ込んで聞いておくべきだつたかと千央は大後悔していた。アリジジは、もう、一度と手の届かない所へ行つてしまつた、そのような予感が猛烈に千央の中をしてきていた。

「ねえ、アリジジを捜しに行こうよ！」

途方に暮れている集団の中で、慶幾が突然大声で言つた。

「え……でも……、だつて、じゃ、さつきの人は……」

アンノはしどろもどろになりながら、救急車が向かつた木陰を指で指して言つた。他の子たちも何だという顔になり、無言で目を見交わした。

そうなのだ。今しがた運ばれて行つた若い男の正体がアリジジであるならば、寝床に行つてもアリジジに会うことは不可能だ。にもかかわらず、その彼を捜しに行くなど、なんて馬鹿げた提案だらうと千央は思つた。

しかし、先程の勢いのまま慶幾は言つ。

「もし、山のどこにもアリジジがいなくつてはじめて、あの救急車の人は本当の本当にアリジジだとわかるだろ？もしかしたらあの人は全然関係ない人かもしれない。早合点しても揃だよ」

慶幾の言い分を聞くと、どうやらあの行き倒れの人物がアリジジであると確信していらないらしいのが分かつた。これに対し、あまりに背格好が似過ぎていたため、あの男がアリジジだというのはほぼ確定だろう、と千央は考えていたが、それと同時になるほどと思つた。

慶幾が提案した方法は今現在の千央たちが、行き倒れの人物がはたしてアリジジ本人であるかどうかを少しでも探ることができる、おそらく唯一のことだつた。千央たちが山でアリジジを捜し回ると、したこと事態に何のリスクもないわけだから、これは実に楽でうま

い方法だと言えるのだ。とは言え、单なる消去法なのだから、山でアリジジを発見できなくても救急車男がアリジジである確かな証拠は得られないだろう。しかし、少しだけだが望みが出てきたので無言ながらも千央は活気づきはじめた。

「そうだな。もしかしたら単に寝坊しただけなのかもしれないな」と公平。

真琴は指を曲げ伸ばしながら言つ。

「アリジジが暢気につくすか寝てたら、私が叩き起こしてやるわ」「よかつたら、それ私も手伝うよ」とアンコ。

伊鶴はそれを聞いて笑い出した。

早速、皆は揃つて山へ向かうことになった。どうかお願ひです、アリジジに会わせてください、千央は祈つていた。一行はまず、アリジジの使う寝床へと向かつた。何度も通つたお馴染みの場所で、大抵の場合彼はそこにいた。

しかし、そこはもぬけの殻、アリジジの姿はなかつた。そこで、千央たちは西側と東側を何組かに別れ、それぞれアリジジを捜しに行くことに決まった。

千央は鷺崎さんの家のある方角である東側にむかうために、一度坂を下り、土の段差から平地へと飛び降りた。隣に着地したアンコがギヤツと驚いた声をだした。地面にびっしりと生えた植物の茎のせいだ。それがサンダルを履いていたアンコの足に刺さつたらしい。毅は早速用意していたトランシーバーの話すボタンを押して喋りだした。

このトランシーバーは夏祭りの際、真から譲り受けたものだつた。おもちゃなので通話できるのはごく狭い距離に限られていたが、お互いの連絡の役に立つかもしれないと家から持つてきていた。もう片方は西側の誰かが持つているはずだ。

「えー、こちらは東班。一面枯れ草がだらけ、しかもめっちゃ痛いであります。（毅は自分の周りを見回した）なお、アリジジの姿は見えません。どうぞ」

毅は軍の連絡風に伝えた。トランシーバーからはしばらくガーガーピーピー音がしていたが、やがてそれに混じつて人の声が聞こえてきた。声の主は真琴だった。

『こちらは西班。森にでました、こっちにもアリジジはない模様。しばらく捜してみます』

千央たちは膝を高く持ち上げるように歩き、やつとのことで野原を渡つて行つた。この草はすっかり黄色く乾燥しており、ほとんどがくの字型に折れ曲がっているのだが、もともと背丈の高い植物であるせいか、大変進みにくかつた。茎は硬く、触れる度にガサガサといい、芯には空洞か白い綿のようなものが入つていて、踏むとバキバキと割れる音がした。その派手な音の鳴るなか、不意にカサコソという物音がした。千央がハツとしてそちらを見ると、ちょうど一匹のネズミが木の洞から這い出てくるところであった。

針地獄を抜けた後は林に出た。杉の木の間からは木漏れ日が指し、鳥が鳴き、何の変哲もない風景だった。周囲一帯を眺め、千央は口の横に手をあててアリジジを呼んだ。

「アリジジーッ！」

千央の声はこだまのように響くわけでもなく、たちまちのうちに消えていった。多分、下の分厚い落ち葉の類に吸収されたのだろう。

「おーい！」

毅も叫んだ。アンノもそれに続いて大声を出した。

「いたら返事してーー！」

「アリジジーッ！」

そういえば、アリジジの本当の名前は何なのだろう、彼の本名はアリジジではないはずだ。しかし、それ以外の名前を千央たちは知らないのだから、アリジジという偽の名前で呼ぶ他なかった。もし、アリジジを無事に見つけだせたら聞くことが増えたな、と千央は思つた。

そこへトランシーバーからまた雑音がはじめた。再び真琴から通信が入ったな、と思つたら今度は公平であつた。

『もしもし、道路脇に呪いの痕跡らしきものを見つけた。布が三角に折つてあって上に口ウの後があるよ。ローソクはどうやら全部燃えつきたらしい』

どうやらアリジジは予告通り、計画を実行についたようだ。

「カエルはどうなつてた？」

『いないよ。カエルは皆逃げたみたいだ。……そつちは何かあつたか？』

『いや、ないね。もう少しでバーガー岩に着くよ』

一同はバーガー岩まで走つて行つたが、ここにもアリジジはいかつた。千央は岩の中を少しだけ覗いたが、あいかわらず「コウモリの糞だらけだつた。

さらに先へ行くと、長い畦道にたどり着いた。ここは主に地元住民の使う砂利道で、トラックのタイヤ跡を避け、雑草が生えていた。遠くには白いハンカチのような布切れが見えたが、今の状況からしてそれがただのハンカチである可能性はかなり低かろう。

「あつ、あれ！」

地面にある白い布を指差して千央は叫んだ。

三人で駆け付けてみると、やつぱりあつた。角を釘で固定された布、公平の言つた通り、ローソクは溶けて短くなり、布の中は空であつた。毅はトランシーバーを使い、それを西にいる公平たちに報告した。さらに下つていくと車道があつた、車がたくさん行き来していたが、それ以外に人の姿はなかつた。奥の方には水路が見えた。鷺崎さんの家行く時に渡つた川だ。千央は肩を落とした。千央たちはあそこをアリジジ探しの終点としていたからだ。普通の状況でこれ以上アリジジが移動するとは考えづらいと千央たちは思つていた。人目につかぬよう移動を制限していたアリジジにはおそらく、ここまで土地勘はなかつたろうからだ。

もし、わざわざ土地勘の無い上このように人の目の多い場所まで来る必要が起こつたのならば、よほどの緊急事態だろう。多分病院のみならず、千央たちからも逃げようとする時か、または誰かに発

見されかけたか。今のところ、そのどちらの可能性も薄かった。アリジジが急な気まぐれを起こし、探索を行つた、というのも普段ならありえるだらう。しかし、呪いの計画を実行した次の日にそんなことするだらうか？ 千央たちが来ることは分かつていただらうから、それもまた有り得ないのだ。というわけで千央は結局“あの救急車に載せられたのはアリジジであったのだらう”といつ結論に至る他なかつた。

千央たちは車が途切れる瞬間を狙つて道路を渡つた。もちろん、さつき見た通り誰もいない。ちょうどその時トランシーバーが電波を受信した。向こう側では真琴が怒鳴つてゐる。山で遮られたため、電波がごく弱くなつてゐるのだ。

『こっちにはアリジジはないよ！』

毅も怒鳴り返した。

「今水路に着いたけど、こっちにもいないみたい！」

公平の声が聞こえた。

『じゃあ、これからどうするつもりだ？！』

『さあ、……それはわかんないよ！』

結局、アリジジは見つけられなかつた。

しかし、あの行き倒れがアリジジだったとしても、謎が残るのは確かだつた。なにせ、彼は全身がつるつるだつたのだ。

多分、アリジジは毛を剃つたのだろう、でもなんでまた剃る気になつたのかが分からなかつた。一体どういう心境の変化が起つたんだろうか？

これを突き詰めて考えてみて、一つの説を千央は思いついた。

まず、アリジジは逃亡生活を諦め、自首しようとしていたということが一つ目。毛剃りと病院に戻ることの関連性はうまく説明できないが何か関係がある気がした。そして一つ目は、毛を剃ることで姿を変えて新たな場所へ逃亡するつもりだつたという説。しかし熱中症になつてしまい、どちらにしろ計画は頓挫したというわけだ。

アンノはひどく疲れたようすで道路脇のコンクリートブロックに

腰を下ろした。そして膝を抱えて目を閉じ、ため息をついた。腕を組んだ千央は、毅と並んでそのようすを見ていた。

千央はアリジジが自分たちを裏切って一度目の逃亡を計っていたとは思いたくはなかつた。だがしかし、これが裏切りだと言えるのだろうかと千央ははたと気づいた。なぜなら、自分たちもアリジジを匿うことでのなりのリスクを負つていたからだ。むしろ、アリジジが長い期間山に留まり続けていた方が双方の危険度は増すだろう。千央たちには知らせなかつたが、これまであわやということが何回があつて、危険を感じていたのかもしれない。あるいは、自己犠牲の精神みたいなものをおこし、この山から自分が去ることですべてが丸くおさまると考えたのかもしれない。だから、これはこれで結果的に良かつたのかもとも千央は考えた。だが、それを実行するにしてはタイミングがおかしすぎる。もう少し後からでもいいはずだ。千央たちにお別れを言ってからでもちゃんと間に合つはずだ。千央は無意識に頭を横に振つていた。やっぱり変だよなあこれ、一体何が起こつてこうなつたんだろう？

たいして毅は、鬱々と考えこんでいた。それは帰り道でも続いた。探偵のように顎に手を当て難しい顔をして、ぼそぼそと何事かをつぶやきながら、千央とアンコの後ろを着いてきた。その熱心さとともに、もし千央たちがわざと間違つた道に入ろうとも、気づかずに素直について来そなほどの集中ぶりであった。

三十一、くだんのけん

増田家に到着してからの千央たちは、ウリのワタ抜きより何よりも、園さんの前に入れ替わり立ち替わり現れ、逃亡者とは言つても、もう逃亡はしていないのだが、のプロフィールを聞き出すことにとにかく尽力した。

園さんからは、千央たちが作業中に抜け出したことに気づいていなかつたのか、あるいは気づいたが黙つていることに決めたのか、何も言われなかつた。なので千央たちは先程の騒ぎの詳細とアリジジの件について、遠慮なしに質問することができた。

まずは伊鶴が園さんの前に飛び出して進路を妨害し、元気よく聞いた。

「ねえ、さつき表で救急車で運ばれて行つた人、マジで精神病院から脱走してた人だつたの？」

勝手口から外に出ようとしていた園さんは、一瞬驚いていた。しかしすぐに気を取り直すと、たむろした千央たちの横をすり抜けて、壁に設えてある食料棚へと向かつた。千央たちはぞろぞろとそのあとに付いて行つた。園さんはこちらに背中を向けていたが、背後から視線を感じたのか、歯切れ悪く答えた。

「うーん。そうらしいわね」

もしかしたら園さんはあまりこの話はしたくないのかもしれない、と千央は思つた。子供に話すには複雑過ぎる問題だとかいう理由で、「助かつたの？那人」間髪いれずにアンコは聞いた。

段ボール箱からカゴの中へと何やら入れながら、園さんは言つた。

「さあね。でも、すぐに病院に運ばれたから、きっと大丈夫よ」「あの人何の病気だつたの？」と毅。

「水野さんから聞いたけど。多分、熱中症じゃないかって話よ」

「違うよ、熱中症つてことはもう分かつてゐる。そうじゃなくつて何で精神病院に入れられたかの原因だよ、入院してたんでしょ？」

毅はさらに突っ込んだことを聞いた。

「どんな病気だったか知ってる？どんな見た目なの？顔は見た？感じはどうだった？」

あまりのしつこさに、どうとう園さんはキレたようだ。園さんはカゴを持って、急に立ち上がった。カゴから漂つてくる匂いからしてどうやら、中身はタマネギのようだ。

彼女は毅然とした態度で、千央たちを見下ろして言った。

「知らないわ。あのね、そんなことよりあなたたち、私が頼んでいたウリの下処理の仕事はもう終わったの？まだでしょ？途中でほっぽりだしてたんだから。こんな質問している暇があるんならせつと仕事をすませて欲しいものね」

皆は口をへの字に曲げ、お互に顔を見合させた。どうやら千央たちのサボリは完全にバレていたらしい。

「興味があるのは分かる。でも、いくら根掘り葉掘り聞かれても、知らないことは答えられないの」

「分かったよ」毅は面白くなさそうに頭の後ろで腕を組んだ。「でもさ、厄介なやつが無事に捕まつて、市長やよしば病院の人達も今『じるさぞほつとしてるんだ』うつな」

公平は笑つて言った。

「きっと、反対派の人にはまあみると思つてるんじゃないかな？」「どうしてそう思うの？」と、千央。

「だつて今まで、あ……、……あの患者の件で散々吊るし上げを食らつてきたんだからな。これからはそのネタは使えない……、いや使えるか、つていうか、彼が新たなトラブルを起こすっていう心配は少なくともなくなつたつてわけだよ」

「でもこれで、反対派の人たちは逆に張り切り出すかも知れないな」と慶幾。「だつて、あの人達の行動力といつたら恐ろしいものがあるもの……」

「またバトルが始まるのか」伊鶴はため息をついて言った。「もう飽きたよ

真琴は澄まして答えた。

「大人同士のケンカほど見ててうざりするものはないわよね」「色んな意見があるみたいね」

園さんは少し笑い、それからつぶやくように言った。

「でもね、病院は今喜んでいるどころじゃないわよ。きっと」

毅は驚いた、もちろん千央たちもだ。

「えっ？ なんで？ 僕が院長の立場だつたら大喜びすると思つけど」

一同は、だよねえといった風に頷いた。

「ああ。ほら……、あそこの院長先生、具合が悪くてずっと入院してらしたでしょ？ ずいぶん前から相当具合は悪くなっていたらしいけど、昨日の夜意識がなくなつて。とうとう今日の朝早く、亡くなつたらしいわ」

夕方、やつとウリの下準備の手伝いを終え、報酬に缶ジュースをもらつた千央たちはそれを飲みながら部屋でくつろいでいた。この頃の山は午後6時過ぎにもなると、窓さえ開けていれば涼しい風が勝手に入つてくる。以前と比べて、だんだん日も短くなつてきた。空は少しづつ陽を失い、群青色に染まつていつたが、ほのあかい桜色の光だけが残つて黒い山影をくつきりと縁取つていた。こんな空模様を見ていると、何かが起こりそうな気配がするのだが、実際は残暑の時期も過ぎ、もうそろそろ夏も終わりへと近づいていた。

……という風に物悲しい気分に浸つていた千央の耳に、さわやくような鋭い声が聞こえてきた。

「そうだ！ そうだ……！ 間違いないよ！」

院長が亡くなつたというニュースを聞いた毅は、さつきからソワソワして興奮しつぱなしだつたのだ。

それを見兼ねた公平が毅に話し掛けた。

「おいおい、院長が死んでそんなにうれしいのか。そりやお前にとつては気に入らない人だつたかもしれないけど……、嬉しさを面

に出すのは流石に不謹慎つてもんだぞ」

毅は、夢見たような顔のまま首を振った。

「違う、そうじやないんだ。全然別のこと。いや全く関係ないと言つたら嘘になるんだけど……」

公平は毅の拳動不審ぶりがおかしかったのか吹き出した。

「じゃ何なんだよ。言いたいことがあるならとつとと言えよ」

毅は一拍息を止め、ゴクッと音をたてて唾をのんだ後、喋りはじめた。

「ほら、僕らこの間、ゴツチを解剖してただろう?」

「ああ……確かにそんなこともあつたね」公平はまた笑つた。近くにいた真琴も笑つた。「君ら一人のバカな行動については、僕はもう何も言わんよ」

アンコは解剖を聞いて気分を害したのか、うえつという風に大袈裟に舌を突き出してみせた。それをチラつと見て公平は言った。

「……で、それがどうしたの?」

「……えーと、とにかくだな。その時の帰り際、千央と僕は目撃してたんだ」毅も渋い顔をしているアンコを見ながら言つた。「まあ帰り際、というか、それを見てしまつて逃げ帰つたといつのに近いんだけど……」

「何なのよ、もう。勿体振らないで早く言いなさいよ。イライラさせるわね」真琴は自分の膝を叩き、毅を急かした。

「まあ、待つて。まずはこのことを先に話さないと……」

「僕らは最初、ゴツチの死因は鼓脹症か毒草を食つたせいなんじゃないかと疑つていたんだ。鼓脹症つてのは穀物を多く摂りすぎた時に胃の中で異常発酵が起こつてなる病気だよ。だから、胃にその穀物やら毒草の痕跡がないかと思つて、まず胃袋を切り取つて中を見てみた。でも何も出なくつて、次に心臓を取り出して調べた。次の候補はフィラリアだつたから、フィラリアのことは前に話したから知つてるよね。でも心臓にも問題はなくて、それでどうしたものかと千央と一緒に途方に暮れてたんだ。そしたらゴツチの腹が突然、

膨れ上がり始めた。内臓を取ったのに。しかもそれが動きだした。

最初、僕は「テカイ寄生虫か、腹の中で産まれたた虫が外に出ようともがいているのかと思った。でも膨らみはただの虫とは思えないほど、異常に大きいし、動きもめちゃくちゃ素早いんだ。だから今度はネズミかと思つたんだけど、でもそいつは傷口からゅつくりと這い出してきた。まるで悪くなつたラードみたいな物体だった。で、それはゴッチの腹をギュッと掴んだんだ。僕らはそれを見て一目散に逃げた……、そして……、それつきり」

「うおああ

「おいおい大丈夫か

慶幾は言つた。可哀相に、アン「は顔を歪ませて顔を隠してしまつた。

「あとからゴッチを埋めに行けばよかつたんだけど、あんな得体のしないものがいた場所に戻るのは嫌で……」

何だか支離滅裂な感じだつたが、ゴッチを解剖した際の話は、この場にいるほとんどの子にとって始めて聞くことだつたためか、皆は黙つて大人しく聞いていた。

公平は言つた。

「ああ、だからゴッチの死体は埋められてなかつたんだね。野ざらしのままにしておくなんて、いくらなんでもちょっと薄情すぎだと思つてたんだ」

「うん、まあね。でも、それが失敗だつたんだよ。何日か後になつて、山の一斉搜索があるつてのを聞いて、ゴッチを埋めにまた山へ行くことになつた。もちろん僕は全然行きたくなかったんだけど、ゴッチの死体を見つけられたら今以上にややこしいことになるつて千央に言われたから、で行つた時にはもう、おじさんたちに見つけられて実際にそうなつてた。アリジジの仕業だと思われて大騒ぎだつたよ。それで、僕らはその様子をちょっと離れたところから見ていたんだけど、何かゴッチがいる周りでまた妙なものが見えるんだ。それは黒い色をしていて、やかましい音をたてて飛び回つてた。で

も周りのおじさんたちは全く気づいていなかった。まるで口ケット花火みたいな派手な音をずっとたてていたのにだよ。もしかしたら、あれは僕らにしか見えてないんじゃないかとさえ思った。しばらく見てるうちに、黒い影は一瞬でシユツと消え去った。ローソクの火が消える時みたいに」

毅が話をしている間、アンコはずっと指を耳に突っ込んでふさいでいた。真琴はジエスチャーでそれを辞めさせると、眉根を寄せて言った。

「ふーん。まあ……、かなり不思議な話だとは思うけど……」

どうやら真琴は怖い話に免疫があるらしく、毅の説明では一人の味わった恐怖はあまり伝わらなかつたらしい。とは言え、あの場にいればそんな暢気なこと言つてられないはずだけど、と千央は思つた。

「でもそれがさっきの院長が死んだ話と、何の関係があるの？」

毅は息巻いた。

「だからさ、さつきアリジジの顔を見ただろう？ いつもと違つて全く毛が無くて不思議だつたよね？ でもあのが本来のアリジジの姿なんだよ」

真琴は首を傾げてまだ分かんないな、といつ顔をした。千央はといふと、全くの同意見だった。

「あー」慶幾は納得の声をあげた。

「つまりアリジジは毛を剃つたんじゃないかと？」

真琴は言つた。

「アリジジの中身は本当はこんなだつた的な意味で？ でもこれと黒い影と何の関係が？」

毅は大きく息を吸い込んだ。

「違うよ、そういうことが言いたいんじゃないって。僕が言いたいのは、アリジジはもともとは毛のないごく普通の人だつた。でも、なにかの拍子にゴッちの体から出現した影に乗り移られた。そのせいであるように毛むくじらになつてしまつたんだ。ヤギのDNA

のようなもののがいいでね。アリジジの毛は白かつただらり~」

毅は、またも息を継いだ。

「でも、今は魂が体から抜けたからアリジジの毛がなくなり、本来の姿に無事戻つてたつてわけ」

皆は話を聞いて、揃いも揃つて不審な顔になつた。

「ちよつ、ちよつと待つて」真琴は手を突き出し、つつかえながらも話を遮つた。「憑依の件はまず横に置いておくとしてさ。確認したいんだけど。じゃ、あの倒れてた人は本当にアリジジだったってことで決まりつてわけ? そういうことなの?」

「それは……うん、ほぼ間違いないだろうね」

公平は残念そうに言つた。何かを諦めたような態度だった。

「…………そ、う、なの。……なんだかびっくり」

真琴は目を丸くして言つた。

公平は唸つた。

「んあー、君が言いたいことつてつまり、解剖の時、ゴッちの死体から抜け出した靈が手近なところにいたアリジジに乗り移つて、今までその一、なんだ……、色々コントロールしてたつてことなの?」

毅はうんと頷いた。

「だいたいのところはね。そりや、ありえないって思うだろうけど。僕は黒い影を一度目撃したけどどちらもアリジジと合つ前だつた、その後毛むくじやらのアリジジが現れ、今度はつるてかだよ。公平の言つ通り、こう考えたらアリジジの体に毛がなかつたのや、黒い影にもちゃんと説明がつく気がするんだ……」

伊鶴は呆れて、口をパクパクさせていた。そして、慶幾は馬鹿にしたように毅に言つた。

「でもその説だとさ、アリジジの毛がなくなつた後に黒い影を見つける必要があるよな? 見てないんだろ? 黒い影」

「うん、まあね。でもこれから見るかも知れないし。僕はさ、あの呪いに何かしら意味があつたんじゃないかと思つてるんだ。よく分からぬけど、目的を遂げたとかで体はもう必要なくなつた、って

わけですか」

公平は言つ。

「あー、君つたら、またずいぶんバカバカしいことを言うな。死んだヤツの魂が人間にとりついて……だなんて、ものすごい妄想力だ。僕はお化けとか、さ迷う魂とか現実のものとして信じられないよ。そもそも毅たちが見た黒い影つてのも見間違いじゃないのか、あまり怖がるからそういう風に見えてしまったんだよ。よく言つだろ？ 気の持ちようで風にふかれた柳の枝が、幽靈に見えるとかなんとかって」

「でも確かに私も見たよ。そりや死んだ魂、ましてやゴッチだつたかつて聞かれたら、全然分かんないけどさ。別に話し掛けられたりはしないし……」

千央は言つた。この黒い影の日撃に関して、千央は決して見間違いでない、と断言できた。「回目はただのハチであつた可能性がまだ捨てきれないが、少なくとも一度目は氣のせいや精神的なものなんかではない、確かな物理的現象であった。あの灰色の手がゴッチの開かれた腹からによきり差し出され、ゴッチの体に指を絡ませた。その時白いゴッチの毛が押されてへこむのを千央は確かに見たのだ。

「ヤギはもとから喋つたりしないだろ。動物なんだから」は呆れた風に言つた。

ねえ、とアンコは言つた。「結局ゴッチつて何で死んじやつたんだろうね？ 毅たちが解剖しても警察が調べても分からなかつたんでしょう？」

「毅たちはプロじやないし、警察もゴッチの死因を調べようとして死体を持つていつたわけじやないからな。こればっかりは神のみぞ知る、だよ」と公平。

「後、黒い影の正体がゴッチだつたとして、だいたい何を理由に蘇つたのよ？」アンコはつぶやいた。

「知らんが、多分……成仏できなかつたんだる。この世に心残り

があつたのさあ」慶幾は納得したように頷き、少しふざけた感じで言つた。「それが墓を荒らされて怒つたとかな……」

千央はニヤツと笑つた。

伊鶴は言つ。

「でも、ヤギがこの世に残す未練つて一体何だりつゝ死ぬ前に草を腹一杯食べたかった……、とかか？」

「そりやあさ……、自分を殺した犯人だろう、うん。僕は今んとこそれしか思いつかないね」と慶幾は淡々とした調子で自分の意見を述べた。

しかしアリジジは空き巣などの犯人捜しは指南したが、ヤギ殺しの犯人を捜し出せなどとは言つていなかつた。それにゴッヂが死んだ時の話しをした際も、特に興味を持つていたようには見えなかつた。なので、これではゴッヂの魂がアリジジにとり付いたという説には辻褄があわない。ゴッヂの死因が他殺ではなく自然死だつた場合は別だけれど。

それとも、アリジジが以前に“やることがある”と言つていたのに何か関係があるのだろうか？

「ああ。でも、僕はさ。黒い影の正体はゴッヂそのものの魂ではなくて、件のようなものだつたと思つてるんだ」

「くだん？」やつと、アンコが喋つた。

「また新キャラかよ」慶幾は言つた。

「件つていうのは、昔から日本に伝わる妖怪さ

毅は件について、説明を始めた。

「件は牛から産まれてくる人の体と牛の頭、それか人の顔をした妖怪で、同時に完璧な予言者なんだよ。人間の言葉を話し、人間にとつて重大な予言するんだ。例えば、日照りや台風とかの災害や流行り病のことをね。その予言は必ず当たるんだけど、件は何日かしか生きられないんだつて」

「それで、僕はアリジジが運ばれるところを見て黒い影のことを思ついてから、何かが起きるんじゃないかつて、薄々だけど期待し

てたんだ。毛のないアリジジが現れたことと直前に呪いを仕掛けに行つたことが何か関係があるように思えてね。そしたら、今の院長が死んだってニュースだろ？しかも昨日の晩に体調を崩して、ちょうどアリジジが呪いのお礼参りをしてた頃にだよ。僕はこれが偶然とはとても思えないんだよ。まるで件のようじやないか」

毅は自信満々の表情で言つた。しかし慶幾は、話の矛盾点に容赦なく突っ込みを入れた。

「ちょっと待つて、お前の話だと件つていうのは普通牛から生まれてくるんだろう？ゴツチはヤギじyan。それに件には実体があるっぽいから、他人にとりつく必要はない。というかとりつけないだろ。件というには条件が全然合つてないよ。それに予言だつてしてない。アリジジは別に“院長が死ぬ”や“誰かが死ぬ”どころか、予言らしいことは何も言つてなかつたよ」

毅もやり返した。「僕はただ、動物由来の靈験のたとえとして件を説明しただけだ。だからさつき、件そのものじゃなくて件のようなものつて言つただろ？本当の件は牛だけど、今回は死んだヤギから産まられてきて、重大な予言じやなく、個人的な恨みをはらしていつた。簡単に言つと、グレードが少し下がつた件の亞種つてところかな」

「でも個人的な恨みをもつた相手つていつても、あくまで空き巣や放火を偽造した人であつて、院長とかではなかつたようだけど……」

「いや少なくとも、院長はのつとつた宿主を追い詰めていた。宿主を伝つて間接的に苦しんでいたかもしれないだろ？」

「そんなこと言うなら、住民たちも同じように恨んでいたはずだよ」

「反対派はただの住人の集まりで小物だもん。一人一人相手してたら埒が開かない。要是院長は見せしめに呪い殺されたんだよ」

「いやいやそんな……、ヤギが人に乗り移つて他の人を呪い殺すだなんて、馬鹿な話があつてたまるかよ。だいたい件だつて、想像上の生き物だろ」

「じゃあ急に毛が消えたことは、どう説明するんだよ」

「だから、やつをかいつてゐるより簡単に剃つたんでしょー。」慶幾の声が大きくなつた。

毅も負けじと怒鳴り返した。

「髭剃りなんて僕、渡してないよー。」

「どうせまたどつかで盗んだりして手に入れたんだろうー。」

「…………！…………アリ、」

「ああ、もうつるつるでいいな。少しくらい静かに喋れないのー…？」眞琴は毅がまた大声を出さうとしたのを遮つて言つた。

「そうだそうだ」と伊鶴。

一人はお互いを指差して言つた。

「ほら見ろーお前の声デカイんだよー。」

「つぬせーのはむしりお前の方だるー。」

「…………一人共同じくらこつるさこんですけど」アンコは言つた。

公平は笑つていた。

「まあ僕も今日院長が亡くなつたのは本当にたまたまだと思う。……だって、他にどう考えるつていうんだ。さつき外に集まつてた野次馬のおばさんが院長は相当の歳だと言つてたのを僕は聞いたし、病氣の年寄りが死ぬのなんて別段珍しくもなんでもないもんだろ。毅にとっては院長が昏睡して死んでいったのは絶妙なタイミングだったのかもしれないけど、本当のところは適当に寿命で死んでいただけだよ。そもそも魂が抜けでとりつくつて話からしてもう……、有り得ないだろ？」

「だよねえ」慶幾は大きなため息をついた。「それにしてもさ、お前はどうどんどん自分のバアさんに似てきてるんじゃないか？全く、先が思いやられるよ」と同業になつてるんじゃないのか？全く、先が思いやられるよ

それを聞いて毅は、苦虫を噛みつぶしたような顔になつた。

「お前にそんな風に心配をされる筋合いはないね」

「さあ、それはどうだか。僕にも友達として付き合える限度つてもんがあるからね。来学期からはまた石室からのイジメがひどくなるんじゃないかな？」

慶幾は残酷な調子で言い放つた。そして、意地悪そうに笑った。

「このクソ野郎！」

激昂した毅は慶幾に向かつて飛び掛かつて行つた。しかし慶幾はひらりと身をかわし、すぐさま反撃の体勢をとつた。慶幾は毅の首に掴みかかるとその体をひっくり返らせた。毅はその腕をめちゃくちゃに殴り、身を捻つて慶幾の手から逃れた。それから二人は叩いたり叩き返したりの乱闘騒ぎになつた。

しかしそうなつたのもつかの間、園さんが階段の下から、晩ご飯の時間ですよと千央たちを呼んだので、喧嘩は即時終了となつた。さつき怒らせてしまつたばかりなので、千央たちも素直に従つざるを得なかつた。

二人はしばらくの間緊張状態で睨み合つていたが、とうとう慶幾はついと田をそらし、部屋を出て行つた。何人かもそれに続いた。残された毅はバサバサになつてしまつた髪を撫で付けてから廊下へと向かつた。

千央は階段を下りる時に窓から外を見た。もうすっかり日は落ちて辺りは暗くなり、遠くにある家庭から洩れる黄色い光が見えた。「あの川にはね、鰐とすっぽんがいるんだ。夜行くとよく見られるんだよ」

外を眺めている千央を見咎めて、毅は暗黒色の川を指差して言った。毅はさつきよりもいくらか気分が落ち着いてきたようだつた。

「ふーん」

「あそこに月が映り込んでるでしょ。だから今ちょうどあの川は、月があつて、すっぽんがいて……つまり、月とすっぽんの状態なんだ」

「本当だ」

良く見ると、田の前にある田んぼの区画一つ一つに夜空が映り込んでおり、毅が言つ通り、川にも全く同じことが起こつているのだった。黄色く円い月が静かに波打つていて、空には星も出でていて、家々の明かりと夜空の光とが墨色の水面という水面に一斉に映り込

んでいた。その光源は実際の何倍もの数になつて、本物の何倍も美しいかった。

千央は深呼吸をしながら空氣の匂いを嗅ぎ、夜の露を肺へと取り込んだ。確かにこれには朝の空氣のような自然と氣分が高揚する、不思議な効果は無かつたが、夜の空氣には一日を生活した人の匂いがする気がして、千央をなぜか安心させるのだ。

毅は両手の人差し指と親指で輪つかを作ると、それを繋げて鼻先まで持つていつた。

「すっぽんつて途中で切つたみたいな鼻してるんだぜ、こんな風に」「へえ！」千央は言った。

「……」

庭では鈴虫が鳴きまくつている。

突然、毅はこちらを見て言った。

「アリジジはもう、目を覚ましただらうか？」

毅の目は黒曜石のように光つて、どこか謎めいていた。千央も毅の顔を見た、きっと千央の目もそうなつているだろう。

「わかんないな」千央は答えた。

「アリジジって結局何から逃げ出したかたんだらうか？」

「しらないよ」千央は首を振つた。

興奮も冷めて、毅はすっかり落ち込んでいるようだ。あんな喧嘩の後では仕方がない。その上、慶幾にずいぶんひどいことを言われていたし。

「どつちにしろアリジジに聞けば全部が分かるよ。そうだ、過去に毛アリだつたか毛ナシだつたかを聞けばいい。そうすれば件が取り憑いていたかどうか、分かるよ」

そういうえば、どうしてアリジジはあんなに若いのにも関わらず、入院するまでに精神病を悪化させてしまつたのだろう。戦争や飢餓なんかが起こらない限り、子供はお気楽に生きてゆけると千央は信じていたのだ。

「うん、まあね。でも、もしかしたら意識が戻った時はアリジジはもう僕たちのことを全く覚えていなくて、会ってくれないかもしれませんよ。僕らが今まで接していたのはゴッちから出てきた黒い影であって、病院から逃げてきた人とは別の人格なわけだから」

毅は言った。

「あ……そうなの……」

毅の力説に音洩れのような返事しかできなかつたが、その可能性はおおいにあるなど千央も考えていた。とはいっても、ゴッちの靈云々の話とは関係がない。もしかしたらアリジジはこの逃亡生活を忘れたかつたり、自分を恥じたりが原因になつて千央たちのことを全く知らない振りをするかもしれないと思つているのだ。仮にアリジジがそう望むのなら、千央たちも多分、少なくとも千央は協力するだろう。あるいは逃亡中、匿つた千央たちに迷惑をかけまいとして黙るかもしない。この場合はアリジジと千央たちだけにしてもらえば話が違つてくるのかもしないが、今後そんな機会を作れるのかは不明だ。

毅は身を乗り出し、弾んだ声で千央に囁いた。

「ねえあの呪いつて、何か効き目があるのかな? だつて、件が考えた呪いだよ?」

千央は笑いを堪えた、毅がある重要なことをど忘れしていたからだ。

「考えたつて言つてもさ、半分くらいは眞で案を出し合つたものじゃなかつた?」

千央の言つたことを聞き、毅はみるみる変な顔になつていつた。
「といえば、カエルを使うのは、千央が出したアイデアだつたつけか……」

「そうだよ。それに……私、考えたんだけど。もしアリジジがゴッチの化身か何かであるとしたら、院長を呪い殺したことで成仏したことするはどうにも説明がつかないよ。……だつて宿主を齋かしたところ理由で院長を恨むんなら、それは蘇つた後のことになるはず

でしょ。だからアリジジの魂が蘇つた理由つてのが全然分かんないんだよ。慶幾が言つた通り、自分を殺した相手への復讐？……でも院長が殺したわけがないし、やっぱり院長が今日亡くなつたのは偶然だと思うよ

「…………」

毅は話を聞き、納得がいかないような顔をしていたが、何も言い返してはこなかつた。そして、彼は彼なりに解釈をして受け入れようとしたのだろうか、色々と考え込んだ顔になつていた。多分今、毅の脳の中は思考の糸が何本も絡み合つた状態になつているんじやないかしら、と千央は思い、ぐちゃぐちゃになつた糸を少し想像した。

その時、園さんから呼ばれる声がした。今夜は焼きサンマらしい。それで千央たちは離れると、また歩き出した。

三十一、夏の夜の日（終）

睡眠途中、千央は何者かの物音でハツと目を覚ました。足音と床を摺つていいくような音。おそらくは誰かが、千央の上を跨いでいたのだ。しかし周りは暗闇と静寂に包まれていて、人が動いている気配は無かつた。この感じから言って、今はまだ深夜のはずだ。千央はぼんやりした意識の中、考えた。多分さっきのは誰かがお手洗いだから麦茶を飲みに台所へ行つた音だろうな、と。

千央はタオルケットを手繕り寄せ、頭からそれを被ると、うつらうつらしつつ、また眠りにつこうとした。だが、それができなくなってきた。周りがどんどんと騒がしくなり、力チリと音がしたと思つたら、部屋の電気が付けられたからだ。千央の視界は強い蛍光灯の明かりのせいで、瞼の中を流れる血が透けて見え、全体が赤くなつた。こうなつてはおちおち寝てもいられず、千央は渋々目を開けた。と同時に千央は名前を呼ばれ、肩を揺すられ、平手で叩かれた。

「……千央。千央！ 大変！ 起きて！」

千央は言われた通り、上体を起こすと、無茶苦茶に体からタオルケットを引きはがした。そして、急に浴びた光の眩しさに、目を細めた。蛍光灯の輪郭がドーナツ型に薄ぼんやりと見えた。声からして、大騒ぎしているのはアンコのようだつた。

いきなり起こされて、千央はひどい仮頂面をしたが、アンコはそれを無視し、言った。

「大変！ 山が火事！ 山が燃えてるよ！」

千央は腕を抱えられ、強引に立たされると、病人のように支えられ窓辺まで引きずられた。窓辺のベランダには紺色の寝巻き姿の真琴が既におり、心配そうな顔で一人を迎えた。

外はまだ真っ暗であつた。風が強いようで、耳の脇でヒューヒューと音がした。真琴は黙つたまま向かいの山を指で差した。その方角を見た千央の眠気はいつぺんに吹き飛んでしまつた。

アン口の言う通り、前方の山が赤く燃えていた。しかし、炎 자체は木に隠されてこちらからは見えなく、どうにかすると、山の中をオレンジ色の光でただライトアップしているようにも、そこだけ朝焼けかおきてているようにも、あるいは火山口のようにも思えた。だが、そこから黒煙が立ち上り、山肌からは枝が折られていくような不吉な音が続けざまに聞こえてくるので、山が燃えているのは本当なのだと千央は思った。

今夜は満月で明るかつたので、注意深く火口を見てみると、姿の無いマグマが着々と周囲の木を食っていくのが分かった。まず、もともと緑濃色をしていた樹木は炙られて、青紫に変化していき、だんだんとバターみたいにだらーっとだらけてくる、葉っぱがそれに堪えられなくなると、フツと一瞬で体積が小さくなる。まるで花が咲くのを逆回しにするような感じだ。これが連続して起こり、木は確実にやせ細つていく。

千央がふと目を横にやると、もともと草原だったところが目に入ってきた。その草原は真っ黒に焦げて、群青色一色の山肌の中、人のほくろくくらいに異常に目立つっていた。どうやら山火事はこの草原からはじまつたらしい。しかし燃えるものが無くなると、火事はおそらくコソ泥のように身を低くして、森へと移動していくのだろう。かたや丸裸になつた草原からは、白煙が静かに上がるのみだ。

「スゲエなあー！」

隣からは興奮した囁き声が聞こえてきた。右手にある窓を見ると、隣室の公平たちが柵から身を乗り出して、同じように火事に見惚れていた。仄赤い光は彼や彼女たちの頬を不安定なリズムで照らし続けていた。まるでそれは音の無い和太鼓の演奏のようだ。

さて、最初は木の影に姿を隠していた炎も、千央たちが見ているうちにどんどんと勢力を伸ばしていた。火は黒い杉の影を赤と橙に完全に縁取り、背丈を伸ばし、葉を嘗めとろつとしていた。もし、杉の葉まで炎が及べば、火事はあつという間に大きく拡がってしまいそうだ。あのリストの尾のような形状の乾燥した葉っぱを思い出し、

千央はゾッとした。ただ一つ救いがあるとするなら、見たところ近くに全く人家が無いことであるつか。

「ねえ、消防車はまだこないの？誰か呼んだの？僕ら消防に通報した方がいいんじゃないかな？」

巨大化していく火柱を見て不安になったようで、慶幾が言った。

彼は半ズボンに半袖姿で体育の授業の時のような格好だった。

「大丈夫だよ。さっき園さんが電話してたけど、もう消防車は出発したらしいから」真琴は隣の窓を見て言つた。「山奥だから少し到着が遅れてるのかも」

慶幾は急に不審気な表情になり、こう言つた。

「もしかして、また放火じゃないよね？」

「いやでも、アリジジはもう捕まつたんだから。誰もそんなことやる必要はないでしょ？ねえ？」真琴は言つた。

公平は首を傾げた。「さあな。ただ、こんな風に自然に山火事が起こるとは思えないな。もし冬だつたらそういうことが起こるのもまだ分かるんだけど。……もしかしたら煙草のポイ捨てとかで出火したのかもねえ」

「雷が落ちたつてセンは？」と伊鶴。

「無いことも無いかもしねいけど、今の天気は思い切り晴れだよ」千央たちは空を見上げた。夜の空は雲がほとんどないくらいの晴天で、満天の星が見渡せる状態だつた。

「違うんだよ、そういうのが言いたいんじゃなくって。まさかアリジジ。また病院を脱走してたりしてと思つてさ……」

つまりところ、慶幾の言いたかったのは、今まで悪事をアリジジの仕業に見せかけていた犯人がまた活動を始めたのではないか、という意味ではなく、今度はアリジジが本当の放火魔となつて戻ってきたのではということだったのだ。慶幾は冗談ぽく言つたが、その場はどよめいた。真琴なんかはとんでもないと言つよう銳い声を出した。

「いくら何でもそれはありえないよ

千央は言った。もちろんアリジジが今病院に大人しく寝ていると
いう確証は全然ないが、だからと言つて……、「病院から逃げて山
に火を点けたって言うの？物騒だな」

「あ。そうか。確かに、山を燃やすくらいなら、むしろ病院に放火
してるよね……」

「つか、放火は端からしてないだる。空き巣はしたけど」と伊鶴。
「冗談でもそんなこと言わないでよ。ビックリした」アンコは言つ
た。

そして、しばし沈黙の時間が訪れた。とは言いつつも、全員が一
抹の不安に襲われていたのだ。

「ねえ」

アンコは心配そうに言つた。「ここまで火が来て、家に燃え移つ
たりはしないよね？」

彼女がそういう気持ちになるのは千央にも理解できた。火事の現
場からこちらまでは百メートル以上離れているのにも関わらず、も
う、野畠焼きの後のような焦げ臭い匂いが風に乗つてやって来てい
たからだ。それから竹が熱で爆発でもしているのか、引っ切りなし
に爆竹のような音が、おそらく山中に響いていたのだ。

「まさか！大丈夫だよ」

灰の混じつた風が目の前を渡つていくのを見ながら、伊鶴は叫ん
だ。

「この風には焼けて灰になつた木の葉が混じつていて、吹く度に千
央の視界は発熱した橙と黒色の斑模様で占められた。

「川もあるし、途中でせき止められて、火は多分こっちまでは渡つ
て来られないよ」慶幾はつぶやいた。「といふか、そうならないと
僕の家も焼けてしまうよ」

「まあ、そくなないこと祈ろう。あ。ほら見て、噂をすればだ

……」

公平が下を見たのにつられて、他の子たちも同じ方向を見た。ま
さにその時、道路をサイレンを鳴らした消防車が通過していった。

千央は何だか心強い気分になり、赤色灯の光る消防車を見送った。その時、背後で再度力チリという音がして、千央は振り返った。部屋の中はまた暗闇になっていた、アンコが背伸びをして電灯を消したのだ。

「寝ちゃうの？これから火を消すのに」真琴は惜しそうに言った。千央も思った。そうだそうだ、だいたい人を叩き起こしといて、先に寝るなんてどういうア見だ。

アンコは言った。

「だつて暗い方が火事が見やすいと思って」

「見やすいって、花火大会じゃないんだから」

真琴はこう言つて苦笑したが、部屋が暗くなつた結果、確かに炎がよりハツキリ見えるようになつた。

隣室でも少し揉めて騒がしくなつた後、こちらと同じく明かりは消された。

さて、現場では消火活動が始まつたらしく、山の下方から湯気だか白煙だかがもくもくと上がり始めていた。まれに放水された水が林のすき間から見えた。

この光景を見ながら千央は考えた。大量にいるであろう水は一体どこから持つてくるんだろう？と。おそらくだが、供給場は村のあらゆるところにある用水路だ。その場所の一つで千央たちは釣りをしたわけだが、同じような感じの水路を千央はあちらこちらで何度もなく見ていたのだ。

みるとみる辺りに充満した白煙を吸い込んだ真琴は、顔をゆがめ言つた。

「何だこりや、ひどい臭いだな」

アンコは細い自分の鼻をつまんだ。「うん。ガスくさい」確かに、消火活動がはじまってから胸のムカムカするような臭いが立ち込めてきていた。千央も鼻をつまんだ。

「何が燃えてるのかしら」

「さあ、ゴムとかかな。もしかしたら、秘密基地が燃えている臭い

かも」と公平。

あそこには、冷蔵庫やソファーなどの家具や廃棄物が山と積まれていた。この臭いの原因はタイヤか、あるいはベッドに使われていたウレタンマットか……、どちらにしろダイオキシンか何かの悪いガスが出て、体にはかなり良くなさそうだ。しかしそれでも、千央たちはタオルケットを顔の下半分に当てて、火事の観覧を続けた。

「ねえ！」

急に慶幾は尖った声を出した。

「ねえ！あれ、また、燃えだしてない？」

いち早くそれを見咎めたらしく、真琴は目を細めて言った。

「あっ、本當だ」

「どこよ？」千央とアンコは聞いた。

「あれ、あれ」真琴はそれを指差した。

消火が大分進んでいたため、山は全体が薄い白煙に覆われ霞みがひどく、真琴が差し示す方向を見ても簡単にそれは分からなかつた。しかし、千央はどうとう探し当てた。火事から二百メートル超は離れている山林に「ぐぐく」小さな明かりがある。

もともとの火事の場所から飛び火していつたのだろうか？それにしても、どうも距離が離れ過ぎている気がする。それよりも、新たな火の手と考える方が妥当であるようだ。しかしながら……？

千央たちがア然として見ているうちに、新しい火事からは勢いよく火の粉が吹き出されはじめた。火の粉はやがてふらふらと地面に落ちていったが、その中にいつまでも空中に留まり、落ちることもなく、それどころか自由に飛び回っている火の粉が一つあるのを千央は見つけた。握りこぶし大のそれは軽々と、まるで生きた鳥のように飛んでいる。

しばらくの間、火の鳥は下にある火事の場所を起点に、千央たちの円の高さと同じくらい、上空20メートルほどを小さな円を描くように回っていた。しかし、一周するごとに連れて速度も速まり、外側へ渦巻きを書くみたいに円周もだんだん大きくなつていった。

絶えず動き続け、表面が次々に入れ替わっている印象を受けた。火でありながら、まるである空間の中で循環している水に似ている。もし、このままずっとあの鳥が周り続けたら、いつかは千央たちのいるベランダのすぐ近くまでやつてくるかもしない。それどころか、開け放しの窓から部屋に乱入してくるかもしれない。そんな事態になつたら、一体どう対処すればいいだろう？水をかけて火を消すのか？あるいは捕まえてみようか？

火の鳥はまた向こう側で大きな曲線を描いた。

そのためには、何かしら道具が必要だつた。しかし、あまりに火の鳥が綺麗なので千央はこの特等席から離れるのが惜しかつた。今だ猛烈な勢いを保ち、鳥は飛び続けていた。周囲に明かりを振り撒き、縁の山や焦げた木々、家々を照らした。そのようすを下にある水田が見事に写しだして、何本もの赤のラインとなつて千央の目に返つてきた。千央以外の子も動きを止め、黙つてそれを眺めた。舌をとられたんじやないかと思うくらいであつた。

そうしてベランダに届くまで、あと何周といつたところまでに火の鳥は迫つてきた。鳥は惑星のように同じルートをたどり、山の近くで山肌を赤くし、弧を描き、またこちらに戻つてこようとした。千央は固唾を飲んでそれを凝視した。

突然、増田家の屋敷に誰かの悲鳴が不自然なほど大きく響いた。千央たちは何事かとビクッと飛び上がりつて、後ろを振り返つた。しかし、音の正体はただの電話の呼び出し音であつた。音はその後、すぐに鳴り止んだ。

千央は急いで視線をまた外の方へと向けた。だが火の鳥はこちらに来ていなかつた。鳥は急に方向転換し、彗星のような尾を残して山の向こう側へと飛んで行つてしまつていた。火の鳥が行つてしまつたせいか、こちら側は一段暗闇が濃くなつた。

「あわあー」慶幾は身を乗り出して言つた。

「何だつたのあれ……」

アンノは目を剥いて言つた。

火花が向かつた山は、まるで日の出みたいになつていて。

もしかしたら、あそこがまた新たな火種になつてしまふのだろうか。それに、あの飛行する謎の物体はなんだつたんだろう。命のある物だつたんだろうか？ もしや、あいつが火つけの犯人なのではないか？

しかし考えはじめてから間もなく、背後からガチャガチャと音がし、ドアが開いて、園さんが部屋に入ってきた。そしてなぜか、千央だけ廊下へ来るようになつた。千央は何事だらうと思い、真琴とアンコに目配せをした。

千央は疑問に思いながらも部屋を出て、園さんを上目で見ながらドアを閉めた。園さんは言つた。

「あなたのお父さんから電話よ」

「えつ？ こんな遅い時間にですか？」

こう言つた時、同時に千央はあることを思いついて、火事の見学で興奮した気分がたちまち緊張に変わつていった。こんな非常識な時間帯にかかる電話が伝えるのは、たいていの場合、悪い知らせだというのが常だらう。千央は動搖した。

千央は、電話のある1階まで向かつた。

なぜか園さんが後からついて來た、ますます嫌な予感がした。途中でチラリと見た柱時計の針は3時台を示していた。

その電話は台所側の廊下にあつて、バネのようなコードがついていた。千央は受話器を取り上げ、心臓の音を聞く時のような気持ちで静かに耳に当つた。気づけば、園さんが側まで寄り添つてきていた。どうしよう。最悪なことに肩に手まで置いてきたので、千央は血の気が引くような気分になつた。どうしよう、どうしたらいいんだ、本当に。

それでも千央は意を決して、話し口に向かつて言つた。

「もしもし……？お父さん？」

「あつ、千央かー？」懐かしい父の声が電話口からした。意外にも声の調子は暗くはなかつたので、千央は拍子抜けした。むしろ、い

つもより明るくて親しげなくらいだ。

「今近所で火事が起こってるんだって？千央のいるところは大丈夫なのか？」

「うん……多分……大分遠くだからね」「元気かと思つて電話した」

「うん？元気だよ」

「そつちは楽しいか？」

「うん……まあまあ」

父は電話の向こうで笑い声をあげた。

「そうか、まあまあ、友達は出来たか？」

「うん……？」

この人は一体何の用件で電話してきたのだろうか、千央は疑問に思つた。父は確かに少し変わり者だつたが、用もないのに深夜に電話してきたりするような人でもなかつたはずだが。

「……もしかして、もう寝ようとしてた？」

あやふやではつきりしない返答に、父は千央が眠いようだと判断したらしく、こう聞いてきた。

「いや、起きてたよ」

千央は言つた。山火事や火の鳥の登場といつ大事件の連続で興奮し、むしろ頭はハツキリとしていたのだ。

「ところで、なんでこんな遅くに電話してきたの？」

何かを心配しているらしい園さんの前でこんなことを聞くのは少々気が引けたが、いい加減聞かなくてはならない。千央は思い切つて父に尋ねた。

「ああ」父の声は、一気にトーンダウンした。「ああ、それがね。

お父さんは今、病院にいるんだけど、実はお祖父ちゃんの具合が悪くて倒れちゃつてね」

「えつ！どうして……？」

いつも元気で活発な（千央より元気なくらいなのだ）祖父が救急車で運ばれるなんて、にわかには信じられなかつた。また熱中症か

なんかだろうか？それとも食中毒？何にしろ病氣で臥せつてゐる祖父など、千央の持つイメージとは程遠かつたのだ。

父は意氣消沈したようすで言つた。

「夕方頃に気分が悪くなつたそうで、自分で救急車を呼んだらしい……。お父さんはちょうど仕事に出ていてね、連絡があつた時はビックリしたよ」

「で、大丈夫なの？」「それがお医者さんの話だとあまりよくないそうだ。血圧がどんどん下がつて……」

では、祖父は熱中症ではないのだろうか。千央は驚いて聞いた。

「何の病氣なの？」

「ウーン」父は唸つた。「それが、脳梗塞つていつて脳の血管が詰まる病氣なんだよ」

「どうもおかしいな、千央は沈黙した。

「……とにかく、明日の朝早くに迎えに行くからね。そのつもりで準備してなさい」

「うん。わかった」

「急に帰ることになつて、残念だつたな」

「それは、別にいいけど」

千央はこう答へながら考へていた。この電話に関しては、おかしなところがいくつもあつたのだ。

園さんが父からの電話を、いつものように子機に切り替えることなく、わざわざ千央を階下へ呼んだことがまずおかしかつた。子機は親機のすぐ側、つまり電話を取る時目の前にあるのにも関わらずだ。とは言え、これだけなら単なる偶然と考えられるかもしがれない。しかし、園さんの千央への妙に馴れ馴れしい態度。それから祖父は夕方の時点で既に倒れていたのにも関わらず、今になつて電話してきたことも重なつっていた。

だいたい後になつて祖父の容態が悪化したにしても、どうせ朝になつてからしか動けないのなら午前3時に電話する意味がない。

それに、容態が良くないのなら、たとえ千央を迎えて行くためで

も家族が患者の側を放れるのはよくないんじやないか。父がこちらまで迎えに来なくても千央を病院まで運ぶ方法は他にあるはずだ。しかしそれを提案しなかった、ということは今やもう祖父の側についている意味はないということではなかろうか……。千央は顔を歪めて考えた。

もしや父はそのことを言おうとしたが、途中で怖じけづいたのではないか？詳しい理由はわからないけれど。

少しの時間考えて、千央は聞いた。

「お母さんは大丈夫？」

「……ああ、元気だよ」父は答えた。

その後すぐ、千央は電話を切った。

千央の耳に園さんの声が上方から響いた。

「どう？皆のいる部屋に戻る？なんなら私の部屋で寝てもいいけれど」

なんて遠回しですぐ分かりにくい宣告だつただろう。しかし千央にはわかつた。どうやら祖父は死んだらしいことが……。

「はい。じゃあ、そうします」

その声は、木の虚を叩いた時のように籠つて聞こえてきた。もう、火事のことなどどうでもよくなつていた。それから千央は園さんの隣で、朝までの時間を寝て過ごした。

父がやつてきたのは、先刻の宣言通り翌朝6時半のことだった。その際千央は、スポーツバッグを2つ持ち、若草色の服を着て、玄関の前に立つて待っていた。そこへ、父の愛車である白いビビオが砂利の音をやかましくたて、増田家の前庭に乗り付けた。千央は車へ走つて向かい、巨大なバッグと共に後部座席に收まった。

父はアクセルを踏み、千央は小さく前へつんのめり、車は出発した。車は門を通り抜けて外へと出た。「ねえ、お祖父ちゃんの具合はどんななの？」

千央は前方の運転席に向つて聞いた。父が急に大きく息を吸つた

ので、千央は自分の予想は間違つていなかつたと分かり、同時に肩を落とした。

「それがな」

父は、声を震わせた。

「お祖父ちゃん、もう駄目だつたみたいなんだよ。お医者さんが言うには……」「…

「やつぱりね」

今度は、千央が巨大な溜め息をつく番だつた。

「もう知つてたよ、もういい」

千央は父の涙声を打ち消すように語氣荒く言つた。変に思われることは分かつてゐたが、言わずにはおれなかつた。それに、元々千央はオカシイと思われてゐるのだし父に対する印象は多分あまり変わらないだろうから。

父はしばらくの沈黙した後、口を開いた。

「……もしかして、お祖父ちゃんが最後の別れに夢に出てきたか」

千央は顔を歪めた。そんなことが起つるはずないだらう、この期に及んで馬鹿じやないのかコイツ、と心の中で父を罵つた。だが、自分がなぜそう思ったかを説明する気には到底ならなかつた。なので、まあそんなとこだ、と氣のない感じで答えておいた。

調度その時、昨日の火災が見えるところに車が差し掛かつた。千央は窓の外を見て、父に教えた。しかし、期待外れなことに反応は淡泊なものだつた。

「ああ、来る時に見たよ。ひどい火事だつたみたいだな」父は涙だか鼻水だか拭いながら言つた。父の言うように、確かに火事はとてもひどいものだつたようだ。今日の明け方にはよく見えていたかつた火事の被害の程度が、今ははつきり見ることができた。

山は広範囲にわたり、木の部分がえぐられており、いくらか笠が減つたように思えた。焼け跡は炭化してほとんど真つ黒になつたところや、茶色く変色したのが混じつて、何だか妙に汚らしい。その箇所はまるで、ギリギリまで治療するのを済つた虫歯のようだつた。

千央はその山を隅々まで見渡した。もういるわけがないのだが、今になつて明け方に見た火の鳥の行方が気になりだしていったのだ。あの火の鳥はどこへ言つたのだろう。何者だったのだろう。このことを父に話そうとして、千央は思い留まつた。祖父の死んだのを秘密にするような人に、話す義理がどこにあるのだ、と思つたのだ。

車は走つていた。千央は自分の前を通過していく建物を、ずっと目で追つていた。豪奢なパチンコ屋、長い煙突付きのゴミ処理場を通り、排気ガスで枯れた街路樹も見た。そして、千央はふと、奇妙な気分におちいつた。何かを忘れているような、不思議な落ち着かない気分だ。千央は頭を集中させて、それを思い出そうと努めた。

しかし、車がカーブを曲がりきると、それが何だったのか、すぐにつかつてしまつた。まるで煌々と輝く巨大な繭のようで、千央を感じさせたビニールハウスだつた。当たり前だがハウスは以前と同じ場所にあつた。だが、昼のビニールハウスは夜に見た時と大分違つていた。何しろ、ハウスはビニールが剥がされ、貧相な骨組みだけの姿になつっていたのだ。先日来た台風に巻き取られていったか、あるいは栽培していた野菜なり果物なりを収穫して、役目を終えたのだろう。その姿はもう、神秘さも迫力の欠片も感じられなかつた。千央はあの見事な繭をもう一度見たいと思つていただけに、とても残念だつた。

……いや違う。千央は気が付いた。自分がさつき思い出しかけたのはビニール製の繭なんかじゃない。しかし、それが何なのかはわからない。だけど千央にとつて本当に重要なことだという気がした。しかし、思い出しかける度につるりと逃げて行つてしまう。繰り返すごとに記憶は不確かになつていくようだつた。むしろ思い出す努力をするほどに忘れていくような感じさえした。そうであるなら、もう、努力するのは辞めてしまつた方が良いかもしれない。

千央は祖父の葬式について、考へることにした。千央は、まだ葬式には出たことはなかつたから具体的にどういうことをするのか知らなかつた。何をすればいいんだろう。どういう服を着て行けばいい

いのだろうか。

車は田んぼや、畠の群れを完全に抜け、もつ県境である橋に差し掛かった。陽は段々と高くなってきた。木陰の数は消え、建物の影が濃くなり、空気は暖まってぬるま湯のようになってきた。虫は高い気温に元気づいたのか、一層大きな声で喚きだした。窓の外にはすでに馴染みのある光景が迫ってきていた。

千央はぼんやりと思つた、自分はまた元の生活に戻つて行くのだろうな。それは現在が速く昔になつてくれるることを願うような毎日であった。

そうだ。私はふと思い出した。千央には悪魔が憑いているのだから、そのように振る舞えばいいのだ。私は自分の手の玉をギョロギョロさせた。

父はアクセルをさらに深く踏み込んだ。古い年式であるこの車は唸るようなエンジン音を立てて、速度を上げ、街の中へと消えていった。

終

三十一、夏の夜の日（終）（後書き）

小説“夏の夜の日”はこの三十一話をもつて終わりです。稚拙な作品を読みに来て下さった方々、それからお気に入り登録してくれた三人の方、本当に感謝しています。執筆は大変でしたけど、とても楽しかった。飽き性の私が最後まで書き上げることが出来たのも読者様のおかげです！ありがとうございました！m(ーー)m

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7535p/>

夏の夜の日～化人大家族～

2011年10月11日03時08分発行